
神剣の舞手

やー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神剣の舞手

【Nコード】

N5277S

【作者名】

やー

【あらすじ】

注：このお話は金髪つ子集まれーとは一切関係ありません。寧ろパラレルです。

とある孤児院兼剣術道場に住む少女、ティン。

彼女の身体秘められた秘密から、彼女の物語が動き出す。

しかしこの世界に住む人間も、存在するモノたちも『特別』はあちらこちらにある。そう、故に世界は一気に動き出す。色んな『特別』も『宿命』も持つモノまで遠慮も容赦もなく彼女を中心に巻き込む。

さあいざご静肅に。此処は一つの舞台。ティンと言つ舞劍士にス
ポットライトを当てた、彼女を中心とする舞台。
さあ、いざ幕を開けよう。

そして幕は上がる（前書き）

重ねて言おう。金髪っ子あつまれーとは一切関係ありません。

そして幕は上がる

「華ー梨ー」

緩いウェーブの長い金髪の少女、ティンが黒く長い髪の少女、華梨に後方から走り寄る。

華梨は両の手に買い物袋を提げたままティンの方へと振り向いた。

「ティン、袋一つくらい持つてよ」

「えーだって買い物当番華梨じゃん。あたしじゃないしー」

「全く、何の為にいて来たのよ」

「だって華梨が付いて来いって言うからじゃん」

「私は、買い物行くから手伝って言ったの！」

「はいはい」

二人はそんな言い合いを続けながら家路についていた。
彼女達にとっていつもの日常。そう、そのはず。

まだ、この時までは。

（何これ、熱源反応？ こっちに――）

華梨は素早くティンを逃がす様に背中を押し、直後に彼女の腹部に黒い何かが激突する。

「ぐぐ」

「華、梨……？」

弾かれる様に吹き飛ぶ華梨。

持っていた買い物袋も同時にアスファルトの上にプチまかれ、一種の惨状が広がる。

ティンはその様子を立っただまま呆然と見ている。

「な、に、これ。何なの」

「――外したか」

ティンは声のする方へと顔を向ける。

そこには黒いボロ布のマントに、漆黒の仮面、そして灰色の髪の人間らしきものが立っていた。

仮面の人間からは、男の様な低い声が漏れる。

「お、お前、が。お前が、やったのか？」

怒りの表情を浮かべ、射殺するような視線を謎の者に叩きつける。

「我らの目的は一つだ。貴様の持つ、神剣を頂く」

男は手から黒い波動をティンへと放ち、最小限の動きでかわす。

その瞬間。ピツ、と彼女の頬から熱い液体が流れた。

「――え？」

「……素早い娘だ」

ティンは驚きの表情を浮かべ、頬に触れ、触れた手を見る。

赤い、粘着力のある、鉄の匂いを発する液体が、指に絡みついていた。

それは、この世界の通りでは見る者さえ珍しい代物。

魔力の制約により、同種族に外面的な怪我を与えられないこの世界において、闘いでは最も見られないモノ。

血だ。真赤な、命の水。鉄の匂いを放つ、真っ赤で燃えるような血。

「え、あ、う、え……」

「次は、仕留める」

男の言葉に目もくれず、ティンはゆっくりと横たわる幼馴染を見る。

一見ピクリとも動かず、倒れ込んだ黒髪の幼馴染。
さきほど、出血する攻撃を腹部に食らった、幼馴染。

ピシリと。そんな音がティンの脳内に響き渡る。

「う、あ。あ、あ……うあ、あ……うあああああああああ
あああああああああああああああつ！？」

あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ
！？」

取り乱す様に、身体に溜め込んだ何かを吐き出す様に叫びあげる。
それは、怒りの産声のようで、外に這い出た事を喜ぶような声で。

ティンの脳内に種のイメージが浮かんだ。
そしてその種に罅が入り、やがて割れる。割れた種から光の芽が
出て、芽は次々に枝分かれして、あちこちに咲き誇る。

ティンは、そのイメージだけを見て意識を手放した。
母親の腕に抱かれる様に。温かい布団に埋もれる様に。

ティンの身体から太陽に等しいと思うほどの光が溢れ出す。
まるで天から舞い降りた聖女か、女神かのような眩し過ぎる光を。
「こ、これ、は……！」

仮面の者はそれを見て、まるで好奇心に心躍るような声を出す。
だが、表情は欠片も見えない。

光はやがてティンの右手に収束し、一つの十字架となる。

ロザリオ

神々の戦争の後に人間界に産み落とされたと言われる神の十字架
神剣、ラグナロック。ラグナロクの後、人間達の元に降り立った

光の十字神剣。

「こ、これが、ラグナロック！　これが、神剣！

す、素晴らしい！　素晴らしい輝きだ！　ははっ、はははっ！

あの娘、ラグナロックを本召喚し」

男の言葉はこれ以上続かなかった。

ティンは駆け出すと男に剣を振るう。

軽く息を吐き、神剣を薙ぎ払い、振り下ろす。

闘いは酷いくらい一方的だった。

ティンは本能に身を任せるように剣を振るい続ける。

獣が獲物をくいちぎる様に。何度も、何度も、何度も、何度も、

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も何度も何度も何

度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何

度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何

度も。

力の差を思い知らせる様に。何度も、その剣を振るい続ける。

「う……………」

華梨は呻き声を上げながら目を開ける。

腹部をガードした左の手の感触を動かして把握する。

（結構、ぶじみたいだな……手が、焼ける様に、痛い）

身体を起こしながら周囲を見渡し、すぐ近くで起きている惨劇を
目にする。

「……夕飯の材料が……いや、それよりティンは……え？」

ティンが、仮面の男を押し倒して光り輝く剣を振るい続けていた。
何度も叩き付け、何度も切り続け。

「お、おい、ティン。もうやめろ」

ティンは大振りでも抵抗の相手を遠慮も無く神剣で劈り続ける。

「み、見る。私は無事だっ、ごほっ、ごほっ！」

咳き込みながらも華梨は自身の無事を訴える。

ティンは聞こえた様子も無く、ただ無心に剣を振るい続ける。壊れた機械のように。

「もういい、もう良いからごふっ、やめ、ろ！ 止めるん、だっ」
立とうとして華梨は足が纏れて再び地に伏す。

まともに立てない己を悔やむと同時に鬼神の如く、仮面の男を斬り続ける幼馴染を見据える。

「もう、止めてくれ……」

華梨は、力無く呟く。彼女が、何処か遠くへ行ってしまうそうで、そんな思いを無視するように、ティンは剣を振るい続ける。

「もう、良いから……」

ティンの剣は止まらず敵を切り続ける。

薙ぎ払い、切り付け、叩き付け、叩き付け、一方的に攻撃を繰り返し続ける。

「やめ……ろ……ッ！」

華梨はティンの背中に手を伸ばし、声を訴え続ける。

だが、ティンは飽きた様に剣を一払いし、上段に構え。

「止める……っ！」

剣に力をこめ。

「止めるおおおおっ！」

振り下ろした。

刀身が何かに食い込む様なおとが、周囲に響く。

華梨の伸ばした手は虚しく虚空を掴むだけであった。

「——あ」

ティンは声を吐き出すと、それと同時に十字架も消え去る。ロザリオ

やがて彼女は意識を手放す様に仰向けに倒れ込んだ。

「ティ、ン！」

華梨は無理やりに身体を起こし、倒れ込んだティンの元に駆け寄る。

ティンは目を閉じたままきを失っていた。

華梨は続いて仮面の男に目を配る。

男の顔は、分らない。こんなボロボロの状態だと言うのに、仮面だけは碎けてなかった。

身体は元々ボロボロだったマントが更にぼろくなり、ずたずたで、ボロ雑巾と言う表現が似合っていた。

それでも仮面は碎けて無く、数か所欠けているだけ。

欠けて仮面から男の口が見えた。口元がつり上がり、にやけている。

まるで、この結果を喜んだ様に。

(……マゾ?)

孤児院。

「ん……こ、こは……そうだ、華梨！ あいつは！？ あの仮面の男は!？」

「落ち着け、ティン」

ティンは布団から飛び起きて周囲を見渡す様に首を回すと、無精髭を蓄えた、がたいの良い黒髪の男が制す。

「師範代……華梨は!？ あいつ、大丈夫か!？」

「おいこら、勝手に殺すな」

ティンは声のする方へと首を動かすとそこには黒髪の少女、華梨が座っていた。

「あ……華、梨……?」

「何情けない声だしてんだよ、ティン」

ふん、と華梨は不満げな声を上げると同時に自身の無事を認めさせる。

やがてティンは布団を掴み、ぶるぶると震えだして手元にぽたぽたと水が落ちる。

「よがっ……た……ほんとっ、よが、っだ……!」

涙声で、震えながらの口調だった。

なにより、彼女が幼馴染である彼女の無事を喜んで居る証拠でもあるのだ。

華梨はそれを見て、安渡の息を吐く。

（良かった……元のティンだ……お調子者で明るい、いつもの）

そう、彼女から先ほど見せた鬼神の如き活躍を見せ付けたあの輝きも、気迫も存在しない。

紛れも無く、何時もの彼女だ。

「良かった……か」

一人、師範代だけは身長な面持ちでティンを見つめていた。

「ティン、話は聞いた」

ティンは布団から起き出し、皆と同じ長机に席につくと師範代は真剣な表情で口を動かす。

「話し？ あ、そうそう！

いきなり変な仮面の男があたし達を襲ってきてさ、もう大変だったんだよ！」

ティンは自慢げにどれだけ大変なめにあつたかを話し始める。

「……お前、魔力が暴走したそうだな」

「魔力？ んーなんだろう。

華梨がぶつとばされてだこいつって思ってたらさ、あいつの攻撃で血まで出て来てあたしも何が何だか頭ん中めっちゃくちゃになっちゃってさ！ ……それでもうさ、何かさ、うがーってなって、なって……なって、何したん、だっけ？」

ティンは最初こそは調子良かったものの、徐々に勢いは失って一番重要な問題にぶつかった。

「……良いか、ティン。よく聞け。これから聞く話はお前の親が、深く関わる」

「……え？」

ティンは鳩につままれた様な顔をする。

当然だ、彼女は孤児。つまり、親に捨てられ、両親の顔さえしらずに育った少女。

つまり、これから聞く話は彼女が捨てられるに至話し。

「お前の魔力が暴走した時、華梨から聞いたんだよ。」

そんな時のお前の様子とかをな。そこでふと気になる事を聞いた」

「気に、なる事？」

「模様だ」

その時まで静寂を貫いていた華梨が口を開いた。

「あの時は身体中痛くてきにもならなかったけど……今思い出すとティンの身体中の線が光っているのが見えたんだ」

「それで、悪いとは思ったがお前が眠って居る間に知り合いの魔導師に頼んでお前の身体を調べて貰った。そしたらよ、俺でさえ吃驚する様な話を聞いた」

「は、話して、何？」

ティンは恐る恐る、話を促す。

「そいつがさ、昔にお前に会ったと言ったんだ。自分のマークになる術式も有ったそうだし間違いないらしい」

「そ、そいつとあたしが会ってるのが、なんだって……」

「良いから聞けっ！」

そいつによると、お前と会ったのは約十九年前、とある夫婦に連れられた赤ん坊だ。その赤ん坊がお前だったんだよ。

当時のお前は、赤ん坊が有するには余りある程の膨大な魔力を持つて居たんだよ」

「え……どういうこと？」

「魔力って言うのは、ある程度からだが成長すればあらかた大丈夫になるが、生まれたばかりの子供には猛毒だ。魔力乖離現象って知ってるか？」

「何、それ」

「魔力と言うのは、小さい物質に集まると原子レベルで分解されてしまうのよ。」

それが、魔力乖離現象と言うもののよ」

そこに口を挟んだのこの孤児院の長の一人で、道場主の一人でもある老婆だ。通称ばーさま。

ばーさまは続けて口を開く。

「つまり、小さい赤ん坊に膨大な魔力は危険なのよ。防ぐ方法は現在二つあるわ」

「その一つが、赤ん坊の魔力回路と魔力を大量に消費量の高い術式を刻むって奴だ。

お前の両親が取った方法だな」

ばーさまの言葉を引き継ぐ様に師範代が喋り出す。

周囲の子供達まで、固唾を吞んで見守っている。

「お前の両親は、その魔導師に出会った時は相当酷い有様だったそう。ボロボロの服装で、光輝く赤ん坊を抱いて来てな。

そいつも始めは追い返そうとしたが、夫婦の顔を見て頼みを聞く気になったそうだ」

「なんで？」

「そいつは、当時じゃちょっとした資産家だったそうだな。金だけは間違いなく持っていると分かったからだ。

だが、夫婦は金は持っていたが……他に何も持って居なかった。

お前を救う為に、尽くす限りの手を尽くし、持ってる金はかなりのもんだったが……家も、後に生活して行くだけの基盤さえもなかった。

本当に、金と衣類、赤ん坊のお前と自分の命と体以外持ってなかったんだ」

ティンも、華梨も孤児院の子供達も、皆絶句している。

華梨が声を絞り出す様に、師範代に問う。

「な、何で、そこまで……？」

「一重に、愛だな。俺もそうとしか言えねえ。我が子を思う、親の愛としか……正直、俺も信じられん。

子供の為に、そこまでの事が出来るなんて、な」

「……じゃあ、ティンはずっと、両親の愛で、生かされてたの、か？ あ、仮面の男に襲われた時も？ 両親が刻んだ術式のおかげで？」

「そうとも言えるが、その愛情のおかげで狙われたとも言えるがな」ティンは俯いて話を聞いている。

一言も発さず、黙って静かだ。

「ともかく、両親はティンに術式を刻む様にそいつに願った。

願ったのは、神剣ラグナロクの召喚の術式。そいつを選んだのは単なる偶然らしい。光の魔力を抑える術式を刻んでくれて言われて、丁度手元にあったのがラグナロク召喚の術式だったそうだ。作業は成功、見事ティンは救われた……が、問題はその後、だ。

お前の両親は金を支払い、去ったが……その後、夫婦の行方を知ってるのは誰もいない」

「え、何でお金を」

華梨は反射的に聞き返す。

何故その人は、そんな非情な事をしたのかと。

「そいつだって、それを仕事にして生きてるんだぜ？」

そういう別次元の存在を召喚する術式を扱って言うのは、非情に危険な仕事だ。

相手の事情なんざ、そいつはしらねえ。まあ、夫婦の状況を聞いたのは全部終わった後、夫婦の去り際だそうだ。

その後色々探ってみたが、分かるのは夫婦がとある街に子供を捨てて行った事だけだ。

……多分、相当悩んだらうな」

「どう、して？」

「じゃあ華梨、お前ならどうする？」

自分の全てを犠牲にしても助けたかった物が、自分の側に置けば確実に不幸になると知ったら？ もしも、誰かに委ねれば、確実に今よりましな生活が約束されるとしたら？

お前ならどうする。それでも側におくか？ それとも手放すか？」

華梨は思わず息を呑んだ。

彼女はまだ十九。二十に満たない少女に、その問いはきつい物がある。

捨てるべきか、側におくべきか？ 自分でさえ、自分を見失う程だ。

家を捨ててまで子供を救おうとしたその夫婦の悩みはどれほどだった？ 何もかも失ってまで、我が子の命を救った夫婦は、この非常な現実はどう向き合った？

華梨では、答えが見つからない。

「そういうことだ。夫婦が選んだのは……譲るだ。我が子の幸せを願って、な」

華梨は思わずティンを見た。

当事者である彼女は今の話をどう感じただろう？

最後の最後まで、自分と違い親に確実に愛された彼女は。

華梨は戦争孤児だ。赤ん坊の頃、住んだ村が戦火に塗れ、そこから師範代に救われて此処に來た。だから自分も両親の顔も知らない。愛されてたかさえ分らない。

だけど、彼女は、ティンは。間違いなく、両親に今日まで愛されているのだ。

「ティン……お前……」

華梨は俯いたまま無言の幼馴染に語り掛ける。

でも、言葉が見つからない。華梨は何を話そうか迷っているうちに、ティンが動く。

「——そう。で？」

見上げた彼女の顔に動きはない。

寧ろ、それが何なのだと言わんばかりだ。

「うん、あたしの何？ 出自？ それは分かったけどさ。それがどうしたの？」

「ティ、ティン？ 何いってんだお前？ 嬉しくないのか？」

「嬉しいって、何が？」

「だ、だって、お前、お前はちゃんと両親に愛され」

「それがどうしたの？ それが一体何だって言うの？ それでも、両親があたしを捨てたつてことに変わりはないじゃん。それで良いよ、めんどくさい。それよりお腹空いた」

「ティンッ！」

華梨はティンの胸倉を掴み、声を荒げた。

ティンは興味無さそうに華梨を見る。

「お前、それはないだろ？」

「無いって、何が？」

「今の発言だよっ！ ふざけんなよ、此処に居るお前の妹達はな、皆親に見放される様に捨てられた奴ばっか何だぞ！？」

そんな中で、お前はちゃんと愛され」

「どっちがふざけてんだよッ！」

ティンが華梨の腕を掴み返し、声を荒げる。

「何だよそれ、何なんだよそれ。あたしだけ特別って言いたいのか？ ふざけんなっ！ あたしも、妹達も、変わんない！ 親の都合で捨てられた、これは変わんないだろっ！

あたしも皆と同じだ、同じ孤児なんだよ！ 孤児院の仲間なんだよ！」

「で、でもティン姉ちゃん」

妹分の一人が、一歩歩み寄る。

「今のは、あたしも酷いと思うよ。だって、折角お父さんとお母さんのことがわかったつて言うのに」

「なんだよ…… お前まで、あたしが悪いって言うの？ ねえ、皆？」
周囲の妹分達も、気まずそうにティンから目を離す。

「何だよ…… あたし、そんな、悪い事言った？ 皆思ってるでしょ

？ あたしだって特に変わらないよ？

親なんてどうでも良いって……いいって……」

言えば言うほど、ティンは孤立する。

「な、なんだよ、皆して……皆、あたしが悪いの？ あたしが？」

「お、おい、ティン」

「もういいッ！」

ティンは華梨の手を振りほどくと道場から走り出す。

ティンは鍛え抜いた足腰を生かし、木の枝から木の枝に跳び移り、夕陽に沈む森の中を飛ぶ。

その少し後を追うように華梨がティンと同じように跳びながら続く。

「おい、ティン待て！」

「くんな！」

「ティンッ！」

「五月蠅いッ！ もうお前なんか顔も見たくない！」

「ティーンッ！」

華梨はティンの言葉に思わず足を滑らせ、動きが止まる。

その間にどんどん引き離される。

「畜生……」

ティンは涙を零しながら駆ける。

何処までも、何処までも。

やがて、森の中の広場に躍り出る。

「ちく、しょう……」

目に涙を溜め、ティンは広場の中央に立った。

「ちく、しょおおっ！」

涙を流し、叫びあげて彼女は動き出そうとする。

その時だった。

「どうしたの？」

羽根だ。白い羽根が、ティンの周りに舞い落ちる。

一つや二つではない、もっと沢山だ。数え切れ無いほどの羽根が地面に満ちる。

見上げれば、純白の四枚翼を背にした少女が居た。

金髪の長い髪に、青く羽根のマークや羽根の飾り付けが目立つ服装を見にまとった少女。

（――まるで、天使みたい、だ）

ティンはふと、そう思った。

「ねえ、貴方は誰？ わたし、浅美」

「あ、さみ？」

「うん、浅瀬が美しいと書いて、浅美。貴方の名前は？」

「え、えっと、ティン」

「ティン？ ……何か、遠くからティンって呼んでるけど？」

ティンはその言葉ではつとした様に駆け出す。

「ねえ、どうしたの？」

「うるさい、ついてくんな！」

「もしかして、追われてるの？」

浅美と名乗る少女はティンの最後にピタリとついて来る。

ティンはそんな彼女に目もくれず、踊るように木の枝から枝へと移る。

「じゃあ助けてあげよっか？」

「あ？ 何だよ！？」

気が付くと、ティンはふと足が地につかない事に気が付いた。

視線を動かすと、浅美がティンの両脇を抱え込んで飛んでいる。

「え、え？」

「少しの間黙ってて。舌噛むよ」

「な、なん」

ティンはそれっきり口を空ける事が出来なくなる。

いや、口が動かせなくなる。

体が縦から横に変わるほどの強烈な風圧を叩きつけられたからだ。

あまりの風圧に目さえ開けられない。

同時に何かに守られている様な感じさえして来る。

分かるのは、永遠にも等しく一秒にも等しい時間の間、物凄い勢いの飛行移動を体験している事だけ。

何秒経ったか分からぬ間に移動は終わり、周囲の風景は森から街へと変わった。

夕陽に照らされたビル郡、下に目を向ければ人に群れが東西南北へと動いてる。

思わず下を見たティンは思わず震え上がり、少しパニクる。

「う、動かないで！ 落ちたら幾らわたしでもフォロー出来ないよ！ 死んじゃうよ！」

浅美の言葉を聞くと同時にティンが石像の様に止まる。

ティンが大人しくなるのを確認すると浅美は一度旋回してから公園の方へと向かい、人の居ない広場に静かにティンを下ろし、彼女もゆっくりと着地する。

「うん、街二つ分くらいはすっ飛ばしたかな？ 向こうに風魔導師が居たって追い付けっこ無いよ。」

ちゃんと風のジャミングもしたし、もう追って来れないよ」

「え……？」

ティンは呆然と聞いていたが、浅美の説明に聞き捨てならない単語が混ざっている事に気が付く。

「街、二つ？ え、待ってじゃあ、此処何処？」

ティンはくびを回して周囲の風景を見る。

目に映るもの全てが、彼女には真新しく、見覚えが一切ない。

つまり――。

「え……此処、あたし知らない。し、知らない街に来ちゃった！？ 嘘、どうしょ！？ あたし、どうやって帰れ……いや、帰らなくて……良い、かな？」

ティンは少し俯いた様に呟いた。あんな風に飛び出したのだ、どうしても戻り難い。

（何だか、そう思うと少し楽、かな？）

やがてティンを取り合えず道路の方へと歩き出す。

「あ、ねえティンさん」

「何だよ、ついてくんなよ」

「何で？」

ティンは後に振り返り、ついて来ようとした浅美と向き合う。

「うつさい！ お前には関係ないだろ！」

「何で？ わたし達、もう友達でしょ？」

「は、はあ！？ 何で！？」

「だって、名前教えあつたでしょ？ じゃあもう友達だよ」

「ふ、ふざけんなよ！ な、何でお前なんかと」

「ねえねえ、それよりさ」

「何だよ！」

「お腹空かない？」

浅美が言うと同時にぐうぐうと音が鳴り響く。

二人の間に一瞬だけ静寂が訪れ浅見が先行する。

「ねえ」

「何」

「何食べたい？」

「……え？」

「だからさ、何食べたい？ 友達なもの、夕飯くらいごちそうするよ。」

お肉が良い？ それともお魚？」

浅美は純粋な笑顔をティンに見せながら聞く。

ティンは申し訳なそうな声で「肉……」と空腹を訴える腹を抑えて呟いた。

浅見は手慣れた手付きでホテルの手続きを行い、ティンと一緒にあてられた部屋に向かう。

ホテル側から託された鍵で部屋を空け、浅美はティンと共に部屋に入った。

「じゃあ台所もあるみたいだし、直ぐに作っちゃうね」

言々と浅美は荷物を適当な場所に置き、部屋に備え付けられた簡易キッチンの前に立ち、来る途中で買った物を広げた。

鼻歌交じりに分厚い肉を二枚取り出し、塩とコシヨウを振り荷物から取り出したフライパンをコンロの上に置き、術式を発動させ発火させる。

次に浅美は荷物の中から油を取り出してフライパンの中に注ぎ、塩とコシヨウを振った肉を二枚中に入れティンの方へ振り返る。

「焼き加減はどうする？ 柔らかい？ 普通？ 固い？」

「……ちよつと、固め」

「じゃあミディアムだね」

笑顔で答えるとフライパンの蓋をし、流れる様にまな板の前に戻り、野菜を中に放り投げては練達の包丁捌きを見せつける様に野菜を刻み、再び振り返る。

「ソース要る？」

「ソース？」

「うん、お肉にかけるソース。塩コシヨウだけでもおいしいよ？」

「……要る」

「じゃあ甘いソースと辛いソース、どっちが良い？」

「……甘い」

「分かったよ」

ティンは空腹で気が滅入ってるのか、先ほどの事を引きずっているのか、沈んだ表情を見せる。

浅美は次に刻んだ野菜のいくつかを別の鍋に移して煮込み始め、続いてフライパンの蓋をあけて中の肉をひっくり返して。

「もう少しだね」

とだけ言々とフライパンに蓋をし、再びまな板の元戻るとボールを取り出して色々取り出してはボールの中へと注ぎ込むとかき混ぜ、

続いて煮込むんでいる鍋の方に向うと中身をかき混ぜ、小皿に移して味を見る。

「うん、良い感じ」

とだけ言うと蓋をして発火の術式を消して消火し、となりのフライパンの前に移動して耳をすませる。

「こんなもんかな？」

そう言っただけでフライパンの蓋をあけ、荷物の中から皿を二枚取り出して発火の術師を消してから皿を洗って磨き、ステーキを盛り、刻んだ野菜を盛り、更にソースをかけ、部屋に備え付けられた簡易テーブルを取り出し、それぞれの皿にフォークとナイフを載せて自分の側に一つ、ティンの側に一つ置く。

そして浅美はステーキの肉を切って一口はおぼり。

「……ん、おいし。さあどうぞ、召し上げれ」

と、ティンに言った。

（……ま、まるで、踊るような調理だったな、うん）

鮮やかな調理法に目を奪われている内に料理が完成していて少し呆けていたが、立ち上るステーキの香ばしい匂いにつられ、余計に腹に響く。

ティンは側に置かれたフォークとナイフを見て……固まった。

（……あれ。これどう使うの？）

「どうかした？」

浅美は食わずに困り果ててるティンに語りかける。

「え、あ、うん。ナイフとフォークなんて使った事無いんだけど……」

……

「ん？ こうだよ」

浅美はそう言っただけでナイフとフォークの持ち方を見せ、実際に切った口で運ぶ所までやってみせる。

ティンも見よう見真似で何とか切ろうとするも、上手く肉が切れない。

「そうじゃないよ、こう」

「ど、どう？」

「そうじゃない、こう！」

浅美は何度もフォークとナイフの持ち方と切り方を見せるも、ティンには全然分らない。

やがてティンはしびれを切らし、ナイフとフォークで肉を固定するとそのまま齧り付く。

「……ッ！」

びりつと、電流でも走ったかのようにティンの身体は震えた。

（しっかりとした肉の歯ごたえ、溢れる肉汁、塩と胡椒と絡む甘めのソース、噛めば噛むほどにあふれ出るこの味、これは、これは――）

ティンは口中に広がる味をしっかりと認識し、跳びはねる様に笑顔で叫んだ。

「んまい！」

更にもう一齧り、もう一齧りと厚いステーキ肉を食していく。

肉は固めで焼き上がっており、上手く肉塊を噛み千切れずに何度も分厚い肉に噛み付いていく。

「もー。ナイフとフォークはちゃんと使わなきゃ駄目だよ。

後、野菜もちゃんと食べるんだよ」

ティンは浅美に言われ、肉を頬張りながら皿に盛り付けられたサラダをフォークで口に持ってくる。

「んまい！ このサラダ、うまい！」

ティンは再び声を張り上げると肉も野菜も同時に食べ始める。

礼儀も無くも作法も無く、ただ獣の様にがつく彼女の皿にのっていたサラダとステーキは見る見るうちに消えてなくなり、やがて何も無くなった。

ティンはげふつと床に仰向けで倒れ込む。

「美味かったー！ ごっそさん！」

「もう、テーブルマナーくらい覚えてないと駄目だよ」

「いいよ別にー食っちゃえば何でも同じだって」

「むー」

浅美はそう言うつと最後の一切れを頬張り、空になった二つの皿を流しに置く。

「まあ良いけどね。これから覚えれば良いし。

じゃあお風呂いいっか」

「お風呂？」

ティンはソースとドレッシングの纏り付いた口を嘗め回し、座り直す。

「うん、このホテルにおつきな浴場があるんだよ。一緒にいい？」

「ほんと！？ あ、着替えが」

「大丈夫だよ、下着なら此処にも売ってるし。あ、でも」

浅美はそう言いつつティンの服装を再確認する。

半袖のブラウスに短パンのみと言う彼女の格好を。

「んー明日服屋さんに行つてちゃんとした服装を買わないとね。

後、二人分の食料の確保もいるし……うん、忙しくなるね。取り合えず、いい？」

そう言つて浅美はティンの手を引つ張る。

浅美はティンの下着を購入後、浴場の方へと向かった。

「わ、ひっろー」

ティンは首を上下左右に回し、浴場を見渡す。

彼女達以外に利用中の女性は居らず、殆ど貸し切り状態だ。

「もしかして、ホテルは始めて？」

「え、あ、うん」

「そうなんだ。あ、お風呂に入る時は静かにね、飛び込んだじゃ駄目だよ？」

（……それは寧ろお前じゃ）

ティンはお姉さんぶる浅美に冷めた視線を送るも、兎にも角にも風呂に入る。

続いて浅美も入り、二人は隣に並ぶ。

「ふいー……疲れ取れるねえ」

「うん……」

「ん？ どうしたの？」

「いや、何でも……」

ティンは今一表情が暗い。

（……あんな美味しい料理を一人で食べて、こんなに広いお風呂に入って……あたし、何やってんだろ？）

ティンは今日の流れを振り返る。

謎の男に襲われたこと、自分の両親のこと、華梨や皆を反抗する様に出て行ったこと、浅美に連れられて見知らぬ街に来たこと。

それらを駆け抜ける様に振り返る。

（思えば、何であんなことしたんだろ？

だけどあたし、間違ったこと言ってない。言ってない、筈よね。

うん、間違ってない。間違って何か……ない）

ティンは湯船の中で答えを見つけ出す。でも、それは一度否定された答えだ。

間違ってたんじゃない。そう、信じる。信じたい、が……。

「どうかしたの、ティンさん？」

浅美は柔らかい表情でティンの顔を覗き込んだ。

「……別に」

「悩み事があるなら相談乗るよ？」

「……何でもない」

浅美は変わらず笑顔でティンに語りかけるも、ティンは対照的に表情が暗い。

「……ねえ」

「なあに？」

「あんたはさ、親は居るの？」

「ん？ いるよ？ ティンさんにだってお父さんとお母さんがいるでしょ？」

「両親なら、あたしが赤ん坊の頃にあたしを捨てたよ。

理由は……よく知らない。知りたいとも思わない」

「ふーん。お父さんとお母さんいないの？　じゃあ、今までどうやって過ごしてきたの？」

「決まってんじやん、孤児院だよ。」

あたしは孤児院で色んな妹分達に囲まれ育ったんだよ」

「いいなあ」

「……は？」

ティンは浅美の言葉から素っ頓狂な言葉が飛び出た。

当然とも言える。彼女は親が居ない人生を良いと言ったのだから。

「妹分って、お友達だよな？　沢山いるの？」

「え、あ、うん。沢山いるよ。戦争孤児とかね」

「良いなあ」

「そんなに良いもんじやない。結構貧乏だし、剣術修行以外にやる事無いし」

「良いなあ」

ティンは壊れたレコーダーの様に同じセリフを返す浅美にカチンと来る。

「良いもんじやないって言ってるだろ。」

お前、親が居ないってどういうもんか分かってるのか？

「凄いで？　買い物に行くと、同年代の子は皆母親の手を引かれて帰るんだ。あたしらはむっさいおっさんの師範代と一緒に。」

何で？　ってよく思ったよ。

なんで父さんがいないんだろうって、何であたしには母さんがいないんだろうって。何で……あたしだけは、他とは違うんだろうって……」

ティンは皮肉げな顔で思い出す。

他者と己が違うんだなと思った瞬間を。

「よく分からないけど、そう言うのって良いなあ。お友達が沢山って」

浅美は本当に羨ましそうに言葉を紡ぐ。

「……友達なんて、お前にだって幾らでもいるだろ？
そんなの何処が羨ましいんだって言うんだよ」

「うん、今はね」

言って、浅美は初めて表情が暗くなる。

「……今は？」

「うん、旅に出るまでずっと友達がいなかったんだ」

「……何で？」

ティンはふと浅美に問い返す。

（……まあ、こいつならありそう……結構空気読まないし。
いや、あたしも人のこと、言えないな。うん）

「わたしの住んでた村だとね、子供はわたし一人だったの。

他の子はね、わたしが赤ん坊の時に皆村を出て行ったんだって。
それでかな？

わたしの住んでた村に同年代の子供はいなくってね。ずっとずっと、一人で遊んでたんだ。

一人で海を泳いだり、一人で砂浜を走り回ったり、一人で潮干狩りしたり、一人で砂遊びしたり、一人で木登りしたり、一人で村中を駆け回ったり、一人で釣りをしたり、一人で砂浜にお絵かきしたり、一人で歌を歌ったり、一人で動物さんを観察したり、一人で鳥さんの数数えたり、一人で、一人で……一人で……ずうっと、一人ぼっちで……ね？」

「……あん、た……」

浅美はずっと落ち着いた様子で、暗く沈んだ表情のまま幼い頃の自分を語る。

孤独に満ちた、子供時代。

「も、もういい」

「それでね、九歳の頃からはお父さんやお母さんのお手伝いしたりね」

「もういいよ」

「狩に付いて行ったり、料理の手伝いをしたり、釣に付いて行ったり、洗濯のお手伝いしたり」

「もういいって」

「お母さん、色んな地方の料理を知っててね、ステーキの焼き方とか、お母さんが教えてくれたんだ」

「もういいんだよ」

「後、動物さんを狩る時の仕掛けとか」

「もういい、もう言わなくていい!」

ティンは湯船から立ち上がり、浅美の肩を掴み揺する。

ティンの顔は汗が何かで雫に塗れている。

「……もう、いいよ……いいって……」

「えと……なに、が?」

浅美は柔らかい表情のままティンの言葉に問い返す。

「……もう、いいって。あたしが悪かった。ごめん、辛いこと思い出させて」

「辛いじゃないよ? 寂しかったけど、楽しかったよ。それに、今は沢山お友達がいるんだし」

ティンはゆっくりと手を離し、もう一度湯船に浸かる。

「……思えば……あたしも、辛い思い出なんて数えるくらいしかない。」

寧ろ、楽しかったことばかりだったなあ……剣術修行してるだけで、それを考えるだけで孤児だとか、親がいないとか、忘れられたんだ……。

逃げてた、って言えばそれまでだけど……それでも、あたし楽しかった。

皆で蕎麦屋に寄ったり、皆で井物屋に行ったり……楽しいことばかりだった」

「よく分かんないけど、楽しかったの?」

「うん、凄く楽しかった。だからだ。だから、言えるよ。」

親なんてどうでも良いって。あたしはあたし。

生んでくれて、生かしてくれて愛してくれて有難うって言う気も無いし。何で捨てたんだ、何で一緒にいてくれなかったんだって恨む気も無い。

あたしはこれで良い」

そう言ってティンは湯船から出る。

「あ、背中洗いっこしようよ！ お風呂と言ったら背中の洗い合いだよね！」

そう言って浅美も湯船から立ち上がる。

そして幕は上がる（後書き）

ん。

適当に妄想した話です。他のは更新しないのかつて？

敢えて言おう、気まぐれだ、と。

それでは、彼女の周囲に取り巻く人々の模様をどうぞ。

0・1秒以下の世界

朝が来る。

ティンは日差しに目を刺激され、眠りから覚める。

目を擦りながら、見慣れぬ天井に慣れぬベッドの感覚。

(……ベッドが、ふかふかで落ち着かない……もっと、硬いのが良いかも……?)

身体をゆっくりと起こし、周囲に見渡すために首を動かす。

部屋の中央で金髪の長い少女が——浅美と言う、此処でティンがホテルに宿泊する事になった主な原因だ——がさこそと荷物をあさっていた。

「……あ、さみい……?」

「あ、おはようティンさん。昨日はゆっくり眠れた?」

「んー……」

ティンは細目のまま生返事をする。寝ぼけている様だ。

「それじゃホテルの朝ごはん食べに行こうよ。すっごく美味しいんだよ」

「んー……」

ティンは目覚め切っていない頭で生返事を行う。

朝食を取った後、浅美は部屋に戻ることは無く、真っ直ぐにホテルのカウンターへと向かう。

「浅美、何をしてるの?」

「ん? このホテルを出す手続き」

「へえ……って、ええ!? もうでの!?」

「あれ、ティンさん言わなかったっけ? もう街を出るから荷物忘れに注意してって」

「え、ええっと……言……ってた、よう、な……?」

朝食を取って眠気が飛ぶまでずっと寝惚けていた彼女はもう全てを聞き流していた様なものだ。

ティンは頭をかきながら考える。

「むー、今日はティンさんの服を買っただけでしょ。お店に行くよ」

「あ、うん」

浅美が先行し、ティンも後に付いて行く。

浅美とティンはデパートに寄り、階段を上って6階に向かう。

「じゃあ此処で。此処が剣士服売り場だから」

そう言って浅美は踵を返す。

「え、ちょっと浅美はどうするの？」

「ん、ぐんしきん稼いでくるねっ！ あ、こう言っおっきなお店始めて？ てー員さん！」

浅美は大手を振って店員を呼び寄せた。

店員は待ってましたと言わんばかりにすすと出て来る。やたらと訓練された動きだ。

「この子の戦闘用の鎧服をしたらてて」

「かしこまりました」

「それじゃあ、後はこの人に言えば良いよ。はいお金」

そう言って浅美はサイフから一万と刻まれた紙幣を二枚手渡す。

「え、ええっ！？」

「あ、足りない？」

浅美は続いて同じ紙幣を三枚ティンに手渡す。

ティンはその行動に更に吃驚して震えだす。

「え、え、え、え」

「それじゃあ、お願いしまーす。」

あ、用が済んだらわたしの名前を呼んで。直ぐ向かうから」

言っと浅美はとてととエレベータに乗り込んだ。

ティンは店員と共に置き去りにされた。

「剣士服をお求めですか？ それでしたらこちらです」

話を聞いてたのか、絶妙なタイミングで店員が案内を始める。

「あ、はい」

ティンは言われるがまま案内され、軽装戦士服と言う看板の下がった売り場に案内される。

店員は素早く、いや予め用意してたとも思えるほどの手際の良さで白い服を取り出す。

「今ですと、こちらのシャインスーツがお勧めです。

光属性の魔力が籠っており、光属性の抵抗も高く、防御術式を練りこんでいますのでマシンガンのフルバーストさえ弾くほどの防御力を誇ります」

「え、いや、その……」

「ではこちら等は如何でしょう？」

店員は鮮やかな手付きで別に白いロングコートを取り出す。

「こちらはライトコートと言う軽装戦士服でして、光属性の防護術式により闇属性の魔法に対する耐性が上昇します。

無論物理防御力にも保障付でして、斧の一撃さえ無傷で受け止めるほどの防御力を持っています」

「えっと、その、別に物理防御は高くなくても……」

「でしたらこちらですね」

そう言っただけで店員は少し位置をずらして青いジャケットを取り出す。

「こちらはフリーズジャケット。

氷属性の魔力防御膜を展開し、炎属性の魔法ダメージを軽減し、中和する効果を持っています。

更に涼やかなオーラが例えば猛暑の中であろうと非常に涼やかな気分になります」

「えっと、出来れば回避系重視で……白いのが」

ティンは思い出す。ばーさまが自分の為に仕立ててくれた戦闘服。白百合をイメージして作られた、闘いのドレス。

（ばーさま。あたしには白百合が似合うって、よく言ってたから…

…自然と白いのに手が出るんだよなあ)

そんなこと思いながらぱりぱりと頭をかくティン。

「でしたらこちら等いかがでしょう？」

オーラウェアと言う光属性の軽装鎧服でございます。

防御力も当然、機動力を重視して作られている為、非常に回避行動を取り易く魔力抵抗力も高めに出来ています」

「あ、じゃあそれで」

「かしこまりました、レジの方までどうぞ。

ついでに頭部用防具や、腕用防具、脛当てに肩当て、ついでに武器などを購入しては？」

店員は続いてセールストークを始める。

ティンは圧倒されつつ、考える。

「え、あー……いいです。そう言えば下のは」

「はい、これはスカートとワンセットでございます。パンツタイプもあります」

「あ、スカートで。あ、そうだサイズ合ってるかな？」

「かしこまりました。では試着室へご案内いたします」

店員は頭を下げるとティンを試着室へと案内する。

「うん、こんなもんかな？」

ティンは白い服に茶色いミニスカートを穿いた自分を鏡で見る。

「でもあの店員結構凄いな、適当に選んでると思ったらサイズが恐ろしいほどにぴったり。

しかもきつくないないどころか、寧ろ快適。

うーむ、浅美はこういうの知ってたのかな？」

ティンは一人納得すると試着室から出る。

そのままレジまで向かい、支払いを行うのだった。

ティンはそのまま外に出る。

「……そういや、浅美は名前を呼べって言ったけど何でだろ？
まあやってみるか。浅美ー！」

ティン是人混みにとり合えず浅美の名を呼んでみる。

道行く人々は一瞬足を止めてティンに視線を集中する。

直ぐに前を向いて歩き始める人、奇異の視線を向け続ける人、自分
に指を向けて首をかしげる人様々な反応の中、後から返事が来た。

「ティンさん、どうしたの？」

「あ、浅美」

「あ、買い物終わった？ わたしも旅支度終わったよ！」

浅美はそう言ってナツプザックを掲げる。

（……あとで、ちゃんと浅美に説明しないとね）

ティンは静かにそう思った。

かくかくしかじかと。

二人はバーガーショップで昼食をとりつつ、ティンは浅美に昨日
浅美と出会うまでの経緯を語る。

浅美は黙ってそれを聞いてた。いや、それも怪しい。

「ふーん、じゃあティンさんと呼んでたのって友達だったんだ」
「うん」

「あ、じゃあ此処につれてきたのって拙かった」

「……いや、感謝してる。ちよつと頭冷やしたかったし」

「じゃあ、もう帰るの？」

一瞬、浅美は暗い表情を見せた。

ティンはそれには気付かなかったが、昨日の話を思い出す。

（……もしかして、浅美は一人で旅してきたのかな？ まだ、帰り
たくないし……もう少し、浅美と一緒にしよう）

「いや、まだいいよ。このまま浅美と一緒に旅する」

「いいの？ 帰らなくて」

「いい。まだ、帰りたくない」
そう言ってティンは手にしてたバーガーを頼張る。
浅美は少し嬉しそうにバーガーを頼張る。

昼食も終え、街の出口付近にやってきた浅美は急に立ち止まって
目を閉じる。

そして暫くすると「こっち」と言って森の方へと歩み始めた。
暫く道無き道を歩んでいると何か不思議に思ったようにティンが
話しかける。

「ねえ」

「何？」

浅美は歩みながら後ろに居るティンの方へ首を向ける。

「何処に向かつてるの？」

「風の行く先！」

浅美の輝くような笑顔にティンは顔が真っ青になる。

当然だ。旅のド素人である彼女でさえこの選択にはドン引きだっ
た。

歩き続けていると、崖とその下に大きな水溜りが目前に広がる。
風に流れて乗って来る潮に匂いと波が崖に打つ音が響く。

「……ねえ、進路を変えよう？ 海を泳いでなんて」

「背中に捕まって」

ティンは溜息混じりに進路を変えることを進言すると浅美は屈ん
でティンにそう催促する。

「……へ？」

「良いから。空飛んで大陸移動するよ」

「……マジ？」

ティンは目を見開いて驚いた。

当然だ。彼女はいきなり海を渡って大陸を越えるとまで宣言した
のだ。

「うん、大丈夫だよ。わたしには、神様が付いてるから」

そう言って、スカートのポケットから羽根を取り出した。

羽根を背中に放り、風の魔力を背中に集中する。

するとどうだろう。羽根と魔力は融合し、機械の翼と、純白の大

翼が生み出される。

「あ——」

「さ、乗って」

ティンは静かに、体重をかけない様にと浅美の背中に乗った。

そして大きな四翼を羽ばたかせ、風を巻き起こし、純白に輝く羽根を舞い散らす。

やがて、一瞬で木々を飛び越え進行方向を定めると身体を固定して一気に飛行する。

「わ」

「あ、口閉じないでいいよ。今回は空間せー御で保護してるから喋ってていいよ」

「そ、そう？」

「うん。だって風圧を感じないでしょ？」

ティンは恐る恐る目を開ける。

見えるのは浅美の煌く様な金髪と風の壁と微かに見える流れる海だ。

風圧は無い。驚くほどに。風圧の壁が見えるし、髪が風に靡く感覚と急激な風の流れるを感じる。

「すっご……」

と感じてたら急に景色がよく見える様になる。

太陽に反射して輝く青い海に、優しい潮風を感じる。

「ど、どうし」

「何か、来る」

浅美が言った直後だ。

何も無い空間から這って出るように、仮面を被ったのボロマントを纏った者達が浅美達を取り囲むように現れる。

数は見渡すと十。

連中はまるで宙に足場があるように空中に静止している。

（こいつら、昨日あたしを襲った奴の仲間……？ にしても、なんか不気味）

空中に、緊迫した空気が流れる。

「神剣を渡して貰おう」

ティンは確信する。こいつらは昨日襲ってきた奴の仲間だ、と。

しかし、此处でティンが予想も出来ないことが起きた。

「やだよ」

（え……？）

浅美が、拒否の言葉を口にする。

仮面の男達の視線は全て浅美に集中する。

「これは、お父さんがくれたもの」

浅美はそう言って、いつの間にか長剣を手にしてた。

「何処の誰だか知らないけど、神剣を寄越せって言われても渡すもんか！」

叫ぶと、黒紫の長剣を構える。

瞬間、ティンは空中に浮かんでいるという感覚を味わう。

何の支えも無しに空中に浮かぶ感覚。

そう、自由落下フリーフォールの感覚を。

「ひっ」

恐怖のあまりに声が漏れるのと声が響くのと、斬撃の音が四方八方から響くのは同時だ。

直後にティンはまた下から背負われる。

「わ」

仮面の男達は一瞬で風に流される様に消え去った。

「ふう、ご免ご免。ああいう連中は直ぐにたたきるのが一番だからね」

「こ、怖かつ」

「大丈夫？」

声が振るえ、涙目になつてゐるティンに浅美は声をかける。

「ふざ、ふざけふざけんな！？　しし、死ぬかと思つたぞ！？」

「うーん、流石にティンさん背負つたまま周囲をぶつた切るのもどうかと思つたんだよ。」

超高速戦闘だし、流石にわたしもそこまでフオロー出来ないよ」

浅美は言うだけ言つと再び移動を開始する。

(……後で、ちゃんと説明しよう。うん)

次第に陸が見え、浅美は減速して地上に降り立つ。

輝く四翼は消えて風に溶け、残つた羽根を浅美は掴み取り、スカートのポケットの中に仕舞い込む。

「ふう、やっと着いたよ」

「うん……」

「ん？　どうしたのティンさん？　さっきみたいな連中なら、わたしに幾らでも潰してあげるから！」

「――ほう、やたら勇ましいな。混沌の双剣神」

二人はすばやく声の方へと振り向く。

そこには、さっきの男達よりももう少し装備がグレードアップしたような男が立っている。

仮面に牙が追加され、肩当てが付いている。

「全く、やつらも気が利かぬ。混沌の双剣士と間違えるとは。」

狙いは女神の騎士剣ではなく――」

男はティンに指をさす。

「神の十字剣だ。それを渡して貰おう」

「え、ティンさんが、神剣を？」

浅美に言われる様にティンは光を手に宿し、やがて十字の剣を生み出す。

「これが、欲しいの？」

「そうだ」

「……分かった。欲しいなら、くれてやる」

「ティンさんッ!？」

ティンはぱいっと剣を投げ捨てる。

だが男は剣を踏み砕き、ティンは胸を押さえて仰け反った。

「ぐっ……!？」

「こんな仮召喚物などに用はない。そもそも、寄越せと言われて渡せる物ではない」

「なに……っ!？」

「ティンさん! 渡しちゃ駄目だよ!」

浅美は片膝つき掛けてるティンを庇う様に立ちはだかる。

「神剣は、剣に認めた主以外に持てない。それを奪うってことは、今の所有者を殺すってことだよ!」

ティンさん、死んで良いの!？」

(え、そうだったの?)

ティンは初めて神剣のシステムを知る。

ならば、昨日有無を言わずに襲ってきた理由も分かる。

つまり、連中の目的は最初からティンの命その物だったと言うこと。

「それに、アシェラさんが言ってた。

神剣と知ってて他人の物を狙う連中は、限って良い奴なんていないって! どうせロクでも無い事に使うに決まってるよ!」

「なら……」

ティンはもう一度剣を生成する。

「こんな奴、あたしが倒してやる」

ティンは踊るような足捌きで仮面の男と距離を詰め、剣を振るう――だが。

「下らん」

男の一蹴りで剣は粉碎され、ティンも吹き飛ぶ。

「うぐっ!」

「そんな仮召喚された様な魔力、砕くのは容易い。そのような脆い

得物で、我を切れるとも思ったか？」

「くっ……」

「ティンさん！」

ティンが呻く間に浅美が庇うように前に立つ。

「ふん、そもそも貴様のような魔力の使い方をろくに知らぬ小娘なぞ何時でも仕留める事が出来る。」

二度も魔法剣を砕いてやった。心は既にボロボロだろう？」

（——わか、らない。何、これ？ 寂しいよ、苦しいよ？ 心が……バラバラだよ？

何なの？ これ、何なの？ 思いが、ちっちゃくなっちゃってるよう……かりいん……師範代……師匠……ばーさまあ……）

「——大丈夫。任せて」

ティンのバラバラになった心に、浅美の力強い言葉が染みる。

誰かに守られてる、と言う思いが心の決壊を食い止める。

「こいつは、わたしが倒す」

浅美はそう言って今度は背中に背負った剣を右手で引き抜く。

瞬間、浅美の左腕の腕輪が回転し、白い宝玉が露出している部分で静止し、光だす。

それと同時に黒紫の長剣までも左手に現れる。

「混沌の魔剣、カオス・スパイラルか。よもや、貴様が出て来るとは……まあ、いい。」

貴様を退け、その小娘さえ捕らえれば十分」

「させると」

「だ、ろうな。これは骨が折れる」

仮面の男から戦いを喜ぶかのように声を漏らす。

浅美は背中に魔力を集中させ、羽根をそこに落として四枚翼展開する。

そして、二人は動き出す。

ティンは何とか震える身体を動かし、周りを見る。二人の姿は一切見えない。影さえも。

影が絶った様に二人は消え去る。

音も無く、静かな空気が流れ……音が響く。

その瞬間、二人の姿が見えた。

ティンの目の前。男の拳と浅美の金色の剣が激突し、火花が散り再び二人の姿が消える。

「……みえ、ない」

ティンはそう呟いた。不気味なほどに静かな空間。

やがて音が森の中で響き渡る。

ティンがそこに視線を動かすと、もう何も無い。

別の方向に音が響く。また響く。更に響く。姿は一切目にする事が出来ずに音だけが四方八方から木霊する。

ティンの知らない所で、だが直ぐ近くで、何度も二人が交戦している。

耳を澄ませば、響く金属音の中に斬撃音と打撃音が混ざっている。つまり浅美が斬り、男の打撃が当たっている、と言う事かも知れない。

やがて、地面に衝撃音と砂煙が立ち上る。

「……決着が、ついた？」

ティンは浅美ではない事を祈りながら砂煙が晴れるの待ち……それよりも早く結果が来た。

浅美だ。

羽根を舞い散らしながら浅美が宙から降りて、砂煙を払って地に付した男の姿を露にする。

「浅、美……？」

「凄いね、吃驚だよ」

「くうっ……」

男は呻きながら身体を起こす。

「まさか零・一秒以下の世界に付いて来れるなんて」

「ぐっ……」

「でも残念。わたしと渡り合うならせめて零・零一秒以下の世界まで来ないとだめだよ。」

尤もわたしは、零・零零一秒以下にいけるけど」

（……それって、どんな速さ？）

ティンはぼんやりとそんなことを考える。

ただ、想像を絶する速さだと言うのは理解できた。

「くっ！」

仮面の男は悔しげにそんなことを言うや否や影に解ける様に姿を消した。

「ティンさん、大丈夫!？」

浅美はティンの方へと振り向くと、ティンは多少落ち着いたように座り込んでいた。

「あ……う、うん」

「良かった……」

浅美はティンを見て、心底安心したらしい。
柔らかな表情を見せる。

「もう日も沈んで来たし、お夕飯食べよ?」

「あ、う、うん」

そう言っ浅美はリュックザックを降ろしてその中からキャンプセットを取り出した。

0・1秒以下の世界（後書き）

注：このやり取りは所謂別空間、何でもワールド的な感じの話です。

時系列とかは考えないでください。真面目に考えると損です。

黒く長いウェーブのかかった少女が緑の短髪の少女の元へと走り寄る。

黒髪の少女の名前は美奈、緑髪の少女の名は林檎だ。

「た、大変だよ林檎ちゃん！」

「どうしたのよ、おねえちゃん」

美奈は凄く慌てた様子なのに対し、林檎は非常に落ち着いている。優雅と言っても良いだろう。

「今回の話で、専門用語とか、解説が必要な単語が沢山あるよ！」

「……それに、何か問題でも」

林檎は至極どうでもいい様に手にした本のページを捲る。

「え、だって読者さんとかに」

「作者はなんて言ってるの？」

「えっと……読んだ人が楽しめればそれで良いって」

「で、分からない人は？」

「えっと、分からないままで良いんじゃないかって」

「じゃ、それで良いんじゃない？」

そもそも、人生に欠片も役に立たない知識を求める様な愚者に付き合う必要性なんてあるのかしら？」

「うん、林檎ちゃん。此処まで読んでくれた人にあやまるっか？」

美奈は優しい笑顔で、物凄い迫力のあるオーラを纏う。

「ま、どうしても知りたいなら、答えてやらなくもないわ。」

と言うことで、質問があるなら下のコーナー当てに質問を書くこと

良い。

多ければ、私が次の後書きで答えるかもしれないから」

『林檎先生の教えてコーナー』

林檎は髪をかき上げ、提案されたコーナー名を凝視する。

「……まあ、別に良いわ」

「良いんだ」

「ええ、いつかは講師の資格を取るつもりだったし。

その準備運動か何かと思えば十分よ」

「そうなんだ」

「と言うわけで、聞きたい事があれば次のあとがきで答えてやらない事も無いってだけよ」

そんな感じに、林檎さんがこの話の世界設定等を解説してくれるようです。

作者的に大助かりです。

だって、書いてて思いました。

誰か、説明をと。

それでは。

そして鳥はネコとまた巡り合う

がさがさと言う音に誘われ、ティンは覚醒し始める。

ゆっくりと目を開けるとティンの目に黄土色の布が入ってくる。

ティンは首を動かし、毛布の隣に目を移すとそこには誰も居なかった。

ぽーっと毛布に包まっていると「ご飯だよー」と言う声が聞こえる。

ティンはあくびをしつつのそのそと毛布から出て外に顔を出した

闇だけが存在する空間——異世界のいずこかで。

闇だ。

その空間に闇だけが存在している。

黒と紫に彩られた深い深い、闇。

見る人に恐怖しか与えぬその空間に、確かに数多くの何かが存在した。

「さて、四天王の台座を頂いておきながらこの失態をどう説明する気だ？」

男の様な低い声が漏れる。

その声から来るイメージは若き策謀家、冷徹な美青年を思わせる。「まあ良いではないか。あれは一種の事故、咎めるに値するだろうか？」

続いて別の男の様な声が響く。

その声からは長い年月を生きた武人を思わせるような声色だ。

「……言い訳はするまい」

また別の男の声が響く。

その声からは、誠実かつ真面目な青年を連想させる。

「おいおい、フォローして貰っておいてそりゃねえだろうが」
更に別の男の声が嘲笑うように闇に響く。

その声からは年若き指導者を思わせる、頼り甲斐のある人間を想像させる。

「我ら四天王に失態は許されない。我らの存在はあの方の為に存在している。

役に立たぬ者は……屑にも劣る、いやこの表現は屑に失礼と言うものか」

冷徹な意見が暗闇の中に響く。

「ならば、あんたならあの局面で任務を遂行できたって言う気かい？
じゃあ何故行かない。とっとと仕事を終わらせて、新しい仕事を貰おうじゃねえか」

「僕が手を下すまでもない、そう判断したまで。

あのような小娘一人捕えるのに、あやつ一人で十分と判断した。
だと言うのに――」

「……申しわけない。ただ、この身を滅して詫びる前に最後の報告に戻った次第。

許し願えるか？」

「へえ、相つ変わらず誠実だねえ」

仕事に実直に向かう男の声をからかう様な声が暗黒に響く。

「……良いだろう。せめて最後は役に立とうとする貴殿の心意気を
買おう」

「……あの小娘に混沌の双剣神が付いていた。

あの剣士、噂以上の実力だ。この私でさえ敵わなかった」

「ふん、何の報告かと思えば……負けた言い訳が見苦しい」

「では問おう。貴殿ならば結城浅美を仕留められるか？」

「……いや、状況が整っていない」

突如、闇の空間に笑い声が響く。

「こりゃ傑作だ。策士殿はあれだけ人を賣めておいて、自分に振ら

れるとこれか」

「ならば貴様が仕留めて来ると良い。

混沌の双剣士だろうと、僕の策の前には無力に等しい」

「へえ、じゃあとつとその状況を揃えてラグナロックを手に入れて来いよ」

闇以外何もない空間な筈なのに、ピリピリとした雰囲気が漂う。

「落ち着きたまえ、諸君。今は争う場面では無い。

幸い、あの混沌の双剣士には仲間が居ない。この場面を利用せぬ手は無い」

「そういや、あの女とかの氷姫は運命によって巡り会う定めとか。

なあ策士殿、またあの一行が揃った状態でもラグナロックを手に入れる策はあるかい？」

「その問いは肯定しよう。だが、とるなら難易度が低い内に行うのがベストだ。

そして、行うなら直ぐに取り掛かった方が良い」

「……では、さらばだ」

闇の中でも、己の意思表示を行っていた四つの気配の内一つが消え去ろうとしている。

「待てよ。俺に一つ考えがある。

あんたが責任感じて自決するのは勝手だが、最後に役に立たねえか？」

「……何？」

「簡単さ、あの混沌の双剣士を相手にしちゃ一人で作戦の遂行は無理だが……協力すりゃ無理って事は無い」

朝食をとり終わった二人はココアを飲みながら昨日の件について語り合っている。

浅美はティンから自身が神剣を使える事、そして浅美自身も神剣を所持していること。

これらの情報をお互いに交換した。

「つまり、あたし達は神剣を持ってて、狙われてるのはあたしの方
つて事」

「ふーん」

「えと、そのごめんね。狙われてること隠してて。

でもわざとじゃないよ？ その、色々あつてすっかり忘れてたし、
その……迷惑？」

「全然。大丈夫だよ安心して、そんな奴ら出て来てもわたしが全員
ぶった切るから！」

ティンは昨日の出来事を思い出す。

海上で襲つて来た連中を一瞬で薙ぎ払う。

続いてやって来た強そうな奴も一気に撃退。

(……うん、寧ろ本拠地乗り込んで一気に問題が解決しそう)

「どうしたの？」

「あ、ううん、なんでもないよ」

「そう？」

ティンは苦笑しつつ朝食の後のココアを飲んだ。

インスタントだが、苦味を含んだ甘味がティンの口いっぱいに広
がる。

同じタイミングで浅美もココアを飲み、同時に息をついた。

「「ふう……」」

和む。

食事とその後の一服を満喫した二人は再び歩き出す。

森の中をとことこ歩いていると、やがて石造りの道が見えて来る。
ティンはそれに気付くと楽しそうに石造りの道を踏みしめる。

「わあ、何か雰囲気あるなあ。こんな感じの道まだあったのか」

「ほんとだねーなんか御伽噺に出て来る街道みたい」

二人は物珍しそうな反応を見せつつ、道を進んでいた。

「そう言えば浅美」

「なあに？」

「こっちで良いの？ 道」

「え、いや？」

浅美は首を傾げる様に問い返した。

「だってさ、昨日は風の行く先へって」

「うん、だって風はこの先に向いてるよ？」

浅美はそう言っ指を天に指す。

すると微風が確かに浅美の金色の髪がこれから向かう方向に靡くのが見える。

「んじゃあいいや」

「そう」

そんな会話をしてると次第に橋が見えた。

つるが纏わり付いているが、中心の部分は人の通りが多いのか綺麗に整理されている。

「こんな橋もあるなんて雰囲気あるなあ」

「うん、そうだね」

「この先に街でもあるのかな？」

浅美は目を閉じて耳を澄ます

「……複数の生活音や、生活臭がする。うん、この近く……でもちよっと歩くけど街があるよ」

「よっしゃ、じゃあどんな街なんだろう。楽しみ」

「——ったくよ、気楽なもんだぜ。自分達が逃亡者だって分かってんのか？」

突如後ろから響いた声に対し、二人は弾かれる様に振り向いた。

そこには昨日追い払った仮面の男が立っている。

ただ、纏う雰囲気が段違いだ。

浅美は素早くティンを庇う様に立ちふさがる。

「また来たの？ しつこいよ」

「ああ、そうか。俺達は殆ど同じ格好だからな、見た目は全部一緒

か」

男は自分の格好を見直しながら言った。

「誰でも同じだよ。敵なら切る」

「へえ、勇ましいじゃねえか」

ピシッと。

そんな音が響くと同時に浅美は必死な顔で振り向く。
ブレッシャーゾーン

「圧力場！」「アカシックレディストツ！」

声と同時に響き、振り向いた浅美は再び前を向いて金色の柄の剣を抜くと蒼白いオーラを纏って黒い衝撃波を薙ぎ払う。

その直後、ティンの立っている地面に亀裂が走り、橋の手前まで地面が砕け落ちた。

「ティンさんツ！」

「行かせるか！」

浅美が砕けた地面と共に落ち行くティンに手を伸ばすも飛んで来た衝撃波を再び蒼白いオーラを剣に纏わせて薙ぎ払う。

「ちっ、流石は女神の騎士剣。しかも完全状態たあな。

事象自体を拒絶する守護の力……全く、こんなのを相手にするなんて」

「てえあつ！」

男の口上を遮って浅美は機械の翼と純白の翼の四枚翼を背に切りかかるも、男は素早くかわし——なおも切りかかる浅美の剣がその身体を捕らえる。

男は斬られた部分を押さえつつ、仰け反る。

「ぐうつ、流石だぜ混沌の双剣神。剣神の名に恥じぬ剣捌き恐れ入る。

でも、そんなあんたでも俺を無視出来ねえよな？」

「くつ」

浅美は苦虫を噛み潰したような表情を見せる。

「そつだよな？ 幾らあんたでもあれ《圧力場》は防ぐしかない。そして油断できない。無闇やたらに俺を斬る事も、この口上さえ

ぶつた切りながらっ!？」

男の背中から黒紫の長剣——カオス・スパイラルが貫いていた。見れば、浅美がカオス・スパイラルを真横に向けている。

が、刀身は途中で消え去り空間に生まれた穴の中に埋め込まれている。

浅美はその穴からカオス・スパイラルを引き抜くと男の身体から剣が抜かれる。

「くくくつ、こんな不意打ちしか出来ねえよな？」

ほらほらどうした？ あそこに落ちたあのお友達は無事かねえ？ おかしな話だよなあ？ 行き成り地面が抜け落ちるなんてよおお？ んま、俺達の仕業だな」

浅美は一層深刻な表情をする。

「ははっ、さつさと来いよ。こんだけ時間をかせぎや十分だ。

後は、仕上げを邪魔されねえようにバトラせて貰うぜ？」

直後だ。

男は空中に飛ばされる。

後は一方的だった。

浅美は、男をはつきりとした敵意で男を射抜き、飛翔して切り裂く。何度も何度も。

一瞬にして鮮やかな剣戟の網が生まれ、男は微塵に切り裂かれる。一秒、一秒、刻一刻と時が過ぎる度に斬撃の嵐は男を刻む。刻み続ける。

「これで、締める！」

浅美は宣言し、カオス・スパイラルが輝き始める。黒紫の、混沌の輝きを。

「カオス、スマッシュアアアアアアッ！」

混沌の斬撃が一閃する。

男は弾かれる様に吹き飛んだ。

「ティンさぁんッ！」

浅美は必死の形相を現し、橋の前に出来た穴に飛び込んだ——。

少し、時間を戻そう。

地面に亀裂が走り、ティンごと砕け落ちた時。

ティンは横に見えた壁に生成した剣を突き立てるもあつさり壁に弾かれ、次に足を蹴り付けて転がり落ちる様に地面に到達した。

「んぐうつ!？」

「こつも上手く事が運ぶとは」

ティンは痛みに耐えながら何とか体を立たせ、前を見る。

そこには地上に居たのと同じ格好の男。

「お、まえ……」

「悪いが悠長に話してる余裕はない」

男は拳を構え、ティンを見据える。

ティンも応える様に剣を構える。

だが。

(こんな剣じゃ、あいつに碎かれる……!　でもあたしにはこれしか武器が無い。

くそつ、剣がまともなら、あんな奴に負けはしないのに……!)

ティンは悔しげに歯を噛み締める。

——そもそも、ティンが剣を持たないのはラグナロックを仮召喚できるからだ。神剣である以上、例えば仮召喚でもそこの剣に劣らぬ性能を持つ。ゆえにティンはこの剣以外に武器を持つことが無い。だが、それが此処に来て裏目に出ている。

剣士として生きて来たのに、剣が使えない。

彼女にとって、これほど悔しいことは無い。

「尚も食い下がる、か。良いだろう、その剣士の誇りごと打ち砕いてくれる」

男は足を動かし、ティンを打ち砕かんとその拳を振るう——!
と、その瞬間。

トントン、と男の肩を後ろから小突く者がいた。

「「!？」」

対峙した二人の表情は驚愕に彩られる。

当然だ、この状況に対して第三者が現れたことになる。

しかし、それ以上に男は固まっている。まるで、後ろに居る人間が誰だか理解しているかのよう。

またトントンと、黒い手が男の肩を小突く。

仮面の男はゆっくりと後ろに首を振り向くと、そこには女が一人。
フェアリー・プリンセス
妖精姫の紋章が刻まれた手袋を身に付け、黒く長い髪、猫耳の様に山形に盛り上がった前髪、白いケープに水色のジャケットの下に白いブラウスを身に纏った女。

「——漆黒の、氷姫……氷結、瑞穂っ、だと……!？」

男は女の名を口にした瞬間、ぶっとんだ。

ティンの直ぐ側まで男は砲弾でも叩き付けられたかのように。

「え、え」

「ねえ」

ティンは混乱していると、瑞穂はティンに語りかけながら一歩一歩歩み寄る。

ただし、ゴキッゴキッと指を鳴らしつつだが。

「私の頭上に岩盤叩き落した“馬鹿”は、貴方？」

「え、いや」

ティンは漸く見えて来た瑞穂の表情を見て固まる。

表情は至って冷静だ。指を鳴らしている割には本当に冷静。

……だが、目は一切笑ってなかった。と言うか怒りに満ちている、
それどころか殺気さえ籠っている。

「え、えと、そ、そいつ！ そいつの仕業！」

ティンは震えながら仮面の男を指差す。

瑞穂も続いてそつちに目線を送る。

「……ほう。ねえその人、それ本当？　嘘なら私は両方ぶちのめさなきゃなくなるんだけど？」

（さりと怖いこと言うな……氷結瑞穂？　あれ、どっかで聞いたような）

ティンは心の中で突っ込みを入れた。

どっちにせよ、彼女はどれだけ楽観視しても中立止まりと言うのはよく分かる。

（くうっ、何故だ、何故この局面で……！　何故、漆黒の氷姫が、このタイミングで……！

最悪だ……最悪のジョーカーが、この場面に来て揃った……！）

男は震えながらも立ち上がり、拳を構え直す。

「ふうん、本当っぽいね。じゃあ……」

瑞穂は屈伸をはじめ、男を見定める。

「ぶっ潰す」

ふっと瑞穂は消え、直後に男の真後ろで回し蹴りを叩きこまんと足を振り上げ。

ハンマーを叩きつけられた様に男はまたもや吹っ飛んだ。

「んごっ！？」

壁に叩きつけられ、潰れたような声を上げる仮面の男。

瑞穂はゆっくりと、しかし足音としっかり立てて男の下へと歩み寄り後頭部にアイアンクローを入れ込んだ。

みしみしと音を立てる男の後頭部。

瑞穂は壁に埋まった男を壁から引っ張り出し、手を開いて解放し天井に叩きつける様に蹴り上げた。

瑞穂は仕事が終わった様に手を払い、続いて男が天井から地面に落ちた所に氷のハンマーで追い打ちをかける。

「……あれ、これどっちが悪役だっけ？」

「これ」

ティンは静かに呟いた。瑞穂は律儀に氷塊の下敷きになったボロ

雑巾を指さす。

「……ええー」

「だってさ、人が橋の下にある遺跡っぽいものを見てたらいきなり岩盤落としたんだよ？」

「こつなつても文句は無いと思うんだけど」

瑞穂は当然と言わんばかりに主張する。

「ティーンさーん！」

「あ、浅美！」

「浅美？」

瑞穂はティンの発言に反応する。

対する浅美も一気に降下速度をあげ、ティン達の元に降り立ち――
瑞穂に飛びついた。

「わっ!？」

「瑞穂さんだ！」

瑞穂はバランスを保とうと努力を行うが、無駄に終わり尻餅をつく。

「瑞穂さんだ、瑞穂さんだ久しぶりー！」

「ちょ、まつ、待って！ 何で浅美さんが此処に？ あいやそうじやなく、今立て込み中！」

「ちよつと馬鹿が居るからそいつをぶちのめしてから」

「まだ、だ……」

氷塊のハンマーをどかすと、仮面の男は再び立ち上がる。

「まだ、終わっては……おらんぞっ！」

男は拳を構え直し、瑞穂達に飛びかかる。

その別方向から、仮面の男を援護する様に黒い衝撃波が飛んでくる。

「待った！」

瑞穂は言いながら素早く仮面の男の横に回ると、衝撃波目掛けて男を蹴っ飛ばす。

「……え？」

ティンは間拔けな声を上げる。

男は衝撃波に吞まれ、声にならない声を上げる。

「よっし」

「よっしじゃねえ！？ 何鬼畜なことしてんだあんた！？」

瑞穂はガッツポーズを取るとティンが思いつきり突っ込んだ。

「あれくらい普通」

「普通！？」

男に叩き込まれる衝撃波の勢いが更に増加する。

「き、貴様っ……！」

「——わりいな、我らが主人の命でよ。役立つ^{スクラップ}は消せとさ」

「くっ、ぐうっ！？」

「あばよ」

直後、仮面の男Aは委縮して爆散した。破片は全て浅美の四枚翼が吹き払う。

そして三人は仮面の男Bと対峙する。

「で、これで三対一………どうするの？」

「三対一？ やれやれ、もう少し戦力計算は確り行って欲しい」

更に別方向、瑞穂が現れた所からまた別の仮面の男が現れる。

「これで二対三………と思っっているのか？」

その小娘は戦力外も良い所だ。どう見ても二対二、いや僕の見立てでは寧ろ足手まとい付きで実質二対一………僕らの勝利となる可能性が高い。

だが…… 幾らなんでも相手が悪過ぎる。

君達が相手では幾ら戦力計算上で上回っていたとしてもイレギュラー要素が高過ぎる。

それに氷姫と双剣士を叩くにはまだ状況が揃ってない。

退くぞ」

言うだけ言うと仮面の男Cは踵を返して消えた。

「ふん、そういうこった。今回の所はこの辺りで引き上げだ。幾らなんでも、相手が悪過ぎるってもんだぜ。」

「そんじゃあな」

仮面の男Bはそう言つと影に溶ける様に消えていった。

「……何なの、あれ」

そして鳥はネコとまた巡り合う（後書き）

教えて、林檎先生！

「つて、質問無いみたいだけど……」

「そもそも、こんなの読んでいる奴なんて居るのかしら？
そこが既に怪しいわよ」

「後、瑞穂さんが来たって事は……更に別の人も？
私達まで出たらこのコーナーどうなるの？」

「さあ？ そんなことまで気を回す道理は無い。」

質問が無いならないで良いでしょう。大体、瑞穂と言う最高の説
明役が居るじゃない」

「あれ、瑞穂さんって魔法の知識は魔法使い以下じゃ」

二人の間を静寂が支配する。

「まいっか」

「良いんだ」

次回に――続く――。

さて、飯を食おう

その後、浅美は二人を背負って石橋の上に飛び降りる。

「はい、着いたよ二人とも」

「有難う」

「ども」

瑞穂とティンは素早くお礼言々と浅美から降り、浅美自身も手を掲げると背の四枚翼が光の粒子に変化し光の羽根が生み出され、浅美の掲げた手の中に納まった。

そして浅美はそれを素早くポケットの中に仕舞い込む。

「ねえねえ瑞穂さん瑞穂さん」

「……何？」

「一緒に着いて行こうよ！」

「落ち着け。まずそこから」

「えっとね、瑞穂さんが仲間になった！」

「良いから落ち着いて。一先ずそこから始めようよ」

「だから、瑞穂さんが瑞穂さんと瑞穂さん！」

「何？」

「……何で此处に居るの？」

「そうだね、まずはそこだね」

「……いや、何このコント」

ティンは二人のやり取りを見て取りあえず感想を述べた。催促したのは誰だよ。

「この辺りの石橋には地下に遺跡があつてね。

興味が湧いたから中を探索してたの。そしたら行き成り岩盤が落ちて来て吃驚して取りあえずむかついたから犯人ぶん殴ろうと思って徘徊してたら犯人っぽい人見つけたから殴りに行った。

以上」

「分り易い上に目的変わってないかと思う様な説明有難う」

ティンは浅美と暫く一緒だった賜物か、一先ず突っ込んだ。

「じゃあ一緒に行こうよ！」

「浅美さん、一先ず何かのプロセスが飛び抜けてる」

ティンと浅美は同時に「プロセス？」と首を傾げ「過程だよ」と瑞穂が突っ込み返し、ああと手を打った。

「……で、私としては別にどっちでも良いんだけどさ。」

一先ず、近くの街に行こうよ。お互い言いたい事聞きたい事はまだ沢山あるだろうからさ」

そう瑞穂が促す。

残り二人は首を縦に振って同意すると瑞穂を先頭に歩き出し――すぐさま浅美が先頭に立った。

「浅美どうしたの？」

「瑞穂さんが方向音痴だって忘れてた」

瑞穂は遠い目をして明後日の方向を見る。

「おおい」

ティンは思わず突っ込んだ。

街道とは到底思えない森の中を進むと、木々が門の様に立ち並んで居るのが見える。

そこを潜り抜けた先には少し古めの街がある。

全体的に古き良き物を思わせる石造りの街並みだ。

街に着いた三人は顔を向きあう。

「で、早速どうする？」

「一先ず昼食でも取りながら話そうよ。もう良い時間だし」

「そうだね。じゃあ皆は何が食べたい？」

「肉！」

「分かった。じゃあ今日はハンバーグに」

「焼き肉屋に行こう」

瑞穂は仕切る様に言々と歩き出す。

(……このままで、良いのかな)

ティンはふと、顔を俯いて考え始める。

先程の戦闘。結局助けて貰うだけだった、あの戦い。

(やっぱり、あたしは何も出来ずに浅美や瑞穂とか言う奴に助けてもらったし。

……剣が。まともな、砕けない剣が……そうだ。砕けない、絶対に砕けることの無い、剣。

剣さえ、あれば……！ あれ、ば……どうにか、なるかな……？
浅美とあいつの一騎打ちも、ろくに見えなかったし。剣が、あつても……)

「ええーなんで？」

「浅美さんはお金使い過ぎるから。後サイフも出して」

浅美は言われて財布を取り出すと瑞穂がぱつとそれを回収する。

(あつても……あつた所で、あたしに何が出来るんだろう。

剣なんて無くても……あたしの、あたし如きの剣じゃ……)

ティンは力なく頭を垂れ、右手で虚無を握り締める。

「ああーわたしのサイフー！」

「とり合えず没収。一先ず皆の共通資金と言うことでわたしが管理するね」

「そんなー！ 酷いよ瑞穂さん！」

(……浅美って、結構騙されやすいな)

ティンはちよつと離れた所から二人の騒ぎ様を見てそんなことをぼーっと思う。

二人はティンを置いてそんなやり取りをしながら街中を歩いていく。

そんな中、瑞穂が後方に居るティンに首を向けた。

「……どうしたの？ ティンさんも来なよ」

「あ、うん」

二人は街の中の焼肉屋に入り、適当な席に座って肉を焼きながら情報交換を行っている。

「で、ティンさんの神剣を狙ってる奴らがあの仮面の連中と」

「うん、そうだよ」

浅美は肉を引つ繰り返しながら答える。

「ふうん、で連中のアジトの目星は？」

「目星？」

「そ」

瑞穂は焼き上がった肉を箸で掴み、たれを入れた小皿に移す。

ティンも瑞穂と同じ作業をしつつ、彼女と言葉を交わす。

「いや、よく分かんないんだよな。そう言うの。あいつらいつも突然沸いて来るし。」

「ほういや、ほうやってふるんだろ？」

「口に物詰めたまま喋らない」

「むぐつ、はりんみたいなのふおひゅうな……」

ティンは喋りながら次々と肉を口に放り込んでいると瑞穂が咎める。

「一先ず、この話は一旦置こう。後で色々調べておく。」

とり合えず食べよ」

そう言って瑞穂は金網の上で焼かれる肉を弄くる。

ティンは瑞穂の言葉に納得し、手にした大盛りご飯に焼けた肉を盛っていく。

浅美は浅美で肉の匂いを嗅いでは顔を顰め、仕方なく金網に置く。

「浅美は何やってんだ？」

「気にしないでいいよ、病気みたいな物だし」

「病気？」

「酷い……」

「はい？」

ティンは浅美の呟きに頭を捻る。

「酷い、この牛肉、酷い！ これ、明らかに肉にするべきじゃない

牛を肉にしてる！」

「……瑞穂、浅美は何を言ってるの？」

「浅美さんは魚肉や獣肉にはちよつと五月蠅い人でね。

不味い肉にはああ言う風に文句を言い出すんだよ」

瑞穂は焼けた肉にたれをつけ口に放り込む。

「むーっ、だから焼肉屋は嫌なんだよ……こんな風に育てたんじゃ牛さんが可哀想だよ。」

育てるならもつとちゃんと」

「あ、すいません。これとこれとこれを」

ぶつくさ言っている浅美を放置して瑞穂は側に来た店員に素早く追加注文を行っている。

店員は短く返すと素早く立ち去った。

「なに頼んだの？」

「取り合えず、多少でも値が張る奴でも持って来れば文句も引つ込むと思うよ」

瑞穂は言うつと空いた所に新しい肉を配置していく。

ティンのご飯の上に山盛りとなった肉をご飯ごとかき込んでいる。続いて浅美がまた肉の色を見たり匂いを嗅いだりして表情により一層睨む。

そんな事をしている内に新しい肉がやってくる。その瞬間、浅美は目を見開いて店員さんの手からぱつと皿を奪う様にとる。

「気にしないでください」

「あ、はい」

瑞穂は間一髪入れるように店員さんに言葉を伝え、一先ず一礼をして立ち去る。

浅美は更に並べられた肉を凝視し、匂いを嗅ぐ。

「……この匂い、色合い……」

浅美は目と鼻で牛肉を吟味するとそれを手掴みで金網に並べる。

「ねえ、良いの？」

「良いの良いの、浅美さんは寧ろ黙って食べてる方が納得してるか

ら」

瑞穂は何時もの事と言わんばかりに焼けた肉と野菜を回収している。

「そうなの？ 所で瑞穂」

「何？」

「……色々回収してる割に、全然食べてないけど」

「要る？」

ティンが瑞穂の更に積もりに積もった焼けた肉や野菜等を橋で示すと、瑞穂はそつとその皿をティンの元に置く。

「……貰う。ご飯おかわりー！」

ティンはまだ半分も減ってないご飯を片手にそう言った。

三人は食事を終え、店を出ると歩きながら話し始める。

「じゃ、取りあえず買うもの買っちゃおう。浅美さん、荷物見せて」
「はい」

浅美は言われてほいっと肩に下げていたリュックザックを手渡す。
瑞穂はぱつとそれを奪い取り、中身を調べ始める。

「……瑞穂っていつもこんな感じ？」

「ん？ うん、瑞穂さんは大体こんな感じだよ」

（……うわあ）

ティンはがさがさと浅美の荷物を漁る瑞穂を複雑な表情で見つめていた。

「……浅美さん、なんで魔力コンロや鍋しか無いの？ 傷薬とか持たない？」

「あ、そうだ。瑞穂さん、薬品系そのまま持っていないでよ！」

「……いや、それは浅美さんが物臭なだけでしょ」

呆れながら瑞穂は荷物確認を続ける。

結果、瑞穂は立ち上がって浅美に心底呆れた表情を見せ。

「浅美さん……鍋以外にも何か買おうよ……」

とだけ言った。

流石のティンまでその発言にあきれ返る。

「え、ちゃんとクーラーボックスに食材入れてるよ？」

「……そう」

瑞穂は生返事を返した。

「えっと、取りあえず必要な物を買ひ揃えて……一応狙われてるんだし単独行動を控えるように。」

ティンさん、欲しい物とかある？」

「えっと……剣が、欲しいかな？」

「分った。じゃあ、まずは武器屋に行こう」

「場所分るの？」

「すいませーん、道を聞きたいんですがー」

ティンの問いに対し、瑞穂は返す様に通行人の女性に話しかけた。

「はいはいなんでしょう？」

「武器屋は何処ですか？」

「ああ、武器屋ならそこら辺に色々あるよ。」

此処は古都ハルベルトと言われるだけあって中々に上等な斧系の武器を売っているのよ」

「……斧？ 剣は無いんですか？」

瑞穂は表情に疑問の色を浮かべて聞き直す。

「剣ですか？ 剣なら古都ブリンガーにしかありませんよ」

「え、此処に剣無いの！？」

続いて割って入ったのはティンだ。

「え、ええ。此処古都ハルベルトは聖都セントラル・パラディンの周囲に作られた街でして。」

古都ブリンガー、新都ハスタ・スピアの三つに囲まれて出来ているの。古都ブリンガーに行くなら、聖都セントラル・パラディンから経由した方が良いわね」

「そうですか。有難うございます」

瑞穂は一例すると通行人の人は立ち去った。

「と言うことだから、武器の購入は別の街まで待つて」

「あ、うん。で、何を買うの？」

「備品を色々。浅美さん、銃弾は？」

「何を言ってるの、瑞穂。浅美が銃弾が要る訳ないじゃん」

「ティンがないと言ってるのと浅美は荷物の中から拳銃を二丁取り出し、中身の弾倉を取り出して更に銃弾と書かれた袋まで取り出して中身の確認を行う。」

「んー、最近使っていないからって弾丸の補充やるの忘れてたなあ」

「……何当たり前のように拳銃取り出してるんだ？」

「言うかそんな話聞いてないんだけど！？」

「じゃあ銃弾も補充出来るかどうか探してみようか」

そう言うのと瑞穂は踵を返し、歩き出す。

夜。

夕食を取った三人は宿を取った。

「流石にこの辺で銃弾を取り扱っているお店は無かったね。」

「聖都って所にも無いってさ。暫くは剣だけで戦ってね」

「うん。暫く銃を使っていなかったし大丈夫だよ、瑞穂さん」

「そう」

瑞穂は軽く頷くと次はティンに振り向いた。

「ティンさんも良いね」

「……え、あ、うん」

「どうかしたの？」

「……その、さ。瑞穂と浅美って、友達、なの？」

「そうだよ！」

二人の会話を遮る様に浅美が乗り出してそう言った。

瑞穂は溜息混じりに語りだす。

「元々私と浅美さん、後他の人達と一緒に旅をしてたの。」

色々な所をね。ずうっと……でもさ、だんだん一人で居なくなっ

それで暫くパーティを抜けたつもりだったんだけど……結局解散しちゃったんだ」

瑞穂さんがいたから、皆が集まってたみたいになくなったってね……火憐さんも最後まで皆を引き止めようとしたんだけど……メイリフさんと林檎が「一人の都合に合わせる必要は無い」って言うって……結局、皆いなくなっちゃった」

瑞穂はそう言つて細い目で窓を見つめる。

「……もし、かしてさ。あたし、邪魔？」

「……は？ 恋人？」

「ねーねー変な事をほざく馬鹿は貴方かなー貴方かなー？」

瑞穂はすうーっと浅美の背後に近づくと、そのまま頭を締める。

頭にもぎりぎり関節とも呼べる部分が存在するのだと。

「……わあ、仲良い」

「うん。と言つかさ、女同士で恋愛とかありえないでしょ？」

67

を抱いたり、欲情する事は出来ない」

瑞穂は言うだけ言々と浅美を開放する。

「痛いよー」

「うん、なら変なこと言っの止めようか」

浅美はまだ唸っている。

ティンは、そんな二人が眩しく見えた。

（これが……友、達……あたしには……華梨が、居るか。
でも、今は……）

「どうしたの？ ティンさん」

「あ、いや。なんでも」

さて、飯を食おう（後書き）

んじゃ

あなたの“まもりたいもの”はなんですか？

「……ざっ、い……」

ティンは地獄の様な寒さに震えながら目が覚める。

冷房効き過ぎか？ そう思いながら部屋を見渡すが、木製のこの宿屋にそもそも冷房と言う機材さえない。

見れば吐く息まで白く染まっていた。

つまり、この部屋が0 近いと言うことである。

左右の二人はと見てみると、普通に安眠。

「……え？ ちょ、ちょちょ、ちよつとお……二人とも、起きて」

ティンは白い息を吐き、寒さに震える体で二人を揺する。

浅美は唸りながら瞬きを何度もしてから目を覚まし、瑞穂はゆっくりと眼だけを開ける。

「……どうしたの？」

「ささ、ざぶいんだけど」

「……あーそれ仕様」

「ししし、仕様？」

「うん、氷魔導師の仕様。高レベルの魔導師は自分の一番得意な属性の魔力を垂れ流してるから。」

私、氷一つだから」

「ででで、でも、こんな寒く」

「あー」

瑞穂はティンの吐く息が真つ白である事に気が付く。

「浅美さんも氷の魔力持つてるからね。多分それで相乗効果でも出たんじゃない？」

「……マジ？」

ティンは浅美の方を見る。

目を擦り、寝ぼけた目でむくりと体を起こすと。

「おはよおー……」

とだけ言った。

「……おい、浅美。後でお前に聞きたいことが沢山あるから朝食後にゆっくり話しよう」

ティンは眉の端をピクピクと痙攣させながら言った。

「浅美さん、ちょっと良い？」

ティンは浅美を叱る様に歩きながら今まで聞いてなかった情報を洗いざらい聞いた。

使える魔法属性、使える武器、今までどういう風に旅をしていたのか、どう言う事が得意なのか。

途中から瑞穂も混ざって買い物時にちゃんと値札を見ているか、財布の中身を確認しているのか、どういう食事をして来たのか等等。そして瑞穂は呆れ返った様に浅美の肩をたたいた。

「……余計に、酷くなっていない？」

「だ、だって……」

「もういいよ。浅美さんを見放した私にも責任あるし」

「何で？」

瑞穂はため息混じりに言うつと再び歩き出す。

「でも、何でティンさんが地図を見ながら一番前を歩いているの？」

「……昨日までのやり取りをしてて、お前らに前を歩かせる事が出来ると思っているの？」

「……浅美さんの言うことを信じちゃだめだよ」

「じゃあはい」

ティンは瑞穂にそう言って地図を手渡す。

そして瑞穂は地図を見て方向を確認し、真逆方向に歩き出してティンは素早く肩を付かんで地図を奪った。

「ええと、セントラル・パラディンは向こうだね」

「待って、今のやり取りに何か重要なことが抜けている」

「取り合えず、お前らに前を歩かせちゃいけない事にだけは理解出

来た」

「わたしは大丈夫だよ！　ちゃんと風で方向先を把握してるんだから！」

瑞穂さんみたいな不思議な方向音痴じゃないんだから！」

「いや、あれの何処が方向音痴！」

「方向音痴だよ。行きたい方向の反対方向に進む凄い方向音痴」

「なるほど。つまり私は二人を殴って事かな？」

瑞穂が言いながら指を鳴らしていると二人は無視して更に進める。

三人は森の中にある整えられた街道を進んでいく。

「……空気が、澄んでる？」

何かすつごく澄んだ空気が漂っているよ」

「いや、空気なんて分かんないし」

浅美の言葉にティンは冷ややかに言葉を返す。

そして、城門の様な扉が見えた瞬間。

「止まれ！」

と、凜とした声が森中に鳴り響く。

城門の中心に、青く短い髪を肩先で切り揃えた騎士が水色の刀身を持つ槍をティン達に突きつける。

「貴様ら、此処が騎士達の聖都セントラル・パラディンと知って進むつもりか！」

「……騎士達の？」

「ふん。知らずに来たのか、この愚か者共」

「通っちゃだめ？」

浅美が一步步み出て騎士に話しかける。

「……通りたいのなら、許可証を取れ。」

此処は曲がりなりにも聖都だ。無許可で通せるものか」

「何処で取るの？」

「古都にあるだろう。そもそも、聖都には転移術式で入る以外に方

法がない」

「え、その門は？」

「そう思うなら、そこから先に進んでみるといい」

浅美は言われて更に一步進むと、見えない壁にぶつかった様に弾かれる。

地面に術式が浮き上がり、青白い壁が展開されている。

「この通りだ。辺り一体に結界が張られている。」

通りたければ古都に行つて通行証を貰い、転移して来い」

「……此処から戻るの？」

ティンは不満を表情に浮かべながら睨む様に言った。

「そうだ」

「……でも、街の人達何も言つてなかったよ？」

「当然だ。余所者に、それも目的の無い冒険者風情に聖都まで案内するものか」

青髪の騎士は話にならないと目を背ける。

「じゃあどうすりゃ良いの？」

「そこまで面倒を見る義理は無い。自分で見つけるんだな」

「それは幾らなんでも酷いと思う」

「……ほう。では私にどうしろと？」

「少なくとも、あたし達くらい特別処置にしたって良いじゃん」

「傲慢も良い所だな」

「何も知らせなかったのはそっちじゃん」

「では、此処に騎士を志す者は居るのか？」

「き、騎士？」

「そうだ」

「騎士つて……なんだっけ？」

「騎士。」

広義には騎馬で戦う戦士、及びそういった戦士へ送る称号そして国に忠誠を尽くす軍人のこと。

現在では騎士道精神に則る戦士にも送られる称号でもある。

大和乃国の武士道に通ずるところがあるとされている。

一言で言つと、単なる職業」

瑞穂は虚ろな瞳で棒読みで解説を行う。

青髪の騎士は釈然としない表情で瑞穂を睨む。

「……おい、貴様は騎士を愚弄する気か？」

「別に。私は自分の記憶から引つ張り出した情報を口にしたただだよ」

「……ふん。で、お前たちはどうすれば納得」

「待て」

女騎士の言葉を切る様に男の声が響く。

同時に街を包む青白い結界が消失する。

「……貴様、どう言つつもりだ。焰進の聖騎士」

女騎士に紹介されるように黄金の髪が燃え盛る様な波打つ髪型をした甲冑の男が歩み出る。

「落ち着け、水の聖騎士。彼女達の言葉にも一理ある。

聖都に入りたいのなら好きに入ると良い」

「何故だ!？」

「どうしても、此処に行きたいのだろう？」

ならば通してやつても良いではないか。此処は来る者を拒まず、

去る者は止めずとする聖都。

此処まで突っぱねても引き返さぬと言うのなら入れてやるのもまた良し」

「……良いの？」

浅美は男騎士に問い返す。

「水の聖騎士と口論をしてまで通りたいのと言うのなら」

男はそう言つてマントを翻して街に入っていく。

水の聖騎士は苦虫を噛み潰したように。

「……ふん、入るならさっさと入れ」

といい、背を向けた。

「……良いの？」

「良いんじゃない？」

浅美の呟きにティンは軽く返して扉に向かう。
続いて浅美と瑞穂も扉をくぐった。

中の様子を見た三人はその光景に思わず足を止める。

そこは都と呼べる物はない。

あるのは――。

「テン……ト？」

そう。

野営用のテントと組み立て式の簡易宿等。

まるで、そこは。

「野営地？」

瑞穂は周囲を見渡し、思いついた単語を吐き出す。

「そうだ。此処はかつて多くの騎士団が遠征の途中に立ち寄った野
営地跡だ」

後ろから聞こえた声に「わ」っとティンが反応する。

見れば先程の女騎士が立っている。

「……聖、都？」

「まあ、普通の冒険者なら当然の反応だな」

浅美は疑問を顔に浮かべて首を傾げていると見飽きたと言わんばかり女騎士は歩み進む。

「だが、此処は確かに聖都だ。

多くの騎士達が此処に立ち寄り、己の武勇やそのあり方について
語り明かしたのだ。

何時しか、この近くにある神殿は騎士達の間で神聖化され、何時
しか此処は騎士達の聖都と呼ばれる様になった」

「神殿って？」

「奥に見える、あれだ」

女騎士は一番奥にある神殿を指差す。

だが、どう見ても遠い。おぼろげにしか見えない。

瑞穂は目を細め、額に手を当ててその神殿を注視して一言。

「……遠い」

「根性です」

青髪の女騎士はさらりと言いのけて今度こそ立ち去る。

三人は歩くこと数時間。

昼食を取りつつやつの事で神殿にたどり着いた。

「……おっきいね」

「いや、他に言うことないの？」

垂直になるほど首を上に向けた浅美にティンは突っ込んだ。

「……首が痛い」

「瑞穂、行こう」

ティンがそう言うて後ろに首を向ける。

だがいない。

浅美が「おっきい」以下略の時に既に置いて行っただ。

ティンは周辺を首を回して既に神殿内部へと入って行っただ瑞穂の姿を見掛けて

慌てて追いかけた。

「瑞穂つてさ、結構冷たいよね」

「あ、ティンさんやつと気付いた？ 瑞穂さんは結構酷い人だよ」

「それはつまるところ二人とも殴れって言う暗示で良い？」

ティンと浅美はヒソヒソと神殿内で追い付いた瑞穂の背後で話している。

取り合えず瑞穂はゴキツゴキツと指を鳴らして置いた。

「……貴様らはいつまでそんなやり取りをしてるんだ？」

声のする方向を見る方へと目を向けるとまた青髪の女騎士が立つ

ている。

やたらと呆れた表情で溜息をつく。

「止めない限りいつまでも続くよ」

「いつもこんな調子か？」

「うん、そうだよ」

「……貴様はさながら、保護者か」

「うん」

「違うよ」

「多分違う」

瑞穂は肯定し、浅美とティンが素早く否定する。

瑞穂はゆっくりと後ろに振り返ると呆れた目線を二人にプレゼントする。

「……ティンさん、浅美さん、嘘は言わない」

「瑞穂さん、瑞穂さん、いつもわたしが先導して旅してるじゃん」

「お金の勘定もろくにできない人がそんなこと言わないで欲しいな」

「方向もちやんと分らない人が偉そうにしないで欲しいな」

「計画的な生活が一切出来ないくせに」

「男の人と面と向き合って話せないくせに」

「鳥頭に言われたくない」

「直ぐ殴る人に言われたくない」

ティンは何か始まった女同士の口喧嘩を音速でスルーし、神殿内
部をゆっくり見渡す。

「おいおい、後ろの二人を止めなくて良いのか」

「あーうん、ああ言うのは放置が一番って最近分かってきた」

「そうか。お前がリーダーか」

瑞穂と浅美は同時に「その人一番保護されてるから」と突っ込
だ。

「……そうか、芸人冒険者か。公演は何時だ？」

三人は同時に「ねえよ」と返す。

そんなやり取りの最中高い笑い声が響く。

「くつくつく……面白い者達だ」

「あ、燃えてる人」

浅美は現れた先ほど燃える様な金髪の甲冑男をそう呼称する。
金髪の甲冑男は再び笑い声を上げる。

「燃えてる……くくく、実にあっているな、はははは」

「笑ってばかりだね」

「彼のことはお気になさらず」

ティンがおかしな人を見るような視線を送り、女騎士は咳き払い
するように言葉を紡ぐ。

「そういやさ、あんたの名前って何だよ」

「人に物を尋ねる態度とは、到底思えぬ発言だな」

「あ、あたしはティン」

女騎士は目を細め、意外な表情を見せる。

「……ほう、ただの無礼な小娘だと思ったが。」

「ん、何かよく漫画とかで聞くじゃん。人に名を尋ねる時は名を名
乗れって」

「……なら一つ覚えておけ。それは、常識だ。そして、私の名前は
パルシエ。」

此処では水の聖騎士と呼ばれている」

「……厨二病？」

「え、なんだそれ」

瑞穂は唐突にそんなことを言い出し、ティンは首を傾げる。
後、誰か彼女に唐突に失礼なことを言うなと教えてあげて。

読者の皆も行きなり人に向かって厨二病患者呼ばわりしちゃ駄目
だぞ？

「……貴様は騎士を愚弄しているのか？」

女騎士——パルシエはこめかみをピクピクと動かし、額に青筋を
浮かべる。

この様に真面目に厨二病で仕事してる人に言っていると怒られるぞ。

「ちゅうにびよう？ ふむ、現代人はおかしいな単語を用いるな」

「貴方も現代人でしょうが」

「ん？ おお、すまんな水の聖騎士よ。」

何分暫く俗世から離れていたものでな、最近ではそういう言葉があるのか。勉強になる」

「覚えるな」

パルシエは静かに呟くと神殿の出口に向かって歩き出す。

「……そっぴやさ。聖騎士って何？」

「聖騎士。広義」

「貴様は黙ってろ」

パルシエはきつい口調で瑞穂を黙らせる。

いい加減彼女も瑞穂が失言女王だと気付き始めたらしい。

パルシエは溜息混じりに視線を上を上げながら言葉を紡いだ。

「上を見る」

「上？」

ティンは言われて上を見る。

そこにあるのは――像。

巨大な、甲冑と槍、斧、そして剣を天に翳す三つの石像だ。

「すっごーい……」

「あれこそが此処が聖都と謳われる所以だ。」

多くの騎士達が此処に駐屯した時、この神殿にこの像が祭られているのを見つけてな。

まるで、自分達を称えているかのように聳えているこの像を中心にやがて聖都と言われるようになったのだ。

そして、此処は同時に誓いの場でもある」

「誓いの、場？」

「そうだ。」

聖騎士とは、本来主君に仕え、その活躍を褒め称えられた騎士に送られる名誉ある称号。

神聖なる祝福を受け、忠義を捧げる騎士だ。

同時に、此処ではこの像に向けて騎士の誓いを捧げた者達に送られる信念の称号だ」

「……信、念？」

パルシエは頷くと解説を続ける。

「そう……己自身が人生をかけても良いと思える信念に忠義の証を立てる。」

そうする事で、此処では神聖なる祝福を得て聖騎士となるのだ。

本当に“まもりたいもの”を守る為に。な」

「まもりたい、もの……」

「お前も聖騎士になりたいのか？」

「え？」

ティンは背後からけられた声の方に振り向く。

そこには燃え盛るような金髪の男が立っている。

「えつと、あんたの名前は？」

「私の名はブースト。焔進の聖騎士の名で呼ばれている。」

一つ問おう。お前は、聖騎士になりたいのか？」

「えと、あたしは」

「迷いがあるなら、止める。どうせなれはしない」

ティンの言葉を遮る様にパルシエが言い切った。

「な」

「聖騎士になるには、神聖たる純真な願いを捧げる必要があるのだ。貴様にそれがあるか？」

パルシエの鋭い眼差しがティンを射抜く。

「人生を捧げてでも“まもりたいもの”が、貴様にあると言っのか？」

「……あたしは、ただ。剣が欲しいと」

「剣？ 剣を手にしてどうする気だ？」

ティンは自分の胸に手を当て、はつきりとした意思を持って答えた。

「……自分の問題を、自分で解決する」

「話にさえならない」

下らんと、パルシエは視線を外した。

「な、何で！」

「剣を得たくらいで解決するのか？」

「そもそも、何故剣が居る？ 見た所武装してない様だが？」

「そ、れは……」

「何故剣を欲するかまでは分かん。」

だが、それが一体何の為の剣なのか。それさえ分からん輩の聖騎士たる証は無い」

ティンは、ただ押し黙る。

「……あたしは、ただ」

ティンは、それだけ漏らして神殿から走り去る。

「あれ、浅美？」

ティンは神殿の外で浅美が待機しているのを見て、声をかける。

「何で此処に？」

「瑞穂さん構ってくれないし、ティンさんも何か神殿の見学してるし、暇だから。」

ティンさんもういいの？」

「えと、何が？」

「見学。瑞穂さん、まだやってるみたいだし」

「あ……えとさ……暫く、一人にさせて貰って、良いかな？」

「大丈夫？ 何か変なやつらが」

「大丈夫だって。此処にならあいつらもこれないと思うしさ。ちょっと……一人で考えたいんだ」

「……分かった。でも何かある時は私を呼ぶんだよ？」

浅美はそう言って街の方へと歩き出す。

ティンは神殿の入り口の端っこに歩き、腰を落とした。

「……ふう……」

息を吐いて、大きな木々と水の膜で出来てるような結界に彩られる世界が広がっている。

（……あたしは、何で聖騎士になろうって、思っただろう？

ただ、剣が欲しかった。でも……あたしが剣を欲しがった理由って？

そう。ただ、力が欲しかった。あたしもやれば出来るんだって。出来るんだ……って。でも、何を？

あの仮面の男達。あいつらを倒せば良いのか？ うん、良いんだ。良い……それでいい、筈なんだ……でも、それじゃ、なんか、駄目、なんだ……でも、何が駄目なんだろう？ それが分からずに居る。

だけど、ただぼんやりと、これだけは分かるんだ。これじゃあ駄目なんだって事が）

ティンは静かに空を見続ける。

胸の内に、あらゆる感情を織り交せて。

その思いは後悔か、迷いか。

（聖騎士になれば、全部解決するのだろうか？

……分からない。でも、聖騎士になるには、願いがあるんだっけ。一生をかけても良い、自分だけの誓い。

でも何であたしが戦わなきゃいけないんだろう。

別に狙われているんだから、友達や誰かに守られていたって、良いよね）

それで良いのか。

（——いや、良くない。良い訳が無い。

あたしも。あたしだって……あたしだって、守りたい。そうだ——あたしにも、守りたいものが、ある

大事なものがある。譲って良いモノじゃない、人生をかけても良いくらいの、大事なモノが……沢山、沢山。

抱えても、抱えきれないくらいの、大切なものがある。

だからあたしは、守って貰うだけじゃ駄目なんだ）

それはどうして。

（あたしの問題に、誰かを巻き込みたくない。自分のことくらい、せめて自分も何かしたい。

こんな事で、誰かに頼っちゃいけないんだ。だって――）

そうだ。だって彼女は。

（剣士、だから。剣士として生きた自分には、恥かしい道を行きたくないんだ）

ティンはしっかりと、手を握り締める。

純白の石の地面を力強く踏みしめ、立ち上がる。

空は、群青に染まっていた。

月だけが照らす神殿に足音がやって来る。

淡い光に照らされ、緩いウェーブの金髪に白い服を身に纏った少

女――ティンが、訪れる。

その到来を待っていたかのように二人の騎士が神殿内に立っている。

「……どういうことだ？ 先程とは別人だな。

迷いは晴れ、道を定めた……と言うことか？」

「良いではないか、水の聖騎士よ。

強い意志を持ち、此処に訪れたと言う事は揺らがぬ決意を得た、と言う事なのだろう？

では誓いを、あの像に立てるが良い。お前の持つ、信念を」

ティンは像を見上げる。

「どうやれば良いの？」

「簡単だ。像の前に跪き、誓いを立てよ。

それが神聖足りえるものであるなら、お前は聖騎士となる」

ティンは一歩進み、膝を折って地に付け両手を合わせて祈る。

これが神聖かいかなど、関係ない。

ただ祈るだけだ。自身の誓いを。自身の揺らがぬ信念を。

「ただ、あたしの大事な人を。あたしが大切だと思う人達を、この手で守りたいんだっ……！」

祈りは光となり、天に昇る。

やがてそれは純白の剣となり、天からティンの元に降り立ち、乾いた音が鳴り響く。

「っ……これ、は」

「それが、お前の誓いと信念の証。選ぶべき道は、それを掴み取ることだけだ」

ティンは目の前に突き立てられた剣を見つめる。

純白の花を思わせる、真っ白な騎士剣。

ティンはゆつくりと、剣を握り締め、引き抜いた。

「迷いなんて無い。あたしは、もう決めたんだ……この道を！」

ティンに光は光に包まれ、身に着けた服装が全て変る。

穢れなき純白のマント、白き騎士服。

まさに今、彼女は聖騎士となったのだ。

「ほほう、これは見事。言わば輝光の聖騎士と言う所か」

「……って、前の服装は！？」

「よく見てみる、上に着てるだけだ」

ティンは言われて下着の様に元々着ていた服があるのを理解する。

「良かったぁ……あの、これからあたし、此处で何かするってことは」

「無いな。ただ、志を同じくする者が此处にも居る、と言う事だ。

お前は、お前のしたい事をするが良い」

「……うん」

ティンが柔らかな表情で頷いた。

その時。地が揺れ、爆音と轟音が聖都に響き渡る。

あなたの“まもりたいもの”はなんですか？（後書き）

BGM聞きながら執筆するって、良い物だね。
んじゃ、また。

炎に包まれる街へ怒りに震える剣で何を守る？（前書き）

今回、結構血みどろの展開なので注意。

炎に包まれる街へ怒りに震える剣で何を守る？

浅美は寝苦しくて置きだす。

今日は沢山歩いたのだから、仮眠くらい取らないと明日に響く。そうは思っているけど、置いて来た友人のことが気になってどうにも眠れなかった。

仕方なく、浅美は二階の窓から飛び降り――機械の翼を背中に生み出して軽く飛翔する。

群青の夜空。星が良く見える。

此処から神殿まで軽く飛ぶだけでどうにかなるだろうか、と浅美が思ってた。

その時。

はい、此処からティンの方に戻ります。

ティンが神殿の外まで駆け抜けると、そこは火の海だった。街全体が炎に包まれ、あちこちから悲鳴が聞こえて来る。

「どういふ事だこれは……何故聖都が!？」

パルシェが街中の惨状を見て驚愕の声を上げながら、神殿入り口前の広場を走り抜けて街中に向かっていく。

そんな時、神殿の階段を下りた所に一人の甲冑に身を包んだ男が走って来るのが見え、パルシェは階段を滑り降りるようにして男の元に降り立つ。

「おい、貴様！ これはどういふことだ!? 何が起きている!？」

「え、あ、あんた確か聖騎士の」

「事情を話せ！ 時間が無い!」

「モ、モンスターだ！ いきなり、爆発と共にモンスターが聖都中

に出没している！

俺はこれから居住区や宿の方に向かってくる！

くそつ、此処には怪我人や戦闘能力の無い冒険者だっているんだぞ！」

そう言うつと男は突撃槍^{ランス}を片手に走り去る。

「モン、スター……だつ……！？」

パルシエはその言葉に固まり、動きを止めて呟いた。

はつとしてパルシエは首を振ると、確かに見た事の無い野獣が聖都中を駆け巡っている。

「くつ、おいそこの新人！」

「え、あ、あたし！？」

後ろについて来たティンにパルシエは怒鳴るように呼ぶ。

「私は街中の化け物どもを排除する、貴様は神殿を守れ！」

言った側からパルシエは街の中へと走り去っていく。

「えあ、ちよつ！ ブーストさんっていない！？」

ティンはもう一人の聖騎士がいるであろう方向に首を向けるも、自分以外には人は誰も居なかった。

「……うわあい」

ティンは少し泣きそうになった。

浅美は火の手が上がるのを見ると直ぐさま状況を把握する為に現場に向かおうとした瞬間、浅美を取り囲むように仮面の男たちが出現する。

「退いて」

浅美は苛立った様に言い放つ。

返答する様に男たちは一斉に浅美に襲いかかる――。

直後、混沌の一閃が輪の形となって空間に弾けた。

時間にして約零・一秒。誰かが「よく持った」と呟き、誰かが「ああ、やつぱり」と呟いた。

まあ、なんだ。何、きにすることはない。（川）

瑞穂は何か外がやかましいと思い、外に出た。

すると宿の外に陣取っていた男達が一斉に襲い掛かり、瑞穂は素早くしゃがみ込んでメイスを振るって一気にぶっ飛ばす。

「で。何か用？」

瑞穂が虚ろな目で言う。と仮面の男達は立ち上がり、氷の槍が突き刺さり、釘付けとなる。

「……諦めるって選択肢は？」

誰かが言った。「それは死と同義だ」と。悲しいね。

瑞穂はメイスに氷塊を取り付ける。

ティンは神殿の階段下で立ち往生していると、笑い声が響く。

嘲笑うかのような、愉しむ様な、快楽を貪り溺れる笑い声。

「いつやあ楽しいなあククッ！」

生き物がよーお？ 悲鳴上げてさあ、助けを求めてよーお？

無残に消えて行くななんていうのはさあ、本ツ当に楽しいなあッハハハハハ、ハハハハハハハハハハ！

お？」

啞然とした表情でティンは神殿の屋根に立つ男を見据える。

仮面を付けた、灰色の髪の毛、黒マントの、男。

今までティンを執拗に追って来たのは？

仮面を付けた、灰色の髪の毛、黒マントの、男。

ティンは直ぐに把握する。この騒ぎの原因は。

（こいつらかつ……！）

「お、お、おおー？ 目標発見！？ 付いてるぜえ！」

男はティンを見下ろして仮面を抑えて笑い上げる。

「ヒャーッハハハハハッ！　アーハ、ハーハハハハハッ！　

ついてるついてるついてるッ！　今日はついてるぜえッ！　こんなに簡単に餌に食い付いて出て来てくれるなんてよお！？」

「え、さ？」

ティンは思わず聞き返す。

「そうよお、餌よお！　手前を引っ張り出す為に餌をたっぷり撒いたじゃねえか！？」

「……ま、待て。じゃあ、何か？　この惨状って」

「おうよお、お前を引っ張り出す為の招待状よお！　

ノコノコと現れやがって！　これは俺が活躍するべき瞬間だぜえ！」

ティンは啞然とした表情から、少しずつ。だが確かに変わっていく。怒りへと。目の前の存在に、烈火が如くの怒りをその身に宿す。

「さあ、行け魔獣ども！　手前らを忘れた、不抜けた人間どもに思い出させてやれ！」

恐怖を！　弱肉強食の真理をお！　殺せ！　殺せ！　己の糧として、全てを食い付けせえ！

イーヒヒヒヤハハハハハハハッ！　魔獣もしらねえ覚えてさえもいねえ人間があ、無様に死んでいくのは見てて楽しいぜえ！

ほら、手前も良く見なあッ！？　手前の為に死んでいく人間どもをよお？」

ティンは震える手で剣の柄を握り締める。

（——あたし、神様って存在を見た事ないし信じたことも無い。

でも、もしそんな奴が居て、運命って奴を動かしてるって言うのなら——あたしは、そいつに感謝したい。

これが、あたしに初陣。本当の、初めての、実戦。

それが、こんなにも憎たらしい奴だなんて……！　こんなにも、手を抜きたくない奴だなんて……！）

さあ。

（始めよう）

これが、彼女の初の戦い。聖騎士として。剣士として。ティンは地面を靴で鳴らし、剣を鞘から引き抜く。

「one two three」

体を一回転させ、腰を落として剣を下段に構え、斬るべき敵を睨んで。

「Get ready……！」

一瞬溜めて——此処までが、ちよつと長いプロローグだったけれど。

さあ——行こう。

戦場へと。

此処からは。

ティンだけの戦場だ——！
ダンスファイルド

「GO！」

ティンは足元が爆発現象を起こしたように、矢となって弾け跳んだ。

ティンの足は踊る様なステップを踏むかのような足捌きで階段を跳び越えていく。

しかし狼の様な魔獣達が獲物ティンをくらわんと一斉に襲い掛かる。

ティンは即座に階段を踏み付けターン。

釣られる様に金髪とマントが靡いて行き、バックステップで目前の敵を見据えたまま後ろに下がり、身を捻って。

斬撃一閃。

後ろに放った白い斬線はティンの背後から襲い掛かった魔獣の顔半分を貫き、漆黒の血と共に顔半分を飛び散らす。

ハーフターンして前を向けば、魔獣達が一斉にティンに襲い掛か

るも。

ティンは心底冷めた視線で魔獣達^{それら}を見据えて片足立ちでターンし、撫でる様に。

斬撃一閃、白い閃光が走る――。

白い斬線が通った後、風船が弾ける様に漆黒の血を撒き散らして魔獣達は吹き飛ぶ。

続いて猪の様な魔獣がティンの背後に迫ってくるが、ティンは無言のままハーフターンすると剣を投げ付けて更にスキップの様な動きで投げた剣を追いかける。

剣は白い軌跡を描いて吸い込まれる様に魔獣の額に突き刺さり、ティンはその剣の柄を握り締めてそれを軸に魔獣の背に立ち、剣を真横に薙ぎ払って魔獣の体から取り出す。

その後、魔獣の背中からバック転し、その後ろにいた魔獣の背に半月を描く様に剣を振るう。

描かれた白い月は見事過ぎるほどに華麗に、そして魔獣の背を切り裂き、ワンテンポ置いて漆黒の血を辺りに撒き散らす。

ティンは階段に着地して前を見据える。

眼前には、墨汁でも撒き散らしたのではと思うような光景が広がっている。

狼みたいな魔獣が、続いて来た猪っぽい魔獣までも、見事に切り裂かれて只の肉片となって神殿前の階段を汚し尽くしている。

「……おい」

神殿の上からその様子を見ていた仮面の男は一人呟く。

「どう言うことだこいつはよ。あのガキが此処までやるたあ聞いてねえぞ？」

取るに足らねえ雑魚だ？ どう見ても一騎当千の剣士じゃねえか！？」

仮面の男はティンを見下ろし、叫び上げる。

ティンは階段を上がり切ると男を睨む。

次はお前だ、と言わんばかりに。

「チツ、ただの雑魚を仕留めるだけの簡単な仕事じゃねえのかよ。しゃーねえ。来いよ、出番だぜ!？」

浅美は燃え盛る炎の街中に立つ。

周囲では消火活動を行う者、怪我人を運んだり治療したりしている者等が所狭しと動いている。

「ティンさんは……!？」

浅美は周囲を見渡し、金髪で緩いウェーブがかかった少女を探す。ティンは神殿前に居るのだが、浅美はそんな事は知らない。

神殿前で別れてずっとそこに居るとも限らないし、火の手が上がると言う事はそこに居るのかも思ったからだ。

炎の中から唐突に助けを求める声が流れて来る。

微妙ではあるが、風の魔法使いである浅美にとって大音量も小音量も大差無い。

「今行くから待って!」

直ぐに風と冷気で炎を払い、前に行こうとした瞬間。

「無事だ」

払った炎の中から、ブーストが現れた。

体中が燃え上がっている。髪は元々燃えてるようだったが、今度はマントも鎧も燃え上がっている。

ただ、腕。右腕の中。そこだけは燃えてなかった。

子供だ。小さい子供が、ブーストの大きな――そして力強い腕に抱かれて蹲っている。

「歩けるか？」

子供は「お母さんは……？」と弱々しく問う。

「何処に居る？」

子供は首を振る。

「そうか」

ブーストは子供を置いて炎の中に向かう。

「そこでじつとしているんだ。母君は私が救い出そう」

「だ、大丈夫」

「大丈夫だ」

浅美の問いに、ブーストは直ぐに返す。

「安心したまえ。我が信念は……救いを求める手を掴むこと。必ず救って見せよう」

ブーストはそのまま炎の中を突き進む。

誰かが伸ばし救いを求める手を掴む為に。

燃え盛る街の中に狼の様な獣たちが走り回っている。

狼っぽいそいつらは集団で連携し、次々に歯向かうものを己が糧としていく。

Ｌサイズの大盾を構えていた戦士の一人が狼みたいな奴に背後から噛み付かれる。

「ぐあっ！ こいつらっ！？」

狼的なのは分厚い重装鎧を噛砕き、中の肉体を浮き彫りにしている。

「だ、誰か！？」

助けを求めるも、誰も来ない。

食われたか、分断されたか。どちらにせよ、このままならこの男の命日は今日となる。

ガントレットを噛砕かれ、いよいよ終わったかと覚悟した瞬間。

「スプラッシュボール！」

男の周りを、水球が通り過ぎた。

ついでに狼くさいのも弾かれて流された。

「あ、あんたは」

「死にたくないならさっさと戦線から退け」

パルシェは言いながら男の前に姿を現す。その手には水色の盾を槍がある。

残った狼（仮）は仲間を周囲に展開して二名を囲むらしい。

「逃げるの難しい……か」

パルシエはつぶやき、手にした槍を一回転させ、

「ふっ！」

身を捻って槍を大振りし、前の狼（？）を薙ぎ払う。

「貴様は背を低くして防御しろ！」

パルシエはそのまま後ろの方に槍を大振りして後ろの狼（多分）を一気に薙ぎ払う。

「……体毛が、固い。確かに、これはただの狼ではないな。

まるで金属でも切り裂いてるかのようだ」

パルシエは墨汁を撒き散らしたかのような光景を見てそんなコメントを付ける。

「……漆黒の血、か」

男は何かを後ろに投げる様に腕を上げる。

ティンの背後。目の見えぬ方向から鈍重な音が立つ。ティンはゆっくりと背後に目線を送ると斧を持った牛頭の人間みたいなのが鼻息荒くして立っていた。

鼻息荒い割に殺意しか感じ取る事が出来ない。

（……こんな奴、どこかで聞いた様な）

牛人間と言う所か？ 筋肉隆々の太い腕を見れば人間っぽいがそれ以外はどう見ても牛の様に見える。

そんな風に考えていると本当に牛の様な咆哮を上げながら斧を振り上げて、下ろす。

ティンは素早く踊る様に回転しながら牛人間の右脇の下に移ると脇下で虹を描く様に一太刀振るってティンは脇下から踊る様なステップで抜け出すとスカートの両端を摘み上げて一礼。

まっ白な虹は牛人間の腕を通り、付けられた筋から漆黒の血が外に吹き出される。

牛人間も左手で傷口を抑え、痛みを訴える様に声を上げて右に持った斧を落とす。

牛人間その二も咆哮を上げてティンに向けて下から斧を振り上げる。が、ティンは顔を上げると同時に跳躍して牛人間その二の右腕の上から半月を描く様に剣を振るう。

白い斬閃が通った所からワンテンポ遅れてまた漆黒の血が噴き出し、牛人間の右腕がぶらんと肩から下がる。

二匹の牛人間は右腕の筋肉を切り裂かれた事で左の腕だけで斧を持とうとするが、上手く持ち上がらない。

ティンはその光景を見てついぞと言わんばかりに牛人間両方の左腕も斬り付けた。

「……ミノタウロスもかよ」

あ、ミノタウロスその一とその二だそうです。

ティンは両腕を血に下ろし、首だけを上げるミノタウロスを見つめ、その喉笛を切り裂いて仮面の男のいる方へと歩いて行く。

「あの小娘、ピンポイントで腕の筋肉のすじだけを切り裂いたなあ？
おもしれえなあおもしれえよお。」

とっておきと呼んでやつから覚悟しとけよお！？」

仮面の男は両腕を前に突き出す。そこに黄金の文字で術式が描かれていき、完全なものとなった瞬間に更に黄金の輝きを生み出す。

「来いよ魔獣の王！ 遠慮はいらねえ、その小娘をぶつ潰せ！」

叫ぶと男は眼下の神殿入り口前に何かをあちこちに投げつける。

投げられた物体は、杭だ。杭は円を描く様に神殿前の入り口の端々に投げつけられた。

突き刺さった杭は光の柱を放ち、魔力の壁を生み出す。

「な、何これ！？」

「そいつはな、突き刺さった所の魔力流を乱す効果がある。」

この辺は神殿を中心に魔力が地面の中を通^{こいつ}っていてな、杭を打ちこんでやりやあ大地に眠った魔力が暴走して一種の壁を作り上げる。

一応言つとくが杭を壊そうなんてしても無駄だぜ？ 結果は既に

出来た。もう杭に意味はねえぜ？」

仮面の男が言うと地面に黄金の術式が描き出される。

と言うか、何故に一々説明して行くのだろうか。

ティンは驚いて四方八方に目を向けていると輝く黄金の光から、
何かが出て来る。

毛むくじやらで。

四本足で立っていて。

ティンの全長の半分はありそうな牙を持っています。

はつきり言つて、馬鹿でかい。何で結界内に収まっているのか不明な程だ。

だが、実際問題目の前の怪物は少し余裕を空けて結界内に収まっている。

ティンは引きつった表情でソレを見ていた。

魔獸王はティンを見つけると方向を上げ右前足を上げ、

「って、二本足で立てるん!？」

下ろす。

ティンは踊るような足運びで左足の方へ避ける——でも風圧がそれを許さない。

「ッて、へっ!？」

振り下ろされた右前足から生み出された風圧が、ティンの回避運動を丸ごと飲み込んで壁に叩きつける。

だが、これはただの壁ではない。

地面に流れた魔力が暴走し、噴出している一種の塊だ。

故に。

「ぐあつあああああああつあああつああああああああ！？」

強烈な魔力波動がティンの体を蝕み、弾く。

ティンは息を整えながら前を見る。

「ダンシングステップが……間に合わない!? くそっ……!」

ティンは苦虫を噛み潰した様な表情で言い放つ。

ダンシングステップ——ティンが今まで使ってきた、踊る様な足

捌きによる移動技である。

あらゆる舞踊を参考に作り上げた技で、荒地にも対応している優れものだ。

それが今、通用しない相手が出て来たのだ。

ティンは光単一の魔法剣士である。回避特化型の剣士に、此処まで酷いハンデは存在しないと言われている。

なぜか？

理由は簡単だ——魔法による回避補正が一切ないからである。

風なら風圧を利用した回避力の上昇などや、炎なら熱源反応で敵の攻撃を予測して回避力上昇などの術が幾らでもあるのだ。

だが、光は攻撃と防御に特化した属性だ。

目くらましで相手の命中率を下げる等は出来ても自身の回避力アップは厳しい。

何が言いたいのか？ 限界だ。

魔法による回避補正が出来ない今、ティンの回避技術が通用しないのなら——此処がティンの限界と言うことである。

「まだ、まだっ！」

ティンは左足の爪先で地を鳴らす。小刻みに動き、リズムを取る。再び弾ける様に魔獣王に向けて駆けて行く。

魔獣王も身を低くし、ティン目掛けて突進する。

ティンは跳躍し、魔獣王の上を次々と飛び越えて肩に向けて剣を振るう。

白い斬線は迷う事無く魔獣王の肩に向かい——金属音を響かせて弾かれた。

ティンはその現象を見て目を見開く。

彼女の想像では既に魔獣王の肩は綺麗に切り裂かれていたのである。

だが、実際は全くそんな事はなく。

あまりにも無常な。そしてあっさりとした真実が、音と共に染み渡る。

ティンは正気に戻ると直ぐに魔獣王の肉体を壁として体勢を立て直す。

踊る様な足捌きで、時には両手を駆ける肉体に引っ付けて、何とかティンは魔獣王の突進をやりすごす。

「アツハハハハハハハハハハハハッ！」

ご自慢のクリティカルスラッシュはそもそも効きませんってか！？

こいつぁ良いや、さっさとやつちまえ魔獣王！ 魔獣の王にまで君臨したその強さを見せ付けてやれえっ！」

「くっそ！」

ティンはこちらにゆっくりと振り返る魔獣王を見て悪態をつく。

（折角手に入れたのに…… やっと、戦える様になったのに…… っ！

これじゃあ、意味が無い！

剣が通じないなんて、どうすれば良い？ もっと、ちゃんとした剣さえあれば。

もっと、もっと、強力な、化け物の様な剣さえあれば——）

ティンはそこまで考えて、ぴんときた。

更に答え合わせをするように、仮面の男は高らかに喋りだす。

「どうせ死ぬんだ、最後にみじめな神剣でも呼んだら如何だ？

あのなっさけねえ仮召喚の神剣をだよ！？

それともいつその事、此处で魔力を暴走させて本召喚でもすつかあ！？

あ、無理か。なんせお前自分の魔力制御できねえもんな！？ 魔力を暴走させる条件もしらねえようなお馬鹿さんだもんアツヒヤハハハハハハハハハハハッ！」

勝利を確信した様に仮面の男は高く笑い上げる。

ティンは目を見開いて止まっていた。

（そうだ神剣！ 神剣…… ラグナロク！ でも、どうやって呼ぶ！？

魔力の暴走ってどうすりゃいいんだよ！？）

ティンは汗を一つ垂らして前を見る。

（くそっ、くそっ！ 魔力さえ、魔力さえっ！ あたしの魔力さえ、
まともに使えたらっ！

どうすりゃ良い！？ どうすれば……っ！）
ふっと、ティンはとあることを思い出した。

この結界を形作った、杭。もう抜いたり砕いた所でどうしよう
もないが……突き刺せば、魔力が暴走する。

ティンは思わず背後を見る。

まるで、整えられたかのように杭が突き刺さっている。

ティンは恐る恐る、その杭に手を伸ばす。

「さあ、やっちまえ！」

ちょうど向こうからは死角になるようで、ティンのやってる事が
見えないようだ。

時間が無い。

魔獣王は咆哮を上げて、こちらに狙いを定めている。

迷う暇なんてない。

ティンは杭を引き抜き、自分の首目掛けて突き刺した。

ティンの意識は既に現実になく、どこか真っ暗な場所に移ってい
た。

真っ暗な場所に、種子の様な物が浮いていた。ティンは思わず邪
魔だと思い、種子を握る。そして、力を込めて——種子を握り、潰
した。

ガラスが砕け散る様な音が響き、光を放つ。光は漏れて、濁流の
様に噴出していく。

やがて、小さな入り口は決壊してもっと多くの光が噴出していく。

最後にティンは、眩しいけれど柔らかで優しい光に飲まれて、安らかな眠りについた。

瑞穂はてくてくと歩いていった。

途中から魔獣とか仮面の男が襲って来たが、全部。

「漆黒の氷姫！ 覚悟おおおおおつ！」

「うるさい」

メイスと拳で叩き潰す。瑞穂は黙って神殿に向かって歩いて行く。（神殿で別れてから数時間。だとしたらまだ神殿に居る可能性はあるね）

浅美よりも聡明な判断で神殿に向かって歩いて行く。やがて、神殿から物凄い光が立ち上るのが見えた。

光が、噴出す。ティンの体から噴水の様に光を噴出す。膨大な光がティンの身体から噴き出して行く。

ティンは震える手を白い刀身に置き、撫でる。撫でた先から刀身が砕け散って行った。剣が砕けていくも心配ご無用。剣は砕けようとも中から新たな剣が生み出されていく。黄金色の、光り輝く神の十字架。ロザリオ神々の黄昏。

そう。その名を、人はこう呼んだ。

「この光……十字神剣・ラグナロクだと！？ 馬鹿なツ！？ どうやって！？ どうやって魔力を暴走状態に追い込んだ！？ ……まさかあの小娘、あの杭を自分に刺したのか！？ そんな事をすれば人体にどんな影響があるのか知らずにか！？ 単なる馬鹿か、或いは単なる度胸か！？」

ティンはゆっくりと立ち上がる。黄金に光る大剣を右手に握りしめ、いざ。

神の剣を、彼のものに見せつけようではないか——！！

ティンは無言のままラグナロックを片手に駆け出す。そして、踏み込んで魔獣王の前に対峙し——神剣を一振り。

黄金の煌きを持った斬線は迷う事無く魔獣王の右前足に飛び込み、あっさりと両断し、漆黒の血を辺りに撒き散らす。

「……何ッ!?」

返す刃で魔獣王の顔面に斬撃を入れ込み、真っ黒な血が吹き出る。更に踏み込み、左前足も切り裂いていく。

まだ止まらない。

ティンは魔獣王の顔面に蹴り付け、更に背に跳び上がり、更に斬りつける。黄金の剣閃が走る度に漆黒の血飛沫が舞い散る。魔獣王は痛みを訴える様な声を上げ、下がっていく。

「な、何!? おい、さがるな、下がるんじゃないやねえッ! 何故下がる!? 王と呼ばれるものが、何故!?」

それは逆だ。寧ろ、王と呼ばれるに至ったからこそ、分かるのだ。死が。多くの死線を乗り越えた生き物だからこそ、死のボーダーラインが分かる。

だから、下がるのだ。生き残る為に。それ故に、悲しい。逃げ場がない事ではない、相手に。

神の剣を携えた人間が、相手ゆえに悲しい。

魔獣達の中でも、王に君臨したモノでさえ蟻を踏み潰す様に蹴散らしていく。

ティンの斬撃に容赦も情けもない。ただ機械的に、効率よく敵を切り裂いていく。

「これで、終わらせる」

剣を握り直し、尚斬り付ける。無数の斬撃。その剣戟に、魔獣王の巨体さえも浮かされていく。

ティンの脳に一つに神技が刻み込まれていた。ラグナロックの所有者にのみ、使用を許された剣技。

そう、その名は。

「“ラグナロク”——!」

十字を描く様に魔獣王を刻み込み、そして浮び上がる十字の光はやがて光弾となりて敵を貫く――。

思わず目が眩む様な眩しい光の中、仮面の男は一步步下がつていく。

「す、すげえ……これが、神剣……！」

神殿の屋根の、もっと奥へと上って行こうとする男の目前に一人の女が舞い降りる。

光の十字神剣を握り締めた少女、ティン。

思わず、仮面の男は一步下がる。

「へへ、へ……このゲームも終わりかよお……」

声は震えていたが、言葉はやたらと普通だった。

「おい、気づいているのかよ、化け物」

ティンは無表情のまま、ラグナロックを片手に握り締めて男に歩み寄る。

「手前、良い顔してるぜえ……？ 虫けらを見る様な表情だ」^{かお}

やがて、男の背後の足場は空となる。その後ろにあるのは、神殿前と燃え盛る街並み。

「さあ、俺を殺したいんだろう？ 化け物よお……？」

ティンは無表情に、殺意と敵意を剥き出しにして男を見つめる。

今の彼女は荒れ狂う魔力の流れに酔った剣士。

本能にのみ従い、行動する。

「だがな、よく覚えておけよ？」

ティンはラグナロックを両手で握り締め。

「これが、こいつが、蹂躪される側って奴だああーッハハハハハハハ」

黄金の輝きをもって、目障りな笑い声をかき消した。

ティンの目の前には、何かの残骸と、生を謳歌していた何かの跡と――
――焔に包まれる街だけ。

炎に包まれる街へ怒りに震える剣で何を守る？（後書き）

ふっと、思うことがある。

此処まで来て感想も評価もなし。

ならばいつその事、評価も出来ないし感想も送れない様な作品にすれば良いんじゃないかと。

つまりはあれです、感想貰ったら負けだねゲーム的な。

感想おくんなよ！？ 感想を送れるものなら送ってみるが良い！
感想さえ送れない様な——読者何それ美味しいの？ な作品に仕上げて見せる！

こんな事書いておけば、きつと最終話まで誤字脱字報告以外の感想なんて来ないだろう。

尤も、この作品は一話の時点でおさらばし易い仕様ですが。

此処まで読める読める剛の者が果たして居るのですかねえ……。

新しい旅路に

「気が付いたら……神殿の真上で、下が真っ黒つてどゆこと!？」
ティンの右手に携えていた神剣は光となり、空气中に消え失せるが、その中から純白の騎士剣が現れる。

そうして目が覚めたティンはこの状況をみて現実逃避をした。

流石に目の前の状況にはテンパるしかない。

「あそだ、仮面の男は何処だ!？」

ティンは思い出した様に周囲を見渡したが、仮面の男らしき存在は何処のもない。

ただ、流石にティンは気づかなかった。足元に見慣れた黒いボロマントに包まれた黒い物体に。

ふと足を動かすと何かに当たる。なのでそちらに目を送って見れば黒紫の杭の様な物体がそこにあった。それを見てようやく思い出す。これを自分の体に突き刺したことを。魔獣の王とか言う化け物と戦ってたことも。

「そ、そうだあの怪物は何処に!？　って此処って神殿の上じゃないか!」

騒いでいると思わず屋根から落ちそうになり、慌てて下がる……が、その前に気付いた。

真下の真っ黒な広場に。よく見れば、墨汁の様なものの水たまりである。いや、そうじゃない。一見ただの瓦礫を沈めた様な黒い池に見えるソレ。よく見ればそこに突き出てる様な物体は、肉片ではないか？

そう思うと、確かにそう見えて来る。

此処までならティンの単なるイメージから来る妄想に近い。だが忘れてはいないか？　ティンは意識を手放す前に、黒い血を身体に流す生き物と戦っていたのではないかと。

となれば、だ。

神殿入り口前の広場、そして広場前の階段。そのどちらもが真っ黒な水たまりで染め上がっている。そしてそれら全てが、血だ。ティンはそこまで考えて思わず口を抑えた。グロいなんてものじやあない。色が違う分、まだマシではあるものの全て赤だったら？赤黒く染まった神殿前。何て狂気の現場。

ティンは思わず尻もち付いた。

「あ、そだ」

その時当たった杭をささつとスカートのポケットに押し込む。どうやらこの騎士服は特別制らしく、異次元ポケット仕様で違和感なく杭はポケットの中に埋もれた。

ふうと一息ついたティンは仰向けに倒れ込み、夜空を見上げる。するとどうだろう？ 疲れて火照った体に夜風が当たり、心地良い気分になる。

ちよつと一休みしようと、ティンは静かに瞼を下ろした。

ティンはゆっくりと揺すられ、睡眠から覚醒して行く。だが、身体は安眠を要求しているが為、ティンは深い眠りに落ちる。

——夢を、見た。

ティンは雪の布団の中で、雪山で寝ている。寒くて、寒くて、仕方が無い。だが、それでもティンは起きなかった。身体が、睡眠を欲しているからだ。

寒い、眠い、寒い、眠い、寒い、寒い、眠い、眠い、寒い、眠い、眠い……。

ティンは寒くても睡眠を選ぶ。ほら、だんだん寒さが心地よい感じに眠気を促進してくれたり。

ずつとこの涼しい感覚と言つか寒いに溺れて眠っていたい……。

「——はっ、殺気っ!？」

ティンは即座に身を捻って身体一つ分移動するとティンが元いた場所に氷の剣が突き刺さる。

視線を上げてみれば、瑞穂が立っている。瞳は無色。いや、漆黒の瞳だけど。目に表情は無く、人によつては無機質な美しさと機械的な冷徹ささえ感じさせるほどの無表情だった。

本来ならこの行動を合わせて考えると怒りや殺意を感じても良いのだが、怒りも敵意も存在しない。何の比喩も無い——そもそも比喩さえ存在しない——程に、本当に無表情だった。

「お、おはよう」

「ん、おはよう」

瑞穂は短く言うつとベッドに突き立てられた氷剣は碎けて塵となる。ベッドの端ではリゾットを持った浅美が構えていた。

「……つてあれ、何であたし此処に居るんだ？」

食事の後、宿屋から出ながら浅美から此処に運び込まれた経緯を聞いた。

浅美の説明をまとめると。

- 1、瑞穂が神殿の屋根で寝ているティンを発見& a m p ;回収。
- 2、そのまま宿屋に戻つてティンをベッドにシユートイン。
- 3、瑞穂は自分のベッドにイン。

浅美の天然交じりのハチャメチャな説明を聞いた結果からティンはそこまで理解する。だんだん彼女の事を分かつて来た様だ。染まつたとも言つ。

「……えつと……アリガトウゴザイマス、スイマセン」

「まず落ち着いて。後、怒つてはいないから」

瑞穂は震えながら片言で礼と謝罪をするティンに冷やかに言った。

「そっぴや、今どこに向かつてるの？」

「剣は手に入れたみたいだし、新都つてどこに行こうかと」

「あれ、プリンガーって街は駄目？」

「あつちだと山岳地帯を歩く事になるからね。ティンさんはそつちが良い？」

「山岳地帯って……山の中を歩くの？」

「具体的に言えば、岩山と洞窟内を上ることになる。そこを越えた先に何かあるのかは不明。未探索区域になってるからマッピング用の道具とマッピングが出来る人を連れて来ないといけないと思う。一応、その近くに未探索区域調査隊の野営地があるそうだからそこでマッピング用の道具とマッピングできる人を探せばいいと思うけどね。」

まあ一応私もやろうと思えば出来ないことはないんだけど。でも怪物とかが住んでいる場合を想定するとこのメンバーで私も守りながらマッピングの製作はちょっと厳しいかな？ 傭兵も雇えば良いかもだけどそんな余裕は無いし。そもそも私たちは未探索区域を冒険する為に組んだパーティーって訳でもないからきついと思うよ」

「……マッピングって、何？」

ティンの質問に続いて浅美が「はいいせんせーわっかりませーん」的な反応を示す。

瑞穂は呆れの意を示す様に溜息を付くが、彼女はとうの昔に慣れたことなので、

「……歩いて地図を作る事だよ」

と答えた。それを聞いたティンはポンツと手を叩くと、

「なるほど、瑞穂にやらせちゃいけないことか」

「ティンさんティンさん、それはつまり私に喧嘩売ってるって事で良いかな？ 一先ずぶん殴っていい？ 後蹴っ飛ばしていい？ ハンマーでぶちのめして良いかな良いよね？」

要らんことを言ったので瑞穂がボキボキと指を鳴らし始める。

「ティンさんティンさん、瑞穂さんは方向音痴だけど地図作りなら任せて平気だよ」

「……まあ、そう言う事でプリンガーには通らない。無理して行く場所でも無いし。予備の剣が欲しいって言うならまあ、遠回りにな

るけど……」

と言つて瑞穂はティンを責める様ににらむ。何ともまあ理不尽な対応ではあるが死活問題でもあるのだ。

「あー……いいや。別の街で買えばいいと思うし。あ」

ティンはふと思ひ出したように言つた。

「神殿に行かなきゃ」

ティンは神殿の中に入り周囲を見渡す。そこは人だかりが出来ている。

（何故に？）と思つているとどうやら死者の黙祷やら生き延びたことの感謝だつたりとか人それぞれだ。と言うかなんで真逆のことしてるんだこいつら。

「……いな、い？」

ティンは呟いて、神殿内を歩き回る。

一見、内部は三つの巨大な石造だけかと思いきや、意外と奥は普通にダンジョンだった。とは言つても化け物もなければ複雑な仕掛けもない。まず、像の裏に回れば広場だ。奥には扉が一つ。その扉を潜った先はなんと小部屋だ。小部屋の両壁には盾紋章^{エスカッション}がかかつており、奥にはまた扉。ティンは扉を開けて次の小部屋に入ると同じデザインの小部屋がお出迎え。まるでループでもしてかのように思うほど同じデザイン。

そんな詐欺ループ小部屋の次は、階段だ。先が真つ暗で何処まで続いているのか不明。兎に角長い階段である。幸いにもあまり急ではない。ティンはとことこ階段を下りていく。

どれほど階段を下りたのであろうか？ 十分？ 三十分？ 一時間？ そんな感じにどれ位降りたのかも分からなくなつて来た頃。やがて階段は無くなつて変わりに広い廊下がティンを出迎える。その先。暗闇に紛れて見難いが、間違いなくその先に大きな扉がある。^{エスカッション}盾紋章に交差した剣の絵が描かれた扉。ティンは気が引けたが、せ

めて旅立つ前に志を同じくする者に挨拶をして行きたくて。

扉を開ける。

と、いきなり光が漏れた。バツと弾けた様な光がティンを包み、思わず目を覆う。そしてゆっくりと目を開けて部屋の中を見ると、そこは異世界の様だった。純白の部屋。輝く、神聖なる光に満ちた部屋。部屋全体は円状で非常に広い。入り口から入ると、少し真っ直ぐな通路がありその先には円状の広場があり、円柱が円形に立ち並んでいる。

ティンは部屋の奥へと歩み進む。やがて、円柱は高い椅子だと言う事が判明した。

「……数は、十」
十。

それは、この世界の魔法属性と同じ。

「ほう、此処まで来るとは見上げたものだぜ」

ティンは直ぐに声がした方に顔を向ける。方向は上。入り口の真正面から向かい側の椅子。そこに、誰かが居た。

「あんたは？」

ティンは気が付くと円柱の椅子に座っている。

「転移術式だ。一々驚くなよ、輝光の聖騎士さんよ」

今度は真横からだ。左に向けば椅子に座り込んでいる白マントに白いフードを羽織った何かが居た。

「俺は、虚無の聖騎士。名前はミネル」

ティンはあまりにいきなりの事にそもそも驚く暇さえない。

「俺が掲げた忠誠は見返り無き正義。お前が掲げたものはなんだ？」

「えっと、あたしが掲げた忠誠？」

ティンはいきなり振られた質問に戸惑う。

「お前も聖騎士になったのならあるだろ？ 聖騎士になるに値する

誓いつて奴が」

「えっと……あたしの大切な人を、守りたいって言う」

「へえ、そりゃ良いな」

ミネルはそれを素直に肯定した。

「……いいん、ですか？」

「ああ、良さ。俺の様な何をすりゃ良いのかわかんねえ忠義よりよっぽど、良い。だが覚えておけ。分かり易く、動き易い忠義ほど辛い物は無い。その果てにあるのは、何なんだろうな」

ミネルは遠くを見る様な口調で語る。全てが白い外装で覆われて居る為、実際はどうなのかまでは分からない。

「で、何で此処に？」

「あ、その、ブーストさんやパルシェさんに挨拶でも」

「あ、あいつらいたの。こっちに顔出せよなあ……まあいつか。後嬢ちゃん」

「あ、あたしは」

「名前はいらない。俺は人の名前を聞く主義じゃあないんだ。それと、一応此処は騎士達の聖域になっている。俺が一応聖騎士ならフリーに入れるようにしといたが、人によっちゃ誰かの案内無しには入れないようになってるから気を付けろよ。」

最後に、焔進の聖騎士と水の聖騎士なら聖都の入り口付近に居ると思うぜ。用はそれだけか？」

「あ、はい」

その時、初めてミネルはティンに顔を向けた。中身が黒くて、表情が見えない。

「——良い目だ。恐れも、未来も知らない。無垢な少女みたいだ。純粹で真っ直ぐな目。主体性を失った俺には羨まし過ぎる」

「え」

「忘れるなよ」

ミネルはティンに手を向ける。

「純粹に願った心を。光はいつでもお前の中にある。そして——」
手から術式が生み出され、ティンが光だし、
「光の灯し方を」

気づくと、ティンは聖都の入り口付近に居た。先程までの潤った光ではなく、太陽から放たれる乾いた光がティンを照らす。

「え、と」

何があるのか分からず、ティンは当ても無く歩き出すと、

「どうしたの？」

「つわわ!？」

上から浅美が顔を覗いて来たから、ティンは思わず尻餅をついた。

「……終わったら浅美さんと呼んでと伝えたのに」

横から瑞穂の声が聞こえる。ティンは立ち上がりながら付いた砂埃を払う。

「用事終わった？」

「あ、うん。で、ハスタ・スピアに行くんだよね？　じゃあ行こうか」

「……何でティンさんが仕切るの？」

「お前らに仕切らせるって方が難しい」

瑞穂は一先ず殴る準備を始めたので、ティンはスルーして浅美から地図を貰い歩き出す。

目指すは新都ハスタ・スピア。ちなみに此処から歩いて半日の距離だったりする。

新しい旅路に（後書き）

今回は更新を早めにしたぜ。V。

まずお金を稼ごう

新都ハスタ・スピアを出て数日、ティン一行は更に別の街へと向かっていった。

で、現在森の中にて。

「もー無理！ もー歩けない！」

ティンはそんなことを言って道の真ん中で座り込んだ。

現在の服装は浅美に買って貰ったオーラウェアであります。騎士服は畳んでしまっておりません。理由？ いやだってあんな綺麗な服を着て一々旅なぞできません、と言う事らしい。

「えー……そう言っても」

「時間的に此処で野宿だから別にいいんだけど」

空を見れば赤く染まっており、そろそろ夕食時を思わせる風景だ。ティンは靴を脱いで足を揉み始める。ついでに息を吹きかける。

「足、冷やしたい？」

「うん。足が熱くて、痛い……」

ティンが言うと浅美は手を足の上に置き、ティンの足はあつと言う間に氷付けとなる。

「くううう……きもちい……」

「浅美さん、テント張るから手伝って」

「はい」

浅美はそう言って瑞穂の下に向かって行く。まあやる事は簡単、テントの両端を押さえて術式を発動させてテントを完成状態にするだけだが。そんなこんなで出来上がるテント。

「夕飯は何ー？」

「鳥飯缶詰め」

食後。ティンはテントの中で足の裏をマッサージしている。

「ティンさん、足痛いの？」

「滅茶苦茶痛い……と言うか二人とも、体力すっごいねえ」

「だって、わたしは冒険暦四年だもん」

「色々と知識が要るんだよ。靴選びとか、服装選びとか」

「靴？ あたしの靴って、旅に向いてないの？」

「それ、ティンさんのって何の靴？」

瑞穂が言い、テントの側に置いてある靴に注目する。

「……えっと、それは確か……孤児院の戦闘用靴。動き易さを重視してて、結構頑丈」

「ふーん。じゃあ長歩きには向かないね」

ティンは足を揉みながら瑞穂の発言に頭を捻る。

「それどう言う事？ 動き易いなら歩き易いんじゃない？」

「違うよ。動き易いと長く歩けるはちよつと違う。短時間を素早く動く事と、長時間な歩き続けることは身体の動かし方と体力の使い方は全く違う。」

ちよつと靴を見せて」

瑞穂は側に置いてあるティンの靴を手にとって見る。

「……これ、修行用の靴みたいだね。やたらと動き易さだけを重視して作ってあるみたい……ねえ、ティンさん。ティンさんはずっとこれを？」

「ん？ うん、そうだよ」

「よく此処まで歩けたね」

瑞穂は淡々と口にする。

「え？ どういう事？」

「これ、動き易さだけを重視して作ってある。これじゃあろくに散歩も出来ないくらい。この靴の履き心地は悪いと言うか、裸足に近い物だよ。よくこんなの履いて旅が出来たね」

「えっと……どう、する？」

ティンは何を言えいいのか分からず、ただ口を開く。

「騎士服のブーツを見せて」

「あ、うん」

ティンは言われて自分の荷物の中にある騎士服のブーツを取り出し、瑞穂に手渡す。

「……ふむ。こっちは結構バランスが良い。動き易く、足が疲れ難い。本格的な戦闘用のブーツだね。ティンさん、これからはこれを履きなよ」

瑞穂は言いながら持ち主に返す。

「ん、分かった」

ティンは返事をして布団にもぐる。足のマッサージしたまま。

そんなこんなで翌日。一向はやっとこさ新しい街、アカコガネシティへとたどり着いた。

一行は街の案内板のある噴水広場の前にいる。

「で、どうするの？」

「まずは宿の確保と持ち物の検査だね。足りない物と追加する物を考案する必要があるから。一応此处なら色々物があるから予備の剣も買えるし、装備の買い替えも出来るよ。とりあえずまず最初にやるべきことは資金の補充だね」

と瑞穂が仕切っている。非常に手馴れた様子である。以前も彼女が組んでいたと言うパーティでもリーダーであったのだろうか。

「で、ティンさん。欲しいものはある？」

「そうだな……あ、じゃあ携帯型おきがえ君が欲しい！あれがあれば騎士服にいつでも着替えられるし」

「じゃあお金あげるね。瑞穂さんお財布返して」

浅美は瑞穂に手を出して財布を返せと迫る。がしかし。

「駄目。それくらい自分で稼いで。ティンさんも集るんじゃないかって、それくらい自分で買いなよ。装備や道具みたいに皆で使えるとか、パーティの戦力強化の為とかなら都合するけど、ティンさんだけが使う物なら自分で稼いで買って」

「稼ぐって……具体的に？」

ティンの言う事も尤も。今の彼女達は自由気ままに世界を渡り歩く冒険者なのだ。どうやって資金を稼ぐのか。

「こういう時は賭け勝負だね！」

「賭け勝負？」

「お金を賭けて戦うの。勝つとお金くれるんだよ」

ティンはほうほうと頷いた。確かにこの方法なら修行も出来る、お金も稼げると一見一石二鳥に見える。しかし。

「浅美さん、それは駄目だよ」

「え、どうして？」

ぴしゃりと、瑞穂はその提案を却下した。その理由とは。

「賭け勝負は一見効率的な資金稼ぎに見えるけど、実は全然違う。

良い？ 賭け勝負でお金を稼ぐには絶対条件が二つあるよ。何だか分かる？」

瑞穂はティンと浅美に問いかける。二人は顔を見合わせてうーんと頭を捻る。やがてティンが手を上げる。さて答えは？

「……お金？」

「そうだね。まずはこちらが賭けるべきお金が無いと始まらない。もう一つは？」

「……勝負運？」

ティンは続けて答える。浅美はまだ頭を捻ってる。

「違うよ。必要と言えば必要だけどそれじゃない」

「じゃああたしはお手上げ。浅美は分かる？」

「……対戦相手のお金？」

「浅美さん、一週回って逆に結果を先走ってるよ」

浅美は分かんないよーと答えた。

「……答えは相手、だよ」

「相手？ 何で相手が必要なの？」

「ティンさん、私達は一体誰と勝負してお金を手に入れると思ってる？ 勝利して得るお金は何処から来てると思ってる？」

「えっと……相手の財布？　じゃあわたし間違ってる」

「浅美さん、確かに結果的に相手の財布からお金を貰ってる。でもね、何にしても相手がいないと賭け勝負はそもそも成り立たない。

良い？

相手がいないとそもそも勝負自体が成り立たない。そして、賭け勝負で稼ぎ続けるには必然的に相手からの挑戦を常に受け続け、尚且つ戦う相手は常に勝てる相手が望ましい」

「でも、そんなの賭けじゃないじゃん」

ティンが手を上げて瑞穂に反論。

「師範代が言ってたけど、常に勝てる勝負は賭けじゃなくて一種のイカサマだって」

「イカサマも正当性があれば立派な手段だよ。これは運だけが物を言うゲームじゃない、戦闘の実力と駆け引きが物を言う勝負だよ？

上手く稼ぐには自分が常に勝ち続ける状況を生み出すのが重要なんだ。その鍵を握るのが、いかに対戦相手を絶やさずにいるかって事」

ティンは疑問符を浮かべて瑞穂に問う。内容は。

「相手を絶やさずにするってどういうこと？　勝つだけじゃ駄目なの？

「絶対に駄目、とは言わない。でも勝ち続けるのはちょっと場合によつては望ましくない」

「と、言っと？」

「勝てば勝つほど相手の強さのレートも上がっていく、と言うことだよ。中にはイカサマを使う人だっているしね。このゲームで重要なのは如何に相手の『挑戦意欲』を持たせるかって事。常に勝ってたんじゃ相当な馬鹿でも無い限り相手は居なくなる。負ければお金を失うんじゃ誰だって強い相手との戦いを避けるよ。それでも来るとしたらこちらに勝てる確信してる相手。そう言う相手は大凡が何らかの手段でこちらへの戦略的対策か、勝てると思う実力があるか、何らかの卑怯な手段を持って来てるかの何れかのパターン。ど

れにしたって相手にはしたくない。人間何時だって勝てるとも限らないし、土壇場で勝負運が左右する時もある」

「……えっと、ようはどういう事？」

ティンは訳分からんと言わんばかりに返した。

「要約すれば、勝てば勝つほど勝つのが難しくなっていくって事。分かる？」

「うーん、勝つほど次の対戦相手が強くなるの？」

「そう言う感じ」

「でもでも、わたしにはいざって時混沌の魔剣があるから逆転だって出来るよ？」

「それ言えば、あたしだってとっておきがあるけど」

ティンは口にしてないが、彼女の言うとおきとは魔力の暴走による神剣召喚のことだ。瑞穂はそれを聞いてため息を漏らす。

「ねえ、私の話聞いてた？ 理解してる？ いざって時の大逆転なら私だってあるよ。でもそう言うの使って勝ったら誰だって『こいつとは戦いたくない』って思うじゃん。或いは向こうも『とおきの切り札』があるかも知れない。もしかしたら取って置きの切り札さえ凌駕する実力を持つてたらどうするの？」

そう言うことも考えれば時には負けること、無理なら快勝し続ける事は避けるべきなんだよ。

一回の戦闘で数回は攻撃を受けたりして『こいつには頑張れば勝てる』とか『何度か戦った後ならスタミナ切れで勝てるかも』と思わせるのが重要なんだよ。

そう言うことを考えながら戦える？」

「……うーん、師範代に『相手に攻撃をさせたら、あるいは受けたら負けと思え』って教えられてるから無理かな？ 浅美は？」

「……確かに無理だとは思うけど、この中じゃあ一番防御力の低いと思う瑞穂さんが言う台詞じゃないよね？」

浅美は『今日のお前が言うなスレは此处ですか？』と言わんばかりの表情をしてる。彼女は基本回避重視の軽装剣士だ。物理防御は

低めだが、防御を完全に何処かに置いて来た瑞穂ほどではない。

「でも浅美さんみたく鬼畜レベルの回避力は無いと思うよ?」

「瑞穂さん、それ自慢出来る事じゃないし。そんなだからいつもボロボロになるんじゃない?」

何故か、二人の間に不穏な空気が流れ始める。まあ喧嘩するほど仲が良いとは言っけどね。

「で、結局瑞穂が賭け勝負で稼ぐって事でいいの?」

「まあ、そうなるね」

「それであたしと浅美はどうするの? 戦ってお金稼ぐのが駄目となると……」

「じゃあ闘技場に行く? 大会でもやってたら一気にお金も稼げるよ」

「駄目だよ浅美さん」

浅美の提案も瑞穂がぶった切る。

「闘技場の大会は参加費があるし、何より時間がかかるしその上時間をかけた分の見返りも少ない。失った時間は膨大だよ? そのうえ優勝以外は失った時間に見合う程の物とは言えないし、そもそも優勝賞金自体大した事が無かったらどうするの? もっと言えば、大会は何時もやってる訳じゃない。狙うならなるべく大きな物にするべきだけど、そもそもこの街に闘技場があるの?」

瑞穂はいつて案内板に注目する。そこに書かれた情報によれば。

「無いみたい、だね」

ティンがいった。

「じゃあ闘技大会に参加は無理だね。と言うことで二人には短期バイトをして来て」

「はい」

「え、まってよ二人とも」

浅美が返事をした後、ティンが異を唱える。

「バイトって冒険者を雇ってくれる店って、あるの?」

「じゃあ、まずは場所を移そうか」

と言うことで一行は『冒険者サポートセンター』と書かれた施設の中に来た。

瑞穂は受付のお姉さんと色々話している内にティンの方に向き、カードを手渡す。

「はい、これが冒険者ライセンス。これで冒険者サポートセンターのサービスを受ける事が出来るよ。身分証明書と履歴書としても使えるから失くさないで」

「分かった」

ティンは言われて瑞穂から冒険者ライセンスを受け取る。瑞穂は『バイト検索用』と書かれたプレートが張り付いたパソコンを弄っている。

「で、これを使って冒険者のバイトを募集してる所を調べる事が出来る。それで軽く面接を受けてくれば良いよ」

「ふーん……何処で働くのが良い？」

「そうだね……此処の喫茶店なんてどう？」

瑞穂はパソコンから『主に女性募集。短期、長期どちらも可』と表示されたページを開く。ページには喫茶店の場所と内装の写真が表示されている。

「此処だね、分かった。じゃあ行こうよティンさん」

「待って、募集人数は……うん、二人以上だから良いね。じゃあ浅美さん、ティンさんをお願い」

「はい」

浅美は返事をしてティンの手を引いてサポートセンターから出ると魔法を操り、風の翼を展開すると空を飛んだ。

ティンにとっては計三度目となる空の旅である。

真下に見える街の風景は中々に良い眺めだ。以前は街がゆっくり見る事が出来ないほど速かったが、今度は非常にゆっくり飛行。

と視界が思いつき揺れた。どうやら目的地が近いから浅美が降

下体勢に入ったようだ。

緩やかに迫る地面。そして目的地であるカフェの前に来るとゆつくりと二人は地面に降り立つ。

「じゃ行こうか」

そう言つて二人は店の中へと入る。

店内のロッカー室内にて。髭を蓄えたナイスミドルな店長が、自慢（かどろかは知らないが）の髭を撫でながら嬉しそうに二人を交互に見ながらコメントする。

「で、浅美くんはティンくんか。分かった、じゃあ早速制服を着て働いて貰う事になるけど構わないかな？」

「はい」

「え、あの良いんですか？」

と、あっさりとはまずは働けと言われる二人。対して浅美はあっさり返事をするが、思わずティンは聞き返してしまった。

「ん？ 何がだい？ ああ、ティンくんはバイトは初めてだそうだね。でも浅美くんはバイト経験あるのだろう？」

「うん、こういう事は何度かしてるよ」

「なら、仕事は彼女から教わると良い」

「え……っと。そんなんで、良いんですか？」

ティンは何か納得いかない様で尚も食い下がる。働かせてくれると言っただから素直にうんと言え。

「ん？ 何か問題でも？ ああ、そうか。採用の可否については問題ないよ、うん。採用だ」

「そ、そう、ですか？」

「ああ、二人とも綺麗な金髪に可愛い外見をしている。丁度女性冒険者のバイトが一気に辞めて行った後でね、男ばかりになってむさくなった後なんだ。君達みたいに可愛い子が入ると嬉しいよ」

「えっと……そう、ですか？」

ティンは照れ臭そうに……ではなく、混乱した表情で返事する。
「どうやら、可愛いと言う表現に疑問があるようだ。」

「ああそうとも。じゃあ早速だが頼んだよ。女性用の制服はその部屋の中にあるロッカーにおいてあるから」

店長は奥にある『女性更衣室』と言う札が張り付いた部屋を指差すとささつと出て行く。

「じゃあ着替えよ」

「あ、う、うん」

ティンは戸惑い気味に頷いて浅美について行った。

まずお金を稼ごう（後書き）

次からティンと浅美のアルバイトとなります。

初めてのアルバイト

ティンは呆けた顔でレジに連れてかれていく。

浅美はティンにレジ打ちを教えるべく嬉しそうにレジ打ちの操作を見せている。

（可愛い……あたしが、可愛い……うーむ……）

「で、こうして、こうすると、はい！ 計算終了。後はお金貰うんだけど、お客さんから貰ったお金が多かった時、その分のおつりを出すよ」

（あたしが……可愛い……可愛い、かなあ……？ 華梨によく可愛くないって言われてるし……えーと確か世の中おせじって言うのもあるし……）

「んでね、此処押すと……ティンさん？ 聞いてる？」

未だに考え込んでるティンは浅美の言葉に気付かない。

（可愛い……でもあたし可愛いなんて言われたこと無いし……あの店長、人を見る目が無いの）

「ちよつとティンさん！」

「え、あ、何？」

浅美は不満度百分な感じに叫ぶとやつとティンが反応する。

「レジ打ち教えてるのに、ちゃんと聞かなきゃだめだよ！」

「ご、ごめん浅美。で、えーとどうやっ」

「あーあんだ達？ 新入りっての」

ティンが心を入れ替えてレジ打ちを教わろうとしている中、先輩女ウエイトレスが割って入る。

「どっちかでも良いからさ注文お願い出来る？ ちょうどフロアの担当が男ばっかです。女の子が入ればきつとお客さんも増えるだろうから、頼む！」

「あ、じゃあティンさん行って来て。レジ打ちならわたし慣れてるから」

「分かった」

ティンは返事すると先輩女ウェイトレスからメモとペンを渡される。

「じゃあ早速だけど注文取って来て。あんたバイト初めて？」

「あ、はい」

「んーと、挨拶とか注文取りに行った時の言葉はわかるか？」

「えっと、いらっしやいませーとか、ご注文はとか？」

「そーそーそれに笑顔つけりゃ問題はねーよ。あたしも問題ねーしな」

何処からか「そんなあんただけだよ」とか言う呟きが流れたが、まあ気にしない。

「じゃあこう」と切って、「ご注文は？」とティンはヒマワリのようなまぶしい笑顔を見せる。

「おっし完璧だ！ んじゃ行つて来い！」

軽く返事をし、ウェイトレスを呼んでいるテーブルに向かう。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

「コーヒー二つにパンケーキ」

と、ティンはささっとコニパケとメモに書き込む。

ティンが注文を取りに行ったのは女性客二人の席だ。片方はスパッと答えたが向かい側のもう片方は未だにうーんうーんと唸っている。

「イチゴもいいでも今日はバナナがああでもイチゴが……」

(……うーん、やつぱりあたしは可愛い、のかなあ?)

ティンはちよつと暇になり、先程と同じ議題に悩む。おい、今仕事中。

「ようつしバナナパフェだ！」

とティンは考えながらバパとメモに酷い走り書きで記入。

「んじゃ、以上で……あれ、どうかしたんですか？」

「ん、あ、いえなんでも」

ティンは意識を戻すとカウンターの方へと向かっていく。

「……あれ、あたしホットだけど、あんたは？」

「ん、わたしもホット……あれ、言っただけ？」

そしてティンはメモを見て。

「二のテーブルにコーヒー二つホットでパンケーキ一つとバナナパフェ一つ……バナナパフェ？」

と、ティンは言っただけで、と頭を傾げる。

（バナナパフェ？ あれ、言っただけ？ でもメモに書いてあるし……）

「おいどうした新入り」

「あ、何でもないです」

「んじゃ次いけ次。客すくねえし寂れてっけどこっちは一杯一杯なんだよ」

ティンは軽く返事をするにテーブルへと向かう。

ちなみに店長は「客、少なくて寂れてて悪いね」とかぼそりと呟いてたりするけど誰も気にしない。だから読者も気にしない。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

「おれリンゴジュース」

「僕アイスコーヒー」

「アイスティーを貰おう」

「オレンジジュースな」

旅人グッズを身に纏った四人組が次に次に注文を口にする。

対してティンはメモにリアコアテオと書き込んだ。

「んじや以上で。んでさ、次どの街行くー？」

ティンは言われてカウンターへと戻り、メモを見ながら。

「六のテーブルにリンゴジュースとアイスコーヒーとアイスティーとオレンジジュースを一つずつ」

「あいよ、ちよつと待ってくれ」

「ほほう、あんたやるねえ。本当にウェイトレス初めて？」

さっきの先輩女ウェイトレスが使い終わった食器をお盆に載せてやって来る。

「は、はい、バイト初めてです」

「にしちゃあメモの走り書きといい、随分手慣れてるみたいだけど」
「えーっと……自分でもよくわかりません」

そう言つてティンは別のテーブルに向かつて注文を取りに行く。

（……ああ、そう言えばうちの孤児院つて色んな好みの奴とか多いからなあ。いつつもあたしか華梨がお茶とか紅茶とか持つてたりしてて、メモとかもこんな風に使つてゐるからかな？

……人間、生きてると変な時に変な経験が生きて言うけど本当だね）

そんな事を思いながら無意識の内にティンは注文を聞き終えて、カウンターに向かつている。

と言うか、急にそれに気付いたティンがびっくりだ。

「ん、どうかしたのかい？」

「あ、いえ。えつと……十のテーブルにナポリタンとカルボナーラとアイスコーヒー二つです」

「そうか……おい、誰か厨房手伝ってくれー！」

「はい。あ、レジ変わってくださいーい」

店長の呼びかけに浅美が応じた。

「何作るんですかー？」

「ああ、私がカルボナーラとナポリタンを作るから君はミートソースを頼むよ」

「はい」

と言つて浅美は大きな目の鍋に水を入れ、火をかけて蓋を閉める。

次に冷蔵庫から玉ねぎとニンニクと挽肉とホールトマトの缶詰を取り出すと「あ、ミートソースは缶詰があるから」まずは玉葱とニンニクの皮を向き、その二つをまな板の上に放り投げ、包丁を華麗に操り、空中でみじん切りにし「あの、浅美くん？」次にフライパンを取り出して火を付け、油をひく。

「あ、オリーブオイルはありますか？」

「あ、いや無いと思うが」

それだけ聞くと浅美はニンニクを鍋に放り込み、炒め始め「いやだから浅美くん」次に玉ねぎを放り込んで炒め続ける。

「……あー、私はカルボナーラを作るか」

続いて浅美は挽肉をフライパンに放り込み、三つの具材を炒め、更にホールトマトをフライパンの中に放り、ベラでトマトを潰して具材を混ぜ合せていく。

「こんなもんかな？」

浅美はフライパンの火を止め、そう言っ隣の鍋の中の様子を見る。結構な時間が流れてたらしく、もうすぐ沸騰と言う感じだ。

浅美は塩を鍋の中に入れ、冷蔵庫からパスタの束を取り出して鍋の中に入れて広げて煮込み、ミートソース作成の続きを始める。

「ほえー、浅美ってパスタも作れるんだ」

「君、今日入ったばかりの子？」

と、そんな様子を見ていたティンは横から声をかけられる。

そつちに視線を移すと茶髪でショート青年が立っていた。

「そつだけど、何か用？」

「いや、君かな？ バイト初めてって言うのは。僕で良ければ相談乗るから分らない事があつたらなんでも聞いてくれ」

「あ、じゃあ一つ聞いていい？」

「何？」

「あたしって可愛い？」

「……は？」

青年は返答に一瞬詰まった。が、顎に手をあて。

「んー、確かに可愛いかな？ うん、可愛いとは思っけど、どうして？」

「そうか……あたしは可愛いのか……なるほど」

ティンは納得した様子を見せると別のテーブルに注文を取りに行った。

「……なんだつたんだ？」

その後、青年の独り言に返す人は誰も居なかった……。

夜、浅美はティンの手を引いて適当なホテルに入り、適当な部屋に入ると瑞穂がベッドの上でごろごろしていた。

ティンは（多分読者も思っただろう）ふと思ったことを口にする。

「……ねえ浅美、何で此処だつて？ 携帯も見えてないよね？」

「瑞穂さんの髪の毛の匂いを探った！」

「それ人間としてどうなの！？」

犬も吃驚なサーチ法。風属性の魔法を使える人間は広範囲で人の身体に付いた匂いで人を探すことが出来るのである。

もつと腕を上げれば声で居場所を特定することだつて出来るんだぜ。

「体臭とかじゃない分遙かにましだよ」

「それもどれでどうよ！？」

「瑞穂さん香水付けてないし、汗の匂いで判別なんて出来ないよー」

「リアルなコメント！？」

ティンはあちこちに突っ込みを叩き込む。忙しいなあ。

「あ、そうそうティンさん。今日は変な連中こなかったよね」

「え、あ、そう言えば最近来ないね」

ティンは道中を思い出す。思い返せば、仮面の連中は最近全く来ない。

ちよつと前までは相当にしつこかったと言うのに。

「多分、浅美さんの影響だと思う」

「え、なんで？ この前は浅美が居てもあいつらやってきたけど」

「それについてはまず置いとくけど、浅美さんは混沌を制御する魔剣を持つてるの。その影響で浅美さんの近くに異世界から転移してくるのが難しい事があるんだ。

んつとね、浅美さんの周囲が転移先として設定する際異常にブレるんだつて。これは浅美さんが剣を別空間に置いてある事が原因らしい。おかげで浅美さんの周囲に異世界から転移し難いんだつて」

「つまり、あいつらは暫くこっちに襲って来ないって事？ でもな
んで前は襲って来れたの？」

「多分、元々この世界に居たからだと思うよ？ 異世界からでない
のなら簡単に来れると思う」

「なるほど……」

ティンは納得する。しかし、瑞穂はこう言う知識を何処から持つ
て来るのだろうか。

だがティンは取り合えず瑞穂の言葉を信じてみることにした。

翌日。二人は朝八時に店に入り、ウェイトレスの制服に着替えて
掃除を始める。

その時、ティンの耳に心地よい歌が流れ込む。人を陽気な気分
にさせ、元気が沸いて来る様な歌。聞いていると「今日も元気に過
ごすぞ！」と言う気分になてくれる。

「浅美くん、君は歌が上手いねえ。歌手志望かい？」

「ん、そうかな？ でもわたしは歌手志望じゃないよ？」

浅美は歌を止めて店長に向きながら否定する。

「でも確かに踊り出したくなる様な歌だったな！。もっと歌って
みよ」

「そついわれてもわたし歌なんて一つしか知らないよ」

浅美は複雑な表情を見せる。歌に関しては色々思う所があるよう
だ。

「じゃあ今の歌は？」

「今の？ 気分が良かったから適当に歌っただけだよ」

「へー、じゃあさ、その知ってる歌って言うのを歌ってみてよ」

「でも今は仕事中だよ？」

「良いさ良いさ、それくらい。君くらい上手いんなら是非に頼みた
い所だよ」

店長は笑いながらグラスを拭いて揃えて行く。

浅美はそこまで言うならと、呼吸を整えて歌いだす。

店の中に優しい歌声が響く。

微風のように優しく大地を撫でるような、祝福を運んで来る風のような。

歌詞は恵みを運ぶ風に、そして風を司る精霊達、そして——風の化身たる風神様に感謝を捧げるもの。

まるで風を祀り、風神を崇める、優しい風のような歌。

浅美は僅か数分の、そして聞く者には数時間にも感じられる歌を歌い終わると一斉に拍手喝采の声があがる。冗談か本気か、アンコールの声まで出る始末。

「すつごいよ！ もうちょっと激しい歌だったら思わず踊り出す所だったよ！」

「そ、そう？」

浅美は控えめに言った。その表情はあまりの賞賛に照れて——るのではなく、寧ろ戸惑い。まるで「なんでこんなに喜ばれてるの？」と言う疑問を振りまく様な。

そんな浅美を余所に周囲は開店時間二分前だと言うのに喫茶店内はライブ会場のように盛り上がっていた。

時間になると騒ぎが嘘の様に静まり、普通に仕事をする人たち。

メリハリ大事。

「そーいや結城、お前昨日人の匂い追ってただろ」

「え、何で先輩が知ってるんですか？」

答えたのは浅美ではなくティン。浅美も反応しているがティンに先手を打たれていた。

「昨日そいつが軽く魔法使って走ってたの見てたんだよ。あれ、場合によっちゃ犯罪だからあんますんじゃねーぞ？」

「は、犯罪なの？」

「確かに人の家の匂いとか、部屋の匂いとかを魔法で持って来るのは犯罪だって知ってるけど、野外で匂いを拾うのは大丈夫な筈だよ」
オロオロするティンを余所に浅美は常識を語る様な表情で対応。

「あれ、そうなのか？ 匂いを風でかき集めるのは犯罪って聞いたんだが」

「それは人の家とかの場合だよ。確か、無断で人の家の中に魔力を使っちゃいけないって法律だと思うよ」

「と言うか、人の家の匂いとか持って来て何がしたいの？ お腹減るだけじゃん」

「世の中そう言う変態がいるんだって。女の部屋の匂いとかこそこそ魔法使って嗅いだりする様な奴とか」

ティンと浅美は理解出来んと表情に浮かべた。世の中、色んな人が居るもんだ。

二人のアルバイトは特に問題もなく過ぎていく。そしてあれから十三日め、二週間の短期アルバイト終了の前日。

時間は十七時頃、夕暮れ時。仕事を終えた二人は店長に呼び止められる。

「御苦労さま、二人とも。君達が来てくれて助かったよ。明日でバイトは終了だが、君達はまだ街に残るのかい？」

「うん、暫く滞在して旅に必要なものを買い揃えて行くつもりだよ」

「そうか……もう一度この街に来る事があればまたバイトに来てくれ。君達なら歓迎するよ」

「ありがとうございます！」

二人は揃って頭を下げ、踵を返して宿泊してるホテルに向かう。

その途中、公園前である人物に出くわした。

「あ、瑞穂さん」

「そっちもバイト終わり？」

「うん、瑞穂は稼げた？」

瑞穂はんつと親指を立てた。稼げたらしい。

「今日は仕入れ悪い」

「その親指の意味は」

「でも減金零」

ティンと浅美はおおつと反応する。凄いのか、それ。

「今日喧嘩売る奴大した事なかった。どうやら今日の奴らは私が漆黒の氷姫だつて知ってたみたい。挑発にも乗って来ないし」

「で、瑞穂はどれぐらい稼げた？」

瑞穂は両手で指七本立て、一言。

「勝利総金額七十万」

「凄いね〜！」

ティンと浅美中々の収穫に喜びの意を示す。

「敗北総金額三十四万」

「つて負け過ぎだよ！」

「いやあ、流石に私でも全力で負ける時はある」

「素で負けたの!？」

ティンは流石にびっくりだ。あの瑞穂が素で負ける事があるとは。幾らなんでも剣聖とか言われてる人が相手じゃ私はどうしようもないよ」

「剣帝じゃなくて剣聖？」

浅美は更に瑞穂に問いたです。ティンは既にちんぷんかんぷんだ。「さあ？ でも剣聖つてよばれてるのは確か。前にもあつた事ある人」

「剣王でも無くて？」

「アシエラさんがいたら速攻で逃げるか土下座して負けるよ……まあ、剣聖にはマッチで一勝一敗一分けだからお金減って無いんだけど」

「結局減って無いんかい」

ティンはお金減って無い事実とそもそも剣聖と拮抗する実力を持

つてる件についてと言うか剣王って何と言う話を始めとして色々な突っ込みが浮かんだが、結局減って無い事を選んだ。世の中、分かんことだらけだ。

「じゃあこのまま三人で帰る？」

「んーじゃあわたしはお夕飯のおかずでも買ってくるよ」

「パスタでナポリタン」

瑞穂は言う浅美にお金を手渡す。ティンにも言わせない辺り、素晴らしい仕切り様である。

「分かったよ……瑞穂さん、これ足りな」

「足らして、三人分」

「駆け勝負で増や」

「駄目。それだけで三人分のナポリタンを用意して」

浅美はとぼとぼと買い物に向かった。瑞穂、恐ろしい人。

「あたしに」

瑞穂はティンの真横でゴキゴキと指を鳴らし始める。ティンは踵を返してホテルに向かった。

話し込んでいたおかげか辺りは余計に暗くなっている。

まだ太陽は見えるが、街によっては薄暗く、よく見えない。

「瑞穂って前からパーティのリーダーだったの？」

ティンが切りだした。瑞穂は対して肯定の意を示す。

「他にやる人がいないからしょうがなく仕切ってた気がするけど。

みんなリーダーなんて面倒がつてやらないの」

「……どっちかと言えば、他が頼りない様に思える」

ティンは浅美の様子を思い出してコメント。確かに、どう考えても彼女にリーダーは無理あると思う。

「浅美さんはね。あれで結構空気読んで空気ぶち壊すけど、もう少ししっかりすればリーダーになれると思うよ」

「……浅美がリーダーなんて想像付かない」

「もうちょっと一緒に居れば分かって来るよ」

二人はそんな話を話し合いながら角を曲がり、沈みかけた日の光

が届き難く、暗闇が生まれている場所に到達した、その時。

闇から這い出る様に、ティンからしたら非常に懐かしく——もう二度と会いたくない連中が出て来る。

真っ黒なボロマントに、仮面を付けた、灰色の髪、男達。

音を立て、瑞穂がティンを庇う様に瑞穂が前に出る。

「お前ら……また来たのか」

「本当、いい加減しつこいよ。事情はよく知らないけど」

「——ほう、氷姫一人とは都合が良い」

瞬間、瑞穂が大きくぶれる。直後、瑞穂が弾ける様に吹っ飛んだ。ティンはぼんやりと、その行方を見詰めている。友人が、吹っ飛んでいく様を。その眼に、焼き付けるッ！

「み、瑞穂ッ!？」

「ぐ……くッ」

瑞穂は何とか立とうと腕を支えに起き上がろうとする。その側へ、ティンが駆け寄って瑞穂の様子を見る。

それでも瑞穂は呻きながら氣を確り保とうとする。

「瑞穂、瑞穂、大丈夫ッ!？」

「ぐ……うッ……んッ……」

と、そこで体中の全ての力を抜き、「きゅゆっうう……」と、だけ言って氣絶。眼をぐるぐる回して氣絶。

その時、ティンは師範代から「人間、当たり所悪いと意外とあっさりと終わる」と言う教えを思い出した。

「って、な、え、きゅ、きゅゆっうう……ってそんなの無いよ! ? 何をあつさりと氣絶してるの! ? そんな可愛く氣絶すれば良いってものじゃないよ! ?」

読者の皆さんは良く分かってないかもしれませんが、敵に囲まれています。周囲は謎の男だらけ。この状況ティン一人はきつい。

「そうだ、浅美を……」

と言ってティンは止める。今、自分は本当に守られるだけで良いのか、と。出来るだけの抵抗も出来ないのか、と。

「どうした？ 混沌の双剣士は呼ばないのか？」

男の一人——瑞穂を気絶させた、幹部級と思わしき男が腕を組んで立っている。

ティンは素早く、引き千切る様に——でも服を傷付けることなく強引にオーラウェアを脱ぎ捨て、瑞穂の荷物から自分の騎士服を半ば強引に着用し、マントを羽織る。

「……服を着るぐらいは大目に見るんだ？」

「そのくらいなら見逃してくれよう。どの道、貴殿ごときの腕前では我と対等に戦うことさえ難しいのだろうからな」

「随分余裕だな」

ティンは剣の柄に手をかけ、臨戦態勢を取る。

「これまでの戦を見れば妥当と言うものだ。剣を変えた程度で変わったと思えぬ」

「——お前、聖都の事は知らないのか？」

「聖都？ ああ、貴様が神剣を召喚して我らの手勢を蹴散らしたところか？」

（こいつら……あの時の事を知らない？ 何で？ もしかして、あの杭を持つてる事も知らないのか？）

ティンは敵組織が意外と杜撰である事を目の当たりにする。

だが、この状況に異音が響く。

「む、誰だ？ 我らの邪魔立てすると言うなら」

「ッ、おい逃げろ！」

男とティンが同時にそちらへ意識を向ける。

そこには、同じく夕闇から這い出る様に誰かが出て来る。

「え……おん、な？」

それは、黒いコートを羽織ってチャックを閉め、フードも被った誰か。ティンはその姿を見て、そいつが女だと思う。

理由は一つ。師範代的に思わずむしゃぶりつきたくなるとか言い出しそうな腰の括れでもなく、じーさま的に思わず撫で回したくなるとか言いだしそうなむっちりとした太ももでもなく——その、羽

織ったコートではどう見ても隠せてない、胸の大きくて豊かな隆起。そのコートは隠す為か、どっちにせよ全く隠せてねえよと突っ込みたくなる大きさの胸だ。

ちなみに前二つの特徴は単純にティンが上半身を先に見たからだ。まあ下半身はコートを着ているから女性的なボディラインの男とも言えるが……それを言えば胸も詰め物とも言えるが。

そんなこんなで行き成り現れた謎の女にティンを初め、周囲の男達はどよめく。

「——見られた以上は止むを得ん。そいつも始末しろ」

幹部級の男が言った瞬間、女は左手を右の腰に置き抜くと——星の剣が。続いて右手を左の腰に置き抜くと——星の刀が女の手の中に。

「二刀、流……ッ!？」

初めてのアルバイト（後書き）

今回、アルバイトの話だけど筆者はバイト経験ほぼ0です。

まあ、色々あるでしょうが大目に見てください。異世界ものって事で此処は一つ。

え、無理？ ですよー！。

初めての対人戦に対するは星の双剣士。（前書き）

各武器の定義。

注：非常にどうでもいいのでスルー推奨。スクロールでおさらばしましょう。

短剣の定義は刀身柄含め全長五十ｃｍ未満、かつ刀身三十ｃｍ未満とする。以上の条件を満たしている場合、短剣と分類する。

刀剣の定義は刀身柄含め全長１ｍ未満、かつ刀身五十ｃｍから九十ｃｍ未満、刀身の厚さ二ｃｍ未満、刀身の幅三ｃｍ未満。以上の条件を満たしている場合、刀剣と分類する。

以上、参考資料『世界総合武器連盟・武器図鑑』より。

初めての対人戦、対するは星の双剣士。

「——見られた以上は止むを得ん。そいつも始末しろ」

幹部級の男が言った瞬間、女は左手を右の腰に置き抜くと——星の剣が。続いて右手を左の腰に置き抜くと——星の刀が女の手の中に。

女は両方の剣をジャグリングする様に回しながら頭上で刀身を交差させ、音を鳴らして二刀を構える。

ティンはそれを見て、その大凡の構えの名を口にする。そう、その名は。

「二刀、流……ッ!？」

二刀流。そう、二刀流だ。二刀流と言ってもこの世界、アーステラに二刀流は大きく分けて三種類も存在する。

一つ、それは短剣二本による二刀流だ。

このタイプの特徴はリーチに乏しく、殆ど切れ味に威力を期待する短剣を二本持ち、より強烈な手数を持つて敵を攻めるタイプだ。一番の長所は何と言っても短剣の持ち味を最大限生かし、ほぼ二倍に近いほどの手数を持つ事と短剣特有の防御能力の特化である。攻撃を受け流し、切り捌く事にも優れた短剣を両手に構える事は防御力の上昇に繋がるとも言える。

次は刀剣と短剣の二本による二刀流。人によつては正統派、人によつては最もバランスが良いと言われる二刀流だ。

攻撃用の刀剣に防御用の短剣をそれぞれ持つて戦うタイプだ。言い換えれば、盾の代わりに短剣を持つ事で攻撃寄りになっている。だが、リーチの違う二本を同時に装備する事により他の二つのパターンより手数が減っている。だが、堅実な立ち回りを可能とするタイプであることに変わりはない。

そして、最後——これこそが二刀流の中で最も有名かつ、最も扱い難い二刀流。刀剣二本によるリーチの長い剣を両手に握るタイプの二刀流であるッ！ 他の二タイプと比べ、非常に扱いづらい。

理由は二つ、リーチと重さである。刀剣は短剣よりも巨大な為、長いリーチによる振り難さ、重さによる持ち難さが多大に影響が出るのだ。特にリーチに関してはより扱い辛さに歯車をかけている。長い刀身ゆえに二本の剣を扱う際、小回りが利き難く腕が絡まり、時には自分の腕さえ切ってしまうかねないのだ。つまり、二本のリーチのある剣を巧みに操り、刀剣を腕一本で振り回すほどの腕力と体力が要求される。

だが、この二刀流には他の二刀流にはない大きな長所が存在する。そう、武器の重さとリーチを生かしたまま敵に圧倒的な手数を叩き込める所、動き次第で単純に攻撃の重さが二倍と化す所であるッ！

それがこのタイプの二刀流の魅力ッ！

そして彼女の構えは——刀剣二本の二刀流だ。

女は二刀を構えて踵を返すと背後に襲い掛かって来た男二人を一気に横一文字に薙ぎ払うッ！

ティンも抜剣して掛かって来た男どもの内一人右肩口を切り裂き、次の男を返す刃で左腰に刃を当て切り上げ、身を回して次の男の右脇腹を一閃し、更に次の男を舞う様に頭上真ん中を切り裂き、別の男に肩からタツクルして左肩口を切り裂くッ！

この間、僅か五秒ッ！

続いてティンは他の男達の弱点を見切る。それがティンの長年の鍛錬により身に付けた技術。モノの弱点や脆い所を見切り、切り裂く。新聞紙の破り易い部分を破る様に——あ、意外と結構弱点だらけ。

ティンは打つべき急所を見切り、あっさりとそこに剣を当てて撫でる様にスライドさせて切り裂くッ！

（あの女……意外と動きが悪いな）

と、余裕が出来たので女の動きを見る。

女は両の手に握り締めた剣を振り上げて掛かって来た男をバツの字に切り裂き、続いて左右の男を切り伏せるッ！

直後、女剣士は後ろから羽交い絞めにされ前から殴りかかれる――が左の剣を後ろに突き刺して前の男を蹴り飛ばし、後ろの男を背負い投げの要領で投げ飛ばすッ！

更に女剣士へ三人の男が一斉に飛び掛り。

「重奏・流星刃」

二重に描かれる星の軌跡が、一斉にそれをなぎ払う！ しかし、投げ飛ばされた男が立ち上がって飛び蹴りを繰り返すし、女剣士は左の剣で足を突き踏み込んで右の刀で股座から切上げるッ！

（何だろう、見様見真似で踊りと剣術を混ぜた様な。あの程度なら……大した事はないな）

思いながら襲い掛かる男どもの内一人を突き、蹴り飛ばして振り返って次の男へ右肩から切り下ろすッ！

女剣士踏み込んで左の剣を右肩口に叩き付け反撃をされるよりも先に左の脇腹から右の刀を振り上げるッ！

「退けッ！」

ふっ。と、仮面の男達は夜の闇に紛れて消えていく。

「……なるほど、剣が変わるだけでこうも変わるとは。剣が剣士の魂である……その言葉の意味、深く理解させてもらった。

土産代わりに、我が名を告げよう」

「――名前？」

「強き者へ送る、礼儀と覚えてくれ。この名は――四天王が一人、玄武。また会おう、ラグナロクの剣士」

言うだけ言々と背を向け、背後に手を突き出す。

「しかしこのまま帰るのも癪に障る。置き土産を残そう。何、この程度の輩も片付けられぬ様なら我の見込み違いと言う事になる。

さらばだ」

男が去ると同時、黒い獣たちが這い出て来る。聖都を襲った謎の獣達が。

「クソッあいつらなんてものを置いていくんだよ!」

ティンは言って剣を再び構え直す。同時、ちらりと背後に横たわる瑞穂に眼をやる。まだ目を回しており「はにやにや……」とギヤグ漫画で出て来そうな気絶中のセリフを漏らしている。復帰にはまだ時間がかかりそうだ。

(瑞穂を守りながらこいつら……ちょっと厳しいか)

次にティンは目の前で佇む女剣士に視線を向ける。

彼女はゆつくりと首を回し、周囲を見渡している。

「……こりゃ……ちよつと……」

微かに見える口元がわずかに動くのが見えた。

が、ティンに読唇術を習得してないし、風の魔法使いでもなければ地獄耳も無いので何と言ってるのか皆目見当もつかない。

女剣士は首を振ると再び二刀を構える。

そして、獣たちが一斉に襲いかかってきたッ!

ティンは男達を切り裂いた時と同じ要領で次々と襲いかかって来る獣達を切り裂いていく。踊る様に、払う様にッ!

跳びかかって来た獣の頭上に斬撃一つ、もう一匹に返す刃で顎の下に斬撃一つ、後ろから来たのに振り返って口から上下を真ッ二ッ!

女剣士もまた左右の剣を巧みに振るって獣達を切り裂いていく。

しかし、ティンの様に一撃必殺ではなく二発三発の斬撃で沈めていく。その様子からはあまり実力が高いとは思えない。

それでも華麗に、そして確実に敵を切り裂いていく彼女の剣は中々のものだ。

襲いかかって来た前の獣を蹴り飛ばし、後ろから来た二匹に踵を返してバツの字に切り裂き、そこから右足を軸にコマの様に回転して周囲の奴を切り裂いて払い、後から来た奴に右から切り込み左から切り払うッ!

二人の剣戟により、次に倒れて行く化け物達。やがて二人が背を合わせると残りの化け物達も黒い血潮を撒き散らして倒れた。

そして、一瞬お互いに顔を合わせ距離を取る。

「で、あんた結局何者？」

女剣士は剣についた血潮を払って立ち尽くすのみ。

「一体どうしてあたしに味方をしたの？」

女剣士は二刀を握り締めるだけで答えない。やがて右手の刀の切っ先をティンへ向けた。

まるで、「剣士なら剣で語れ」と言わんばかりに。

「……やる気だつて言うなら、こつちも容赦はしない。来るなら、来い！」

ティンは握った剣を一払いして上段に構える。

女剣士も改めて二刀を構えた。

（そついや、道場の外で誰かと戦うなんてこれが初めてだっけ？）

そして、二人は駆けだす——そしてティンは思い知る。二刀流の本当の恐ろしさを。

瞬間、ティンは何か嫌な感じをして握る力を弱めて女の右の刀を受けた——瞬間、左から突きが来るッ！

ティンは慌てて剣に力を込め、右の刀と交えた自分の剣を軸にして左の突きをよけ、ふっと右の刀から力が抜け、女剣士は一步踏み込み右の刀を上段に構えて振り下ろすッ！

（これが、二刀流……ッ！ 油断してた、さっきは複数に剣を向けてたぶん、今度は二本の剣がこつちに向くんだ！）

ティンは踊る様な足捌きで急いで後ろに逃げ——女は更に踏み込んで左の突きを繰り出すッ！

「なっ」

これには流石にティンは驚いた。自分の足捌きに追い付く人間が華梨や皐以外にも居るとは思わなかったから。世の中広い。

突きに対してティンは更に右側——と見せかけ左へと避けるッ！
相手はそれに釣られ思いつき右の刀を振るい——左の剣も同時

に振るうッ！

「くうッ！」

ティンは剣を構え、鉄の激突音が軽く響く。だが所詮ついでに振られた剣、ティンは軽く捌いて懷に潜り女の脇下に剣を振るい——次は右の刀がそれを防ぐッ！ 続いて女剣士は脚を払い、ティンはそれを足場に代わりにして跳び退き、距離を取る。

（……思ってた以上に、やる。何かだんだん楽しくなってきた楽しくなってきたッ！）

ティンは思わず足で地を鳴らし、小刻みに揺れ始める。リズムに乗り、より過激な剣戟に移る為剣を右側上段へと構える。

向こうもテンションが上がったのか、剣をジャグリングさせる様に回転させて目の前で剣を交差させ、火花を散らして構える。

そして、同時に駆け出す——距離十mッ！ ティンは女の動きを見る。

残る距離九m——女剣士は右の刀を左の腰に置き、左の剣を右の肩に置く。

そして、距離八m——ティンはそれを見て、眼を見開いた。

続いて距離七m——その構えから見て取れる選択肢は三つ。

更に迫って距離六m——上段が先か、胴抜きが先か、それとも同時か。

残り半分距離五m——それは、ティンにとっては最も重要な選択肢。上段を防ぐか、胴抜きを防ぐか、両方同時に防ぐか。

気付けばもう距離四m——同時に防ぐを選べば一見どっちが来ても問題無い様に見える。が、その場合片方だった時に送れて飛んで来るもう一つの斬撃が変わり別の方向になる可能性と危険性がある。だが。

（両方から来ると言う選択肢はまず無いと思う……ッ！ だって、軌道が重なっているッ）

激突はもう直ぐ距離三mッ！ 同時の斬撃は両方の軌道が重なっている。だから、余程の手鍛でもない限り同時の斬撃の線は薄い。

なら。

（右か、左か——！？）

もう相手は目の前残り距離二mッ！ ティンは刹那の合間に頭を動かし、見切る。どっちが先か、それともどっちもか？ 読み負ければ自分が斬られる、それは初手を取られると言う事だ。戦いにおいて、それほど不利な事はない。故にティンは悩むッ！ 考えるッ！ 理不尽な選択肢をッ！

（いや、ならいつそ下がる——いや駄目だッ！ こいつはあたしのステップに追いつけるッ！ 逃げるのは引き伸ばしと一緒。じゃあ、此処で仕掛けるかッ！？）

いよいよ選択の時——距離、一mッ！ ティンは悩む。上段が胴抜きか？ どちらを捌くか。

相手は既にまじか。女は腕を動かし、剣を振るう。そして——ティンは決める。その道を。選択を、する。気付かなかった、真の第三の選択肢をッ！

（そうだ…… あったね。あたらしい選択肢ッ！）

ティンは剣を握り締め、狙いを定め。

二人の女剣士が交差する。己の剣を振り抜いて。

夜闇の風が吹く。どちらが初撃を与えたのか？ お互い軽装剣士。

一撃で戦いが決まる可能性さえある。

「——ま、さか」

ぐらりと、黒コートの女が肩膝をつく。

「脚を、斬るなんて……」

決めた。ティンが……下段を振り抜いて、一撃を決めたッ！
が。

「ぐあッ……！」

ティンは右肩を抑えて肩膝を付く。

「胸抜きでも、上段でもなくて……上下、同時か……！」

が、それでもティンは立ち上がる。傷はない、痛みだけ。しかし、勝負は一撃ではついてないと彼女は剣を構える。

「……え？」

ティンはちらりと見えた。女のフードが零れて見事な長い黒髪を。しかし女は直ぐにフードを被り直す。そしてふっと消え去った。

「……逃げ、た？」

ティンが呟くと瑞穂が唸りながら立ち上がる。

「瑞、穂！」

「ん……頭、くらくらするう……」

そう言って頭を押さえる。まだ完全に回復しきってはいない様だ。ティンは瑞穂の肩を支える。

「つて軽っ！ 瑞穂軽っ！」

と言う事で折角なので背負って歩くことにした。

浅美は買い物から帰って来てから事の顛末を聞くと、こうなった。「どうして早くわたしを呼ばないのッ！」

お嬢さん近所迷惑、と言いたくなるほどのボリュームで怒鳴る浅美。

流石のティンもこれには吃驚である。

「い、いや、それは、最終手段と言う奴だし、結果的にあたし一人で行くのか」

「ならなかったらどうするの！ 勝手に一人で行動しないでよッ！」

「み、瑞穂も倒れちゃったし」

「余計にだよッ！ ティンさん防衛戦なんて出来ないじゃん！」

「ま、まああれだよ、結果オーライってことでさ、ほらナポリタン食べようよ。買って、来たんだよね？」

ティンは食事で何とか話を流す。浅美も空腹なのでそっちに取り

掛かる。

で、肝心の瑞穂は。

「……くにゅう」

寝てた。それにティンがコメント。

「……気絶から睡眠に移る人間始めてみたよ」

翌日。二人は今日でアルバイト最後。張り切って開店前の店内掃除を始める。

そんな時、店長がギターを持って出て来る。ティンはそれを見て。

「あれ、店長それどうしたの」

「なに、うちの奥に眠っていた物を引っ張り出したのさ。所謂趣味の産物さ。今日で此処を止めていく人が多いからね、まあ逆に昨日から入った子も居るが……まあ軽い歓迎会と送迎会と言ったところだ。浅美くん、悪いがコーラスをお願いできるかね？　ただ私の演奏に乗って鼻歌でも歌ってくれられるだけで良いから」

「ん、良いけど……」

「すまないね」

浅美は乗り気じゃなさそうに返事すると呼吸を整える。

そして、店長の奏でるギターが響き、浅美が歌った。

「はい、お給料だ」

ティンは店長から直々に給料袋を手渡され、何とも表現し難い感情が湧き上がる。

「ははは、そんなに給料を貰うのが嬉しいのかい？」

「うん！」

「はっはっは、そんな笑顔で返されるとこちらも嬉しいよ。それではまたね、ティンくん shallow くん。またこの街で働きたくなったら何時でも来るといい」

「はいッ！」

「ありがとうございます」

ティンは思いっきり頭を下げ、大して浅美は軽く頭を下げる。
挨拶を終えると二人は踵を返して歩き出す。

「で、何処いこっか？」

「えっと……携帯型おきがえ君って何処に売ってるの？」

「コンビニや雑貨屋だよ。じゃあデパートに行こうよ、丁度夕飯も
買っていくから」

二人はそんなこんなでデパートにたどり着く。と浅美が携帯電話
を取り出す。

「あ、瑞穂さん？ うん、今仕事終わって買い物する所。お給料？
うん、ちゃんと貰ったよ。でね今日は何にする？ うん、分かっ
た」

「瑞穂、何だつて？」

「好きにして良いって。ティンさん、何処に行けば良いか分かる？」

「……さっぱり」

「じゃあ案内してあげるね。こっちだよ」

と、浅美はティンの手を引いて……案内板の前に立った。

「……何を言えば良いの？」

「えーっと、携帯型おきがえ君の売り場はーっと」

「返す事さえないの！？」

浅美は返事する事なくうんうん唸りながら案内板を見つめる。

「日用雑貨売り場。携帯型おきがえ君ならそこ」

と、二人の背後から声がかかる。振り返ってみれば、瑞穂が立っ
ていた。

「あれ、来たの？」

「うん。浅美さんが無駄使いしない様に」

「あれ、さっきの電話で色々言ってた？ 夕飯とか」

ティンは疑問を言葉にする。確かにそうだが。

「ああ、それ。給料日だから好きにして良いって言ったけど、金銭面で好きにして良いとは言っても聞かないだろうからこうして来たの」

「なるほど、そりゃ確実だ」

「えーっ、なんでーっ？」

瑞穂とティンのやり取りに浅美は大いに不満を漏らす。

「じゃ、まずは日用雑貨から行くよ」

「ほーい」

と言う事で三人は移動。

「あつたあつた！これが携帯型おきがえ君かー！」

とティンはスイッチ型の装置が入った袋を手取る。

「他に買いたいものはある？」

浅美はティンの横に立つとそんな事を言った。彼女は言われて考え始め。

「んーそうだ、携帯も買っていこうかな？」

「別に良いけど……携帯持っていないの？」

「うん。あたし遠くに行く事ないから持つ事なくてさ」

「じゃ、行こう。確かこの階に売り場があるから」

と瑞穂が先導……ではなく浅美が先導して携帯売り場へとたどり着く。

「じゃあ私が手続きとかやっておくから、二人は他の欲しいの買ってていいよ。後、この階から動かないでね」

あ、後ティンさんの冒険者ライセンスも貸して。手続きに必要なだから」

そう言つて瑞穂はティンから冒険者ライセンスを受け取ると携帯売り場の受付へと向かう。

「携帯つて手続きが要るの？」

「うん。電話会社とか色々ね。ティンさん、他に欲しい物は？」

「えーっと……あ、おんがく君だ」

ティンは携帯売り場の近くにある携帯型音楽プレイヤーを売っている所に向かう。

「おんがく君欲しいの？」

「うん。音楽聞くの好きだし」

「じゃあ買いなよ。お金はあるよね？」

「え、良いの？」

「うん、自分で稼いだお金があるんでしょ？　それで買いなよ」

「……うん！」

買い物を終えた三人はデパートを出る。

「はいティンさん。携帯」

「あ、ありがとう」

「私と浅美さんの番号が入ってるから、何かあったら遠慮せずにかけて」

そう言ってティンは携帯を受け取った。

初めての対人戦に対するは星の双剣士。（後書き）

ども、やーです。今回もやたら解説ばかりでつまらんと思います。というか皆こう思っているでしょう。「世界総合武器連盟って何!?!」と。

世界総合武器連盟とは通称WW連盟と呼ばれる武器の販売や鑑定などを司る組織です。この世界一の武器マニア集団です。武器の規定などは彼らによって行われています。

世界で一番武器に煩い連中です。武器について語らせたら3時間は軽い連中です。

加入条件？ 武器語り二時間以上。その上で審査員を納得させること。

後、二刀流については結構思い入れがあるので軽く語ってしまいました。引いていいのよ？ マニアの語りとはマジ顔でドン引きするものです。

ちなみにおんがく君はこっちの世界で言うウォークマン的なものです。

それでは次回にでもー。

闘技大会に出てみようか

ティン一行は必要な物を買終え、アカコガネシティから都市間街道へと出た。

と、その時。

「指名手配書？」

浅美が街の出入り口に置いてある掲示板を見る。

「何々？ 歩道暴走族だつて。乗用車とバイクに乗っているって」

「へえ、乗用車なんてあるんだ。表の世界なのに」

オーラウェアを着込んだティンが物珍しそうに返す。さて、ここで表の世界について軽く解説しよう。

この世界は大きく分けて二つある。人の手により完全に開拓され、細部まで地理が判明している東大陸“表の世界”。大陸の十分の六が秘境の地とされている西大陸“裏の世界”だ。

表と言われる大きな理由、それは人々の生活の発展が主に表の世界で行われていった事が大きい。治安が比較的良好、都市間で大きな繋がりがある。

では裏と言われる大きな理由は逆に秘境の地や不明瞭な部分が多く、治安が悪く、廃墟となった街が多いのが大きな理由だ。特に前人未到の土地が多いのが裏の世界たる所以である。

「違うよ、ティンさん。此処“裏の世界”と呼ばれる西大陸だよ」

「え、瑞穂それ本当？ だってこんなに治安が良いし、裏の世界は基本国家が多いんじゃない？」

ティンさんや、君は大陸移動したのを忘れたのかい？

瑞穂は溜息を付きながら。

「街もあるよ、ちゃんと。治安が良いかは知らないけど。でもシェイと付いていて、ちゃんと都市間同盟に加入している様だし。」

それより行こう。街道付近で野宿になるよ」

「あ、うん」

「……ねえ、この写真。写りがすつごく悪いけど、瑞穂さんに似てない？」

瑞穂が街の外に出た時、浅美がそんな事を言い出す。

ティンはどれどれと写真を覗く。

写真の内容は物凄く、酷い。もうぼやけにぼやけ、モザイクがかつていって言うても良い。しかも砂嵐の様にブレも入りまくっている。だが、見えた。特徴のある、猫耳のような前髪が。気のせいにも見えるレベルではあるけど。

「……言われてみれば。でも髪は蒼っぱいよ？」

「うーん、瑞穂さんがあつちのミズホさんを放置するとは思えないし……そっくりさんかな？」

「二人とも、早く行くよ」

「あ、うん」

瑞穂に催促され、二人は街を出る。

その後、掲示板に騎士警察のマークが付いた制服を身に着けた黒く長い髪の女性が歩み寄り。

「あ、あつたあつた。それにしても、いきなりこの手配書を撤去するだなんて……何かあつたのかし……あら？」

女警察は街を出て行く冒険者三人組——つまりティン達。特に瑞穂を見つめる。そしてブレまくりのモザイク手配書をよく見、再度瑞穂の後姿を拝見し。

「……同一人物かしら？ ま、街の外に出られちゃ冒険者である以上どうしようもないけど」

そう言っただけを返す。

二人は街道をとことこと歩く。地図はティンが持っている。

「此処をまっすぐ行って、分かれ道を左に行くとケモスタームシティだって」

「右は？」

聞いたのは瑞穂。彼女が持つべきと思われる地図は何故か取り上げられている。

「ランドリア王国地方だって。暫く森が続くけど、森の中に大きな街があるって」

「じゃあケモスタームシティに行こう。ランドリア王国地方の森の中、化け物が出るって言うし」

「分かった」

そんなこんなで一行は歩く。

数時間後、案の定彼女達は野宿をする事となった。

「ティンさんそっち！」

浅美の声が森の中に響く。ティンは抜剣し、何時も通りに上段へ構える。

そこへ猪が草むらが飛び出し、ティンは踏み込み腰を落とす――刀身を猪の上顎と下顎の間に入れこんで切り捌くッ！

森中に命が消える声が響き、地面に肉塊が落ちた。

「一匹ゲット！ もう一匹狩る？」

ティンは血糊の付いた剣を払う。するとスルリと血糊は剣から落ちて地面を赤く彩る。

続いて草むらから浅美が飛び出し、顔面が真っ二つになった元猪に走り寄ると更に背負った剣を抜いて解体を始める。楽しそうに。

「……うげえ……」

ティンはこのグロ状況に慣れていなかった。血を見る事が少ないこの世界の住民故、元猪の真っ赤な血はちよつと刺激が強い様である。

後から出て来た瑞穂がティンの肩に手を置いて慰める。

「ティンさんティンさん、浅美さんは大体こうだから気にしちゃ駄目だよ」

「そうなの？」

「あの子、野性的だから」

「じゃあ早速鍋にしよう。野菜はどれくらい入れるー？」

声に振り向いてみた。血塗れで笑顔の浅美が立っている。
「グロいよ」

ティンは突っ込んだ。思わず突っ込まざるを得なかった。

浅美は鍋に水を入れ、昆布などで出汁を取って鍋を作っていく。

「ティンさん、テントはるから手伝って」

「はい」

「後、浅美さんはちゃんと身体洗ってね。体中血塗れだよ」

「解体したんだから血塗れで当然だよ？」

「そうじゃねえよ」

瑞穂はこの噛み合わなさに安心を覚える自分の正気を疑わざるをえなかった。

翌日、一行は無事にケモスタームシティにへと辿り着く。

「なんか騒がしいね」

浅美は街の周囲を見渡す。やたらと武器を所持したいかつい連中ががやがやと騒がしくしている。

非常にむさい。若者から筋肉ムツキムキのおっさんまで選り取り見取り。見るよ、瑞穂さんったら恐怖のあまり街に入って来ようとしなげ。

「……瑞穂」

「ほつとくと良いよ。瑞穂さん男の人駄目だから。でも何があるんだろ」

「なんだ、あんたら知らずに来たんか？」

いきなり声がかかった。浅美とティンは声のする方へ首を動かせば、何か全身甲冑に身を包んだ男が。

「今日この街の闘技場でタッグバトルトーナメントの大会をやるんだよ。ケモスタームシティ誕生日記念タッグバトルトーナメント。んで、パートナー探してこんな感じってこった……」

と言って男は二人を注視する。上から下まで嘗め回すように――

え、全身甲冑なのに分るのかって？　だってゆっくり兜が上から下に下がっていくし——見つめ、一言。

「無いな」

「何が？」

ティンはきよとんと返すが、浅美は意味を理解したのかむっとした表情を見せる。

「あいや、こつちの話だ。お前さんらも出るんかい？」

「優勝賞金は幾ら？」

浅美が聞いた。すると男はうーんと唸り。

「さあな……結構高額らしいぜ？　去年は五百万enとかだったらしい。今年もすげえんじやねえかってあちこちでパートナーを吟味してるようだしな。」

つと、もう直ぐエントリーの締め切りだ。んじやあな」

甲冑男はそういつて立ち去ると人込みに紛れ込んだ。恐らくタツグの相手を探し始めたのだろう。

「ティンさん、わたし達も出よう！」

「良いけど、何で？」

「高額賞金！　あの人思いつきり馬鹿にしてた！」

「うん、片方すつこい個人的な意見だね」

浅美は思いつきりなめられたことに腹が立つたらしい。

そこにぬつと瑞穂が顔を出し。

「取りあえず、大会の情報を集めた方が良いね」

「ああ、もう出て来るんだ」

「ほら、行くよ」

瑞穂はティンの言葉を空気の様に流して歩き出す。

そんなこんなで一行は街の案内板を探し、そこから闘技場の場所を確認して向かった。

闘技場入り口。人が死体の肉を漁るカラスの様に闘技場の入り口に詰まっている。皆出場者らしい。

「まだタツグを組む相手を募ってるみたい」

「……何でだろ？」

「一人旅をする人が多いんだね、きっと」

浅美とティンは遠目にそんなことを話してた。瑞穂は近くの木陰でガタガタ震えながら見守っている。

「……ねえ、瑞穂について何時まで無視すればいいんだろうか」

「あー。別にあの集団の中に放り込んで反応見てもいいんだけど……瑞穂さん大暴れであの人達一掃っていう結果しか出ないよ？」

「瑞穂がすつごく震え始めたんだけど……」と言うか無言で嫌々首振る人間始めてみた」

「でもそんなことすると出場停止貰うかもだし」

「それもそっか。じゃあどうするの？」

「一先ず優勝賞金の確認だね。チラシはどこ？」

ぬつと二人の後ろに瑞穂が立っている。表情は至って普通だが足はがくがく震えている。ティンはその根性に呆れるべきか褒めるべきか悩んでいると。

「うーん、情報は無いなあ。何と言うか、前回高額賞金ってことで今回は隠してるっぽいよ」

「もしかして賞金額は今年も凄いかもしれない、と言う意識を植え付けて客寄せをしていると。せこいね。」

まあ大成功してるところを見ると結構向ここの作戦勝ちっぽいけど、試合時間は何時から何時まで？ 今日中ってことは無いよね？」

瑞穂は更に情報収集を行っている浅美に問いかける。当の本人は目を瞑って唸っている。

「え……つと、時間制限付きでラウンド制。ドローは両者失格で制限時間は九十九秒だって。今日中に終わらせるっぽいよ」

「意外とスタンダードだね。取り敢えず浅美さんとティンさんで出なよ。私は無理だから」

「男性恐怖症だから？」

ティンが大人げなく突っ込んだ。少しは遠慮しようぜ。

「そっじゃないよ。タッグバトル制だからだよ」

ティンと浅美ははて、と首を傾げる。瑞穂は呆れながら解説を始める。

「いい？ タッグバトルにおいて重要なのは二人のコンビネーションだよ……っと、まずはエントリーしようか」

「いや、まず瑞穂がダメな理由って？ 後衛って瑞穂だね？」

「ああそれは知ってるんだ。簡単に言っておくとね、重要なのは前衛後衛よりもコンビネーションだから」

瑞穂に言われるがまま、二人は闘技場の入り口に割り込んだ。まあそんなことをすれば当然怒られ……なかった。どうやらタッグパトナー探しに夢中でまだエントリーをしているコンビは少なかった。迷惑。

「で、どうしたの？ 前衛と後衛のコンビが最良だって聞いたけど」「うん。でもね、タッグプレイには二通りあるんだよ。コンビプレイとスイッチプレイがあるんだよ」

「コンビとスイッチ？ 何それ？」

と言う事で今回の瑞穂さんの解説コーナー始まり始まり。

「コンビと言うのは連携、つまりお互いの動きに合わせて攻撃を仕掛けていく攻撃。一般的にタッグバトルの基本戦術はこれだって言われてるけど、大きな問題がある」

「問題？」

「他者の動きに合わせて動くから当然二人のシンクロ率が兎に角要求される。いきなり出会った人とかだと口頭でもろくな動きが出来ないからね。目を合わせるだけで連携攻撃が出来るのが理想であり最善。出来れば一言でどう動けばいいのか分るといい」

とそこで浅美が手を挙げ。

「じゃあわたしと瑞穂さんが一番じゃないの？ ティンさんよりももっと確実だと思うよ？」

「……一つ言っておくよ浅美さん。確かに私達合体技出せるほど付き合い長いしタッグも出来るよ？」

でもね、私と浅美さんはそもそもタッグが出来る？ 自慢じゃな

いけど、人に合わせるなんて私無理だよ？」

本当に自慢じゃないよ。

「……どうしよう、わたしティンさんとコンビできそうも無い」

「いきなりかよ！ 二人ともそんなに特殊なの？」

ティンの言葉に応えて浅美と瑞穂はびつとお互いを指差し。

「この人魔導師の癖に真つ先に殴りに行く！ 魔法は範囲広いの多い癖して近距離から中距離！ 基本蹴る殴るぺしゃんこにする魔導師！」

「基本地上に居ない剣士、でもぶっちゃけ地上のほうが強いしと言うか一人で勝手にやらせておくべき人」

そして二人仲良くさんはい。

「貴方には言われたくない」

お後が宜しい様で。って宜しくは無い、一切ない。

「うん、協調性が無いのは理解した」

「色々待って」

「ティンさんかなり待って」

二人は絶妙なコンビネーションでティンに突っ込んだ。

その後二人が小一時間お互いティンにいかにとつちが協調性に欠けるか語り合ったがティンは話を進ませる事を選んだ。

「で、次は意外と知られてないけど知らずに多くの人が使ってるタッグプレイ、それがスイッチプレイと言われる戦法だよ」

「ところでスイッチって何？」

ティンは拳手して質問を行った。

「簡単に言うと切り替えのこと。一人が攻撃し終わった所にもう一人が攻撃を続けると言う簡単な戦法だよ。リレーだね」

「リレーってバトン渡す奴？」

「そう。走者が手にしたバトンを渡し続ける奴。一人が攻撃して、続ける様にもう一人が攻撃する。」

コンビプレイとは大きく違い、基本的に一対一には変わらないことと誰でもやり易いのが大きなポイントだね」

「なるほど」

とティンが納得していると受付終了のアナウンスが鳴り響く。
見れば殆どの男達がパートナーを選び終えたいらしい。握手してたり作戦を決めてたり中には武器選びをしているコンビまでいる。

「おいあれ」

とティン達に指を指すものが居る。正確には、瑞穂を。

「あれ漆黒の氷姫じゃねえか？」

「あ、マジだ！ 姫だ！」

ティンと浅美が瑞穂に視線を向けると、そこには誰もいなかった。
「つてあれええええええッ！？」

「瑞穂さん逃げたね」

一体いつ消えたと言っのだろうか、まあそんな事よりも試合である。

まあ、なんだ。その、だね。言いたい事は一つ。非常にシンプルイズベスト。これ以上に無いほどシンプルな文章なんだ。たぶん、これだけでオープニングとエンディングをつなげられるほど。一種の禁止技さ。封印されし禁断の最終奥義、使えば発動者は死ぬと言っても過言じゃないほどだ。これから行う事はシンプルゆえに奥深く、そしてそれだけ恐ろしい極意。前置きが長いのはわずかな文字故、おそらくその言葉の意味が、その本当の恐ろしさが伝わり難いと思ったからだ。じゃあ、いい加減引き延ばしも長いし始めよう。その禁断の最終奥義。それは――。

以下省略。

「ねえ、何か凄く突っ込みたいんだけど」

ティンは開会式を終え、自分の試合の番だと言っのに訳のわからない事を言い出す。浅美は「じゃああの人達のお尻にでも剣を突っ

込んでおきなよ」と返す。

そんな雑談をしていると審判がやたらとテンション高そうに。

「試合開始イイッ！」

と叫んだ。と同時にティンは舞う様なステップで前に行く。がッ。おいぬるぽとか言った奴何処だ。

ティンの真横を炸裂音と共に何かが通り過ぎる。絶妙なコントロ―ルでティンの体のすぐ近くを通ったのか、擦れる様な熱い感触である。

ティンは足を止めて振り返る。そこにあつたのは、浅美――両手に拳銃を構えた。

「嘘！」

ティンはテレビで見たドラマで二丁拳銃を使うシーンがあるの思い出す。だが浅美は回転すると自分の真横に向けて発砲。

「はい？」

ティンは彼女が何をしているのか分からなくなった。

浅美はそんな彼女の視線なぞ気にせずに銃を乱射しまくる。踊る様に。あらぬ方向に。当然撃たれた銃弾は闘技場の壁、地面、観客席への結界に阻まれ、弾かれていく。一体彼女は何がしたいのか。

「背を向けるとは余裕じゃねえか！」

その間に男Aが盾を構え小剣を握ってティンに切りかかって来る。ティン的には距離的に背を曝すくらい余裕ではあったが、振り向いた瞬間に男Aは吹っ飛んだ。何かに殴られた様に。

続いて男Bが何か喋りながら投げナイフを構えるが、行き成り撃たれ様に吹き飛んだ。

ティンはいよいよちんぷんかんぷんな状態となる。

そんな彼女を置いて行くように男達は見えない何かに吹き飛ばされる。何に吹き飛ばされているのだろうか？ 賢しい読者諸君なら既に……え、分かるけど理由が分からん？ えーこんくらい余裕でしょー？

まあ答えは、さっき浅美が乱射した銃弾である。ただの銃弾では

なく、風によって制御された銃弾だが。浅美が撃ち込んだ銃弾は既に威力が死に絶え、無駄玉として地面に転がる……筈だった。が、そこで風の魔法。極小の竜巻を起こす事により、死んだ弾丸を再び回転運動を加え、極小の爆風を弾丸の背後に加えることで再び使える弾丸として再利用しているのだ。

結果、ドーム状の結界により、一種の室内となったこのバトルフィールド。この結界を利用して兆弾を生み出し、銃弾による包囲網を展開しているのであるッ！

ちなみに浅美程の実力なら兆弾なんてことせずとも軌道を自由に曲げられる。これは浅美が銃弾は真っ直ぐ飛ぶものと思い込んでから仕方ない。

浅美は煙立つ銃口にふつと息を吹きかけ、ポツケに仕舞うと宣言した。

「おっしまい」

同時、二人の男達の脳天に計十五発の弾丸が仲良く埋め込まれ、意識を放棄する。

「勝者、浅美選手&ティン選手ううッ！」

審判は喧しい歓声さえも凌ぐ声で試合終了の宣言を行う。

闘技大会に出てみようか（後書き）

ふと思う。この作品のいい所って何処だろうと。
まあ迷った時はツッコミどころ満載の描写で逃げる！

迷惑な乱入者

瑞穂は浅美に直ぐ「いきなり全弾乱射するなら銃は禁止」と怒られ、次から剣による攻撃へと変わった。

だがしかし。

「ターゲット、ロック！」

機械の翼と白鳥が持つ様な純白の大翼を背にし、カオス・スパイラルとアル・ヴィクシオンを一つに重ねて切っ先を上空から敵二人へと定める。

同時に二本の剣は真つ白な光を纏い、やがて渦を巻いて暴れ出す。
「いっけえ！ 虚空光天撃ッ！」

暴れ出した渦は破裂する様に飛び出し、一つの光線となって敵二人へと突き刺さり爆発する。

ティンは目の前で起きた爆風に思わず目を覆って、立ち止まる。風が収まるとそこには対戦相手のコンビがのびていた。

「勝者ティンエエエンドウ浅美イイッ！」

と同時に地震が起きたかと思いきや歓声が上がった。

まあ、こんな風には浅美無双状態となるのである。一方的な蹂躪である事には何も変わりがなかった。

次の試合も概ね酷い内容である。

「てあッたあッせいッ！」

ティンが敵コンビの一人を剣戟で攫うと舞っているかのような華麗な動きで切り刻んで行く。コンビに締めには相手を切り飛ばして距離を開け——ダンシングステップで距離を詰めてまた攻撃を始める。何このコンボ。

ティンの剣戟から逃れようと相手も必死でもがいて打点をずらしたり軸をずらしてコンボ抜けを図るも、ティンのダンシングステップで全部元に戻されると言う酷い鬼畜である。

「毅然とッ！」

相手を高く切り上げ、剣を高々とか掲げる。剣は光り輝き、ティンは身を捻って地に向かって落ちて行く相手に向かって肩から突っ込み。

「煌めけええーッ！」

一気に薙ぎ払うッ！

ちなみに浅美は纏めて片付けようとしたが、ティンが先に一人持つて行ったので仕方なくもう一人を空の旅に持ち込んで切り刻むと言う鬼畜行為をしていた。落とさないって素晴らしい。

その後、瑞穂はティンに試合の感想を語る。

「あんな事も出来たんだ。いつもは一撃なのに」

「ん？　んー寧ろあれがあたしのスタイルだよ。一撃で終わらせるの師範代の教えかな？」

ティンはいいた汗を拭きながら答える。服装は街に入った時と打って変わって騎士服だ。

「次で準々決勝だっけ。早いねー」

「本当にね。ぱぱーっと終わるもんだね」

「初見殺しを仕掛けりや普通はそうなるよ、うん」

瑞穂の言っている事は確かに合っている。誰が思うか、試合開始直後に銃弾乱射による弾幕結果、次はビーム系魔法で一掃、その次は二人で相手を一方的に斬り付け続けるなんて事して来ると。思うとしたらそいつは預言者か彼女達の知り合いくらいである。見事過ぎるほどの対処法の無い初見殺しだ。

ちなみに初見殺しと言うのは特殊な拳動等で相手に有効な対処法を見出す前に倒す事。別名分からん殺し。あれだ、『い、いま起こった事をありのまま話すぜ！　相手が動いたと思ったら何も出来ずに負けた』と言うものである。

まあ戻そう。

と言う感じに準々決勝スタートである。さて何秒で終わるのか、何行で終わるのか、そもそも何文字で終了するのか、期待と恐怖が高まる思いではあるが果たしてとか書いてる内にティンがクリティ

カルスラッシュで一撃、浅美が混沌の魔剣で一気に薙ぎ払って終わりました。何だこのチート集団は。誰か止める奴はいないのかよおい。

「まあ、ティンさんは兎も角浅美さんは結構な反則だからねえ。ちよつと前までは火力が絶対的に足りなかったのに混沌の魔剣持つてから変わったなあ。」

どっちにしても相当なイレギュラーが無い限り優勝は軽いね」

と観客席の片隅でこそ観戦してた瑞穂は語った。こそこそしてる理由？ 男だらけだから。

さつて、準決勝。ついにベスト四に進出した彼女達は。

「暁光の輝き、いつけえええーッッ！」

ティンはダンシングステップで一気に間合いを詰めると剣を輝かせながら身を捻って真横に円を描く斬撃を繰り出し、二人の男達を薙ぎ払うッ！

「勝者、ティン＆浅美イイツ！ 強い強い強おおいッ！ 彼女達を止める奴はいないのか！？」

ちよつと視点を変えよう。闘技場の一角、観客席にて。

黒い髪の女が二人、つまらなそうに闘技場の試合を見守っている。片方は黒い髪を肩に掛かるか掛からないくらいまで伸ばしつつ、もみ上げの部分だけを伸ばした感じの髪型に白黒の中華服を着た女。腕と足を組んで座っている

もう片方は黒い髪を腰まで伸ばし、両耳に星型のピアスを付け、黄色のパーカーの下に白いシャツ、黒いスカートに黒いタイツと上半身と下半身の色合いが真逆な女。ちなみに長髪の方はやたらと胸が大きいからか、周囲の男達からの視線をちらちら集めている。

本人はそんな視線を無視しているのか、そもそも気付いていないのか、抱えたポップコーンを食べながら足を組んで座っている。

「止められるさ」

「ん、優子ちゃん随分自信たっぷりだね」

短髪の女——優子と言っらしい。彼女は腕を組みながら吐き捨て

る様に言い放つ。それはつまり、ティン達の連勝記録を止められると言う意味だろうか。

返す長髪女はペロペロと自分の指をなめる。

「あれくらいどうってことはない。程度の低い大会に出て良い気になつてただけだ。だがまあ、楽しめそうではあるな」

「ふーん。じゃあ仮面でも付けて乱入する？」

「安心しろ、そんな真似をすれば瞬く間に捕まるぞ。と言うか、境界をどうする気だ？」

「えーっと、優子ちゃんの家の方で」

「大企業の社長令嬢に出来るのは精々ゲストとして飛び入りするくらいだ……ろくに帰らん娘に、そんな無茶をしてくれる親とは到底思えん」

「じゃあ終わった後に喧嘩売るの？」

長髪女はポップコーンの袋を逆さにして口に流しこもうとする。

「そんな闇撃ちみたいな真似が出来るか。挑むなら後日に堂々と売るさ。ところでエグレイ、お前を切った奴はあの騎士服の女か？」

「そう！ そうなんだよ！ あいつと来たら折角買ったばかりのタイツを真つ二つにしてくれて！ また買いに行く羽目になったんだよ！？ ったく此間の暴漢と良い、最近人の服を壊すのが流行つてのかつつーの！ この前はお気に入りのコートを破かれるし！」

長髪女——エグネイは足を組み変えて不満の声を上げる。どうやら先日ティンと戦った謎の双剣士は彼女らしい。

「お前の魔力管理が悪い。そもそも、魔道防具を破壊されて平気な顔をしている時点で破って下さいと頼んでいる様なものだぞ、露出狂」

「むぐっ」

言われたエグレイは食べてるポップコーンを詰まらせたのか胸を叩き始め、傍に置いてあるコークと書かれたペットボトルを一气飲み始める。

優子は腕を組んだままつまらなそうに立ち上がると踵を返す。

近くにいた男どもがどよとしたのはきつと試合を見ていたからに違いない。ほら、結構白熱してるしさ。決して“巨乳露出狂女”と言う単語に反応した訳ではないと信じたい。

「だっ、誰が露出狂だッ！　って、あれ優子ちゃんもう帰るの？」
「結果は見えた。下見に来た時点では大した無い連中ばかりと思つて見送つたが……まあ参加出来ない以上こんな所に居ても時間の無駄だ」

言うだけ言うたとさつさと観客席から離れて行つた。後に続いてエグレイも立ち上がると追つていく。

そんなこんなで場は既に決勝戦。ティンと浅美は決勝戦の相手と睨み合う。勝利の女神はどちらの微笑むのだろうか、と言うか相手何秒持つんだろうか？　数人もう勝負の行方が見えたのか帰つていく人達も見える。開き直つて何秒で終わるか賭け始める連中まで現れる始末。

「ふむ、あの時の少女達が……貴様らの内誰かを誘うべきだったか、いやもう遅いか」

何と対戦相手は浅美達を不服と申した甲冑男だった。何と言う偶然。

「さあ、今こそ運命の決勝始め――」。
プレッシャーゾーン
「圧力場ツツ！」

闘技場の真上から押しかかる重圧、それに伴う爆風。闘技場の上部に展開されていた結界さえもぶち破り、そいつらはやってきた。

「お、お前らッ！」

幾度となくティンを狙つて来た謎の仮面の男達だ。数は二人。だが、何時もの奴とは仮面が違う。牙とか付いて厨二病度が上がっている。

「玄武か！」

ティンは堂々と腕を組んでいる男を指して叫ぶ。

「如何にも。我こそは四天王が一人、玄武」

「旦那、勝手に自己紹介しちゃうアウトでしょうよ」

と、軽い調子で隣の男が声を上げる。

「んじゃ、俺も自己紹介いつとくか。四天王が一人、白虎。それが、お前に死を与える存在の名だよ、黄昏の神剣士」

「お前、何で此処に!？」

「聞けば、闘技大会と言うのではないか。こつ言うものにはサプライズと言うものが必要であらう？」

玄武は腕を広げる。ティンも周囲に目を移せば、帰ろうとした人々がなんだなんだと元の席に戻っていく。

ちなみにティン達が実際に戦う筈だった相手はさっきの攻撃で吹き飛んで気絶中。

「な、なあぁんとおおおおッ！ いきなりの乱入ううう者あッ！ これは吃驚な中々にイカしたサプライアアアアイズッ！ 一体誰の差し金だぁぁッ!？」

「見たまえ、ギャラリーも好評だ。此処は一つ、我々と踊ってもらおうか」

「お前の死出の旅路を飾るに相応しい剣舞って奴をな」

「勝手にやってろ!」

「いい加減しつこい!」

ティンと浅美は同時に剣を構え、大して男達も拳を構える。

「試合、開始いいッッ!」

審判の声に合わせ、男達とティン達は動く。

「おおつとおッ！ 混沌の双剣士は俺が相手するぜえッ!」

白虎は手を突き出して黒い衝撃波を打ち出して浅美とティンを分けようとし——ティンが、白虎の方へと距離を詰めるッ！

「チッ、まあいい手前如きに俺を倒せるかよ!？」

「油断はするな、その娘はやるぞ」

ティンは一歩踏み込み下段から白虎に斬りかかり。

「はっ、ただ剣を変えただけで何がかわ」

変わるのか、と言い掛けて白虎は地面めがけて衝撃波を地面に打ち込み、距離を取る。

「——ッハ！ あつぶねえなあおい！ こいつ」

だがティンにとつてその程度の距離、上の台詞を言ってる間に詰める事は、余裕。すぐさま肉薄し、再び剣を握り直して下段から振り上げ。

「つつ、的確に俺の急所を打ち込みやがるだ！？」

それでも白虎は衝撃波を生み出して逃げる——直ぐにティンはそれを詰めるが。

続いて玄武と浅美はというと、浅美が音速に近い速度の連続攻撃を繰り出している。

「かったいッ！」

「それこそがこの玄武の少ない特技だッ！」

金属を鈍く響かせて玄武の交差した腕と浅美の黄金の剣が激突するッ！

「随分、軽い剣だ」

「煩いッ！」

浅美は玄武を蹴りつけて距離を取り——スカートのポケットから羽根を取り出し、機械の翼に貼り付ける。

広げられる機械の二翼と純白の大翼。

魔法で生み出される機械は無機物の証明にして、不純物が無い事の証。あらゆる思いも淘汰され、純粹に風のように世界を巡る事だけを詰めた神にも届く天空を馳せる翼。名を——“天空神の鳳翼”と言う。

浅美は白い羽根を撒き散らして敵と対峙する。

「それが、神に愛されし証明か」

右手には女神の騎士剣を、左手に混沌の魔剣を握り締め、駆ける。玄武は光にさえ届き、光さえも凌駕する速さの浅美に先読みで蹴りを仕掛ける——が、直撃の直前で浅美は空間転移でその真後ろへと移動し、斬撃を叩き込んで空へと打ち上げる。

更に追い討ちをかける様に浅美は空へと舞い上がり、攻撃を仕掛け——。

「ぬうんッ！」

四天王の名を持つ者としての誇りゆえか、玄武はそれでも攻撃を仕掛ける。結局、全部浅美の転移魔法で逃げられているけど。

地上でスタイリッシュ鬼ごっこが展開されている中、天空は天空で一方的な蹂躪が始まっている。

「くうッ！ 拳が届かぬとはこれほどに厄介とはッ！」

玄武は一見我武者羅に蹴りと拳を打ちだすが、実際には先読みから来る直感で攻撃を置いてあるだけである。全部空間接続魔法で逃がっているが。

「動きは単調。だが、途中で急に軌道が変わる。一体、何だこれは！？」

浅美はただ無言に空を蹂躪する様に天を駆け、剣を振るう。

その様子を見て誰かが言った、まるで天使の様だと。でも誰かが否定する。それは。

「天使は、あんな風に空を蹂躪する様に飛びはしない。あそこまで行くともう隼とかだよ」

と、観客席の隅でカタカタ震えながら瑞穂が口にする。周囲に男はいないが観客席の中央には男だらけである。

そんな時、地上の方で少し動きが変わった。男が逃げる事を止めティンと向き合う。

白虎は両手を突き出し、力を放つ。

「くらいなあッ！ 双重圧力場ッ！」
デュアルプレッシャー

男を追うティンの左右に巨大な黒い衝撃波が生み出されるッ！

ティンはすぐさま軌道を上に、動くと見せてまだ衝撃波で埋まっていないう真正面から突っ切ったッ！

「ちいいいッ！ だがなあッ！」

ティンの攻撃を受ける直前、白虎は真下に向けて衝撃波を放って真上へと飛ぶ。ティンは剣を振るうも一瞬遅く、掠っただけで剣は空を切る。

「くそッ！」

ティンは悪態づいて上を見た。そこでは浅美と玄武が空中で読み合いによる攻防戦が繰り広げられている。

浅美は暴風の中を音よりも速く光にも届く速度で玄武の周囲を動き回る。この世界に何度も入った彼女だから多少の物はよく見えた。浅美が攻撃を仕掛けようとするとそのナイスなタイミングに蹴りや拳が置かれており、急な方向転換を行っても絶妙な時間差で攻撃の回避が間に合わず、異空間に逃げ込んで出口を変えらるという離れ業で攻撃を当てているが。

「かったい……ッ！」

そう、一撃が軽い。剣の切れ味は悪くはないがそんなに筋力がある訳ではない浅美が片手で振るえるくらいの重さなのだ。幾ら相手の動きが殆ど止まっている状態に見えるからとは言え攻撃が通り難いのなら幾ら攻撃速度が速くてもきつい。

その内浅美の元に白虎が浮き上がって来る。

ブレスチャーゾーン

「圧力場ッ！」

「アカシックレディスト！」

吐き出される衝撃波ッ！ 浅美は迫る衝撃波をかわす事無く黄金の騎士剣で薙ぎ払うが直後に蹴りが背に直撃し、浅美は羽根を撒き散らして落ちていく。

「浅美ッ！」

地上ですつと見てたティンが叫ぶが浅美はすぐに体勢を戻すと大きく翼を羽ばたかせて風を上空二人に叩きつける。

強風を送り込まれた二人は防御するが直ぐに煽られて吹き飛ばされ、二人の周囲には大量の白い羽根が舞っている。

「な、なんだこいつは!？」

「む、気をつけるこれは」

浅美はポケットから銃を取り出すと真上に向けて引き金を引く。

銃声を響かせて銃口より鉛玉が打ち出され、そして——宙に舞う羽根に直撃する。

直後、風の爆風が巻き起こり、連続して風が大爆発を引き起こす

ッ！

「な、何」

「魔力りゅーし。高レベル魔法を発動した時に出る魔力のカス。錬られた魔力が多ければ多いほど撒き散らすりゅーしの数も濃さも凄くなる。」

わたしの場合、この翼を展開した時にあれだけ濃いものが出来る。それを刺激すれば」

「……あなる、と」

ティンは上で尚も断続的に起こり続ける風の爆発を見ている、が。爆発は一気に黒い衝撃波によって弾き飛ばされたッ！

「双剣士いいッッ！ 手前は俺がああッ！」

現れるは白虎ッ！ 白虎の産み出す衝撃波が産み出される強烈な爆風をはじき出して浅美に向かって落ちて来る。

「浅美、あの玄武とか言う奴はあたしがやるから、あんたはあつちの白虎とか言うのを！」

「え、でも」

「いいからッ！」

ティンは言うだけ言う空中に踏み出し、音を立てて空中を登っていく。そんなティンの足元は光り輝いている。

「もう！」

浅美は言う和白虎の方へと向かっていく。

「ほう、いい度胸だ小娘。よほどに死にたいと見える」

「五月蠅いッ！」

ティンは光に踏み込み、玄武に突きを繰り出す。目の前で出された突きはあっさりとかわされ、玄武は空中なのに落ちながらカウンターで拳を打ち出すが。

「ふッ！」

物が、あっさりと斬られる音が響く。ティンが振り下ろされる玄武の左腕を肩口から切り裂いた音だ。

「え」

「ぬうッ！ 肩の部分を切裂いただとッ！？」

ティンは思わず一瞬動きを止めた。本当ならそこから拳をかわして胸辺りを切り裂く筈だった。だが実際の結果はごらん有様、見事に玄武の左腕を切裂く。

「フッ！」

玄武はそれでも空中から落ちつつもティンに右から蹴りを放つがティンはペアで踊る様な動きでそれを避けるとそこから斬撃に繋げるッ！

玄武は空中から落ちているのにティンの攻撃を左の足でガードッ！

ティンは素早く足場を消して自由落下を始め、直ぐにまた足場を作って素早く地面へと降りていく。

「すばしっこいな」

玄武は呟く。空中から勢いを付けてティン目掛けて蹴り付けるもティンは蹴りに対して斬り付けて蹴りを受け流し玄武の体を斬りつけるッ！

「くっ、ずらされた！」

「危うく、右足を取られる所だったぞ」

ティンと玄武は対峙する。白虎と浅美はお互いの硬直状態が続いている。

「まあいいや、今度こそぶった切る！」

「……ティン、と申したか。今の名は」

「え？」

「貴殿のこと、少々侮っていた様だ。その代償が左腕と言うのならやむを得ぬ。だが、それも問題はない。此处で屠ろう」

「やってみる！」

ティンは剣を上段に構えて叫ぶと駆け出し、一気に距離を詰めて剣を振るい、玄武はそれを左脚から放つ蹴りで捌くッ！ 金属音を響かせティンは更に返す刃で更に斬りかかると右足の回し蹴りで剣を弾かれ、更に玄武の拳が飛ぶがティンはバレエの様な動きで背を低くし足元へと剣を振るい、対して玄武は素早く足を浮かせて斬撃

を飛び越してティンがそこに軌道を一気に変えて剣を跳ね上げるッ！
上へと向けられた斬線は宙に浮く玄武を迷い無く切上げた、ガッ
！　ぬるぼ言うなよ？

「ずらされたッ！」

「ぬううッ！」

ティンの斬撃は思いつきずらされたが、それでクリーンヒットしている。だが、彼女のクリティカルスラッシュではなく普通の斬撃となり金属音を不快に響かせるだけ。

「くうッ！　我が鋼の体にこうも傷を負わせるとは」

「違うよ、鋼の体だから傷つきやすいんだ」

玄武の言葉にティンは冷静に返す。

「硬い物は、逆にどうしても斬り込みを入れ易い部分が出る。むやみやたらに頑丈に作った金属より、柔軟な物の方がよっぽど斬り難い」

「ほほう、中々に鋭い指摘だ。剣術のプロらしい意見、痛み入る」

玄武は片腕だけで拳を構え、ティンは剣を上段に構える。

そしてお互いに駆けだし、玄武は左のから蹴りを。ティンは上段から右の腰に剣を置き、斬り交わして位置を交換しそして——玄武の身体に、剣が突き刺さっていた。

「な、にッ……！？」

続いて玄武の真後ろに存在する空間の穴から浅美が這いずり出るように現れるッ！

「だ、旦那あッ！」

浅美と交戦中だった白虎は声を張り上げて浅美の下に向かうも次の瞬間には玄武も浅美も消えていた。

何処へ行った？　いや、答えなんて既に分かり切っている。上、上空、ぶち開けられて修復された結界ギリギリのところ。

「ふっ、双剣士が相手とは。いいだろう、全力で」

浅美は飛行中にふっと消えさると玄武の真後ろから出現すると同時に斬撃を与えては消え去り、突如出現しては斬って消え、出て来

179

「旦那……撤退なんて出来ねえッ！ こいつ等を血祭りに上げ、旦那への手土産にしてくれるッ！」

「五月蠅い！ とつとと斬られる！」

「ティンさん！」

浅美が急旋回を行いつつティンの元へと向かい、ティンは着地と同時に白虎に向けて剣を投げ、白虎はそれを拳で弾く。

ティンは踊る様な足裁きで手ぶらで白虎に向かい。

「はっ、武器も無しにかよ！ 死ねえいッ！」

衝撃波を放とうとした瞬間、ティンはマントを翻す。その瞬間、一瞬眩い光が放たれたッ！

「ぐっ、何だこの光ッ！？」

「つて、え！？」

ティンも吃驚だがそれ以上に食らった白虎が物凄く仰け反っている。それを見て好機と見たティンは素早く宙に浮かぶ剣を掴み取り、白虎の右腕を切り裂くッ！

「て、手前ッ！」

「これでも食らええええッ！」

切裂かれて吹き飛んだ右腕から出来た隙間に、ティンは剣を振るう。対象は一つ、白虎の顔に張り付いた仮面。そこに斬線が走り、仮面に亀裂が入る。

「て、手前ッ！」

「虚空光天撃ッ！」

白虎の真後ろに光の爆発が起き、吹き飛ばされる。後ろから浅美が放った攻撃だ。

そして、ティンが剣を上段に、両手で構え。

「くうらえええええッッ！」

剣が、仮面に突き刺さって白虎の頭を貫く。ピシリと、仮面はより大きな亀裂を刻み、やがて碎けて散った。

「——え」

ティンはその中身を見て驚いた。その中身は、黒かった。黒い物

で埋まっっていて光る双眸が見える。そう、それは――。

「機、械……？」

『自爆機構作動、五秒前。四』

「ッ、ティンさんッ！」

ティンはぼーっと立っていると浅美が抱き付くように押し出す、
がティンは突き刺さった剣を手放さない為に浅美は白虎を蹴り飛ば
して引き抜く。

そこで漸くティンは。

「あ、浅美、あいあいッ」

浅美は言葉を紡ぐ事無くティンを抱えて上空へと動こうとするが
羽ばたこうとした瞬間、浅美の背から羽根が落ちると同時に翼が消
え。

「こんな時に魔力ッ！」

『零』

瞬間、大爆発巻き起こる。浅美は直ぐに右に握り締めたアル・ヴ
イクシヨンに青白い光を纏わせて爆発を薙ぎ払う。

だが、その一瞬前――爆発の炎が浅美の体の半分を包んでいた。

――旦那……わりい、俺もそっちに行くわ。待ってろ、青竜――

「我が主よ」

暗闇の中、誰かが言葉を紡ぐ。

「何故あやつらを行かせたのですか？ 四天王が残り三人、行くな
ら僕も」

「いや、良いんだよ朱雀」

落ち着いた声が闇全体に染みるように響く。

「四天王なんて、幾らでもバージョンアップして作り直せるから。
寧ろゴミを簡単に片付いて楽だろ？」

「……ならば、より僕も」

「いや？ 君が任務を遂行してくればバージョンアップを出さなくても良いんだよ？ 精々僕の為に動いてくれ。どうせ、此処に居る連中は全部……使い捨てのゴミだから」

迷惑な乱入者（後書き）

次回から、ティンのパーティ構成が変わります。

さて次はどんな出会いなのか？ 浅美はこの後どうなるのか？
次回を待て！

月下の二人・夜に舞う剣士

試合が終わった後、闘技場に居たのはティンと浅美だけだった。だが、肝心の浅美はティンの腕の中で気絶している。体の約半分を焼いて。瞬く間に彼女は凍結魔法をかけられ、病院へと転送された。

そして現在、ティンは瑞穂に引つ張られる様に病院へと向かっている。

瑞穂は病院内に入るとすぐさま「結城浅美の友人です」と言つて浅美の現状を問う。病院からは病室に送られたと返される。瑞穂は病室の場所を聞くと即座に踵を返してその部屋へと向かい。

「浅」

「浅美さんッ！」

ティンが病室に駆け込むよりも早く、瑞穂が駆け込んだ。誰かが病室では静かにとか言ったが瑞穂は一切気にしない。いやしろよ。声に気づいて病室の奥に居る浅美が窓から視線を瑞穂に移した。

「病院じゃ静かにしなきゃダメだよ」

結構元気だ。身体中包帯巻いていたり、所々火傷の痕が見えるが本人は結構丈夫だ。

瑞穂は安堵したように床に座り込んだ。

「……あれ、ティンさんは何処？」

浅美の声に導かれる様に瑞穂は周囲を見渡す。確かに手を引いて連れて来た彼女がいなかった。

瑞穂は直ぐに携帯に電話をかけるが、彼女の荷物の中から呼び出し音が響く。瑞穂は荷物を開けるとそこにはティンの携帯と、彼女が貰った初めての給料の残りがあった。

「瑞穂さん、ここ病院」

月明かりが照らす夜。喧しいと思うほど輝く月を背景にティンとはとにかく走っていた。ただ我武者羅に、目的地も無く夜の森を走る。

（あたしのせいだ）

ティンは必死の表情で夜の森をダンシングステップで駆け抜ける。（あたしが、関わったからだ……関わりさえしなければ浅美も、あの街も、全部、全部……！）

足を踏み外し、地面に倒れ込む。

「あたしが、悪いんだ。あたしが……くそお、何が誰かを守りたいだよ……何も守れてないじゃないか、何も！ 何一つ！」

ティンは泣くように叫んだ。それでも前へと歩く。どっちが前か知らないけど、もうあの二人に迷惑かけまいと。

そんな時、夜の森に異物がある事に気がついた。目の前の地面に人影。思わずティンは見上げる。

「気が向いた時に夜道を歩くのは確かに乙な物だ。自分で勧めておいてなんだが」

見上げた先、木の上に真っ黒な人間が立っている。

黒く短い髪とそれに対して胸まで伸びたもみ上げ、黒い服に黒いスカートに黒い手袋に黒いニーハイソックスに黒いマントを身につけ、鳥の頭部を模った仮面を被っている。腰には水晶の様な光を漏らす剣が一本、女は月光に照らされて怪しく光っている。

「誰だ、お前」

「誰でも良いさ。どっちみち、お前を斬る人間とだけ覚えておけばいい」

ティンは、明らかにあいつらとは違うと分かっているのに。それなのに。

（こいつもか）

まるで、自分の邪魔するものは全て敵だとも言いたげに睨む。

（こいつもか、こいつも……ッ！）

ティンは剣を強く握りしめ、上を見据える。

仮面の女はにやりと笑い、腰の剣を引き抜いて片手で構える。

「来い。久しぶりに楽しめそうだ」

言っとティンは駆け出し、仮面剣士は木から下りてティンに斬りかかる。光り輝く二つの剣が激突し、火花を散らす。

ティンは体重の乗った剣を受け止めながらそれを受け流して距離を取り、再び距離を詰める。

仮面剣士は両手で剣を握り締め、ティンの迎撃に移る——が、瞬間ティンはが消え去り。

「そこッ！」

真後ろに向けて剣を振るう。同時に鉄の激突音が夜の森に響き、鬼の様な形相をしたティンが居た。

「うあああああああああああああッッッ！！」

絶叫してティンは更に剣を振るう、振るい続ける。踏み込んで右肩口から、次に左脇腹、今度は右腰、更に頭部に振り下ろす、振るい続けるッ！

それらの斬撃全て、金属音を響かせて仮面剣士は防ぎ続ける。

と、攻撃の途中でふっとティンがまたしても消え去り、仮面消しの真後ろに出現し、背中に向けて剣を振るうも仮面剣士は振り返ると同時に攻撃を受け止めるッ！

響く金属音、腰を落としたティンと、立った状態から剣を振り下ろす二人の剣が鉄の軋む音を立てるも、ティンがその均衡状態を崩して一旦距離を取ったかと思えば剣に光を宿し。

「ライトニングエッジ！」

閃光となって仮面剣士に切りかかるッ！

対して仮面剣士は空を斬る様に剣を振るい——と剣が再び激突するッ！ 飛び散る火花ッ、響く鉄の激突音ッ！ ティンはそれを見て直ぐに下がると今度は木々の中に紛れて消える。森中に響く木々や草花を掻き分け突き進む音。仮面剣士は周囲を見渡し、相手の気配を探る。

「仕方ない、少し本気になってやろう」

仮面剣士は目の部分に左の指を置き、目の部分が光り始める。

「術式起動、見透しの魔眼……ッ！」

ゆっくりと周囲を見渡す。見透しの魔眼とは、光の魔力の浄化の力により視界を遮るもの全てを透過して見通す魔眼だ。更に身体と目を光に近づく為に自分以外に映るモノは全て半分の速さになり、自身の動きは他者からほぼ二倍の速さに見えるのだ。

そう、今彼女にはティンが何処に居るのか、探る。すると見定めるよりも先にティンが森から飛び出すが。

「遅いッ！」

金属音を響かせ、さっきよりも速く重い剣がティンの剣を弾くッ！
空中で踏ん張ることさえ出来ないティンはそのまま剣を握り締めたまま吹き飛ばされるも木を蹴り付けるように復帰し、仮面剣士に尚も斬りかかるッ！

仮面剣士は木の足場にして斬りかかるティンに対してただ冷静に剣を構えて淡々とティンよりも速く斬り捌く。狙うは無防備な左の脇腹ッ！

左の脇腹に剣は直撃し、ティンはその剣を握り締めるとそのまま相手を斬り付けるッ！
が、速度がほぼ二倍に、写る速度が半分に落ちてる攻撃など通りはせず、ほぼ二倍の速度でティンを蹴り付け――ティンの剣が、仮面剣士の上げた脚に直撃する。

「何いッ！？」

「うああああああああああああああッ！」

睨み続けながらティンは確りと踏み込んで脚に突き刺した剣をそのまま切り上げて仮面剣士の胸を経由して左の肩口へと切り裂いていくッ！

「ぐああああああああッ！」

仮面剣士は大きく仰け反った。まるで、心臓の弱い部分を的確に切裂かれたような鋭い痛みが体中を駆け巡るッ！

ティンは仮面剣士の剣を遠くに投げ捨て、更に斬りかかるッ！
右の首筋に、左の脇腹、股下、右脇腹、刺突、蹴り飛ばしてダンシ

ングステップで距離を詰めて右腰から左肩口に右脇腹へ左首筋にと次々に切刻んで行くッ！

止めに頭部にスマツシュ攻撃を叩き込むと仮面剣士はティンを蹴り付けて改めて距離を取り、ふつと影を残して消え去り、怒りの形相を露わにしたままティンは仮面剣士を探す。

「予想以上にやるな」

声に気付いて振向けば仮面剣士が立っている。ティンは剣に魔力を集中させ。

「シャインソードッ！」

踊る様な足捌きで仮面剣士の距離を詰め、光り輝く剣を上から振り下ろすッ！

「話しさえ聞かないか、重症だな。何がお前をそこまで駆り立てる？」

仮面剣士は瞬く間に先程と同じ位置に立つ。つまり、そこは木の上。再び仮面剣士がティンを見下ろす。

ティンは未だに仮面剣士を睨み続ける。

（確か、さっきこいつ何も守れないとか言ってたな。あの大会の決勝戦で油断して仲間でもやられたか？ それで八つ当たりか？ 全く迷惑な……いや、八つ当たりなんてもんじゃないぞ、これは。明確な殺意と憎悪と激怒をこちらへ向けて来る。普通八つ当たりと言うとただのストレス発散の様なもので、どうしても攻撃が適当になる。怒りで我をわすれ、単調な力押しになりがちだ。

だがこれはどうだ？ 明確な敵意を剥き出しにして来るぞ？ まるで、仲間でも殺されたかのようにな）

ティンは眉間に余計に深い皺を刻んでいる。歯を軋ませ、敵を睨み続ける。

「だが、まあ良い。それもこれで終わりだ……本気を見せてやるよ、術式起動」

仮面剣士がすうっと前に腕を伸ばす。それを横に回す。すると光輝く剣が宙に大量展開される。仮面剣士の周囲に展開される剣、剣、

「あたしは……ただ……」

まだ負けたくない、と、項垂れた上半身を支えて地面を踏み締める。
そしてッ！

「なら、いい加減終わらせてやるッ！」

（ただ、大事な人を……守り……）

仮面剣士は尚も踏み込み、ティンに二つの剣を振るう。

「斬華ッ！」

ティンを飲み込むは剣戟の花吹雪、無数の斬撃がティンを更に切り刻み、幾重もの光の剣がティンの身体を突き刺し切裂いて行くッ！
そして、ティンを一度打ち上げ、二つの剣を一つにし。

「天昇おおおッッ！」

それを振り下ろすッ！　がティンも己の握り締めた剣に編み出させる限りの魔力を振り絞り、出来うる限りの光を剣にねじ込みッ！
「オオオオラアアアアアブレードオオオオオッッ！」

眩いほどのオーラを纏った剣を振り下ろし、月夜に二つの光が木々を揺らすほどの衝撃波を産み出すッ！

目も眩みそうになるほどの凄まじい光の激突。それは輝く様な音を撒き散らし、光の粒子を辺りにばら撒き、夜を昼間の様な明るさへと染め上げていくッ！

そして――双方の剣はずれ、見事にお互いの身体を直撃するッ！
弾ける光の斬線、切り口か噴き出る光の魔力。

仮面剣士は肩膝を付き、ティンは傷口を抑えながらもふらふらと前へと歩く。

「くっ、中々に、やるじゃないか。おい、名前を……もういない。
せっかちなやつめ」

ティンはぼろぼろで未だに輝く剣を握り締めたまま歩き続ける。
息も絶え絶えで、今にも倒れそうなあ、倒れた。

地面に口付ける様にティンは倒れこみ、尚も息を吐き続ける。朦

朧とした意識の中地を叩く足音だけが聞こえた。

「じい、これを回収なさい。ええ、国内で野垂れ死なれては面倒ですわ」

明るい光が瞼を刺激する。そんな眩い光に刺激され、ティンは目を覚ました。

目を開けると、天井の中に天井があると言う不思議な空間。ホテルのベッドの様にふかふかな……いやそれよりも尚ふわふわで非常に居心地の悪さと安心感を与えるベッドの上に居る。

「お目覚めでございますか？」

と、声をかけられたので身体を起こすと紳士服を着た初老の男が服を片手に持っている。どこかで見た服、それは。

「失礼ながら、貴方様の服装を脱がせて頂きました。ついでに汚れを洗い落とし、アイロンをかけさせてもらいました。このじいめのささやかなサービスと言うものでございます」

ティンの騎士服だった。よく見てみれば自分の着ている服はやたらとフリルの付いた高級そうな寝巻きだったのだから更に吃驚。

「え、あの」

「主人達が食堂にてお待ちです。お着替えになられた後にいらしてください。食堂への道案内はドアの外で待機しているメイドにお尋ね下さい。後は彼女達のご案内するでしょう。」

それでは失礼させていただきます。ああそれと剣は城主がお預かりになっていますのでご了承の程を」

言うだけ言うと男は部屋から礼儀正しく、音もなく退室する。ティンはベッドから出て漸くそれが噂に聞く天蓋付きのベッドだと知ったのだった。

月下の二人・夜に舞う剣士（後書き）

今日はこの位で。文字数少ないけど戦闘だけだから少ないのさ。
んじゃあね！。

かつて呪われた国

ティンは老紳士に言われたとおり、持ってきた騎士服を着終え、その瞬間誰かが部屋に入ってきた音が響く。

見れば外に待機してたであろうメイドが部屋に入ってきた。そして有無も言わず「失礼します」とだけ言いつとティンを囲み。

「え、ちょ、何!？」

ティンを抑えるとその髪にスプレーで水をかけ、髪を梳き始める。行き成りの事でティンも驚いて唖然と自分を身体を弄られて行く。気が付くと寝癖やらで何やらで荒れに荒れていた金髪はあつと言う間に黄金の如くの輝きを産み出す。

ティンが戸惑っている間にメイドたちはささーっと消えてしまった。ティンはハテナマークを撒き散らして外を出ると別のメイドが待ち構えており。

「こちらでございます」

と言われるがまま案内される。廊下の内容は簡単に言うと洋風の城内だ。まさしく、こういう場所にこそ今ティンが着ている騎士服が合うのであろう。

「食事は如何されますか？」

「肉!」

ティンは慌てて口をつむぐ。何時ものノリでつい自分の好みを口にしてしまい、周囲を見渡して怒られるのではないかとおろおろするが。

「となると肉料理なのは洋風でございますね。かしこまりました」と前のメイドは静かに返す。と、そんな風に話してると。

「こちらが食堂になります」

言われるがままにティンは食堂の中へと入る。

中は洋風の豪華な王城の食堂と言う感じである。長いテーブルにかけられた長くて真っ白なテーブルクロス、天井にはシャンデリア

などの装飾もされており、ティンにとってはテレビの中でしか見た事がない光景が広がっている。そして、その中に居たのはさっきの老紳士に赤い髪の子供、そして金髪で長い髪の子と同じく金髪で短い髪の子。そして短髪の子が。

「とつとと座れよ」

言うのとトーストを齧る。長い金髪の子は無言のまま食事続ける。長い金髪、と言っても浅美ではない。浅美が可憐な野に咲く花ならこっちは丁寧に育てられた美しい花だ。同じ金髪ロングでも此処まで違ふと少し吃驚だ。

ティンは男性使用人が静かに椅子を引いたのでそこに座り込む。すると目の前に焼かれたトーストとベーコンエッグとレタスが盛られた皿がティンの目の前に出される。

その隣にはナイフとフォーク。ティンはそれを見て「うう……」

と唸った。理由は一つ、一話を読むのだ。そう、ティンはテーブルマナーを教わった事がない。ナイフとフォークを出されてもどうしようもない。

「何だお前、ナイフとフォークを使った事ないのか？　おい」

「はい」

とティンの後ろから両の手が出て来てティンの手を掴む。後ろを見れば先程まで金髪ショートの子の後ろに立っていた赤い髪の子がいつの間にかそこに居る。そこでやっと金髪ショートの子の後ろで待機していた赤髪の子が消えている事に気がついた。

と、驚くティンをスルーし。

「フォークとナイフの持ち方はこうでございます」

と、ティンにその持ち方を手を取って教えて行く。

「ベーコンエッグなどの切り方はこう」

言いながら今度は使い方の指導もしていく。

ティンも彼女に導かれる様に何とかナイフとフォークを使って食事をしていく。

「そっぴいやお前、肉食いたいんだっただか？」

と金髪ショートはコーヒーを啜りつつ指を鳴らす。すると男性使用人が無音で現れ。

「こいつにハムステーキを食わせてやれ」

「かしこまりました」

「え、良いの？」

ティンはやっとの事トーストにベーコンエッグを乗せると顔を上げる。

「別にいいさ。私は喧しいのは嫌いだが退屈も嫌いだな。来る者拒まず、去る者追わず、客人には最大限にして最低限の持て成しを、つてな。」

「つーことだ、気にせず喰えよ。自己紹介はその後だ」

「はあ……」

言つと金髪ショートはコップを置くと別にトーストを持ち、ビンの蓋を開けてトーストに塗りたくり、それを齧った。

ティンもベーコンエッグの乗ったトーストを齧ろうとすると金髪ロングが。

「野菜も食べなさい」

と言つて来る。ティンは言われるがままレタスを載せ、ついでにケチャップもぶちまけて齧った。口に広がるベーコンエッグとレタスとケチャップの味わいにトーストの食感。朝食としては上出来である。

そして静かに音を立ててティンの目の前に分厚いハムステーキが盛られた皿が出される。ティンは手に持っていたトーストを元の皿の上に置くとハムステーキの方を切り取り、口に運んだ。丁度よい肉厚に、焼き上げられたハムの味わいが実に香ばしい。

「お代わり欲しかったら言えよ、そんなにいらねえでも用意出来るから」

そう言つと金髪ショートの方はトーストの一片を口の中へと放り込んだ。ティンは半分くらい聞き流して覚えたばかりのナイフとフォークを駆使してハムステーキを食べている。ついでに思い出し

た様にトーストの方も食べる食べる。

と、ティンがトーストも食べ終わり、ハムステーキの最後の一欠片も食べ終わると。

「じゃ、始めるか」

と金髪ショートが切り出す。

「私はエーヴィア・デルレオン。この国、イヴァーライル王国の女王だ。ついでに言うと、このデルレオン公国の公爵城の城主でもある。デルレオン公爵っつーのは私の父、つまり娘の私は立場上公女……で良いのか？」

「いえ、女王陛下は立派な公爵です。戴冠式の前にきちんとその処理も行っています」

金髪ショート——まあこの書き方をしているのは地の文が殺されそうなので書き方を変更し——エーヴィアは隣金髪ロングに聞き直す。とそっちはそっちで素っ気無い返答をする。

対して女王は答えに満足すると。

「そういうこった。この城は生憎と王城じゃない。が、幼少から住み慣れた城でな。基本は此处で寝泊まりしている。イヴァーライル本国王城はまだ改装中らしいしな」

「は、はあ」

「まあ、噂は聞いてると思うがうちの国はイヴァーライル本国丸ごと呪われていた事があってな、そのおかげで今この国は相当に寂れている。呪い自体は数年前に浄化されたから良いんだが……まあ、どうでもいいか。」

まあそんな訳で、私がこの国のトップなわけだが……お前が此处に着た経緯はそこに居る女」

とエーヴィアが隣に座る金髪ロングの女を指さす。すると彼女は静かに席を立ち。

「はじめまして、ラルシア・ノルメシアでございます。この国で客員剣士兼女王の補佐をさせていただいております。国境付近で倒れていた貴方を此处まで連れ込み、寝床へと運ばせて頂きました」

「あ、ありがとうございます」

と、ラルシアは見る人を癒すとても柔らかい笑顔で言った。その表情からはとても優しいそうで人当たりが良さそうな人柄を窺わせる。そんな風に思わせるような笑顔であった。

そんな彼女を見てティンは頭を下げてお礼を言った。対して彼女は笑顔を崩さず「いえいえ、大した事なんてしていませんわ」と優しく返す。

（ラルシアさん、すごくいい人みたい。世の中、浅美みたいな人って結構いるんだ……）

「そんな訳で、一応部外者ってこともあるし武器は私が預かっていい。暫くなら無料で宿も貸すし飯も食わせてやるよ」

「え、じゃああたし何かするんですか？」

ティンは不安げにエーヴィアに質問をする。

「あー特に無いな。あるにしても私の暇つぶしの相手になってくれりゃそれで良いよ。んじゃ、説明は以上。城内は好きに探索して良いぞ。ただし、壊すなよ」

エーヴィアはそう言うと言つと席を立ち、食堂を去る。続いてラルシアも食堂を立ち去って行くのだった。

そしてティンと一部の使用人だけが残される。ティンは目の前の皿は空になったが、まだ残されたままである。さて、これからどうするかとティンは腕を組んだ考え始めた。

「んー……と……あ、ハムステーキお代わり！」

考えた結果、ティンは取りあえず食べる事にした。ほら、好きに食って良いって言っし。

ティンは食事を終わると食堂を出る。首を動かし、周囲の様子を観察する。そこは王城内の豪華な廊下、という感じだ。流石に国王が住んでいるだけあり甲冑の置物が廊下の端に並んでいるのを見ると色々と壮観である。

「ほええ……これ本物かな？」

と、その内の近くに歩み寄る。よくみれば埃が被ってるのか、色が少しくすんでいた。

ティンは触っても大丈夫かなーと指を近づけたりでも駄目だよなーと指を離してしていると。

「触っても平気ですよ」

と後ろから声がかかる。吃驚して振り返れば大理石製の廊下の床を磨くメイドの姿がティンの目に映る。それではと触ろうとした瞬間。

「失礼します！」

と押し退けられる。次の瞬間には三人のメイドが甲冑にスプレーを吹き付け、一気に磨いていく。洗剤で磨くと次はバケツから雑巾を取り出し水拭きをしていく。最後にメイド達のポケットに突っ込んである雑巾で空拭き。そして。

「それでは！」

と絶妙なコンビネーションで次の甲冑を磨いていく。ティンは立ち上がると場所を移す。

廊下を適当に歩くと今度は中庭に出た。案内板には“第二中庭”と書かれている。そこでは兵士達が声をあげて素振りをしていた。ティンはそれを見て。

（せいが出るなー）

と、思っていたりしながら中庭を通る。

ティンは再び適当に廊下を歩き、絵画が並んだ廊下、図書室、牢屋、武器庫、兵士の寄宿舎、客室に浴場などなど。様々な場所を渡って歩いて行く。

やがて大きな椅子が三つも並んでいるやけに広い部屋へと辿り着く。所謂、玉座の間だ。

「ほえー、ひつろー……」

とティンは感想を述べる。大きな三つの椅子もそうだが、奥の巨大な扉も凄い。あれは城門であろうか？

とか思っていたら今度はとんでもない場面に出くわした。と言うか、出会った。今、ティンの目に、いや正確には部屋の中央に一人のメイドがいる。いや、今玉座の間を掃除中なのかメイドやら男性使用人やらが沢山いるが。しかしだからか、中央に立つ彼女が否応に目立つ。そう、それは先程ティンにナイフとフォークの使い方を手を取って教えた赤い髪のメイドだ。今、彼女はエアカスタネットでもやる様に手を叩き、大きな声で。

「さあ早く動いた動いた！ テキパキ！ テキパキやるんだよ！」と周囲の使用人達に声を送る。彼らは答える事なく絨毯の埃を取り除き、或いは巻くつてその下を磨き、壁を磨いていく。

しかしその様子にティンは呆気にとられる。間違えようもなく彼女は食堂で自分にナイフとフォークの使い方を取り指導したメイドなのであるが、あの時とはあまりにも別人過ぎた。清楚な感じも静かな雰囲気もそこにはなく、何処か気品にあふれ、凜としたメイドが立っている。

「あたしらの仕事はやって無くならない、増えるだけ！ 代わりは幾らでも居るんだから余計なフォローはいらない！ 見落としたら後の誰かがやると思ってた次の仕事に移る！」

ほらそこ！ いつまでも同じ所でもたつかない！ はいそこ！人のフォローより自分の仕事！ ああもうそこ！ 手際が悪い、貸せ！」

と叫んでメイドの一人からモップを奪い取ると素早く床を擦りながら前へと進み、身を返して磨きながら戻って来るとモップを元使ってたメイドに押し付け。

「もつと腰を入れて磨け！」

「は、はいっ！」

「ったく……こらそこ！ まだ掃いてないだろうが！ しつかり確認しろ！ ん、おや御客人ではないですか」

と、そこで彼女はティンに気付いた。そこで周囲でせわしなく働く人々を放置して彼女の元へと歩み寄る。

「すみません。今日は大掃除の日でして、見ての通り大忙しなんですよ。あ、あたしはこの城のメイド長を務めているルジュ・レッドールヴと申します」

とはきはき喋る割には礼儀正しい仕草でティンにお辞儀をする。

「此処つて玉座の間、ですか？」

「はい、そうですよ。暫く掃除してなかったのでこの期に一気に大掃除してしまおうと。ところで玉座の間にどんな御用入りで？ あ、玉座をご見学します？」

「え、良いの？」

「構いませんよ。皆大掃除中だし、流石にあたし無しで動けないような連中は此処には置いてませんし」

と言うとティンを玉座まで案内を始める。と言ってもすぐそこにあるので案内も何もないのだが。

遠目に見ても迫力満点の玉座が近付くと更に迫力が増す。正に王が座るに相応しい椅子とも呼べるだろう。

「これが、玉座……」

「座つてみつか？」

ティンとルジュは揃つて「はいな？」と声のする方へと視線を動かすと、そこにはこの城の城主にして女王陛下であるエーヴィアが立っていた。ルジュは慌てて頭を下げ。

「い、いつ間においでになられたんですか!？」

「今さっき。で、どうするティン。座つてみるか？」

「えと、良いん、ですか？ あれ、あたしの名前言つたっけ？」

「ああ、鞘に付いてたぞ。ティンつて。後、別に良いよ。座られた瞬間制圧ーとかそんな事が起きるわけないし」

と言われ、ティンは恐る恐る玉座に腰を落とす。そこから見えるのは、とてもいい眺めであった。

「お、お、おおッ！」

と思わず叫びだしてしまう。眼下で尚も働き続けるメイド達。一際高い所に置かれているその玉座は、部屋を一望出来る為色々と良

い眺めである。

ティンは堪能し終わると腰を上げて立ち上がる。

「もう良いのか？」

とティンの返事を聞く前にエーヴィアは玉座に座り込んだ。その様は非常に似合っていると言うか、しつくり来ると言うか、長い間そこで過ごしたとさえ言えるようだ。

「しっかし、この城此処まで改装したが良いのかねえ」

「良いと思いますよ、陛下。陛下がお住みになられているのですから、此処が王城でも良いくらいです」

「……まさか、母さんはそれを見越して公爵城に玉座を置けなんて事を言い出したのか？」

等とティンにはちんぷんかんぷんな会話が展開される。何だか空気化してたティンは部屋から出て行った。

次の廊下を進むと今度は“第一中庭”と書かれたプレートの中庭に出る。中央には簡単な教会堂のような物が建っている。その側に小さな部屋があった。

（中庭の管理人小屋かな？）

ティンはそんなことを思いながら部屋に近づく。扉のプレートに『ラルシアの仕事部屋』と書かれていた。

ラルシア。記憶が合っていればさっき紹介された女性だ。ティンをこの城まで運んだ人。ならばきちんと挨拶しようとティンはドアノブに手をかけ、ドアを開けようと。

「ノー！」

と、声が響く。続いて。

「ツク！」

更に声が響き。

「を！」

間を置かずに。

「し！」

おまけに。

「ろ！」

と、凜とした声が間を置かずに響き渡る。声から察するに、発言者は間違えようも無くラルシア・ノルメリア本人である。言葉をつなげると。

（ノクをしる？ いや、ノックをしる？ んー突然入ったから驚いたのかな？）

と言う事でティンは改めてノックをする。すると暫くして「どうぞ」と言う声が聞こえたので中に入ってみる。

「お邪魔しまーす……」

部屋の様子はさながら事務室である。置かれた大きな机、そこに築かれた紙の塔、その中央にラルシアが携帯電話を弄りながら椅子にふんぞり返るように座っている。

「ぼさつとするな、その貧乏人」

「……え？」

ティンは我が耳を疑った。今この女は何と。

「とつとと座れと言っている、社会のゴミ」

地の文さえまともに書かせないほどの速さで彼女はティンに座る様に促す。ちなみにこの発言はずっと携帯電話を弄りながら行っている。

「……あのう」

「何ですか冒険者気取りのゴミ虫が。人が座れと言っているのが聞けないのですか？ それともその耳は飾りかしら？ それなりに良い耳鼻科を紹介してあげましょうか？ 尤も、貧乏人風情に診察を受けられるような場所ではありませんがね。ああ、勿論私は^{わたくし}びた一文払う気は無いので。紹介しただけでも感謝して欲しいくらいですわ」

ティンはあまりの罵倒の掃射に驚くしかなかった。と言うか誰だ、こいつを優しそうとか人当たりが良さそうとか言ったのは。

とラルシアは携帯を閉じて音も無く机の上に放り投げる。

「……えーと、貴方どちら様……？」

「ラルシア・ノルメイアお嬢様ですが、何か？ 本気で耳が悪いの？ それとも記憶障害？ 脳外科でも紹介しましょうか？ ああ、でも貴方みたいな貧乏人風情に払える訳ありませんわね」

ティンはいよいよ頭が痛くなる。思わず「あれーこんな人だっけー」とかぼやいてしまう。すると。

「ああ、さっきのあれ？ あんなの演技に決まっているでしょう？ 世の中、あんな気の良い人が居る訳が無いでしょう？ 貴方本当に頭大丈夫？ 脳みそはある？ 障害持ちかしら？」

お嬢様、流石に暴言が過ぎます。書く身になって下さいませ等と言う作者の願いなど無視して暴言の限りを飛ばすお嬢様。ティンさん、いい加減切れても良いと思うよ？ 当の本人はあまりの鮮やかな暴言の嵐に呆氣に取られて呆然と立っていた。

ちなみにそんな気の良い人は探せば居ると言う事をティンは既に知っているのです。

「え、つと……その……あ、あたしを此処に連れて来てくれてどうも」

「ああ、そのこと。別に気にせずとも良いわ？ 国内で身元不明のたれ死にが outbreaks 変な噂が立つくらいならただ飯の方が遙かに安いと言うものですわ。こちらにも見殺しにするよりも遙かに良いメリットがあっただけの話。それに女王陛下も暇潰しの相手を探していたようですしね。

それよりもお前は何時まで突っ立っているの。とつと座れこの社会の屑」

言われてティンはやっと部屋に足を踏み入れ、適当な椅子に腰を下ろした。

「それと、あたしはティンって言う名前があるんだけど」

「へえ、苗字は？」

「……はい？」

「ですから、苗字。家の名はと聞いているのです」

ラルシアは暇そうに自分の髪を弄りながら書類を読み進めて行く。

「無いよ。あたし孤児だし。孤児院の名前が苗字かな?」

「はっ、親無し。親無しの貧乏と来ましたか。どうせ金が無くなった無責任な親に捨てられたのでしょうか?」

ティンは思わず押し黙る。確かに自分を救う為とは言えお金を全て失って自分を捨てた事実には変わりはない。

（確かにその通りだし、別に親を擁護する気も無いけど……何かなあ）

「ほら黙った。事実なのでしょう、親無し」

「いや、うんそうだけどさ……そう言うのを好き好んで言うってあんな結構性格悪いね」

ティンは苦い顔をしてラルシアに言葉を投げてみる。対して彼女は不機嫌そうに。

「はあ? 言わせてる貴方が悪いのでしょうか? 割り込みもせず聞き手に徹し人に問うだけ、ならば何を言われても平謝りするか黙り込むのが貴方の仕事。文句があるのなら言っただけで御覧なさい」

「いや矛盾してない、それ」

「言い通せば矛盾も正義。それがこの世の理と言うもの。貴方がそれを指摘するのはそれこそ矛盾と言うものですわ」

と、ティンからすると訳の分らん理論を展開される。この部屋に入ったこと自体を既に後悔しているが此処で引き下がれば余計に罵倒されてしまうのだろうと思うとそれも嫌になると言うか億劫だとティンは思い、仕方なくも付き合うこと選んだ。

「まあいいよ。別にあたしが孤児なのは親が捨てたせいだしね」

「あら、両親を憎んでいるのかしら?」

「べつに。どうでもいいよ。あたしは孤児院で楽しく暮らしてたし……今はちょっと離れてるけど、この境遇だって嫌だって訳でもないし」

「親が如何でも良いと言うことには同意ね。残念ではあるけど、私わたくしはその意見について貴方と共感出来ると言わざるを得ない」

「そうそう、あたしとしては寧ろ捨ててくれたから今ラルシアと話

せてるってことでしょ？　なら寧ろ感謝さえ出来るけど……面倒も置いてってくれたしなあ」

ティンは言って溜息をつく。でも、少し思うことがあった。

（でも、確かに喜べることもかも。おかげで色々整理付いたかもしれないし……ラルシアに会えて良かったかも）

「……は、はあ？　気つ色悪いこと言わないで下さいます？　全く、これだから能天気の貧乏人は。頭に花壇でも作っているんですか？　ただでさえ少ないお金をそんな事に使ってどうするの、この貧乏人が」

「でもこの口の悪さは無いなあ……」

ティンはまた溜息を付いた。と、隣の部屋からノックが聞こえ「入りなさい」とラルシアが言つと今朝ティンを起こした老紳士がお盆を片手にそこにいた。

「お茶をお持ちいたしました」

「ええ、ありがとう」

と、ラルシアが返事する間に老紳士はラルシアの前に紅茶を置いた。そしてティンの方に向き直ると頭を垂れ。

「自己紹介が遅くなって申し訳ございません。わたくしはノルメイア家の執事を勤めているデュークと言つものでございます。お嬢様が生まれた頃よりお側でお仕えさせていただいております。

さて、ティン様は紅茶で宜しいでしょうか？　お頼みとあらばコ―ヒに緑茶に烏龍茶もご用意出来てございます」

「え、えつと、紅茶で」

「かしこまりました」

と言うとデュークはティンの前に小さなテーブルを用意するとカップに紅茶を注ぐ。

「砂糖とミルクもございますが」

「えと、その……紅茶初めてで」

「左様でございましたか。では角砂糖とミルクの詰まった容器を置いておきますので申し訳ありませんがティン様のお好みに合わせて

お飲み下さい」

「は、はい」

とティンのテーブルに角砂糖とミルクの容器が詰まった皿が置かれる。一先ずティンはよく分らないのでそのまま紅茶を飲むことにした。

「あ、美味し」

「それは良かったです。茶菓子にと思い、ホットケーキも焼いて来ました」

「エクセレント。上出来だわ」

とラルシアが紅茶を啜りながら自分の執事を褒めた。デュークはと言うと無言で頭を下げると別室に向かい、直ぐにホットケーキを持ってくる。

そしてティンと顔を合わせ。

「申し訳ございません。お嬢様は少々口が悪いかとは思いますが、何分最近の仕事が忙しく、軽い口を叩く友人が不足していたのでございます。お嬢様は従来の性格上、何と言いますか、軽く言い合えるご友人を所望しているのです」

（いやいや、少しじゃない少しじゃ）

ティンはデュークの台詞に心で突っ込んだ。柔らかい笑顔で諭されるように言われてはティンも流石に突っ込む気が失せる。

彼はそんなティンの心情を知っているのかいないのか、そのまま続けていく。

「しかし、それはお嬢様自身が見つけたがつており、我々従者にそれを求めてもないし、我々が見繕ってもお嬢様はお喜びにはなられません。ですが、出来ればお嬢様のお言葉を軽く流してお付き合いたいと、わたくしは思っておるのです」

「は、はあ……あの、本人目の前にいるけど、言って良いの？」

「構いませんよ。否定もせず、肯定もしないということはお嬢様は肯定しているのでございます。ですからお気にせず」

「無駄口を叩く前にする事があるでしょう。ホットケーキが冷めて

はエクセレントと呼べなくてよ」

デュークは無言のままティンのテーブルの前にホットケーキを置くとそれを綺麗に切り取って小皿に分ける。

「バターとシロップはいかがなさいますか？」

「バターは何時もどおりでシロップ多めに。少し甘いのが取りたいわ」

「ではその様に。ティン様、バターとシロップはいかがなさいますか？」

「え、ええつと……普通で」

「かしこまりました」

そう言つとデュークは二つの更に盛られた湯気の立つホットケーキにバターを乗せ、シロップをかけて行く。

「さあどうぞ、熱いのでお気をつけ下さい」

言われてティンは取りあえずホットケーキをさつき教わつた様にフォークで抑え、ナイフで切り取り、口に運ぶ。ちよつと熱かったが、紅茶で慣れていたので慌てるほどではない。

「ん、美味しい！」

「ええ、そうね。何時もながら見事な味ですわ」

とラルシアは紅茶を口に運ぶ。ティンもちよつとシロップが甘過ぎたかな？ と思つて紅茶を口に啜つてみるとあら不思議。口に残つた脂っこい甘さが流されていったではないか。

「おお、これ紅茶に合う！ 合うよ！」

「本当に。茶菓子とはよく言つたもの。甘いお菓子に甘さの無いお茶はまさに黄金のコンビね。パーフェクトよ、じい。何時もながら美味しい茶菓子をどうも」

「いえいえ。お褒めに預かり、光栄でございます」

と二人がお茶を楽しんでいるとそれをぶち壊すように携帯が鳴り響き、ラルシアはパツとそれを取つて。

「はい、ラルシア・ノルメイアでございます！ はい、はい！ ええ、何時もお世話になっていきます。いえいえとんでもない！ 私こ

そお世話になりっぱなしで。はい、はい、はい勿論！ あれでござ
いますね？ かしこまりました、直ぐに部下に資料をお送りします
ので、はいそれでは」

と、ラルシアはこの間、先程ティンを騙し切ったような素晴らし
い笑顔で言い切った。見ていてさっきの調子を見れば気持ちが悪い
ほどである。

さしものティンを啞然とそれを見ている。ラルシアは電話を切る
と音も立てずに携帯を机の上に滑らせる。

「ふう、こっちは昼前の茶を楽しんでると言うのに、気の利かない
連中だこと」

といって再び椅子に深く座り込む。とまた携帯がなり始め。

「はいもしもし、ラルシア・ノルメシアでございます！ はい、は
い！ ええ、こちらこそ何時もお世話に、え、今からで？ 分りま
した。それでは少々お待ちを」

とラルシアは電話を切ると舌を打った。

「野郎……いきなり無粋な真似を」

「直接交渉でございますか？」

「ええ。じい、直ぐに傭兵を見立てて。私は準備をして来ます」

「しかし、今からですと時間が」

「多少遅らせても平気ですわ、あんな奴ら……」

と言い掛けてラルシアはホットケーキと紅茶を堪能しているティ
ンを注視する。

「ねえ、貴方。確か剣を持ってたわね」

「ん、そうだけど」

「腕に覚えは？」

「えっと……そこそこ？」

「じい」

「かしこまりました」

と、デュークは言うと同時に何処から取り出したのか、青白い剣
を抱えている。

「外に出なさい。そして、剣を振って見なさい」

「え、なんで」

「つべこべ言わずに出ろこの貧乏人ッ！」

と行き成り早口で捲し立て、ティンを部屋に追い出してデュークが持っていた剣——シルバーナイトソードを押し付けるように渡す。ティンは行き成りのことでよく分からず、渡された剣を引き抜くと——思わずよろけてしまった。

「貴方本当に剣士！？」

「だ、だってこの剣、何時も使ってるのよりちょっと重いんだもん！」

そう言うとは何時もは上段に構える剣を下段に構える。そして、試しに切下げ、切り上げ、薙ぎ払って切り返しにスマッシュッ！と、剣を適当に振り回すと重さに慣れたのかくるくると回して鞘に収めた。

「よし、ティン付いて来なさい！」

「へ、え、なに、どう言うこと！？」

「仕事ですわ。その剣は仕事の報酬の一つとして今は貸してやる。ほらッ！」

とラルシアは素早く自分の財布から一万en札を二枚取り出してティンに押し付ける。

「前金よ。確りと働きなさい」

「え、え、でもさっきじょー王様は働かなくて良いって」

「ではホットケーキと紅茶の分よ。後、私のことは以後お嬢様、及びラルシアお嬢様と呼びなさい」

「な、何で」

「返事は“はい、分りました”復唱ッ！」

とラルシアは少しドスの聞いた声で叫び、ティンは思わず。

「は、はい、わかりました」

「もっとはっきり言えッ！」

とラルシアが怒鳴るのでティンはやけくそ気味に。

「はい、分りました！」

「後仕事中の私語を一切禁じます。質問の一切も禁じます。私の許可無く喋る事を一切禁じます。返事は！？」

「はい、分りました」

「宜しい。後剣は何時でも抜けるようになさい。寧ろ常時抜けるようにして置きなさい。何か変だと思ったら直ぐに剣を抜いても構いません」

「え、なんで」

「誰が口答えを許した、返事はッ！？」

ラルシアからまるで何かが爆発したかのような声が響く。ティン
は思わず「はい、分りました！」と返した。

「後、私が貴方の名を呼んだら……そうね“イエス、マイロード”
と言って私に仇為す者を全て斬りなさい。良いわね？」

「はい、分りました。ラルシアお嬢様」

ティンはよく分からんが渋々了承する。対するラルシアはその返
答に満足すると魔法陣を展開し、その中にティンと一緒に入り込む
と。

「転移」

一瞬にして二人が消え去った。

かつて呪われた国（後書き）

ども、やーです。やっと出せたよ、ラルシアお嬢様。ついに出せた。しかし、出て来て早々放送禁止ぎりぎりの暴言は止めて下さい。作者を殺す気ですか、彼女は。止めれば良いって、脳内にキヤラを降臨と言つか憑依させて書いてる私としては無理。あれは私の意志じゃない、ラルシアお嬢様が勝手に喋っているんだ！
それではどこかで。

初めての護衛任務

ティンとラルシアが出て来た場所は暗い洞窟の中だった。ラルシアは何処からかランタンを取り出し、明かりを付けて歩き始め、ティンもその後について行く。

どこかの洞窟なのか分からないが相当深いところの様だ。明かりも点いて無い様で真つ暗だ。

（ろくに整備もされてないのかな……）

「此処はまだ未開発の場所。明かりなどあるわけないでしょう」

と疑問を持つて周囲を見渡すティンに答えを教える様にラルシアは言った。思わずティンは何故思ってる事がと言いかけたところで「後、きよろきよろするのは止めなさい。みつともない」

（ああ、なるほど）

ティンは心の中で納得する。どうやら黙って疑問を消化し切れずに挙動不審になっていたようだ。ということで一先ずラルシアの頭を見つめ続ける。ゴミーつない纏まった綺麗な金髪だ。ティンも長い金髪ではあるがラルシアの様に整ってもいないし、ラルシアのその長い金髪は磨かれた芸術品とも言える。

「人の頭がそんなに面白い？」

ラルシアは背後のティンを睨むとそんな事を言った。どうやら頭部をじーっと見つめてたのが気に障った様だ。

ではどうしようかとティンは足元を見て悩む。

「……ちゃんと前を見て歩きなさい」

（んーつままないけどいつかー）

「チッ……」

心で呟きながらティンは渋々前を見る。そのおかげか舌を打つラルシアに気付かなかった。

目線の先は非常に暗い。ラルシアがランタンで先を灯しているが、近くしか黙認出来ず、前がよく見えないのは変わらない。

いつになつたら目的の場所に到達できるのか、とティンは口元に来る欠伸の誘惑を無理矢理閉じ込めて歩き続ける。すると奥に光が見える。暫く暗い所を歩き続けたからか、もう懐かしいとさえ思える光だ。実際にそこまで歩いていないわけだが。

明かりの下へと出てみるとそこには数人の男達が待ち構えていた。
(瑞穂がいたらどうなっているんだろうか)

泣いて逃げる、しかも男達をぶちのめして壁を壊しつくしてでも逃げる。と、此処まで一話から全話欠かさず読み切った読者諸君ならこれに近い結果は軽く予想出来るであろうと思う。作者はそれが出来るほど、瑞穂が重度の男性恐怖症である事を書いて来た筈だ。筈である。ねえ、そうだよな？ 何処に向かつて聞いているのだろう、私は。

「申し訳ございません、遅くなりました」

と、作者も主役であるティンを放置してラルシア様はとつと話を進めます。こちらの事など気にもしません。

と、小太りで背の低いスーツを着た男が一步步み出てラルシアに軽く頭を下げ、ラルシアも挨拶をする様に頭を下げる。

「いえいえ、こちらも来ただけです。おや、そちらの方は？」

「こちらはただの護衛です。空気の物と思つて頂いて結構ですわ」
(好き勝手言ってくるなあ、こいつ)

ティンは心の中で悪態づいた。声には出さない。出せばラルシアの爆発したかと思う様な怒鳴り声が耳に響くと思つていろいろ億劫なのだ。

と、思つて辺りを見渡すと。

「ツツ!？」

瞬間、ティンは思わず柄を握り締めた。理由は危険を、察知したからである。

思わず。そう妙な空気に思わず剣を構えてしまった。だが、抜いてはいない。柄を握っただけだ。

(何だ、今のは……?)

「おや、どうかしました？」

「ああ、こいつはちよつと神経質なのです。お気になさらず。恐らく、虫の音でも拾ったのでしょう」

とラルシアは人当たりの良さそうな笑顔で失礼な台詞を吐いた。この女の身代わりは凄い。

ティンは言われたとおりの事をしているのに、馬鹿にされてる様な感じがして酷く嫌だが渋々と柄を手放す。

「ではこちらでございます」

「はい」

とラルシアが奥に進むのでティンは静かにその後ろについて歩いていった。

黙って彼女の後ろを歩いているとまた別の広いところに出た。

どうやら鉱山の中らしく、壁には点々と光る処が見え、厳つい男達がつるはしを手に発掘作業を行っている。

そして、端に置いてあるトロツコに小太りの男とラルシアが歩み寄った。

「こちらが頼んでいた品物でございます」

「ありがとうございます。拝見させて頂いても宜しくて？」

「勿論でございます。どうぞどうぞ」

ラルシアはそう言って洞窟の広場に置かれた箱の中を拝見し始める。

その時だ。

「うッ！」

思わずティンは再び妙な気配を感じたのか、一気に少し刀身を覗かせる勢いで剣を構える。

と、周囲で働く男達が一斉にティンを見つめる。

「おや、護衛の方。何かありまして」

「……ふむ」

ティンは一考して剣を改めて鞘に仕舞い込むとラルシアの方をちらりと見た。

言葉を口にしたのでラルシアに怒られるのかと思ったが、向こうは呆れた様子で。

「全く、早とちりは困りますわねえ」

「いえいえ、危機感の強い護衛と言うのはいざって時に使えるもんですぜ」

「全く、手が早いのも考え物ですわ」

と言ってラルシアと小太りの男は奥に進んでいく。ティンも後ろに追従して行く。

ティンは、段々とラルシアが自分を連れて来た理由が分って来た。確かに、これはちよつと護衛が必要かもしれない……が、ティンは何故かは気付かなかった。ラルシアを狙ってるのは大体分ったが、その理由が正確に把握出来ない。

（分らん……でもこれが仕事って奴なんだよな……しんどー）

等と思いつながら、ちよつと表情に表していると。

「何か言いたげですわねえ」

とラルシアがティンに耳に囁く様に行ってきた。不満を顔に出していた事がばれてしまったようだ。

見ると、ラルシアは少し含みのある笑みを覗かせている。微妙に怖い。

ティンは首を振って否定の意を示して後ろに下がった。

（私語禁止か……面倒だなあ、もう）

思いつながらティンは二人の後をとことこ歩く。二人は何やら世間話をしているが、ティンにはちんぷんかんぷんだ。話的内容的にはお金持ちの道楽と言うのは分る。だが、それだけだ。ティンからすれば全く面白くも無いし、興味も無い。

と言う感じに歩いていくと別の働き場に出くわす。

「こちらにどうぞ。中々に良質な銀鉱石があります」

「まあ、是非見せてくださいます？」

と言ってラルシアは一見無邪気な少女の様に石が詰まれた箱に歩み寄って中を覗いて物色している。

ティンは思った。

（同じ年に見えるけど、ラルシアって年幾つなんだ……？）

ティンはそーっとラルシアに近づく。と、その時。

「うッ!？」

まただ。また妙な気配を感じる。何だろう、こっ……何かに狙いを付けられたと言っべきか。

訳が分らない。何かがおかしい。ティンは柄を握り締め、ぎらつく剣の銀光を見せびらかす様にティンは臨戦態勢をとる。

（何だ、この鋭い感じは。何だろう、あたしも狙ってる？ いや違う、あたしを通してラルシアを狙ってる？）

「あの、如何なさいましたか？」

「相当に神経質のようですね。全く剣なんて見せ付けて」

ラルシアの言葉を受けてティンは渋々と剣を仕舞い込む。だが、左手は見せ付ける様に剣の鞘を握り締める。

そしてとうのご主人様は何やら用紙に書き込んでいると書き終わったそれを男に渡す。

「では、この様にお願いますわ」

「へい、かしこまりました……ところでお嬢様。もう一つだけ頼みがあるんですが」

ラルシアは優雅な足運びで踵を返すと余裕を見せ付ける様に笑うと華麗に返した。

「あら、何か？ 言っして下さい」

「欲しいものがあるんですが、宜しいでしょうか」

ラルシアは優雅な仕草で髪をかき上げると嗜虐的な笑みを浮かべる——それは正しく、ティンの脳裏に刻み込まれた彼女の本性である。

「どうぞ」

「そいつはですねえ」

と言って、ティンはふっと昔に見たアニメを思い出す——それは、ごく普通のヒーローもののアニメで、小さな女の子を騙して誘拐し

ようしてる所でヒーローが颯爽と現れるシーンだ。

ティンの目の前に小太りの男は、そんな昔を思い出させるような、黒い笑みを浮かべている。

（思えばベタだ。ベタベタだ。よくあるパターンだ、方程式だ、王道だ。何と言うか、もう、ちょっと考えれば直ぐに分ることだ。どういうことかって、つまりこいつはだ）

「――あんたの身柄さ！」

本性を表すように手を上げ、武装した男達がざざつと音を立てて現れる。

「べったべたな、悪役かよ……！」

「ええ、べったべたな展開。もうちょっと捻って欲しいくらいだわ」
ティンの呟きにラルシアが小言で返す。どうやら彼女は行く前から全てを把握していたようだ。

そしてラルシアは心底楽しそうに親指と中指をあわせ、打ち合わせどおりに弾く。

「ティン」

「Yes、My lord」

ティンはマントに身を包み、剣の柄を握り締めて男達の群れに突撃をかける。

マントがバサバサと、風に煽られるように男達の前で静止運動をかけるように踏み込み、剣を抜き放つッ！

走る剣閃、乱れ舞う斬線、舞い踊るかのようにティンは動き、剣を振るうッ！

声も無く倒れる男達。まるでこれは木偶の棒かベニヤ板である。

（な、何て鋭い剣だ……今まで使ってたどの剣より、使い難いって言うか自分も切りそうで、怖い……！）

「くっ、来い！」

男の合図に応じて更に登場する雑魚キャラ達。それはあっさりとティンを取り囲み。

「やっちまえ！」

と一斉に襲って来る。対してティンは足で地を鳴らし。

「?、?、?……Get、ready、Go!」

クルリと身を回してふつとその身体が消え、舞い踊る斬線の嵐ッ！縦横無尽に駆け巡る斬撃の軌跡。それはまさしく斬撃ドーム。嵐が過ぎれば、男達はあっさりと円を描いて倒れていく。

ラルシアは無表情に髪をかきあげながら。

「……で。次はどんなサプライズがあるのかしら?」

「ぐ、ぬぬぬ……先生！ 出番ですッ!」

男が声を上げると同時。ティンはスケートでもしてる様な足運びで下がるとティンが立って居た場所に無数の斬撃が舞い、地面が切り刻まれる。

「――外したか」

と奥から和服を羽織、髪を結い上げた黒い髪に無精髭の男が現れる。腰に差した鞘を握り締め、手にしていた刀を納刀する。

「先生、やつちゃってくださいッ!」

「報酬の分はやろう」

男の前に立ちほだかり、腰の刀を握り締める。

（今の……居合い切りか！ 臯もやってたっけ。すっごい、遠くの物を切っちゃうなんて。）

「でもベッタベタだなあ」

「そうね。茶番ならとっと片付けましょう」

ラルシアはため息混じりに呟く。本当に退屈な様だ。

ティンは剣を握り直すと向こうも腰の刀を握り締める。二人の間に緊張が走る。ティンはよく知っているのだ、居合い抜きを。抜刀術を。その恐ろしさは臯と言う少女が散々教えてくれた。

ただ単に鞘から抜き放っただけの剣が恐ろしいなど、ティンは微塵も思っただけだったが臯との模擬戦でその印象を塗り替えた。居合い抜きは非常に恐ろしい。何が恐ろしいかと言うと、カウンターだ。相手の攻撃に対応して抜き放たれる、特に座っているならもっと恐ろしい。ティンも、一度やられた。臯に「本当の居合いを見せる」

と言われて繰り出されたアレは一瞬で意識が刈り取られたことがある。

だから、相手を舐めるなんて事はしない。ティンは集中して相手を睨み。

（勝負は一瞬。一撃で）

「いざ……勝負ッ！」

男は柄を握り、駆け出す。ティンも同時に駆け出す。あの時もこうであった、とティンの脳裏に刻まれた苦い記憶を思いだす。何故なら、一緒だからだ。あの時も……臯は駆け出した。そして剣が交える直前、臯が一瞬にして座り込んで——不意打ち気味に一撃必殺のカウンターを叩き込まれた。気付いたら臯の膝枕で「私の勝ちですね」と言われた時は何が起きたのか分らなかったが、一撃でやられたと言っのは嫌でも分る。

交戦まで数m。ティンは、全神経を相手の動きに総動員させる。

眼光を鋭く、一点のみに集中する。油断は敗北、これは命をかけたやり取りだ。魔力は無いものと考え、この剣は凶器と捉え、敗者には死を、勝者に生を。

そして、二人の剣士が交差する。時間が止まったようで、静かだ。直後。

「見事……」

刀は見事に両断され、音を立て、砂煙を立て、侍風の傭兵は倒れた。

「勝った……ッ！」

「ひ、ひいっ！」

小太りの男は尻餅について恐れ戦く。対してラルシアはため息混じりに、そして嗜虐的な笑みを浮かべて。

「で？ お次はどうするのかしら？ まさかこれで終わりだ、などと言う冴えない結末ではありませんわよねえ？」

「へ、へえ、何のことでしょうか？」

男はゴマをする様に手を揉むと人あたりの良さそうな笑顔でそう

言い放つ。

（こいつ、何をいけしゃあしゃあと）

ティンは思わず剣を納めて思いながらそいつを睨む。が、ラルシアは静かにボイスレコーダーを懐から取り出しスイッチを押すと、さっきのやり取りが思いっきり流れる。

「さて……これでも言い逃れしますか？」

「ぐ、ぐぐぐ……」

「さて、此処で話があるのですが」

「な、何でしょうか？」

小太りの男は苦い笑顔でラルシアの言葉に返す。対するラルシアは契約書みたいな用紙を取り出す。

「私、^{わたくし}あまり事を荒立てる気はさらさら無いの。ですので、この辺り手を打ってくれませんか？ 嫌ならこれを騎士警察に渡してしかるべき処置を行うしか……ないですわよねえ？」

「了承いたしました。ラルシア様のしたい様に」

ラルシアは用紙を抜き取ると楽しそうに男の顔に叩きつけると踵を返す。

「行きますわよ、ティン」

とラルシアに続いてティンが静かに続き、魔法陣の中に消えていった。

ラルシア達が出て来たのは人が賑わう街中だ。

「さて、仕事は終了。これ報酬」

と、ティンにビツと茶色い封筒を突き付けられる。一体何処に持っていたのやら。

「私^{わたくし}は何時何時でも給料袋の予備は持っていますから、不思議そうな顔なんてしてないでとっとと受け取りなさいな、どんくさい」

「あ、うん」

ティンはゆっくりと受け取り、封筒の中身を確認する。一万 en

札が十枚出てくる。

「さつさと仕舞いなさい。自分のお金を見せびらかす物ではないですわ。まあ、そんなはした金ではありませんが、そんなお金でも奪い取ろうとする卑しい輩が何処に居るとも限りませんわ」

「……そのマシンガンの様に飛び出る罵倒は何処から出てくるんだ？」

「私に掛ければこの程度、造作も無くつてよ？ この程度で一々感激しないで下さいます？ 全く貴方の程度と言うものが知れますわね。本当に駄目な方ですわねおーっほっほっほ！」

「うん、人の話し聞いてないし、と言うか今時おーっほっほっほって笑う人生まれて始めてみたー」

ティンは如何でも良さげに言い放った。と言うかいい加減面倒臭くなつて来た頃合である。

「……つて、十万もくれるの！？ 二週間のバイト代よりも高い……」

「はあ？ それでも相当削っているのですけど？ 礼儀作法から仕込む必要あり、口ごたえもする、素行は悪い、拳動不審、反抗的、そこらの傭兵だつてもつと素直に働きますわ？」

「……え、じゃあもつと多いの？」

「当然でしょう……今度護衛の相場を見て来なさい」

ティンは取りあえず貰った給料袋をポケットに押し込もうと。

「待ちなさい。貴方、財布は？」

「え、財布？」

「持っていないとか言い出したりしませんわよね？」

「……言い出したら？」

ラルシアは呆れ顔でため息つくと懷から財布を取り出す。見るからに何処かのブランド品みたいな、そんな雰囲気がある立派な財布だ。

「私のお古ですわ。どうせ使う予定は無いのだから、貴方が使いなさい」

「え、良いの？」

「ええ。プレミアとかで気紛れで買っただけの物、嵩張るだけなら貴方が使いなさい」

「ありがとう！」

ティンは財布を手に入れた！　みたいなシステムメッセージが流れてきそうな雰囲気だ。ティンは嬉しそうに財布に金を入れた。

「……げ、よくよく考えればこれで削った分の殆どがちらに……こいつ、やるわね」

「どうかした？」

ラルシアは何でもないとわんばかりの態度で街中を歩いていく。やがて昼食を取る為と喫茶店に入ると店員に案内され、外のテーブルに案内された。パラソル付きテーブルだ。

「ねえねえラルシア、このお店ってお勧めは何？」

「特にありませんわ」

ラルシアはつまらなそうに返す。

「え、無いの？」

「無い。好きにどうぞ」

「えーじゃあ何を選べば良いの？」

「ですから、好きにすれば良いじゃない」

「んーじゃあ肉！」

「ミートピザね。私は……フルーツパフェを」

二人は店員に注文し終わると、店員はお辞儀をして引っ込んだ。

暫くするとティンの注文したミートピザとラルシアの頼んだフル

ーツパフェが届く。ミートピザはピザ屋のピザよりは小さかったが、

綺麗な円形である。早速一切れとって口に運ぶ。

「んまい！　これ美味しいね！」

「当然」

「ホントに美味しい！　ラルシアはこの店によく来るの？」

「ええ。この辺の店はほぼ把握していますので」

ラルシアは当たり前のようにパフェを頼張る。ティンは相も変わ

らずピザを美味しい美味しいと食べていく。

「本当に美味しいね、これ！」

「だから当然ですわ……」

「でも、本当に美味しいよ？」

「ああもうッ！ だからッ！」

ラルシアは勢いよく椅子から立ち上がるとティンを指差し。

「この辺りの店は全て把握しているから、味も全て承諾済み！ この辺りで一番近くて一番美味しい店にわざわざ貴方を連れ込んだのよ！？ 美味しくない訳無いじゃない！ 当たり前のことを語らないで！ この店の味はラルシア・ノルメイアがこの身とこの舌と、この名で保障致しますわ！ どうぞご自由に飲み食いなさいなッ！」と、街中を歩く人々も気にせずにラルシアは言い終えると勢いよく椅子に座りなおす。

（……ふうん。ラルシアって、意外と面白いな）

ティンは、その様子を見て感心するようにピザを食べ続ける。

初めての護衛任務（後書き）

今回はこの辺で。んじゃ。

朱雀が落ちる日

食事を終え、ティン達は買い物を行っている。と言ってもラルシアの買い物でティンは一方的に荷物もちをしている。と言うか、もはや一種の塔とも呼べる量だ。ティンは持ち前のバランス調整を駆使し、僅かに見える荷物の隙間から何とか前を見ながら歩いている。そんなティンをスルーしてラルシアは購入した荷物をポイッとティンに押し付ける。

「ちょ、ちよつと、そんなに持てない……」

「貴方なら何とか出来るでしょう？ 私が先程の交戦で貴方が人並み外れたバランス感覚を持っていることに気付いていない思ってた？」「う、うう……」

「まあ、貴方なら本気を出せばほぼ確実に落とさずに持てる量であると思つてますわ」

「そんな信頼はいらないいい……」

ティンは塔の様な荷物を抱えて泣き言を叫んだ。

「あら、信頼と言うものは勝ち取るもの、最初から存在なぞしなくつてよ？」

「あれ、さっきの台詞と矛盾して無い！？」

「ああ、貴方のバランス感覚なら出来るでしょう？ 全力を出しなさい」

「荷物持ちに何の全力を出せと！？」

「バランス」

ラルシアの言葉は冷たかった。ティンは荷物を落としそうになるが、本気でバランス感覚を整える。

「と言うか、そんなに人並外れてるかなあ、あたし」

「普通の人間がそんな塔を築いたりしたら間違ひなく落とすでしょうね」

と、ラルシアは今にも崩れそうで崩れない荷物の塔を見やる。

確かに、歩くと持っている物が揺れて不安定になる。しかし、既に荷物の塔はティンの身長を超しているが、未だに倒れる気配が一切無い。

（落ちた物を全部拾うとか、孤児院の食器を一度に運ぼうとしてた技術がこんな形で……変な事に精を出すもんじゃないなあ……）

「ティン、ちよつと」

ラルシアはティンが涙目で考え事をしていると、また何かを買って来た様だ。見ればティンの荷物の半分を奪い取っている。

（あ、持ってくれ）

思っている途中でラルシアはティンの片腕を取り、手提げ付きの袋に腕に通して元に戻す。腕も、荷物も。

「おおおおーいッ！」

「さて、次を買うのは……」

「聞く耳さえ持ってない!?」

ラルシアはティンの言い分さえ聞かずに適当な店に入ってまた何かを買ってくる。

（何でお金持ちの買い物の手伝いなんてしてるんだろ、あたし）

とかボーっと思っているとどこか荷物を乗せたり腕に通す。軽くプルプル行くほどだ。

「ふむ、予想通り」

「な、に、が、だ……」

「さて、この辺ですわね。城に帰りますわよ」

「や……つとだ……」

ティンは安堵しながら歩いていくと光に包まれ、一瞬にして目の前が変わる。さっき仕事に向かうの場所、城の中庭に来た。

その瞬間、城のメイド達が「待ってたぜ旦那！」と言わんばかりにささーっと出て来る。

「はい、これ新しい布よ。この色が不足していたはずですよ？」

「ありがとうございます」

ラルシアはティンの荷物の天辺から順に荷物を取ってメイド達に

渡していく。向こうは喜んで受け取っていく。

「魔宝石を買って来ましたわ、魔導師隊用の装備品にでもなさい」
「ありがとうございます」

メイドは宝石が詰まった箱を受け取るとすーっと消えていく。
「兵士寄宿舍浴場のシャンプーとリンスが切れているようでしたので、買って来ましたわ」

「まあ、これはどうも」

メイドは袋を受け取るとツツーっと消える。

「掃除用の洗剤を買って来ましたわ。今日は大掃除で大量に消費したのでしょう？」

「丁度切れたんです、ありがとうございます！」

メイドは袋を受け取るとトトトと走り去る。

「食材の追加ですわ。持って行きなさい」

「あ、これ少なくなってますよ。そろそろ買い足そうと思って、ありがとうございます」

メイドは袋を受け取るとブシュンと消え去る。

と、こんな感じにサイン会と言うかプレゼント配布みたいにラルシアは買ってきた物をメイドに次々に渡していく。ティンはあると言う間に持っていた荷物が無くなった。

「つ、つかれたあ……」

どっかと、ティンはその場に座り込んだ。と、思い出した様に腰の剣を外してラルシアに向ける。

「これ、返す」

「報酬として差しあげますわよ。お好きに使いなさい」

そう言うってラルシアは踵を返して事務室に戻る。

ティンは突き出した剣を引っ込めて抱く。

「にしても凄いですね、ティンさん」

「ん？」

声の主は近くにいたメイドさんだ。ティンはそっちの方に視線を向ける。

「ラルシアさん、結構実力主義なんですよ。役立たずには何かをする権利は無いって言う感じかな？ 滅多に人に二つの用事をさせないんですよ」

「……荷物持ち、させられた」

「うん。傭兵なら絶対に荷物なんて持たせない、買った物は即時此処へ転送。絶対に、荷物なんて持たせない。ティンさんは荷物を持たせるに値する人だったんですよ」

「……ラルシア、ちゃんと人を見る目があるんだ」

ティンは呟いた。思い返せば、他人へ労働をしいる事はある意味他人への信頼の証なのかもしれない。

だとするなら。

（頼られたって、こと？ ……素直じゃないなあ。お金だけの繋がりって寂しくないのかね）

捻くれてる。ティンは素直に思った。

同時に思った、人を見る目は異様に確りしてると。商人と言う仕事柄ゆえだからだろうか？ だけど。

（巻き込んだじゃ……駄目だよな）

ティンはそう思った。純粹に、彼女は良い人だから、自分の都合に合わせては駄目だ、と。

翌日、朝食を取った後にティンはエーヴィア女王に旅立つ旨を話そうと。

「ティン殿。そういう話は謁見と言う扱いでお願いします。何分陛下は忙しい身の上ですので」

「別に良いじゃないかそんなくらい。出て行くなら行くで」

「へ・い・か・は政治で忙しい身の上ですので、きちんとした手続きを」

と、ルジュさんはエーヴィア陛下の言葉を踏み潰す様に言い切った。ティンはこの城内の荒れ様を悟る。

と言うことで謁見と言う形でティンはエーヴィア女王に国を出て行くことを言うことに。

——そして時間が止まった。硬直した。

(……こういう時、何て言うのかなあ?)

理由は一つ、お互いにこんな時どうすれば分らないのだ。孤児のティンはともかく、実はエーヴィア女王陛下も謁見されるの初めてだったりする。

いつもフランクに会ってるからこういう時どうするのか全く分らないのだ。

「陛下、ティン殿は国外で出たいと申ししており、出国の許可が欲しいと」

「あれそんなこ」

「では、こちらにサインをお願いします」

ルジュはもうこのやり取りに飽きているのか、全力スルーを決め込んでいる。と言う事でエーヴィア陛下に書類を渡す。

「ん……これにサインすりゃいいのか?」

「さようで」

エーヴィアは言われたとおり、許可書にサインをする。

「ではティン殿、こちらを国境門に見せれば国外へ出ることが出来ます」

「あ、そうなんだ。あれ、でも来た時は?」

「ああ、お前が来た辺りはまだ門が出来てないんだよ。人手不足で工事が亀並みに遅いしな。後、こいつを返す」

と陛下は腰に下げていた剣をルジュを通じてティンに返す……が、ティンはその剣を見てふと疑問を感じる。何故なら。

「これ、あたしの剣じゃないよ?」

「何を言ってる。そいつは間違えようも無くお前が後生大事に握ってた剣だぞ?」

ティンの剣は非常にシンプルなデザインだが、こちらは相当に凝ったデザインの剣となっている。

翼と光をテーマにしたデザイン、とでも呼ぼうか。刀身に光と言う文字さえ見え、柄の先にチェーンとホルダーのアクセサリーが付

いてる。こんな複雑なデザインだっただろうか？　しかし、握った感覚から間違いなくこれはティンの剣だと、剣が告げる。

「ふーん、じゃああれはやっぱり過剰魔力再練成現象か……実物を見るの初めてだが」

「へ、何？」

「何でもない。それよりも、旅支度に必要な物とかあるか？　あるなら用意させるから言っとけよ」

「えっと、じゃあ……」

とティンは荷物の中を覗いて、と気がついた。と言うか、此処まで読んだ読者も気付くだろう。そう、ティンは……そもそも荷物が無かった。

「んじゃ、これに一応全部の荷物を積んでおいたぞ」

とエーヴィア女王様はティンにウェストポーチをルジュを通じて渡す。

「一カ月分の食料と水の魔道書に寝袋。食料は携帯食料だ。他にライト、地図とコンパスも一緒に入れてある。必要最低限の物だけを詰め込んだつもりだが、他に欲しい物があれば言ってみろ」

「……ねえ、何が必要なの？」

「お前本気で旅する気あるのか!？」

エーヴィア女王はまさかの返答に吃驚。でもこれ真実、こいつはまごう事無き旅人初心者だ。

「取りあえず、これだけあれば平気？」

「平地を歩くならそんだけで十分だよ。お前は崖登ったり山登ったりするのか？　すんなら道具やつてもいいぞ」

「……するの？」

「よし、今から拳をくれてやる。貰ったらそのまま行って来いッ!」
首をかしげるティンに身を捻ってティンに拳一発叩き込む。実にすばらしい。

「素晴らしいフォームです、女王陛下」

とルジュさんは拍手を送って賞賛する。まあ殴られた本人はたまったものではなく、頭を抑えて蹲る。

「な、なんでこんな事するの？」

「女王陛下、ティン殿がもう一発欲しいようですが」

「仕方ない、蹴りもやるか。感謝しろよ、滅多にやらんから、なッ！」

エーヴィア女王陛下は華麗な動きでティンを蹴り上げる。蹴り上げられた輝光の聖騎士は打ち上げられ、三・四秒後に大理石の床に叩きつけられる。

きちんと頭に直撃しない様に受け身は取っている様だ。

ティンはこれ以上何も言わずに立ち去る。言うたびに殴られ蹴られては流石の彼女もたまったものではない。頭を下げて礼を言った所で行く。

城門を開け、外に出るとそこは荒野だった。崖に阻まれ、枯渴した岩の大地しかない。

ティンは改めて背後を見る。そこには悠然と立つ王城——いや、公爵屋敷か。ティンはふと思う、此処が公爵屋敷で、もつとこの辺りが賑わっていたと言つのは、何時の頃なのだろうか。

「……のわれていた、か」

ティンは思わず感慨に耽った。そして歩き出す、荒野の果てに。それから数日が過ぎていた。ティンは地図を読んだが、自分がどの辺か分からないので直ぐに読むのを止めた。

コンパスを見たが、地図が分らないので直にしまった……あれ地図とコンパス意味なくね？

ティンは水を飲んでまた歩く。取りあえず地図とコンパスを取り出す。

（デルレオン王国……いや公国か。えっと……この辺で……館が……この辺り。で、何処に歩いて……）

とそこで気付いた。この辺、城がもう見えねえと。

「本気で此処何処だ！……」

ティンは自分に呆れながら荷物をしまつて水筒を口に突っ込み、喉を鳴らして水を飲み込む。

水筒の内部に術式が仕込んであるようで中は常時水が満タンだった。水筒に説明書きが付いていることに今更気付いた。どうやらこれの掃除の仕方らしい。こまめにやらないと中がカビだらけになるそうだ。恐ろしい。

と、考えながら歩いていた時だ。ティンの周囲におかしな空気を感ずる。

「……久しぶり。会いたくなかった」

言いながら荷物を全部ポシエツトに詰め込む。そこには黒い仮面に黒いボロマンツの男達がぞろぞろと。

「一人になるとは浅はかだな、神剣の契約者よ。命が惜しくないと見える」

「お前らの事はあたしの問題だ。他の人達を巻き込んで良い理由にはならないよ」

ティンは言つて腰の剣を引き抜く。光を刻んだ剣を。

「で、お前の名前は？」

「良いだろう、最後に教えてやろう。我が名は四天王が一人、朱雀。英知を司るもの。我が知略に溺れるが良い」

朱雀が手を振り上げ、仮面の男達が一斉に動き出す。数は大雑把に言えば沢山。正確には二十五人、いや二十五体もの機械人形が一気に襲い掛かる。

ティンはまず剣を軽く握り、あまり動く事無く敵の一人を切裂いた。いとも容易く。

続いてもう一体も返す刃で一撃両断、また次も流れ作業の様に二つの鉄塊に変える。まるで優しく、静かに優雅に魅せる剣舞。ティンの剣は恐ろしく無慈悲に敵を切裂いていく。一太刀で。まるで敵に切取線でもあり、そこに刃を通してるかの様な正確さで。

その剣舞により次々に敵が二つに両断されていく。いくらティン

が斬ろうとも、幾ら時間が流れようとも変わらずに剣戟が続く。まるでティンは疲れを知らぬ様に。

（問題は無い）

朱雀は冷静に分析を行う。ティンの動きにも何時か限界が来ると言う事に。

それを待つていれば良いのだ。何て簡単な仕事。

（兵力はほぼ無限大、幾らお前が体力を温存しようとも関係など無い）

数時間にも及び、物量で推しながら朱雀はほくそ笑む。

そうだ、関係など無い。そう――朱雀が幾ら物量作戦で押そうとも、ティンには関係ない。姿を見せただけで終わりなのだから。

朱雀は一瞬判断が遅れた。直に護衛を呼ぶ事が出来た。

ざくり。そんな音を立てて彼の仮面に傷が付く。何が起きたか。

それは簡単だ、ティンが剣を投げた。それだけである。それを部下を盾にする事で防いだのだ。

朱雀の仮面に白銀に輝く刀身が突き刺さる。護衛の部下達は音を立てて地に沈む。ティンは踊るように敵を切り捨てている。昇り始めた日が落ちようとしているほどに時間が流れていた。もう空腹で動けなくても当然な筈だが……と、朱雀は微かにティンが口に何かを放り込んでいるのが見える。グミの様な、何か。ついでに水筒の水を軽く飲む。エネルギー補給は完了、彼女はまだ戦える。

「くっ……投入戦力を増やせ！ 二十五から五十だ！ 一気に叩き込む！」

朱雀の声に従い、仮面の男達が一気に押し寄せる。しかし、ティンにはどうでも良い事である。

距離を見定める。どの位で切れるかを図る。分ったのなら後することは簡単だ。ティンは踊る様に、さつきと変らぬ様に、朱雀の下目掛けて駆けた。

「な、にい……ッ!？」

剣を投げる。その剣は護衛の誰かの腕に突き刺さり、ティンはさ

つき投げた銀の騎士剣を手早く拾い上げると目の前の護衛を切裂くッ！ ついでに投げた光の剣も回収。

続いて朱雀の下へと刃を振るう。が、朱雀は逃走した。異様に速く。

朱雀は作戦指揮を行う立場にある。知略と優れた移動速度を持つのだ。その速さ、ティンにはどうする事も出来なかったあの青龍と同じ速さ。今のティンにはどうやっても追いつけない速さだ。

それでもティンは自分の速さに自信があるから、ダンシングステップで追いかける——護衛に阻まれ、また囲まれる。

ティンは踊る様に軽く剣を振るって次々に敵を切裂いて前に行く。が、朱雀には追い付かず、包囲網を抜けても朱雀の剣が届かない。ティンは呼吸法を用いて失った体力を戻し、敵の攻撃をかわして一撃で切り捨てる。また動く度に敵を一人一人切って進み、朱雀に迫るもまた逃げられる。

その内日が落ち、ティンにも目に見えて疲労が出て来た。それでも動きに变りはなく、一切も変る事無く敵を切って歩いていく。

何故にティンは此処まで動けるのか？ 理由は一つ、此処まで鍛えに鍛え上げた技術の賜物だけだ。約十五年、それが彼女の修業期間だ。今の今まで休まずに剣を振るい続けて来た彼女だ。剣を振るう事は一種の日常と化している。そんな彼女が、物の抵抗も一切なく斬り裂く技術があるとするとしたら、長時間戦えるのも当然。ダンシングステップの行動力を極力抑え、体力の消費を削れば、ご覧の通りである。

ティンは回避と同時に敵に剣を入れ込み、切裂く。それだけで胴体は両断され、鉄の塊が二つでる。ティンが動けば動くほど、その度に鉄の塊が生み落ちる。

しかし、敵の数が減らないのなら意味が無く、斬っても斬っても状況は改善の見込みは無い。

（手詰まりか……？ くそ、もっと速く動けたら……ッ！）

ティンは息を整え、襲い来る攻撃の合間を掻い潜り、次々に敵を

切裂いていく。

この状況を変えるには誰かの手が必要だろう。そう、誰かの手が。
「悪いな」

瞬間、閃光がティンの周囲を駆けた。同時に黒い男達を切り払っていく。

ティンは前を見る。そこには肩口に切り揃えた短い髪、胸元まで伸びた揉み上げ、上下共に黒い服、黒いマント、そしてティンのと違い光の文字で作られた様な剣を握り締めた女。

「こいつは私が切り捨てる予定だ。貴様らはその後にしる」

「……誰？」

いや、ティンさん。みょうちきりんな仮面外しただけであの夜貴方と決闘を繰り広げたあの女剣士ですが。

女は剣だけでは不利と見たのか、何処からか槍を取り出して応戦を開始する。

ティンと違い、彼女は男に攻撃を二・三度当てなければ倒せないようだ。

「ま、待つて！」

ティンは彼女の攻撃に静止をかける。

「待たん！」

「あの仮面の奴、一人だけ豪勢な仮面つけてる奴！　すばしっこいんだけど倒せる！？」

「知らん！」

「あんた何しに来たの！？」

あまりの戦力外通知にティンも吃驚である。

「増援か……問題は無い。幾ら増えようとも、我らの目的はあの娘一人。あ奴一人狙えば済む話。総員、目標のみを集中的に狙え！」

「あら。非常に残念」

斬閃が走る。無数の刃が舞い、敵を蹴散らすように周囲を切り刻む。

「策を練るのがお好きなようですが、国内で散々大暴れされて増援

を視野に入れないとは非常にお粗末ですわねえ」

「ラ、ラルシア！？ 何で此処にいるの！？」

ティンは崖の上で優雅に佇むご令嬢——ラルシア・ノルメミアその人がいた。

「此処はイヴァーライル国内。そこで何故此処に居ると問われたら、国内だから、としか返せなくなるではないですか」

「待ってよ、あんた確か戦えない筈じ」

瞬間、ラルシアの周囲に居た雑兵が吹き飛ぶ。いや、薙ぎ払われたのだ。なにによって？ 当然、ラルシア・ノルメミアの刃によって。

その手にはサーベルが握られており、彼女は静かに剣を納める。

同時、彼女も障害と認識されたのか仮面の男たちが殺到する。が、直後に無数の刃が舞い、敵を切り刻み、薙ぎ払うッ！

ラルシアの手には鞘に納められていた筈のサーベルがもう握られていた。つまり、彼女が使ったのは。

「居合、抜き！？」

「あら、察しの悪い貴方でも気付くのですわねえ。ええ、これは居合抜きと言われる剣技ですわね」

ラルシアは言う事など無いと言わんばかりに剣を鞘に納める。

「ってあんた戦えるのかよ！ しかもそんなに強いんなら護衛要らないじゃん！」

「馬鹿を仰いな！ 仮にも社長の地位にある人間が商談でホイホイ剣が抜けますか！ それくらい考えなさい、この単細胞！」

「誰が単細胞だ！」

「やかましい！ 大体ノルメミアの腹黒お嬢様がなぜここに居る！」

「あら、人の話を聞いていなかったのですか？ 光栄優子お嬢様？」

「お嬢様は止める、虫唾が走る！」

「あら、まがう事無き貴方は社長令嬢の優子さまであらせられるではありませんか。お嬢様をお嬢様と読んで何の問題がございましょう？」

ラルシアは非常に機嫌が良さそうだ。やたらと饒舌に喋る喋る。が、途中で仮面の男たちが割って入る。殆どがティンに集中してるが、二人の働きは全く持ってティンに剣を振らせない。

「無粋な輩です事。少しは人に話をさせようって気はないのでしょうかね？」

「戦闘中に話す方が悪い。無駄話をするくらいなら体を動かせ」

優子は言いながら槍を振り回し、周囲の敵を薙ぎ払って行く。ティンとは大きく違って非常に荒い動きだが、その分範囲が広く一度に攻撃出来る敵が段違いだ。

ティンは動こうとするものの、ティンの行動範囲を優子が殆ど力バーしている為、動き様がなかった。

だから。

「ラルシア！」

「お嬢様と呼べ！」

「やたら仮面が豪勢な奴がいると思うんだけど！」

「ああ、あの仮面がやけに厨二臭い奴？ あれが？」

「奴が指揮官なんだ！ あたしの足じゃどうにも出来ない！」

直後、朱雀は動きラルシアが放ったであろう斬撃が宙を刻み込む。当然、傍にいた護衛の身を切り払うだけに済んだが。

「ふむ、すばしっこい」

「なるほど、さっきの質問はそういう意味か」

優子は呟くと眼が白く輝きはじめる。そしてふっと消え去り。

「ならば答えよう、恐らく追いつかないと」

直後、朱雀の肉体が優子の剣によって貫かれていた。
シャイングローリー

「又グウツ！？」

「だが、剣士は追い付かないなら追い付かないなりで工夫が幾らでも出来る。こんな風にな」

それは工夫と呼ばない気がする、とか言うてはいけません。

ティンは何をしたのか、と問う前にやるべき事に気づく。何を？ ほら、思い出そうぜ。撃破した四天王が今までどうなったかを。

素早くティンは貫かれた朱雀の下に移動し、優子を退かして朱雀を切り裂いてその残骸を蹴り飛ばす。

「申し訳ありません、我が主」

「いいよ別に。ゴミに期待なんかしていない」

直後、宙に浮いた残骸は轟音を響かせて爆発を引き起こす。凄まじい衝撃波の前に優子とティンは腕で顔をガードした。

「……誰かの声が聞こえた気がしたが」

「あたしも。気のせい？」

「いや、気のせいじゃない。確かに僕が言った」

声のする方、朱雀が爆散した跡。そこには確かに誰かがいた。

朱雀が落ちる日（後書き）

ついに出て来た親玉。物語が終わるのか否か。いや終わらないけど。

じゃあ次回またね！。

無駄だ何て言わせない！聖剣と神剣の共演！

二人は行き成り現れたローブ姿の男を見る。

顔を曝し、冷たい視線でティンを見抜く。

「君か。神剣を持っているのは」

「お、お前、は？」

ティンの問いに男は深いため息を漏らす。そして物鬱氣にティンに向けて言葉を吐く。

「君は、この期に及んで何にも察しないのか……一体、今まで何を生きてきたんだい？」

「は？ 何を言ってる」

と、ティンは誰かに頭を踏まれた。思いつきり地面へゴーな感じに。

「ですから、あれが敵の親玉でしょう！ 貴方は、今まで何をしていたんですかっ！」

「い、痛い……」

「全く、随分と下らない事をしている。そんな事に興じるなら、僕の計画に協力してくれた方がよほど建設的だと思うよ」

ティンは立ち上がると砂埃を払って敵の親玉を睨む。

「嫌だね！」

「何故だ？ そんなことをするより、僕の計画に加担するべきだよ。そんな、無駄な人生なんて止めて」

「人の剣無理やりぶん捕ろうとして、言う台詞がそれか！」

ティンは怒りを顔で示して男を睨む。

「当然さ。君の人生なんて、特に意味なんて無いだろう？ なら、とつと死んで僕にラグナロックを譲ってくれ。その方がまだ有意義だ」

「あたしの人生勝手に決めるな！」

「ふん。では聞くが約十九年間、君は何をしてきた？」

「えっと……」

「即答出来ない様な無意味な人生だろう？　なら、とっとと止めた方がいい」

「まるで、わずか数十年で人の人生全てが決まるかのような言い方だな」

言ったのは優子だ。強い意志で男を射抜く様に睨む。

「その通りだよ。人に人生の価値は、大体それくらいで決まるものだ。その間、君は何をして来た？　鍛錬？　それこそ無意味と言うものだ。何も成しては居ない」

「これから成せば良い」

「理想論だ。話にさえならない」

「まるで、努力から逃げる子供だな。見ていて見苦しい」

優子は彼をせせら笑う様に言った。いや、実際ににやりと笑っている。

「君には分らないだろう。理解出来る筈も無い。さあ、速く僕にその神剣を寄越すんだ」

「嫌だよ！　と言うか、その台詞で寄越せなんて言われて寄越す奴が居るか！」

「何故だい？　君の人生なんて無駄に過ぎない」

「無駄なもんか！　無駄って思う方が無駄なんだよ！」

ティンは剣を振るって叫ぶ。無駄だった物は何一つ無かった、と。

「虚しいね……君は自分の人生が如何に無駄だったかを理解していないとは」

「先程から聞いていれば、無駄無駄と……貴様はよっぽど何かを諦めている様だな」

優子はもう聞いていられんと、剣を抜いて切っ先を向ける。

「諦め……違うさ。努力など、所詮無駄な行為だということ。それは僕が今まで嫌と言う位教え込まれた。だから求めるのさ、神剣を」「貴様、その言葉が支離滅裂だと分っているのか？」

「何の話だい？　さあ、速く神剣を」

「もういい」

ティンは抜いた剣を構え、相手を見据える。

「全部終わらせる」

「同意権だ。ああ言う馬鹿は切り伏せるに限る」

優子とティンは同時に駆け出し、ローブの男に切りつける。

が、そこにローブの男は居ない。二人は背後に向くと悠然と男が立っている。

「ほら、無意味だ。永い間積み重ねた鍛錬も、何の意味も」

瞬間、ローブの男の身体に槍が突き刺さる。

「言っただろう、意味など後で成せばいい」

「そう」

ふっと消え、ティンは背後の剣を振るうとレーザーソードと剣が交わる。それを握り締めるのがローブの男。

「ほっ、流石の読みだな。“メアリー”」

「な、に……」

ティンは思わず呻き、男を蹴り飛ばす。

「メ、メアリーって誰だよ！？ あたしはティ」

「それは君が、後で付けられた名前だろう？ 君にはちゃんとした名前がある。両親が付けてくれた、ちゃんとした名前が」

「う、五月蠅い……」

ティンは思わず、震えながら一歩ずつ下がっていく。

「あ、あたしはティンだ」

「違う、君はメアリーだ」

「ち、違う、あたしはティン」

「違う、君はメアリーだ」

「ティンだよ、あたし」

「違う。君の本当の名前は——」

「あたしはティンだ、ティンだ、ティンで良い、ティンが良い——」

「メアリー・スーウェル。それが、君の本来の名前だ」

「……スーウェル？」

それにいち早く反応したのが、さつきから暇そうにしていたラルシアだった。

ティンは体中が震えていた。瞳孔が完全に開き、体中が震えている。

口の中で、何度もつむぐ。

「あたしはティンだ」

壊れた機械の様に、何度も何度も繰り返す。やがて。

「精神不安定か。君の中で、親の話は禁句の様だね」

「あ、たし、は……ティン……ティンだ……ティンだッッッ！」

瞬間、ティンの体中に線が浮かぶ。体中に張り巡らされた線が、光が体中を駆け巡り、やがて爆発が起きる。

手を翳す。荒野を振動させるほどの強大な衝撃波が生み出されていく。

「来たか、神剣の輝き！ 神々の黄昏！」

ローブの男だけが、歓喜する様に叫ぶ。

「素晴らしい、これが、これがああッ！」

翳した手に光が集い、やがて十字の形を作り、その姿を顕現する。その名は。

「これが、十字神剣ラグナロク！ ついに、ついにこの目にッ！」

直後、ローブの男が光に包まれるように切裂かれる。

「くっ……まだその時じゃない、一時退却するか」

そう言っただけでローブの男は消え去る。しかし、ティンは依然暴走したままだ。

「って、待て。こいつどうする、と言うかどうなっている？」

「あのですね、これはどう見ても魔力の暴走でしょうよ。こんなに簡単に怒るとは思っていませんでした」

ティンは獣の様な咆哮を上げ、優子に切りかかる。

対して優子は剣を持って対応するも、神々しき光の前に気圧されるだけだ。

「おい、幾らなんでもあんなの相手に出来んぞ！？」

「ああもつ、こんな事になるなら」

「だから、あたしを呼べて言ったんだ」

ラルシアは驚愕の表情で背後に振り返る。そこに居るのは。

「女王陛下！？」

エーヴィア・デルレオン。デルレオン公国公爵にして、イヴァー
ライル王国現女王である。

彼女は純白の鎧に純白のマントを羽織っている。真っ白ではある
が、彼女の戦闘服だろう。

「全く、あたしが居ない所で勝手をやるな。つかティン、これが
お前の事情か」

エーヴィアが腰の剣を抜くと同時にティンは切りかかる。エーヴ
ィアは、まさかのティンの攻撃を受け止めた。

「神剣か、流石にきつい……が」

ティンを蹴り飛ばし、距離を取る。

「やれない訳じゃあないな……おい、お前らは下がっている。この
馬鹿はあたしが寝かせる！」

エーヴィアはもう一本の剣を引き抜くと光の魔力を通す。

「うああああああああああああああああああ！」

「うるせえよ、ちつと黙れッ！」

エーヴィアの持つ二振りの剣は極光を纏い、極大の光の剣と化す。
それらを構え、振るうッ！

「ツイスト・エクスカリバーッ！」

光と光が爆発を起こし、夜が朝の様な輝きに満ちる。

ティンはラグナロックを操り、エーヴィアに何度も斬りつけるが、
それら全てをエーヴィアは斬り捌き、受流していく。

極光の長剣、対する極光の双剣。長剣の斬線は一見荒れに荒れて
はいるものの、その軌道自体はまるで針の穴に糸を通すかのような
正確さだ。

しかし、女王の繰り出す剣戟も一切の劣りは無い。荒れている様
で繊細な剣戟を実戦的な剣の軌道が次々に捌いていく。

「くっ……おい、起きろ！ ライト、レフト！」

—— お呼びで、女王陛下。

—— こんな真夜中に、暗殺者ですかい？

エーヴィア女王の頭に剣に封印された異界の天使達の声が聞こえる。

礼儀正しいのがレフト（ガードの付いた細身の剣）、軽い調子なのがライト（鍰が羽根の形となった騎士剣）だ。名前の由来はそれぞれ左手に持つ剣と右手に持つ剣。命名者は女王陛下。

「神剣の舞剣士が相手だ！ 気張っていくぞ！」

—— それは、また大層なお相手を。

—— はっ！ 天界を追われ、罰として剣にされた我らが神剣を相手取る！？ 最高にイカしてるじゃないですか女王陛下！

エーヴィアの剣は更に活性化を始め、より強い光を放つ。

「いくぞ、光属性魔法剣技最上級最上段ッ！ シングルエクスカリバーッ！ クラウ・ソラスッ！」

エーヴィアの纏う光は余計に強まり、正しく太陽の如くの輝きを持つ。

同じく、太陽の如き極光を放つティンの剣が目前へと迫り、エーヴィアは二振りの極光を放つ聖剣を神剣に叩きつける。

激しい光の爆発が交わり、夜を昼に変えるどころか、もはや一種の太陽を生み出してる程の勢いだ。

時代が時代なら、これだけで神話が出来ているあるう光景。それほどに激しい光の濁流。

両者は弾かれる様に距離を取り、力を溜める。

—— 陛下、あの、悲しみにくれる墮天使たる私が死を覚悟しているのですが、それについて意見を。

—— 陛下、心無くした狂気の天使が正気になる衝撃を食らったんですが、これ次あたしら生きてる！？

「死ぬ気で頑張れ、これが神罰か神の試練ってもんだろ。さあいくぞ、つつかくるぞ！ 相手はラグナロク、エーヴィア・デルレオ

ンの剣であれた事を誇って戦え！」

――陛下、それ死亡確定。

――死ねと言いますか、流石はエーヴィア女王。

二人の天使の声なぞ無視してエーヴィアは極光の剣を振るう。

ティンが繰り出す、狂乱かつ繊細な剣戟。対するはエーヴィアが二振りの剣から放つ実戦的な無駄の無い正確な剣戟。

これら二つが重なり、ぶつかり合い、何度も何度も激しい激突音を響かせる。まるで間隔も無く連続で叩き続けられる鉄の様な、マシガンの全弾を全て叩き込んでいる様な。

ある種、一番驚いているのはティンではなくエーヴィアである。

剣の数だけで手数の上では勝っている。勝っている、のに。双剣の扱いは慣れているし、鍛錬を怠った記憶も一切無い。なのに、だ。

なのにこの聖騎士殿は長めの剣一本だけで食いついてくる。力を入れずに技術だけで扱う剣故の芸当。柔軟かつ素早い剣戟。エーヴィア自身もただ驚き、その剣を捌いていくしかない。

「はっええな、くそっ！」

エーヴィアは暴れ狂うだけの光と思って少し油断があつたのを認める。

だが、暴れ狂うだけで此処まで激しい攻撃が生み出せるものだろうか。

（違うな、こりゃ。明確な敵意か。加えて感性だけで剣を振っている。まったく、面倒なッ！）

心内で舌を打ちながらもはや一種の暴風と化したティンの剣を捌き尽くす。

ティンの攻撃は次々に位置を変えて行く。上段から中段へ攻撃箇所をずらし、しつこく剣を回転させながら何度も何度も攻撃を加えていく。縦横無尽、自由自在、変幻自在の剣が一本だけで二刀流の剣を圧倒し、手数の上で上回ってさえいる。

ティンの特有の剣がこれでもかと言わんばかりに色濃く強く浮き出てエーヴィアの剣を押し込んでいく。

ラグナロックに魔力が流れ込まれていき、余計に膨張して長剣から大剣へと変化する。

（ラグナロックって純魔力製の剣だったけか……？　じゃあ重さも無しかッ！）

ティンは獣の様な咆哮を上げてエーヴィアに切りかかる。エーヴィアは身体を捻り、右から前から左から後ろから斬りかかるティンに対応する。

エーヴィアは一見防戦一方だ。

ちなみにこちらは野次馬。

「……一体、何がどうなっていますの？　この音は一体」

「何だ、腹黒お嬢様は理解できないか」

優子お嬢様の意見にラルシアお嬢様は力チンと来た様子。

「ああら、反抗期真っ盛りのお嬢様が人を腹黒呼ばわりは止めて欲しいですわねえ」

「誰が反抗期真っ盛りだ、猫被り女が」

「……どうやら、貴方は一度ぶちのめされたいようですわねえ」

「面白い。腹黒お嬢様が何処までやれるのか、試すのもまた一興」

究ううううう　極奥義iiiiiiii　以下アツツツ！

省おお略うツツツツ！

と言う感じに頂上バトルが行われてるその近くでつまらない小競り合いを始める二人。だがすぐに止めた。だって隣の光が余計に強くなったのだから。

「……一体、何がどうなっていますの？」

「気付かないのか？」

二人はちよつとボロボロになった衣服をただして光を見る。未だ鳴り響く激突音。ガトリング砲を至近距離で鉄の壁にでも打込んでいるかのような激しい打撃音が未だ鳴り響く。

「これは剣と剣がぶつかっている音だ」

「……冗談にしては笑えませんか」

「冗談ではない、本気だ」

「……本気で笑えませんか。ガンガンどころかガガガつとなつて
いるこの音が、剣の音？ 一体どういう速度で斬り合っていると言
うのですか？」

「一度、あの剣士とやり合ったからな。あいつの剣ならおそらく此
処まで行くとは思っていたが……」

片方は寝言はベッドで言えと顔で表現し、もう片方は呆れ半分に
光を見つめる。

その中、ティンとエーヴィアの攻防はとうとう大詰めとなる。

まず、今まで捌くだけで手一杯に見えたエーヴィアの動きが変わ
った。防戦一方だった剣が急に攻撃的になる。

防御を抑え、ティンの剣は抑えて自分の攻撃を確実にティンへと
押し込むッ！

ティンの頬をエーヴィアの剣が掠め、エーヴィアの肩口をティン
の剣が派手に挟み、身体に剣を滑らせていくが、エーヴィアもそ
れより先に身体を動かし、攻撃を加えてティンが刺した剣を支えに
飛び越えるッ！

結果、エーヴィアの攻撃がティンの腹を掠め、ティンの剣がエー
ヴィアの肩から心臓の方へと剣を押し込んで更に傷口を深くしなが
らティンは背後を取るも直後にエーヴィアがもう一つの剣を振るい、
ティンは身を屈めて剣を構え。

「クラウ・ソラス！」

ティンの剣がエーヴィアの足を掠り、エーヴィアはティンの顔面
を蹴り付ける。

二人はまた距離が開き、ティンは体勢を戻すと再びエーヴィアに
襲い掛かる。

エーヴィアは両方の剣に光属性魔法剣技最上級最上段エクスカリ
バーのオリジナル発生剣技、クラウ・ソラスを展開する。

展開直後、ティンがラグナロクをエーヴィアに叩き付ける様に
振り下ろし、エーヴィアは剣でそれを弾いて空いてる剣をティンに
振る。しかし振った先にティンはなく、エーヴィアは振り向くが

エーヴィアの剣と共に黄昏の名を持つ六つの光柱がティンを貫いた。

光は弾けた様に霧散し、そこには膝を付く女王陛下と徒手のティンが寝ていた。

「おい、帰るぞ。ラルシア、この馬鹿を持って城へ行く」

「分りましたわ」

「あんたも来るか？」

エーヴィアは優子に声をかけるも、本人は踵を返す。

「いや、後日改めてくる。さらばだ」

言うだけ言うと優子は去った。どう言う走法かは分らないが、あつと言う間に見えなくなる。

「……じゃ、行くぞ。いい加減疲れた……」

無駄だ何て言わせない！聖剣と神剣の共演！（後書き）

クラウド・ソラス。

エクスカリバーの発展系光属性最上級最上段魔法剣技。

膨張と収縮、そして光の拡散により索敵と範囲攻撃などを行う。

しかし、今回のでは効力を発揮する前にティンの猛攻でほぼどうしようもなく終わっている。

ちなみにエーヴィア陛下はこの作品でも指折りのチートキャラである。

明けない夜は無く、君の朝はやって来る

夢を、見ていた。

ティンはただ、ただただ夢を見ていた。

見知らぬ男女に抱かれる赤ん坊。見覚えは無い筈なのに、顔も分からぬのに、その男女も家も赤ん坊も懐かしく感じる。

いや、分かっていた。

全部分かっている。この光景も。家も。男女も。何もかも、ティンには懐かしかった。

ただ認めたくはない。認めたくはないだけである。

なぜならこれは――これこそが、ティンと言う少女の、正確にはメアリー・スーウエルの本当の家、真の家族なのだから。

まるで早送りでもする様な、アルバムの次のページを捲る様な感覚でメアリーの、本来あったであろうティンの人生を見て行く。

両親に囲まれ、何らかの要因によって多大な魔力を抑え込むことに成功した世界。

まるで、悲しみだけを取り除いた様な世界だった。

悲しみ？ 悲しみとは何か。ティンの人生は悲しみだらけか？

毎日、来る日も来る日も両親のいない人生を嘆くばかりであったのか？

答えは、否と彼女は答えるだろう。

ではこちらが悲しい世界か？ それなりに裕福な家に生まれ、両親に囲まれて所謂“ごく当たり前の幸せ”を得ているこの世界か？

答えは、否と彼女は答えるだろう。

今ある人生が一番と答えた彼女でさえ、もう一人の自分が何時までも笑顔でいる事を否定する気にはなれない。

屈託のない笑顔を見せる彼女を見ると、一体何が良いのか分からなくなってくる。

気がつけば、メアリーは剣士になっていた。

親の仕事を手伝い、ラルシアや優子などと分け隔てなく接している自分。

中にはラルシアと仲良さそうに口喧嘩をしている蒼髪の少女とも仲よさげに接し、優子とも仲は良さそうである。

（……あたしの実家って、お金持ちなんだ）

自然と思った。もしかしたら、あのドS意地っ張りの見栄っ張り女とは何れ出会う運命だったのかも知れないとも感じる。

ふと、夢がぼやける。夢に浸り、あり得たかも知れない虚像に溶け込む時間は過ぎた。

残酷な真実を等しく万人に与える様に、現実が彼女を引き上げる。そして声が聞こえた。

「スーウェル社。約十九年前に原因不明の何かが起きて急に倒産した会社ですわ。主に株の売買を行っていた会社です。子息女誕生後、次々に社員の首を切り、または他社へと推薦した後にあつと言う間に倒産して夫妻は夜逃げ……彼女は今年で十九。年齢も時期も一致します」

「……何か不自然な感じがすんな。商売も出来なかったのか？」

「ティンの事情が事実なら、余裕なんて無いでしょうね。生まれた頃から何時乖離するか爆発してもおかしくは無い。何よりスーウェル社は魔法には疎い家だったのも不幸と言えば不幸でしたわね」

現実に戻って来たティンはぼんやりと言葉が耳に入っていく。ただ頭に残らず全部漏れていく。

そんな彼女を無視して二人は会話を続けていく。

「んで、ティンの両親はその後どうなったんだ？」

「不明ですわ」

「不明って……生死不明か？」

「ええ。どこかで野垂れ死んだか、それともひっそりと生きているのか……一応スーウェル社は一代で大きくなった実績があります。その気になれば一から企業を起こし直すことも出来なくは無いですよ」

「難しいのか？」

ラルシアは困った様な表情を見せ、エーヴィアも問い返す。

「そもそも資産が完全に底をついても信用があれば銀行からお金だつて借りれるでしょう。それさえないのか私には分りませんし」
わたくし

「お前はそう言う情報を何処から拾つて来るんだ……？」

確かに謎だが気にしてはいけませんよ女王様。気にしたつて藪から蛇が出るかも。

「情報屋に探偵を駆使し、知ってる輩に黄金色のお菓子を仕込めば洗い浚い全部語ってくれましたわ」

「……聞いた私が馬鹿だった」

まあこんな感じです。と言う事でティンさんもゆつくりと布団を捲つて身体を上げた。

見れば、やけに広い部屋。その一角でエーヴィアとラルシアが語り合っている。窓が遠いがやけに大きく、朝日が部屋を照らしている。そして、やっぱり天蓋付きのベッドで寝ている。

「……えっと、あたしどうして此处に？」

ティンは昨日を思い返す。

（そうだ。昨日四天王の朱雀とか言うのに襲われて、何か親玉みたいなのが出て来て……あれ、出て来て、どうなった？ あれ、思い……出せない？ 何が起きた？ 何があつた？）

「おい、ティン。あんま気にすんな」

と、そこまでいつてティンの思考をエーヴィアが止めた。言われなくても、止まらない。

（え、っと……あいつがいきなり……何だっけ。何て言つたんだっけ。馬鹿にされた、じゃない。何だ？ 何を言われた）

「おい、ティン」

そこでティンは思いつきり肩を揺さぶられ、手の主を見る。まあ、やはりと言うか女王陛下なのだが。

「えっと、何か？」

「気にすんな。昨日の事は、まああれだ。ちょっとした事故だ」

ティンは首を傾げる。全く持って要領を得ないのだから当然だ。
「貴方の本名大公開で魔力暴走、女王陛下がそれを一方的にボコった。以上」

「一方的にボコってねえよ。寧ろ苦戦したよ、二度としたくねえよ
後人が気を使つてんの気付けよ何無駄にしてんだよ」

「隠すより直球が一番ですわよ？」

エーヴィアは唸りながらティンを見る。実際問題は彼女だ。

ティンは虚ろな目で空を見る。徐々に思い出しているようだ。

「貴方の本名は、メアリー・スーウェル。スーウェル社の元社長令嬢」

「違う、あたしはティン」

ティンの答えは速い。彼女にとって、この話題は嫌らしい。だが。
「ええ、それが貴方の思う貴方の名なのならそれで良いのでは？
でも、戸籍上では間違い様もなくメアリー・スーウェルですわ」

「……メアリーなんて、知らない。あたしはメアリーなんかじゃない」

返答は頑なに否定。

「そこまで親を憎む道理でも？ 貴方に生を与え続けたのはご両親
では？ 感謝くらいしても」

「あんな奴らッ！ あんな奴らなんて如何でも良いッ！ 愛なんて
要らないしおせっかいだッ！ おかげでこんな、こんな……ッ！」
膝上に掛かった布団を握り締め、彼女は必死に否定する。

何か、変だ。

「両親を憎むのは簡単ですわ。だって所詮、親など単なる単語。憎
もうと思えば幾らでも憎める。でも、心底憎めるかと言えば、どう
でしょうねえ」

「……何が言いたいんだ」

ティンはラルシアを睨む。怒りと敵意を——いや、はつきりとした
殺意も混ぜて。

「ですが、貴方の両親は生きているかどうか定かではありません。

のたれ死んで居るかもしれせんし、どこかでひっそりと生きているのかも知れせんわねえ」

「……だから、どうした。そんなの、あたしに関係あるか！ あいつらが生きていようがいなかるうが」

「ほら、矛盾。死んだ対象を憎み続けると言うのですか、貴方は？」

「な、にい……ッ！」

ティンは全身の毛を逆立てる様にラルシアを睨む。強く。でもそれは、単なる強がりには見えぬ。

対するラルシアは酷く達観している。以前は親など如何でもいいと同意していた彼女が。

「貴方は壊れているのよ、ティン。もうボロボロなほどにね」

「壊れてる……？ 壊れてない、あたしはまだ戦える！」

「まともに言語を理解出来ない馬鹿が偉そうな口を叩くなッ！ 本当は親を憎んでもないくせに、本気で如何でもいいと、生死さえも気にしていないくせに！ 貴方は一体、何がしたいんですの？ 何を求めて生きているんですの？ お前は今日この日まで、一体何をしていたのか、はつきりなさいな！」

「あ、たしは……」

ラルシアに怒鳴られ、ティンは引つ込む。ティンは本当に、今日と言う日まで何をしていたのだろうか。

考えれば、考えるほど、情けない。親の話が浮上して、それを斬って、誰からも見捨てられたような思いをして、そのまま家出して、途中であつた人と遠くに来て、仲良くなつて、追っ手が来て、自分はどうしようもなくて、友人に助けられて、また来た追っ手も別の友人が何とかしてくれて、剣が欲しいと願って、聖騎士と言うものを教えられて、なりたいたと、誰かを守る自分になりたいと願って、そしてまた来た追っ手を自力でどうにかして、アルバイトして、追っ手を自力で追い払って、その時やつと自分も誰かを守れたとか思つて、その後闘技場に行つて、追っ手が来て、結局友人を守れなくて、逃げ出して、八つ当たりして、あの城に運ばれて、仕事を無理

やり手伝わされて、その後城を出て、追っ手を追い払って、今此処だ。

その間自分は如何だった？ 誰かを守れたか？ 大切だと思えた人を、守りきれたか？

（何一つ……守れて、ない）

守れたかも知れない。少なくとも、そう思っていた時期はあった。だが今のティンはそれさえ認められなかった。

言われても見れば自分は壊れているのかもしれない。心は何ともないと思っただけ……いや、そう思う事さえ単なる強がりになさえない。それでもせめてはと自分らしくあるうと思いが、そもそも自分らしいってなんだったか。ろくに思い出せない。

「一先ずは食事にしましょう。此処ではまともな食事もないでしょうし」

言つとラルシアは指を鳴らしてティンを腕を引つ張る。例の如く彼女は高級そうな寝間着姿であった。そしてラルシアはティンを引っ張って部屋の外に出ると——そこは、デルレオン公爵館の客室であった。正確には、ティンが寝泊まりしている部屋。

ティンは驚いて続いて入って来たエーヴィアを押し退け、部屋の外に首を突っ込む。するとそこは高級そうな寝室が——無く、客室前の廊下があった。

「ドアに転送の術式を張り付けただけですのに、何をそんなに慌ていらつしやるやら」

「そう言う事は早く言えよ！？」 と言うかあたしはさっきまでどこに居たの！？」

「わたくし私の実家。魔力暴走後、気絶した貴方に身体上問題が無いかわべさせたんですよ。感謝こそされても文句を言われる通りは無くつてよ」

ラルシアは呆れたように言つとエーヴィアと共に部屋を出た。直後、ティンは背後に忍び寄って来たメイド達によってあつと言う間にコスチュームチェンジされたのは言うまでも無い。

毎度お馴染みと言える様になって来た聖騎士の服を着たティンが食堂に來ると見覚えがある様でない人物がそこに居た。

黒い髪を肩口で切り揃え、揉み上げを胸元まで伸ばした女性。作者は作中で彼女の外見描写を何度行えば良いのか分からなくなつて来た頃合いです。

彼女は席に座つて紅茶を啜っていた。そう、彼女こそ。

「こいつだれ？」

「昨日の事を全部忘れやがりましたか、この脳無し。お前には記憶力と言う物がありまして？ 大体お前の頭に物が詰まっているのですか？ 詰まつて無いに決まっていますでしょうが言つて御覧なさいなこの鳥頭」

ティンは黒髪少女を指さしたままラルシアからいつも通りの罵倒を叩き込まれる。流石だティン、昨日共同戦線張つた人を忘れるなんて凄えや！

で、指差された彼女はゆっくりと紅茶を置き。

「……それは、斬つて欲しいと言う事が、貴様」

「喧嘩なら外でやれ。此処で暴れんな」

ゆらりと席を立つ。黒髪少女――優子（ちなみに年齢二十歳）は剣に手をかけるも、エーヴィア様の言葉に渋々引き下がる。

ここは食堂。食事をする場で斬つたはつたは確かにマナー違反である。

「で、こいつ誰？」

「ようし表に出ろ、剣で分かせてくれる」

「食堂で剣を抜くなつてんだろが。後喧嘩の前に飯食え飯、朝飯食つた後にしろ」

「女王陛下、非公式とは言え言葉使いがはしたないですわ。後セリフが主婦臭いと思うは個人的にどうかと」

直後、ラルシアが急に現れた座布団に突つ伏される姿が見えた。

まさか彼女までも実力行使されるとはエーヴィア女王恐るべし。座布団何処からとか言う突っ込みはなしで。ちなみに座布団をセットしたのはルジュさん。

そんなこんなでティンと優子は仲良く並んで座って朝食を取る事に。

「ティン殿、今朝の朝食はどの様に」

「肉！」

「では和食を。今朝の朝食は豚汁でございます」

ルジュさんが言うのとティンの前に漬物に白いご飯に豚汁と大根おろし付きの魚が出される。きちんとこの世界には大根だつてあるのです。どうでもいい。

ティンは素晴らしい笑顔で豚汁と銀シャリを頂いております。優子さんは凄い顔で睨んでいます。

「光栄家のお嬢様は体裁を取り繕うて事はしないのですわねえ」

「ふん、貴様みたいに仮面を貼り付けて生きるよりは遙にマシだ」
ラルシアの挑発に盛大に乗る優子。ラルシアは口だけで同い年の相手に「青いなあ」と動かす。

彼女は調子が宜しいのか、更に軽快に言葉を紡いで行く。

「つつふ、貴方は偽るのはお嫌い？」

「ああ嫌いだな。お前の様に誰にも彼にも仮面を付けなければろくに付き合いも出来ん奴はな」

「自分を偽るのは当然では？ 寧ろ人は何かしら誰かを騙して付き合っているのではなくって？」

「……記憶に無いな」

「おい」

二人の言葉をぶつた切るようにエーヴィアが紅茶を口にしながら言葉をつむぐ。

「喧嘩なら外でやれ。ラルシアも挑発はするな。後、優子とか言ったか？ あんたもこいつの挑発と戯言に一々突っ掛かるな。面倒だぞ」

「……ふん。おい、その金髪。名前を何て言うんだ」

ティンは一切反応せずに焼き魚を頬張っている。優子は思わず抜剣しかけるが何とか抑え、刃を見せるだけに留める。剣は力タカタ震えているが全力で抑えている。

「……おい、ティン。ちょっとこっち向け」

ティンはエーヴィアの言葉を全力スルーして豚汁とご飯を食べる。あ、食べ終わった。

「おい、ティン」

「あ、おかわり！」

と、エーヴィアさんの言葉を総スルーしてそう言うとすぐさま豚汁とご飯が用意され、ティンは食事を再開する。あ、女王陛下の額に青筋が。

エーヴィア様は勤めて笑顔で、青筋を顔中に浮かべながら言葉を出していく。

「……おいティン、聞いてないなら殴る。沈黙は肯定と取るが良いか？」

「ん？ ふおーかひふあー？」

ティンは豚汁ご飯をもつぐもつぐしながら返す。

「おう、ちよっと聞けや。後食うの止める」

「やふあ」

ティンは言うてからまた食事に取り掛かる。エーヴィア女王は指を鳴らし始める。

「あの、女王様落ち着いて下さいませ、あの怒っては」

「ああ大丈夫。大丈夫だ」

汗を流しながらラルシアはエーヴィアを宥める。当人は凄くいい笑顔だ。額中に青筋立てているけどな。

と、そんなやり取りの間にティンは食べ終えたらしい。

「おかわり！」

近くに居たルジュはティンが突き出した茶碗を奪い、持っていた箸を取って下がると直後にエーヴィアがティンを引き摺って行く。

この後どうなったかは受け手のティンさんの悲鳴でご判断下さい
「え、何とうしいたたたたたたた頭頭頭はあああああああ
あああぐへえツ!? く、首、す、脛はすねはあああああああ
ああああああ痛いたいたイタイイタイいたいたいたいたいた
いたいたいたいたああああああああああああああああああ
ああああああああおろして下ろしておろしいいいいいいい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ!? ぐへえツ
!?!」

ちなみに詳細。両手で頭を絞めつつ次第にアイアンクロウから首殴打へ続いて脛を殴って殴つての連打から尻を蹴り上げ二刀による空中に留まる永い間落さないコンボをやって一気に地面に叩き付けたのでございませう。

「……あーいや、いい。私はこれで失礼する。彼女に伝言を頼めるか？」

「次こそ決着をつける。剣路道場で待っている、とな」

る。ちなみに食った物を戻していないのは女王陛下下の配慮である。

明けない夜は無く、君の朝はやって来る（後書き）

最近、ティンが殴られキャラとして定着しつつある様なきがする。主な原因は作者とラルシア。ラルシアが容赦なくティンを殴ってると思うんだ。

んじゃ、次回。

遅れた出演者

ティンは、今やっと気付いたことがある。

それは、この公爵館には結構人が住んでいることに。

女王陛下にボコされてから十分で気絶復活すると——現実はいーヴィア女王陛下に無理矢理叩き起こされただけである——ティンは第二中庭に引きずり出された。

「……で、何でここに連れて来られたの？」

「仕事だ。一先ずうちの騎士団を鍛えてやって欲しい」

イーヴィア女王陛下に続いて「よろしくお願いしますッ！」と言う男の野太い声が響き、甲冑姿の男達が一斉に頭を下げる。

ティンは訳が分からずにイーヴィア女王に顔を向ける。

「なに、どゆこと？」

「つまりはだ。うちの騎士団連中と模擬戦でもして鍛えてくれ。暇なんだから、そんぐらいやってくれ」

「……はあ」

ティンは言葉を返すと整列している騎士たちを見つめる。

「如何すればいいの？」

「まあ、あれだ。こいつらが襲って来るから返り討ちにしてやれ」

イーヴィアが説明を終えると再び男たちが「よろしくお願いしますッ！」と一斉に声を上げる。

「……分かった」

ティンは渋々了承すると、イーヴィアの側に見慣れない人影がいるのに気が付く。

何だろうとそっちに目を配るとイーヴィアの肩までしか背が無い（と言ってもティンからすれば十分大きい。イーヴィアが大きいのだ）朱髪の短くカットした青年がひっそりと立っている。

「誰そいつ」

「ん？ ああ、こいつか」

エーヴィアは言われてそっちに目を送る。その二人の佇まいを見てティンは。

「親」

「側近だ。親子じゃねえよ」

エーヴィアは率先してティンを黙らせた。対して青年は何処か残念そうだ。

「後、一応彼氏だ。うん」

空気が凍った。見事以上に空気が凍り付いた。ティンもコメントの困った。

いきなり彼氏だ。驚くなつて方が無理である。

「おい、火之志^{ひのし}」

凍った空気の中、女王陛下が声を絞り出す。

「……言い出したあたしが恥ずかしいって如何言うことだてめえっ！？」

「お、俺が知るかつ！？ 勝手に自爆したのお前だろうが！？」

「うるせえよ手前が責任取れよ！？」

「知るかよ！？ 俺だつて恥ずかしいわ！」

とエーヴィアは顔を真っ赤にして火之志の胸倉を掴みあげる。対する彼も顔を真っ赤にして言い返す。この様子を見たティンは一言。

「ああ、これが痴話喧嘩」

なんて言おうものだから二人から剣を眼前に突きつけられるのだ。ティンも動こうにも動けずにいるとそこにラルシアが通りかかった。

——のちに彼女は語る。ラルシアが天使に見えたのは後にも先にもこれが一回きりだったと。

彼女に言えばきつと「あら、私は何時だつて天使のような存在ですわ」と言つてのけるのだろう。ちなみにティンがこう語るのは理由がある。なぜならラルシアは笑顔で二人に。

「あ、ところで女王陛下。お世継ぎご出産の予定はいつですか？」

等と言うのだから。

本人的には最後に「なるべく早くして下さいませ。あ、その前に婚姻が先でしたか？」と言いたかったのだがこの二人（主にエーヴィア）を相手に何時までも冗談——と言つか冷やかしを言っていて高速度ダッシュで逃げた。

が、当然この二人は黙って逃がす気は皆無らしく、無言で仲良くラルシアを追いかける。

取り残されたティンは取りあえず。

「さーて、訓練始めるぞー」

仕事をすることにした。

訓練とは言うが実際はティンによるワンマンショーに近い。

次々に襲い来る城の兵士をただただ何時も通りに斬り倒すだけだ。しかし、今までの様な機械の兵隊とは違い武器を持った人間な為か何時も通りと言う訳にもいかない。もっと言えば集中リンチではなく一人一人相手にして行くのだ。

甲冑姿に剣と盾を構えた兵士がティンに向かって突っ込み、盾を突き出して隙間から剣を突き出す。

対するティンは突き出された盾を蹴り、足場にし、踏み越え、兜の隙間から首元に剣を突き刺し、そこから剣を軸に相手を持ち越えて、反動で一気に剣を引き抜き、背中から一撃必殺の斬撃を送り込む。

すると兵士は走り込んだ勢いに乗って吹っ飛んで地面に倒れ込んだ。

「次！」

ティンの声に合わせて今度は大斧を両手で持った甲冑姿の兵士が一步前へ出、そこから武器を構えてティンに向かって突撃をかけて来る。

対してティンは剣を握り直して斧兵士と一気に距離を詰めて肉薄し、飛んで来る斧の一撃を潜る様に加速して腕を切り裂いて首元に刀身を埋め込んで一気に引き抜いた。

喉を貫かれた男は無言のまま力を抜いて倒れる。ティンは退かそうと蹴るが、微動だにしないので位置をずらして叫んだ。

「次！」

次に刀剣を両手で握った兵士が一步前に出て武器を構えてティンに向かって走って来る。それを見たティンは剣を構えて堂々と前から突っ込み、そして酷くわざとらしく真後ろに回った。

それを見た兵士は驚いて背後を振り向いた瞬間に背中を切り裂かれて地に伏す。

「次！」

と言った感じに次々と襲ってくる兵士達を見事に蹴散らして行く。ついにはあつと言う間に全ての兵士を切り倒していた。

「……えつと、これで終わり？」

「へえ……中々面白い戦い方をするんだ、君は」

と声に引かれて顔を動かせばそこには薄い笑みを顔に張り付け、灰色の長い髪とボロい灰色のコートを羽織ったて刀を手にした男が立っている。ティンはふと、こんな男居たっけ？ と首を捻るが妙に薄いと言う印象を抱いたので見落としたんだろうなと思ひ直す。

「えつと、あんたは？」

「俺？ 俺は氷滅。氷滅烈也。氷滅流剣術の剣士さ。この城の……客員剣士だとかになつてゐる。まあ、あれだね。旅をしていたら此処に流れ着いたのさ」

（……氷滅？ あれ、どこかで聞いた様な……）

ティンは頭を動かすが直ぐに止めた。だって疲れるし。

男は手を顎に当てティンを見る。

「うん、ちょうど良い。俺暇だったから相手してくれよ。此処の兵士じゃちょっと物足りなくてね」

そう言う手にした刀をコートのベルトに差し込み、居合の構え

を取る。

「んーまいつか。じゃあ行くよ」

ティンもそう返して剣を握り直す。そして二人は測った様に同時に駆け出す。

相手は居合を使用するなら十分に注意せねば一氣にやられる。そう思った刹那の瞬間——男は刀を抜く。

「氷滅流秘剣——雨閃・零式ッ！」

ティンは呆氣に取られた——烈也が剣を抜いたことではない。その斬線にだ。

その斬線の軌跡は正しく、雨。男の通った後には降り注ぐ剣の雨、狂った様に繰り出される上段から下段への振り下ろし斬撃ッ！ ティンはそれを見て、剣閃の合間を見切り、雨を払う様に剣を振るう。二人は交差し、まるで試験の結果発表を待っているかの様な静寂の中、烈也静かに片膝を着く。

「なるほど。雨さえ切り払う、か」

と、静かに漏らすと立ち上がった。

「流石に零式は無理だったか……だがそれにしても良い腕前だね。君、凄いなあ」

「な、なんなの、今の技……狂った様に連続振り下ろして……」

「おかしいだろ？ これは雨閃の初期型でね」

烈也に身体に付いた砂埃を払いながら立ち上がる。

「うせん？」

「そ。“雨の如き剣閃”、名付けて雨閃さ」

「も、もしかして、それ上から使ったりする？ こう、連続突きで」

烈也はその台詞を聞いて驚いた様に。

「へえ、よく知ってるね。そう、式式は上から雨を模して突きまくるんだ」

その言葉にティンが盛大に驚いた。

「や、やっぱりだ！？ 氷滅に雨閃って仮面ブレードじゃん！

あんたどう言う関係!？」

「あ、君アレのファン？」

烈也の表情が変わる。こう呆れ果てたように。

「うん、そうだよ。少なくとも仮面ブレードの初代は大体実話。当時警官だったうちのご先祖様の伝記を、先祖の息子がどっかの出版社に持っていったら小説化して人気が出てTV放送になったのが初代。これ、ファンの剣士の間じゃ有名だよ？」

「う、うそおツ!？ あたし、いつも見てたよ! 最近までずっとよく見てたよ!」

仮面ブレードとはアーステラ全国で放映中の特撮物である。大体六十年も大昔から大人気シリーズである。あらすじは大凡『社会の裏で暗躍する悪を影から討つ、仮面剣士』の話。主人公は社会人だったり世捨て人だったり様々である。

これが原因で一時期剣士を志す人が急増したりするほどの反響があったり。

作中の基本的な設定として主人公は氷滅流剣術を使う剣士だと言う点である。ただこの氷滅流はシリーズが出る度に設定が変わっていき、年々シニール化している。

噂では街頭で出会った冒険者に脚本を書かせてる、と言うものがある。

「じゃあじゃあさっきの雨閃ってレイン・フラッシャー!？ うわ、あれが原型なの!？ 何かしょぼい様な……」

「いや、アレでの技は大体原型より無意味に派手にしているよ。と言うか、人間が使うんだからしょぼくていいんだよ。と言うかそれぞれちゃんと目的があって生まれたただけだね……」

烈也は呆れ顔で言い切った。それを見てティンは。

「ねえ、仮面ブレード嫌いなもの？ 面白いじゃん!」

「そう？ 俺としてはご先祖の奇行が元で作られたってイメージしかないけど」

「きこっ?」

「変つてことさ。剣士の癖に、こそこそと闇討ちなんて見つとも無い」

「な、何だつて!？ そこがつかいいんじゃないか!」

ティンは思いつきり反論する。自分の好きな番組を侮辱されたのだ、当然の反応とも言えよう。

「そんなもんかなあ……俺は別にどうでもいいんだけど」

「な、何イ!？」

と、そんな感じに烈也とティンは暫く対話した後、ティンは叫んだ。

「アンタ何か、大っ嫌いだッ!」

ティンは酷く不機嫌な気分で第一中庭へとやってきた。ふとラルシアの事務所に目を移す。理由はさっきの鬼ごっこの結果が気になるのだ。

と、そこで礼拝堂の近くに誰かが居ることに気が付いた。近くによつて見ると茶のセミロングの髪の修道服を纏った女性が竹箒で礼拝堂前を掃いている。

「何してるの? こんな寂れたところで」

「んなつ!？ 寂れたつて酷い事言わないで下さい! と言つか見ていれば分るじゃないですか、掃除ですよ掃除。全く最近の人は……つてあれ、貴女誰ですか? 新しい旅人さん?」

と、ティンが話しかけた途端に舌が回ること回ること。彼女も吃驚して少し引いている。

「え、あ、うん。えつと、シスターさん?」

「そそ、シスター・カレンですよーつと」

「え、華梨?」

「かりん? 誰それ、私はカレンです、カレン・フェイバツト」

「……えつと、か、りんじゃなく、か、れん?」

ティンは疑問系たつぷりに問うとカレンは満足気に首を縦に動か

すと。

「そうですね。で、教会へ何の御用で？ これでも一応聖職者の端くれ、お悩み相談から懺悔まで聞いて差し上げますよ？」

「いや、こんなさ」

とティンは上からしたへと視線を動かし、礼拝堂をじつくりと見回す。蔓が絡まり、今にも崩れそうな雰囲気、に礼拝堂だ。幽霊と出て来そうで、不気味である。

良くて年季入ってる……と言いたいがここまでボロいとそんな事さえ言えない状態である。

「廃墟に人が居るとは思ってなかったから、何かなって」

「あなたが私をバカにしてるのはよく分かりました」

ティンの失礼な物言いに青筋浮かべて返す。まあ寂れているとは言えども此処の礼拝堂に務めるシスターなのだ。自分の所属する教会を馬鹿にされたらそりや怒る。

「全く、騎士服を着ている癖に……え、騎士服？ 貴女がティン？」

「へ、あ、うん、あたしがティンだけど」

シスター・カレンはじろじろとティンの姿を上から順に見ていく。それに対してティンは怒って言い出す。

「もう、一体何なんだよ！」

「貴方が女王陛下の言っていた聖騎士？ へえ……」

「女王陛下って……エーヴィア様？」

「うん、そう。この前、此処に居たって言う聖騎士のことを話していたから……なるほど、貴女が。じゃあこっち来なさい」

と、カレンはティンの手を握るとその手を引いて礼拝堂へと入って行く。そして適当な椅子に座らせるとカレンはその側に立つ。

「ではでは、えーっと……うん、お祈りでもして行きます？」

「いや、何で」

「だって、騎士ですし」

「騎士と教会なんて関係ないでしょ」

それを聞いたカレンは溜息を漏らして呟いた。

「はあ……仕方ない、その辺りの歴史の勉強をするか……良い？
この国は違うけど、一部の国で一番偉かったのは誰だと思う？」

「え？ えーっと……王様？」

「うん、皆そう思うよね。この国、イヴァーライルも王様が偉いけど、教会の長、教皇が偉い国もあったんです」

「……え、何で？ 教会の偉い人が何で関係あるの？」

ティンはきよんとして返す。

「理由としては宗教的世界観では国王だろうが皇帝だろうが皆一緒だからよ。そういう意味じゃ皆平等な一般信者、その上で一番偉いのは当然それを仕切る教皇って事」

「それおかしいよ。何で教会の中で偉い人が国を治める人より偉いの？」

「だから、宗教的な身分で言っちゃえば王様も一般人と同じ、一番上が神様、オケ？」

ティンは酷いレベルの暴言を聞いた気分になった。

「そういうこと、その中で宗教を取り仕切る教皇が偉い。他にも小難しい話になるけど一気にぶった切って、何で騎士と教会が関係あるかって言うと、そういった教会が神聖なる目的で行う戦争、聖戦とかをやってるからよ。」

その最中、軍事的な拠点として礼拝堂を使っていたの。騎士修道会とか言われているわね。聖堂騎士団とも言っわ」

「もしかして……それが聖騎士の元なの？」

「聖騎士？ ああパラディンのこと？ アレは違う、パラディンって言うのは親衛隊とかの高位の騎士に与えられる称号だから……あ、でも高潔な騎士を聖騎士って呼んだっけ……確か、聖戦に参加した騎士団を聖騎士団と呼んだわね。あ、そうそう教会所属の戦闘部隊も神聖騎士団と呼んでるわね。ま、そんな感じに聖騎士ってのは高位で、神聖視されてる騎士って事」

「よくわからないけど」

カレンはずるつとこけた。まあ結構解説してて肝心の生徒が分からんと言われれば脱力するだろう。

「取り敢えず、聖騎士がすごく偉いってことと、教会と関係が深い事がわかった」

「うん、そこ分かってくれなかったら貴女の事殴ってるね」

「暴力シスター」

「ん？ 何だって？ よく聞こえないなあ、もつかい言ってみ？」

カレンは言いながらティンの喉元に斧を突きつける。その鮮やかな手腕にティンは思わず息を呑む。間違っではないよ、いきなり突きつけられた銀光放つ斧を見て息を呑んでるよ。

ティンはか細い声で「何でもありません」と返すしか無かった。するとカレンは斧をしまい。

「うんうん、素直でよろしい。と言う感じに貴女が此処にいることは別におかしく無いどころか普通に寧ろ当然なの。オウケーイ？」

「お、おっけー……あれ、でもあたしそうやって聖騎士になったんじゃないけど」

「あ、知ってるよー聖都セントラル・パラディンで聖騎士になったんでしょ？」

カレンは手をヒラヒラと振りながら言い切った。それに対してティンははてと。

「あれ、何で知ってるの？ あたしいつ言っただけ」

「聖騎士で冒険者なんて、騎士達の聖都で神聖足り得る誓いを立てたんでしょ？ そうでなければ聖騎士が一人で気儘な旅なんて出来る訳じゃない。遠征ならちゃんとした手続きだってあるでしょうし、そもそも貴女の装備に国章が無いじゃない。騎士の癖に仕えるべき国の紋章が無いし馬にも乗っていないなんて、そもそもそんなの騎士でさえない、その上それで自身を聖騎士と名乗るのは聖都セントラル・パラディンで誓いを立てた騎士だけよ」

「……ねえ、あたしが聖騎士だっていつ言っただけ」

ティンは無い頭を必死に動かして考える。今までで自身が聖騎士と名乗った事は今までで一度も無い。だから余計に不思議だ。

「え、だってその服にセントラル・パラディンの聖騎士の紋章あるし。ラルシアさんが気付いて、私が調べて判明したこと」

「……ま、待つて。この服って紋章があるの！？ 何処に！？」

ティンは服の端を持って驚いた様に叫び、くるくる回って体中を見渡す。

「首元。マントの留金にあるのがそれ。今度行くことがあれば神殿に行ってみ、同じ紋章があるから」

ティンは慌てて留金を外す。当然のようにマントが落ち、気にする事無くティンは留金の部分にきちんと何処かで見たような紋章が描かれている。剣と盾が交わった様な紋章。

「ほ、ホントだ……ホントに、見たことある様な紋章がある……」

「分つたのは良いけど、マントどうすんの？ これ一人で付けるの難しそうだけど……ってこれ浄化の術式かかっているのね。砂埃が掃う事も無く落ちるなんてシュールねえ」

言いながらカレンは落ちたマントを拾い上げ、そのままティンの首にマントを付けてひょいっと留金を取り上げて付け直す。

「あ、ども」

「どうもいたしまして……そう言えば貴女、何で此処に居るの？ エーヴィア女王が仕事させるとか言ってたと思うけど」

「あ、うん。終わった。騎士団全滅させて来た！」

「自慢げに言うな。それ最悪だから」

カレンはティンの頭をチョップしながらため息をつく。

「え、何で。女王陛下はそれで良いって」

「ああ、なるほど。アホにはその説明で良いやって事か」

「ねえ、それ馬鹿にしてる？」

「いや全然全く持つて馬鹿にしていまませんよー」

ティンは何か納得いかない何かを抱えながら流す。カレンは呆れ返った様に。

「と言うか、見境も無く切り倒しちゃ訓練の意味が無いでしょうが。あんた、騎士団の何を鍛える気？」

「……何を鍛えれば良かったの？」

「馬鹿だこいつ」

カレンは小さく素早く呟いた。なのでティンには全く聞こえなかったのである。

「まいっか……そう言えば、騎士団ってことはその中に剣士いなかった？」

「え、あ、あいつ！ あいつさひつどいんだよ！ あたしがいつも楽しみにしてる番組を下らないとか言つてさ！」

ティンは言われてピンと来た。家出をするまで毎週見てた番組を下らないと切り捨てた、長い銀髪の剣士。

「ああ……仮面ブレードか……あれ、私も正直な！。毎回毎回設定が奇抜と言うか、氷滅流の扱いがおかしいよ。この前のシリーズなんて「身体に流れる氷竜の血が」っていやいや、氷滅流は一子相伝でそんな特殊設定ないし」

「ええっ！？ 逆に斬新で良いじゃん仮面ブレード餓狼！」

白熱するティンに対してカレンは酷いくらいローテンションである。

「が、がろうつて、何？ ごめん、正直一話だけ見て呆れて見るの止めたからよく知らない」

「初代見なよ！？ あれ名作だよ！？」

「あー原作読んだからいい。あれ渋いよねえ、最初に出た『氷滅流、それは氷が如く冷たき悪を滅する剣』ってのが最初スルーしてたけど最終話でその台詞出てまさか泣くとは思って無くてさー。あれ実話が元の上書いてる人が上手いのか思わず読んでのめり込んだよ、原作仮面ブレード。と言うか、あれ原作と言うか四代目氷滅流当主が名乗ってるんだね。最初そのネーミングどうよって思ったけど、中盤での『我が身常に剣也』と叫んで権力に負けた上司と対峙するあのシーン見て寧ろかつこよく思えたわ」

「でしょ、でしょ！？ 最初あたしも『単に仮面剣士ってだけじゃん』って思ったけど、あれって一種の覚悟の証明なんだよね」

「まあ、あれはまあ初代は良いってのは認めるけど、それ以外は正直無理やり続けてるようにしか見えないってのが何とも言えなくてさ。正直ねー」

カレンはそう言って立ちっ放しに疲れたのか、ティンの側に座り込む。

「えー良いじゃん、面白いし」

「……こういう連中が増長させてるんだよね……ま、いいや。あ、そだ、あの人と戦ったんだよね？ あー、じゃあちよつと気分悪くしちゃったかな」

「ん？ いや別に？」

「そ？ あの人、行き成り本気出す人じゃないから……あの人なりのルールって奴？ いきなり本気で戦おうとしないの、烈也さん」カレンは言う少し嬉しそうな表情を見せる。その表情は、何と言うか。

「好きなの、あいつのこと」

「わひやおうつ！？ い、いきなり何を言い出すのあんた！？」

そ、そりや顔良いし話してて飽きないし強いしかっこいいしでも私は一応シスターであって神と結婚している様なもので、その特定の殿方に恋をするなんて畏れ多い事出来る訳が無くて」

「つまり、好きなんですよ？」

「……はい」

シスターは夕陽よりも赤く顔を染め、俯きながら呟いた。

ティンは息を吐いて考える。女王陛下に恋人が居て、隣に座ってるシスターにも好きな人が居て。

ティンは、素直に思った事を口にした。

「ねえ」

「な、何よ」

「恋をするとみんな馬鹿になるんだね」

「あんた、殺されたい？」

ティンはボロボロになりながら礼拝堂を出た。世の中、殴ると言いながら殴る人は居るが、まさか殺すと言って軽く殴る人はいないだろう。まあ実際居たのだが。

（まさか片手五、六発づつ殴って来るとは……やっぱりあいつ暴力シスターじゃないか？）

そんな事を思いながら前をみる。すると、以前は寂れた雰囲気しか無かった噴水から水が噴き出し、シャボン玉が舞っているではないか。何とも神秘的かつ幻想的。そこまで別世界の様だ。そしてその中央、噴水の近く、幻想的な風景を彩る様に女性が立っている。手にはシャボン玉で彩られた長杖、纏うは水色を基調としたローブ、短く切り揃えた青い髪的女性が、そこに居る。

「ふう、これでよし、と」

「ねえ」

ティンはその様子を見て彼女に歩み寄る。

「何をしてるの？ あんた誰？」

「あら、貴方その格好……貴方がティン？」

どうやら彼女も此処の住民らしい。彼女を知ってると言う事はエーヴィア女王から聞いて居るのだろう。

「私は宮廷魔導師をしている水沢潤。最近は公爵館の近くの水源を調べてたから初めて会うはずよ」

「水源？ 何で？」

「貴方は、この国が昔呪われてたこと知ってる？」

「あ、うん。結構有名だったし、ニュースでも時々言っていた」

ティンは少し記憶を掘り返した。確か、『立ち入り禁止レポート』とか言う番組で特集が組まれていたことを思い出す。その時は空から見た国の様子を映し出されていたが、酷い様子だったのを思い出す。

しかし、そう言えば。

「確か、二年前だっけ。急に呪いが解けたんだっけ」

「ええ、二年半前。私は此処に来て一年だからよく知らないのだけど。まあ、呪いが解けたって聞いたし、近くに来たからついでに寄ったの。そしたら女王陛下が『腰を落着きたいと思ってるなら此処で働くか?』と言われてね。まさか御伽噺でしか聞いた事がない宮廷魔導師になれちゃうなんて私も吃驚したけど、一応憧れだったし良いかなと思ってるね」

「宮廷魔導師って何?」

「簡単に言えば王宮所属の魔導師のこと。国王様直属の魔導師の事で、魔導師として最高位の称号よ。今は荒れ果てた国内の水源を調べ、魔法で如何にかできないかって事の調査ね。漸く使えそうな水源を見つけて、噴水が動けるようにしたのよ」

潤は此処までの経緯を長々とティンに語る。対する彼女は。

「へえ、すごいねえ。でも何でシャボン玉が浮いてるの?」

「ああ、これ? ……魔法で水源調整して噴水が動くようにしたら、その、私の魔力って泡が出やすくて……」

「つまり、どういうこと?」

「……まあ、私が魔法でやった結果ってこと。あ、あれよ、幻想的でいいよね?」

よくない気がするが、いわゆる部外者であるティンには言い切られてはどうしようもない。

「……つまり、手抜き工事?」

「ううん、違うわ。仕様よ」

もっと悪い気がするが、潤がこうも言い切るのであればそうなのだろう。ティンは此処にいてもしょうがないと感じ、移動を開始する。

ティンは東館と書かれた館を歩き回り、二階から外の様子を眺めてみた。と言っても風景なんてない。遠くに崩れかかった岩の壁が見えるだけ、風景なんて欠片も無い。

(……ん、なんだあれ)

遠く、岩の壁の近くに黒い点が揺れている見える。いや、きちんと視界に入れてみると黒い格好をした人間だ。服装の雰囲気的に、少女らしい。

ティンは気になったので直に外に出て行つた。

外に飛び出し、踊る様に駆けて行くとやがて黒い点は徐々に黒い——いや黒紫のローブを羽織つて——と思いきや実際はマントを羽織っているだけの様だ。

ティンは後ろから近寄ると少女は立ち上がる……が、結構小さい。ティンの胸にも届いてないなら相当に小さいと言つことだ。そして、彼女ははつきりと言いつた。

「その人、立っている地面を割つた。気をつけて」

言われてティンは直に一步下がった。そして予告どおり、軽い断層が起きる。ティンの立っている地面が下がり、少女の地面が上がる。そして少女はゆっくりとティンの方へと振り返る。

少女の容姿は黒い髪を短く切り揃え、服装は白をベースの黒と紫の装飾が施された服装を纏い、黒光りする杖を手になしている。

「……誰、貴方。行き成り人の後ろに立たないで欲しいのだけど」

「い、いきなり地面を割る人に言われたくない!」

「何の用? 私は一応忙しいんだけど」

少女はティンの言い分を流して言葉を繋げる。ティンはペースを崩されながらも口を開く。

「えっと、城から人が見えたらなんだと思つて……と言つか何をしてるの?」

「この辺りの地面を調べてる。相当に荒れ果ててる様だし、ラルシアさんがこの辺りの地面を魔法で変化させようと業者に頼んでいるようだし、一応、月並みとは言えども地の魔法が使えるわたくしが調査しようって話になってね。それでこの辺りの地質調査をしていた

けど…… やっぱり酷い様子。荒廃と言うか枯れてると言うか、酷いくらい大地が荒れ果ててね。栄養素が皆無でボロボロ、これは本気で如何にかしないとね。そう言えば貴方本気で誰？ 城から来た、と言う事は公爵館からってことでしょう？ 貴方もあそこに流れ着いた旅人？」

ティンは少し驚いた。あの公爵館で自分を知らない人間がいたとは。

いや、彼女の台詞を聞くに城の滞在期間は短いようだ。なら不思議は無いのかも知れない。

「と言うかこの国、いろんな人が来るんだね」

「貴方、旅人初心者？ この国の位置を地図でよく見なよ」

そう言っただけで彼女は城へと向けて歩き出す。

「あれ、もう帰るの？」

「もうこの辺りは調べたからね。後、この国は山を通ると大体行き当たるから、結構此処に来ちゃうんだよ。覚えておくと良いよ」

そう言っただけで彼女を追ってティンも歩き出す。

「そっぴや名前は何て言うの？ あたしはティン」

「…… ネイル」

ネイルと入り口で別れ、ティンはそのまま公爵館へと入る。すると、見慣れない人達がいる。

数は二。銀髪で髪の長い人と、メイド服を着た青い髪の短い女性。内、ゆつくりと青髪メイドがティンの方へと振り向いた。

「いらっしやいませ、お客様ですか？」

「客っちゃ客だな。今、此処に滞在している奴で新しいのが居るって言っただけ、そいつがそう」

メイドの細くも透き通った声に続いてエーヴィア女王が加える。

「あらまあ、何て可愛い子ね。うふふ、一体何処から来た子かしら？」

と波打つ長い銀髪を持つ女性は気が付くとティンの側に寄って軽く頭を撫でている。

「ってうわ!？」

「あらごめんなさい、可愛い金髪だからつい撫でちゃったわ。ねえねえ、貴方お名前は？ 良かったらうちの子になってみる？

まあ冗談だけど」

「え、な、名前？ えっと、ティンだけど」

「そう、ティンね。良い名前ね、姓は？」

「ねえよ、そいつは孤児だからな」

二人の会話に割り込む様にエーヴィアが入ってくる。すると銀髪の女性はエーヴィアの方へ近寄りながら。

「んもう、人が話してる間に割り込むなんて悪い子ね。親の顔が見てみたいわ」

「なら鏡見る鏡」

「……え、どゆこと？」

ティンは玉座でため息をつくエーヴィアの反応を見て頭を捻る。

「紹介するよ、その銀髪のおばさんがうちの母親だ」

「ひっどおい、お母さんをおばさん呼ばわりするのなんて、エーヴィアちゃんだって後十年もすればお母さんと同じおばさんのくせにいい」

言いながらエーヴィア（母）は女王陛下の隣に歩み寄り、抱き付いて頬ずりをはじめ。やられている女王は酷くうっとおしそうだ。「後エーヴィアちゃん、お母さんの紹介の仕方がなっていないわよ？ お母さん、それだけはちゃんと教えた筈だけど？」

「あーそうそう、名前はデイレヌ。デイレヌ・デルレオン、元公爵夫人の未亡人。これで良いか？」

「元が余計よ。まあ、概ね良しとしましょう」

「そして私が今日まで公爵夫人様に振り回されて来たメイド兼護衛役、マリン・ブルーフィアでございます。メイド暦四十年のベテランです」

「やれること少ないの威張るなよ、あんた」

ディレーヌの台詞に便乗する様にマリンが自己紹介を行い、そこをルージュが突っ込んだ。

ちなみにマリンの見た目はどう見ても二十代中盤である。

「……わ、若いにもほどが」

「魔力は物体の劣化を抑える効果がありますから。魔力年齢ならちやんと実年齢相応です。メイド暦四十年！」

「凄い四十年！」

「ちなみに実際は三十九年と半年ですがさば読みました」

「さば読んでるの!？」

ティンはマリンの言葉に反応し続け、最後に突っ込んだ。ルージュは呆れ気味に。

「いやそれさば読むなよ」

「四捨五入しました、申し訳ありません」

「いやそれ四捨五入しても四十年届いてなくね? 半年って数字的に四くらいだろ？」

とエーヴィアが突っ込み、ただでさえ動きの少ない表情はぴきつと固まる。

「女王陛下、部下を苛めて楽しいですか？」

「私は楽しいわ? ねえ、エーヴィアちゃん」

「母さん、人を勝手に巻き込むの止める。後ベタベタくっつくな、うざい」

エーヴィアは未だに深い愛情表現を行う母親に心底うつとおしそうに言った。対してディレーヌは。

「うふふ、やだわエーヴィアちゃんったら、お母さんの事をうざいだなんて……こっちは吐き気を抑えて娘にベタベタしてるって言うのが分らないの？」

「吐き気がすんなら似合わない事すんなよ」

「母親として娘を可愛がるのは当然でしょう? 全くお母さんに似て……気持ち悪い」

そう言つとディレー又はエーヴィアから離れ、廊下の方へと向かつていく。そして笑顔で。

「お母さん、長旅で疲れたから部屋にいつてるわね。お昼にまた一緒にしましょう？ 勿論、ラルシアちゃんも一緒にね？」

そう言つて廊下に入り、続くようにマリンとルジユも後を追つた。

「……あ、そついやラルシアは？」

「ああ、しらね。あいつ母さん苦手だからなあ」

「後、恋人さんは？」

ティンは踏まれた。頭から。

遅れた出演者（後書き）

じゃ、次回。多分、後で追記か活動報告でもっと長い後がきか
よ。

月を背に頂く女

「一つ、聞いて良い？」

「何だ？」

ティンは昼食中に思わず口を開いた。その理由は。

「ラルシアが凄くおびえてるのはどうして？」

「うちの母親の旧姓はカーメルイアって言ってな、後は察しろ」

「カーメルイア？ ああ、あのでっかいお店？ どゆこと？」

「分り易く言つてやりや、うちの親は世界経済に食い込むほどの大会社のご令嬢でな、あいつ的にはいつでも自分の会社を握り潰せる重役つてこつた」

「ああ、だから」

ティンは目を移す。そこには完全に脅え切つたラルシアと素敵に仮面笑顔なデイレーヌさんが向き合つて食事をしている。

「あらあらどうしたのラルシアちゃん、食事が進んでないわよ？」

「エエ、チョット、キブンガ」

ラルシアは死んだ魚の様な目で片言で喋り昼食のステーキを一口にしていない。

「あらあら片言で喋つて、悩み事があるならおばさんに言つて良いのよ？」

「イエ、オキナサラズ」

「んもつ、そんなつれないこと言つて、おばさん悪戯心でお父様を唆してラルシアちゃんの取引相手を買収しちゃおうかしら」

「やめてお願い本当！ それされたらうちの会社が潰れるから、破産するから止めてお願い本当！」

デイレーヌがいそいそと携帯電話を取り出すとラルシアは涙声で涙目で叫びながらぺこぺこ頭を下げ続ける。

その様子を見たティンは。

「ラルシアが壊れた……」

「ところで陛下、私は近々メイド暦四十年になるのですが祝つてくれませんか？」

マリンはティンの台詞に便乗するようにエーヴィアに語りかける。「んーあー分った。じゃあ四十年頑張ったで賞的な勲章やるよ」

「あら、じゃあお父様に頼んで私のお付ご苦労で賞的な賞状を送らせるわ。就職に色々有利になるわよ」

「あーんじゃあ近くの街で良い店見つけたから飲みに行く？」

「すみません、高望みし過ぎた私が愚かでした、何も要りません」

次々にエーヴィア、デイレヌ、ルジュがマリンの為に祝いの提案をするが当人は丁重に断った。

翌日、ティンは再び旅に出た。

「もう行くのか」

「うん、今までありが」

蹴られた。ティンはラルシアに頭を蹴られる。

「謁見と言う単語を勉強して来いアホ」

「も、申し訳ありません、陛下……」

敬語を忘れてはいけません。ティンが蹴られたのはそういうこと。

「えと、今までお世話になりました。このご恩は忘れません」

「ああ、思い出した頃にでも戻って来い。達者でな」

ティンはもう一度頭を下げ振り返り、そのまま外へと向かった。門を開き、外へ出るとそこは相変わらず寂れた荒野があるだけ、他には何も無い世界。

ティンは名残惜しさを感じながらも歩き出す。

数日をかけ、やっと辿り着いた国境門を抜け、とうとうティンはイヴァーライルを出た。

イヴァーライルを抜けた先には森が広がり、木々のざわめきだけが響き渡る。そこで少し、今までを振り返る。少し後ろめたさを感じながらも頭に描くのはいつも一緒にいた幼馴染のこと。

（華梨、今頃どうしてるだろう。元気だといいいけど、きつと怒ってるだろうなあ……酷いこと、言っちゃったしなあ。謝れば、許してくれるかな？ 浅美も元気、かな？ でも、あたしが心配するのは…… お門違いかな？ あたしが、浅美を傷つけた様なものだし…… 合わせる顔なんて、無いよね。きつと、向こうもあたしの事なんか嫌ってるよね、忘れてるよね、全部、あたしが悪いんだから……）
ティンは頭を振った。嫌なことよりも、いいことを考えようと頭を回す。

そうだ、楽しかったことに浸ろう。運命も知らず、気ままにいられたあの頃を。

（そう言えば昔皆で行った海の家、楽しかったなー。クリスとか普通の服でも胸だけはおっきいのに着になると圧倒的でびっくりしたんだっけ。華梨とか絶望的な目で見ていてたなー。師範代ともう一人のあいつは人がいる海岸に行つてナンパばっかしてたっけ？ 一回地獄に落ちればいいのに。そう言えば、あの夏の日、麦藁帽子被つて買い物に行かされた日に皐にアイスクランデーを買つてもらったっけ。結局みんなの分買つてもらつて、皐には本当に感謝だよ）

そんなことを考えていると近くの草むららがさがさと音がする。ティンは弾かれる様に剣の柄を握り、そこを凝視する。

「——おや。こんな所で会えるとは、凄い偶然ですね」

ティンは一瞬、我が耳を疑った。理由なら簡単だ、聞き覚えがあるからだ。もつと昔に、当たり前前に聞いていた声が聞こえたのだから。

やがて、草むらからその人は出てくる。女物の着物に、三度笠を被り、合羽を羽織った、微かに見える長い黒髪の女性。その姿に、ティンは無性に見覚えがあった。

「おや、声だけでは分かりませんか。では一つ。

おひかえなすつて。私は生まれは月宮の屋敷、剣術修行として武者修行の旅をしているもので御座います。名を」

女はそう言つて、三度笠を取る。結び上げられた黒い髪、深い森をイメージさせる深緑の瞳。そう、彼女は。

「月宮皐です。大体二、三ヶ月振りですね、ティンさん」

「さ、つき……？ 皐！？」

「はい、月宮皐です。それにしてもこんな場所で巡り会えるなんて……イヴァーライルを抜けたんですか？ よく通れましたね、ティンさん地図読めそうにないのに」

ティンは思った。この女は紛れもなく皐だ、と。こうも悪びれること無く毒舌を吐けるのは皐以外にいない。だが、今のティンにはそれさえ懐かしく、心に突き刺さる。

「何で、ここに？ あたしを連れ戻しに？」

「いえ、単純に武者修行です。ティンさんが出て行つたのを機に私も旅に出たのですよ。あの道場はいいですねえ、修行の旅が良いだなんて。大手を振つて所属道場を名乗れるつてものです」

皐は清々しい笑顔で言い切る。ティンは少し半信半疑で彼女を見つめるが、皐が動いた。

「まあ、雑談はここまでにしましょうか」

そう言つて皐は堂々と携帯型お着替えくんを起動し、衣服を変える。純白の和服、袖のない上着に左を前に羽織つた着物。それはまるで、死装束の樣だった。

「何で、着替えるの、皐」

「あはは、決まってるじゃないですか。勝負です」

瞬間、ティンは恐れ戦く。皐が、敵意を剥き出しにしてティンを見たからだ。本来、ティンは敵意さえ向けられれば無意識に対応出来るくらいには身体を戦闘用に鍛えている。その彼女が反応出来なかった、いやしなかった。理由は一つ、敵対する理由が一切ないからである。甘い？ 違う、ティンにとって皐は敵ではない、それ以前に敵意を向けられる覚えも無ければ敵意を向ける理由も無いのだ、何故敵意を向けて相対せねばならないのか。

「どうしましたか？ もしかして、剣を向けられない、とても言い

ますか？ まあ良いですよ、それならそれでその気になってもらっただけです」

「どういう、こと？」

「こう言う事ですよ」

皐は収められた刀の柄を握り、白刃が閃く。直後、ティンは素早く後ろに下がるとティンが居た場所で斬撃が舞い、鐃鳴りが響く。

「月華閃流、月影斬。油断すれば月の刃が切り刻みます」

「な、何する」

「その気にさせる、と言ったじゃないですか。貴方が本気になるまで攻撃を続けます。剣士として背を切るのは些か不本意ですが、まあ良いでしょう。あなたがその気になればいいのですから」

「な、なんでこんな事するんだよ！？ あたし、皐を怒られる様なことした！？」

「クス、怒るだなんてとんでもない。私は単純にあなたと戦いたいです。本気で。ああ、それとも未経験ですか？ 本気で互いに殺意を向け合い、相手と斬り合う行為自体が」

皐は詠う様に笑うように語る。その姿は異常にティンに見えた。だが、皐は正常である。人としてではなく、剣士として。戦に生き、戦に死することを誇りと感じる剣士として正常だ。

「は、初めてじゃあ、ないけど」

「なら同じです。私も貴方が斬ったモノと同じ扱いで良いんですよ。同じ敵です、敵は切って捨てるものでしょう？ それと同じです」

「さ、皐は敵じゃない！」

「は、あはははははっ！」

ティンの返しを聞いた皐は大きな笑い声を上げる。そして再び皐は刀の柄を握る。そしてまた白刃が閃き、ティンは素早く避ける。

「敵ではない、ときですか。まあ良いですよ？ 私にとって貴方は十分魅力的です。十分、斬るに値する剣士です。なら、斬るだけです」

「な、なんで……なんでそこまでして敵対する必要があるんだよっ

！？」

「おや、おかしいことを。剣士と剣士が向き合ったなら、斬り合うのが当然でしょう？」

皐はさも当然の様に語る。まるで、それが真理の様に。

「皐、本気で言ってるの？」

「本気、と言うかそれが真理では？ 貴方だって、強い人とは戦いたくなるでしょう？」

「たし、かに、そう……だけど……」

「理解、出来ましたか？ では、やりますよ」

皐は抜き身の刀を鞘に仕舞い込む。そして、皐は一瞬足に力を込めて駆け出し。

「月穿蹴ッ！」

瞬時に懐に入り込むとティンの顎を素早く蹴り上げる。対してティンは身体を反らしてそのままバック宙で距離を取り。

「月駆穿衝ッ！」

皐は負い掛ける様に駆け、跳躍から蹴りを放つもティンは素早く抜剣して蹴りを受け止め、火花が舞う。直後、皐は抜刀から一気に振り下ろしてティンの剣と激突し火花が舞う。

皐は鐔競り合いなど行うことせず。

「足斧ッ！」

右足を振り上げ斧の様に振り下ろし、ティンは踊る様に回転しながら踵落しをかわす。対して皐は振り下ろした足につられる様に体勢を低くして。

「天月穿ッ！」

真上に、居合い抜きを放った。ティンは素早く剣を構えて防御を行うも、あまりの激しさに軽く打ち上げられる。そこへ皐は素早く納刀し。

「円月刃ッ！」

宙に浮いたティンへ身を捻りながら斜め上へと追撃の居合い抜きを放つ。射られた矢の様に鋭い斬撃がティンの防御を貫く。皐は更

に納刀しつつ前に出る。

「月影空歩ッ！ 月斬翔ッ！」

ティンの真下に出、真上に向けて居合い抜きを放ちながら跳躍してティンを切裂き。

「天月烈旋ッ！」

続いて納刀と同時に真横から回し蹴りをティンに叩き込み、空中で踏み込んで。

「月影空歩ッ！ 落月刃ッ！」

更にティントの距離を詰めて叩き落すように上から居合抜きを叩き込むと同時に地面へとおり。

「地月斬ッ！」

地を抉るように切り上げて地面に叩きつけたティンを切り上げ。

「月砕乱牙ッ！」

無数の斬撃を一気にティンに叩き込むッ！

「はぁッ！」

斬撃の締めめにティンを蹴り飛ばし。

「月駆閃ッ！」

納刀後から駆け抜けながら居合抜きでティンを斬る。

「流石ですね、全部打点をずらしますか」

「さ、臯こそ、相変わらず一撃が軽いね」

ティンは即座に空中で体勢を立て直し、地に立つ。

「一応筋力トレーニングはしてるんですがねえ。まあいいや」

臯は納刀しながらティンの方へと向き直り、互いに距離を開けて向き合う。

「今のをくらっても反撃しませんか」

「……臯と殺し合うなんてできない」

「まだ言いますか。そうまでして戦いを嫌う理由は何ですか？」

ティンは黙り込む。自分でもよく分かってないのだ、無理も無い。だけど——いつも優しくしてくれた彼女を、敵として認識出来ないでも。

「——やるって言つなら、叩きのめす」

「ええ、そうです。それで良いんです、敵は遠慮せずに斬って捨てればいいんです、よ！」

ティンはやつと剣を構え、皐は応える様に踏み出して距離を詰める。

「蹴り上げなんてッ！」

「天月穿ッ！」

ティンが蹴り上げを予知してかわすも飛んで来たのは真上へと放つ居合い抜き。天の月を穿つ一閃がティンの眼前を閃き、更に。

「斬月閃ッ！」

納刀後、下から満月を描く様な剣閃を放つもティンは身体を横にして剣閃を避け——直後、描いた月を斬る様に上から斬撃が飛来するがティンは滑る様にそれを避け。

「月駆閃ッ！」

鐐を鳴らし、避けたティンを追う様に居あい抜きと同時に駆け出す、が。

「もらッ！」

皐は素早く跳躍から真後ろに回ったティンに鐐鳴らしつつ回し蹴り——天月烈旋——を放ち、ティンは剣で防いでそのまま仰け反り、踏み止まってから剣を構え直してから皐目掛けて突進を仕掛ける。皐は迎え撃つ様に居合いを放ち金属音鳴らし、火花が舞う。

ティンは剣を戻して更に皐に斬りかかり、皐は納刀する事無くティンと切り結ぶ。剣と刀が打ち合う音が響き、更に二人は斬り結ぶ。「滅多切りいッ！」

ティンは踏み込んで剣を横から薙ぎ、皐は。「斬月閃・連ッ！」

皐は月を描く様な剣閃でティンの剣を捌き、続いてティンは剣を振り上げるが皐は描いた月を切裂く様に刀を振り下ろして刃が激突。続いてティンは蹴り付け、皐は月を描く様に蹴りを捌き、ティンが斬り付け、皐は剣閃を切り払う様に剣を捌き、ティンが斬り、皐

が斬り捌き、ティンが蹴り皐が捌きティンが斬り皐が捌きティンが斬り皐が捌きティンが斬り皐が捌きティンが蹴り皐が捌きティンが斬り。

「月影空歩ッ！」

皐はティンの攻撃を避ける様に後ろに下がり、それ食い付く様にティンが後を追って輝く剣を振るう。

「オーラブレードッ！」

皐は身を捻り振り下ろされる剣をかわす。直後、剣が激突した箇所が光の炸裂を生み出す。

ティンは尚も逃げる皐を追って森を駆け、やがて抜けて平原を突き出た——ところで。

「月影斬・五閃ッ！」

ティンに月を描く斬閃が舞い飛ぶ。ティンは髪の端を削られる様に切られるがそれでも踊る様な足取りで皐との距離を詰めて皐に剣を振るい、皐もそれに応じる様に抜刀してティンと切り結ぶ。ティンは更に剣を振るい皐の刀と切り結び、皐も押され気味だった先程とは違って蹴りを交えティンよりも優位に立とうと攻め立てる。皐の蹴りをティンは剣で捌き、ティンは素早く切り返すも皐は素早く着地して刀を抜き、ティンの攻撃を弾く。ティンは素早く真後ろに回り、皐に切りかかり。

「月穿蹴ッ！」

皐はそこに向けて蹴り上げるも、そこには何も無く、皐はそのまま足を後ろに向けて風ぐ様に回し蹴りを叩き込むがそこにもいなく、視界の隅に見えた剣に反応して剣を振った瞬間、皐は感じ取った。さっきまであった剣が自分にとって一番見えたいた場所に——今では立派な死角となった場所に振るわれている事に。

「しま」

それだけ言った。それ以上はティンの剣が皐の身体をとらえた為に言えなかった。

先に一撃を入れたのは、ティンだ。ティンが先手を取る。

「は、入った……皐、入っ」

皐は納刀して、ティンに向けて居合い抜きを叩き込み、ティンはそれを剣で斬り捌く。

「ど、どうしたの皐！？ 一撃、一撃はいった」

「だからどうしたあッ！？」

ティンの言葉を消し飛ばす様に皐の怒号が響き渡る。その衝撃にティンは思わず仰け反る。

「一撃？ 一撃入っただけです、まだ勝負はついてはいない。まだ勝負は終わってさえないッ！ 一撃入れたからなんだ、一撃入れたら終わりか？ そんなお遊びみたいな勝負があるものか、そんな一回程度攻撃が入った程度で、誇りを捨てられるものかッ！」

「え、何、何なの……？」

皐は納刀し、顔を上げてティンを睨む。

「剣士として生き、剣士として死す。これこそが、私の一生を賭すに値する誇り。剣士としての生き様だッ！」

皐は眼前に刀を持ち、抜き身の刀身を見る。磨き上げられた刀身は鏡の様に皐の目を写す。そして——皐の纏う何かが、一気に膨らんで収縮する。

「な、何？ 気が、膨らんだ？」

「月華閃流剣刀術、天下夢想。自己催眠による、身体強化の秘儀。さあ、続けましようか。どちらかが、果てるまで」

月を背に頂く女（後書き）

ども、やーです。今回は珍しく後半戦を次回に置いとくよー。

今まで本気で敵対出来る相手としか戦わなかったティンが、初めて敵対出来ない相手との戦い。実はあの短編がフラグだったんだよ！
それじゃ、次回また。

剣に誇りを、剣を振る意味を

「月華閃流剣刀術、天下夢想。自己催眠による、身体強化の秘儀。さあ、続けましょうか。どちらかが、果てるまで」

「てんか……むそう？」

「そう、おのが刀を鏡とし、目を写して自身に強く自己暗示をかける。それによりより強烈に相手を攻め立てられる」

言つと皐はふつと消え、ティンは真後ろに向けて剣を振るい——いや振つた瞬間に皐の刀と激突する。

「早ッ！」

「つてえええええええりゃああああッ！」

皐はそこから更にティンを押し込み、力任せに払うが、気付くとティンは既に真後ろに陣取っていた、が。

「虚月刃ッ！」

皐は足を軸にして一回転してティンを薙ぎ払うが、ティンもまた身を捻りながら姿勢を下げて剣閃を避け、皐との距離を詰めて。

「エースオブ」

跳躍しながら切り上げるが。

「天月穿ッ！」

皐も同じく姿勢を下げて真上に切り上げ、ティンは更に剣を背に置き、宙から切り落とす様に剣を振り下ろす。

「ライズッ！」

「天翔」

ティンの攻撃に合わせて皐は身を捻りながら斜め上へと居合い抜きを放つて相殺し。

「烈華閃ッ！」

その隙を縫う様に返す刃でもう一度同じ箇所——ティンへと刃を振るう。

「聖浄の輝きをッ！」

瞬間、ティンは光の槍を臍へと叩き込むがその光も臍の剣閃に消え、ティンの体に剣閃がかかる。だがそれも構う事無くティンは臍に向かって突進し、ティンの剣が臍の身体を捉え――臍は身を低くし。

「天月穿ッ！」

真上へと居合抜きを放ち、ティンの攻撃を避け、さらに相殺する。しかしティンは切り抜けた直後に急停止から身を返して更に光の槍を臍へと投げつけ。

「円月刃ッ！」

それも臍は居合抜きと同時に身を回し、胸を貼って背を弧状にすることで光の槍を避け、直後に突進するティンに対し。

「月斬翔ッ！」

納刀から跳躍と同時に真上にむけて居合抜きを放つことでそれを回避し、ティンはその硬直を狙って更に光の槍を投げつけ。

「落月斬ッ！」

飛び上がった直後、納刀後に地面目掛けて居合抜きを放ちながら着地して光の槍を避け。

「月影空歩ッ！」

直後のティンの突進も臍は後方に下がって安全圏へと逃れ。

「月影斬・八閃ッ！」

さつきよりも苛烈に無数の斬撃をティンに放つ。

「いいかげんに」

「月駆閃ッ！」

ティンは殺到する斬撃を斬り捌いているとそこへ臍が駆けながら居合い抜きをティンへと叩き込み、ティンは踊る様に後ろへ――と見せかけ、あえて身を屈めて臍の攻撃を避けて臍に剣を突上げるが、臍は居合い抜きの動作の途中で真後ろに疾走し――月影空歩――ティンの攻撃を回避する。

そこで両者は一度顔を見合わせる。

「速い……ッ！」

「ええ、これが天下夢想。行動力を高め、技の硬直時間を削り、無理な体勢からでも回避運動が取れるようになっていきます」

「んなの無茶苦茶じゃん！」

「さあ」

皐は言った後にふっと消え去り。

「私にはよく分りません」

ティンの後ろに現れ——ティンは同時に剣を真後ろに突刺すが、それさえも皐は余裕を持ってかわす。

「これで……貴方の速さにも追いつける、と言うものです」

「そんなに速い、あたし」

「ええ、私からすれば、凄く、速い。では比べましょう、どっちが速いか」

皐は言った側から体中の力を抜き、刀を握る手を緩め、かくんと項垂れる。

「な、んだ……？」

ティンは相手の隙や、脆い箇所を見つけるのに特化している。あまりにも脆かったり、隙だらけな場所は点となって認識出来るほどだ。だからこそ、言える。今の皐はおかしいと。何故か、体中に隙となる点が見えるからだ。

もはや誘っているとさえ言えるくらい、隙だらけだ。何処を打っても攻撃が通ると言っても過言ではないほどに。だからティンは、畏れと思いつつも。

——つられる様に、皐に剣を振るう。

剣が届くか否か、いや微かに刃が肌に触れたとも思えた瞬間、だ。皐が消えた。ティンの目の前から、まるで最初からそこに居なかった様に。

「月華閃流客員秘剣」

後ろから降って来るように。

「鏡花水月ッ！」

皐の刀がやって来た——瞬間、ティンは無茶な体勢から踊るよう

な足捌きで皐の一撃をかわす。

「な、何だよそれ!？」

「月華閃流剣刀術が客員秘剣“鏡花水月”。鏡花水月とは鏡に映った花であり水面に映った月のこと。目に見える、油断しきった姿を相手に見せることで攻撃を誘い、その攻撃に対して背を取って反撃する技。月華閃流には無かった、相手を騙す技」

皐はそう言ってから再び楽な体勢へと切り替える。月華閃流客員秘剣、鏡花水月だ。

対してティンは遠慮もなく、手早くもう一本の剣を抜き投げ、ティンもそれを追いかける。飛来する剣が突き刺さる直前、さっきの再現を行うように皐は幻のように消え、ティンは首を上げる。そこにこれもまた馬鹿正直に皐が真上からティンに強襲をしかけ。

「同じ手にひっかかると」

「月華閃流客員秘剣」

皐の静かな呟きにティンは警戒心から素早く距離を取る。そしてティンが回避運動を行った直後。

「落花狼藉ッ！」

皐はティンに対してかかと落としのような蹴りを叩き込む。

「いきなり何を」

「月華閃流客員秘剣“落花狼藉”。落花狼藉とは物が乱れている様、花が散る様、花を女性に見たてて女性に乱暴を働く様を指します。

この技は対戦相手に奇襲し、体の至る箇所を攻撃する技です」

「な」

「つまり頭を踏んづけてティンさんが動けなくまるで攻撃する技です」

「な、なに!？」

「これも月華閃流には無い技です」

皐は淡々と語り、鞘に収めた刀の柄を握り、ティンへと向かって駆け出す。

「客員秘剣って何なんだよ!？」

「読んで字のごとく、他の流派より月華閃流へと取り入れた技です。故に、客員秘剣」

喋りながら皐はティンに向けて居合抜きを放ち、ティンは剣で防ぐがそれでも皐はそれでも止まらずにティンの後ろに移動して——ティンが直ぐに皐の背後を取って攻撃を加え——鏡花水月——皐が真上からティンに刀を振り下ろし、ティンは当たる直前で皐の背後を取る。

「背後取りの舞ですか？　良いですねえ、受けてたとうじゃないですか！」

「うっさい！」

ティンは返しながら皐の背を斬り、皐は真上からティンの背に強襲し、ティンは踊る様に背中を取り、皐は真上からティンの背後を強襲し、ティンはふっと消え去り皐の背後に回り、皐は真上からティンに強襲し、ティンはそれを当たる直前で消えて皐の背後に回り、対する皐はティンの真上から強襲し、ティンは踊るような足捌きで直に皐の背後を取り、皐は対してティンの真上から襲い掛かり、ティンは。

「クイック」

皐の刀が当たる直前、剣を構え直して膝を屈めて。

「オブライズッ！」

瞬間、皐の身に閃光が駆ける。それは正しく、発動の挙動さえ見えないほど速いティンの上昇攻撃であり。

「毅然と」

続けて宙で更にステップを踏むようにティンは身を捻り。

「きつらめけええええッ！」

皐へと光を纏って突進し。

「月斬翔ッ！」

対する皐は素早く抜刀と共に跳躍してその一撃をかわし。

「逃つがすかぁッ！」

ティンもそれを追って跳躍して。

「満月斬ッ！」

皐はティンを宙から叩き落すように刀を振り下ろし、ティンは剣を上に乗って攻撃を重ね合う。地の利は皐にあり、ティンは重力に引かれて地へと舞い降りて皐は。

「落月斬ッ！」

更に追撃として上から攻撃を仕掛け、対するティンはそんな皐に向けて蹴り出し、刀とブーツが激突して火花が舞い。

「断罪をッ！」

ティンは無い魔力を剣に通し。

「ろくに流せる魔力も無いくせにッ！」

どうでもいい、とティンは心内で返して構う事無く滞空している皐目掛けて光を纏い、剣を前に突き出して突進する。

「性懲りも」

皐はその剣を払う様に蹴りを放つが、金属音を放って皐の足が弾かれ、皐は一瞬目を見開いて刀を納め。

「遅いッ！」

ティンの宣言どおり皐の空中抜刀よりも速くティンの剣が皐の体へと突き——いや、僅かに抜かれていた皐の刀がティンの攻撃を受け止め、攻撃の軸をずらす事には成功していた。

「月華閃流剣刀術奥義イイッ！」

ティンはその言葉に反応する。奥義、つまり皐の取って置きだ。

剣術道場に居た頃、彼女は奥義の存在は秘匿とすべき物と言って決して使おうとしなかった技。

光を纏ったティンは軸を修正しながらも皐へと向かい、地に降りた皐は刀を納めなおして確りとティンを見据えて皐は前にへと踏み出し、さっきとは比べ様が無い強烈な、まるで大砲の砲撃でもされたかのような蹴りをティンの剣へと叩き込む。空間を揺らすほどの衝撃が走り、二人は金属音を響かせて弾かれ合うも、皐は尚も天に舞い上がる。そして——。

華散らし、月さえ断ち裂く、極意。名を。

[illegible]

——月華閃流劍刀術奧義“華美裂ヶ”。

臯の咆哮と共に、巨大な一閃がティンを飲み込んだ。その光景を背負うように立つ臯の背には、真つ二つに切裂かれた月の絵が描かれている。

「げふ」

「さっきの分は返しましたよ、ティンさん」

皋は背中越しに語り、ティンはよろよろと立ち上がる。

「つ、き？ 何で、一二つに……？」

「ああ、これですか」

臯は刀を納めてティンと向き合う。

「月華閃流剣刀術とは、そもそも月を斬る事を目指した初代が考案し、一万年以上も昔から研鑽を重ね続けた剣技です」

「何で、月を斬ろうなんて」

「剣士として、何を斬れば伝説となるか。そう考えた末、目に入ったのが輝かしい満月だったそうですよ。そして生み出されたのが、絵面だけでも月を斬ろうとした技です。そして奥義、華美裂ケは月を裂き華散らす刃。さて、解説がこの辺りでお終いにしましょうか」

皋は刀を握り直し、ティンに向かって駆け出し、二人は同時に剣を重ねあう。金属音が響き、お互い弾かれあう二人。吐く息は僅かに荒く、互いに痛みを分け合った。

勝負は中盤を超え、いよいよ終盤へと向かい始める。

皐はティンへの距離を一気に詰め、居合を放つ。

「遅いッ！」

ティンは今までの居合抜きから明らかに遅い一撃を弾き、返す刀で皐に剣を振るう。ティンはこれを自主的に誘った鏡花水月だと思つた。だが皐は――その刃を己の身体に深々と突き刺す。

「……え？」

ティンは動きを止めた。いきなり皐が自分から刃を掴み取ってそれを自身の身体へと突き刺したのだ。皐は光の騎士剣を抑え、まる自身の目を写すような位置においてその体勢を維持する。

「な、なに、何なんだよ……」

「月華閃流剣刀術が秘儀、身刃一体」

皐は絞り出すような声で自分が何をしているのか語り、刃から自身を抜く。

「自身の身に刃を突き刺し、痛みを持つて自己催眠をかけ、生存本能を呼び覚ます。月華閃流剣刀術の中で唯一の攻撃を受けて発動させる秘儀……！」

「そん、な……！」

ティンは目を見開いて皐を見る。

「何で、なんでこんなことしてまで戦うんだよ！？　痛くないの！？」

「痛みを持つて自己催眠をかけているんです、痛くない訳無いでしょうが」

「じゃあなんでここまでして戦うんだよ！？」

「守る為ですよ」

皐の返答は、ティンにとって意外という他ないものであった。何を守る為なのか。

「守るって……何をだよ」

「誇りです」

「ほこ、り？　誇りを守る為に戦っているの？」

「ええ、貴方には分かりませんか？ 人はいつだって、武器を握る時は何かを守るためなんですよ？ 自分の身であれ他人であれ、守るものなしに人は本当の意味で戦えません。何かを守るために戦うんですよ。貴方もそうでしょう？」

皐はティンに問い返す。覚えが無いとは、ティンは言わない、いう訳が無い。守りたいものを守りたくて騎士になった彼女が皐の言うことを理解出来ない訳が無い。だが、それでも。

「剣士には守るものが必要なんです。守るものなしに本当の戦いなんて出来ないと言ったとおり、剣士は守るものがあって立てるんですよ」

「……そっか」

ティンはそれだけ言った。皐がそこまでする理由なんて理解出来ないし、したくもないが——それでも、信念は分かった。なら十分。

「じゃ、やろうか」

「ええ、やりましょう。最後に立つのは私かあなたか、存分に」

二人は互いに駆け出し、同時に攻撃を放ち、武器同士がぶつかり火花散らす。

「ラッシュオブラッシュュッ！」

「月華閃流剣刀術客員秘剣“百花繚乱・集”！」

二人は声を上げ、斬撃の嵐をお互いに生み出す。拮抗するそれらはまさにお互いを削り合うように凄まじい激突音が響き渡る。お互い放つ斬撃は剣戟を越えてお互いの身体をかすり、ティンは隙を見て背後に回り、皐は素早く反応し、ティンが先に斬りつけ、皐は紙一重でかわして反撃を行い、再び二人は斬り合う。

剣風は刃を乗せ、周囲を薙ぎ払い、二人は身を、身体中の至るところを斬り合い、頬が掠り、刃が脇腹を撫で、髪が数本舞い、胸元に剣が走り、周囲の草までも切り払う。

皐の刀が不意にティンの足を切り裂き、一瞬だけティンは動きを止めてしまう。

「貰ったあああああああああッッ！」

皐は思わず起きた好機を逃す事無く、更に踏み込み、刀を握りなおし、皐はティンを見抜きその先にある天を見据える。その理由、それは――無論、月。

「月華閃流剣刀術、最終奥義iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiいいいッッッ！」

皐は鋭く踏み込むと同時に天に向けて刀を抜き、切裂き、天も地も、全てを切裂いていく。

その刃、地を歩むものさえ、天の月をも、斬り裂く、魔剣。故に――天の、月を、斬る、魔剣。

「天・月・斬・魔ああああああああああああああああああああああああああああッッ！」

「――見えたッ！」

ティンは斬られる事で体勢を直し、皐と交差する瞬間に、可能な限りの急所を切裂くッ！

「――っは」

皐は全身が分離する痛みを歯を食いしばって耐え抜き、ティンと同時に地に立ち、ティンは直に駆け出し、皐は納刀してそれに対応し、居合いを放つも紙一重で頬をかすりながらも前に進みながら剣を突き出し。

「なっ」

「ってああああああああああッ！」

皐の体にティンの剣が突き刺さり。

「これで」

剣を握って蹴りを入れて剣を抜き、左肩口から切裂き、胴抜きを叩き込み、跳躍から首元を切裂き、蹴り払って踏み込み、右肩を切裂いて止めに胸を貫き上げるッ！

「終わりだ……ッ！」

ティンの呟きに、皐は身体の奥から何かを吐き出す様に仰け反り、力なく背から倒れた。ティンは慌てて倒れた皐の下へと走り寄る。

「皐！」

「……ああ、負け、たんですか。私」

皐は力無く呟いた。ゆっくりと目を開け、皐はティンの方へと向く。

「なんて、顔しているんですか。勝ったのは貴方なのに」

「だ、だって……だってッ！」

ティンは弱弱しく返す皐に涙声に返す。そして、ティンが開いた口をそつと皐が塞ぐ。

「それを言っではいけません。謝罪の言葉は、敗者を惨めにするだけです。貴方はただ誇ってください。勝者に許されるのは、勝利を誇る……ですよ」

そう言っ、皐の身体から力が抜ける。魔力に染まった武器で死に至る傷も痛みも与えることは出来ない。だから、彼女は全身に走る苦痛に耐え兼ねて気を失っただけなのだ。ティンは自分にそう言い聞かせ、皐を背負って歩き出す。近くの町へ向けて。

剣に誇りを、剣を振る意味を（後書き）

終わった！。今日は色々あったので今日中に上げられて嬉しいです。

それでは次回。

姫と騎士

ティンは臯を背負って暫く歩いていると道路に入る。歩いていると大きな街が目に入ってきた。やがてティンは何時の間にか道路から街に入った。

適当な宿屋を見つけ、いつか浅美や瑞穂がやってたようにチェックインをして臯を部屋まで運んだ。

「それにしても驚きですね」

ティンは臯をおろして驚く。気絶していたと思っていた人間が目を覚ましたのだ、当然だろう。

「まさか、ティンさんがチェックインできるようになってたとは……見ない間に立派な冒険者になりましたね」

（こいつは喧嘩を売ってるのか？）

ティンは臯の減らぬ口にむつとしながら布団の中へと入れる。すると臯は震える体で懷から携帯型お着替えくんを取り出すと元の服に着替えた。

「そう言えば、なんで着替えたの？」

「あれは月宮に伝わる戦闘服、決死戦服です。羽織れば最後、自身は死したものと扱い、決死の覚悟で戦う服です」

「し、死んだって、なんでそこまで」

「剣に生き、剣に死す。剣士なら誰もが夢見る理想です。私も覚悟だけはそうありたかった……それだけです」

臯はそう言っただけで目を閉じた。

「さ、臯、大丈夫!？」

「ええ……結構、疲れました。少し、寝かせて……下さい……後、敗者の、責務です……この宿代は……私が払うので……どうぞ、自由に」

それだけ言うと臯は瞼を落す。

「さ、臯？ 臯？ 臯!？」

ティンは瞼を落とした臯に呼びかける。そして、臯は――。

「んっ……姉上……もう酒は……まだいけるって……年を考える……」

思いつきり、寝言を呟いていた。ティンは呆れた表情で宿を後にする。

ティンはとりあえず、街中を適当に歩き回っていた。と言っても、彼女に行く所など存在しない。故に、本気でぶらぶらと流れるように歩く。そして、ティンは衝撃的な人物と見かける。

揉み上げ部分が頭の上で盛り上がった、長い髪の子。見間違うはずも無い、彼女の名は。

「み、瑞穂!？」

「はい?」

瑞穂(?)はのんびりとした調子で振り返り、ティンが駆け寄る。

「な、何で瑞穂が此処に!？」

「え、えっと、巡回ですが……あのう、どちらさままで?」

ティンは首を捻った。あれだけ長い間一緒にいたと言うのに、彼女は覚えていないと言う事に。

「あたしだよ、あたし! ティンだよ!」

「ティン……さん? ええっと……んー? 騎士の格好って事は神

聖騎士団の人? ええっと、あそこにティンと言う方は居たかしら

……家名は?」

「家名? ああ、苗字? ええっと……あれ?」

再びティンは頭を捻る。瑞穂に自分の家名を名乗った事など無い。何故であろうか。

「……ないと思うけど」

「え、無い? と言うことはもしかして孤児ですか? それにしてもおかしいですね、教会に入った時に貴方に苗字を渡している筈ですが……」

と瑞穂（？）はまたしても訳の分からない事を口にする。いい加減にティンも何か気が付いてくる。

「……あんた、瑞穂だよな？」

「はい、水穂ですよ」

ティンは本人確認をし、更に頭を捻る。確かに彼女は“みずほ”で問題ないえ、何？ 既に文字から別人だつて分つた？ でも読みは同じ『みずほ』だよ？ ティンもまだ気付いてないから続くよ？ 彼女の姿をちよつとよく見てみる。髪型は間違えようもなく瑞穂と同じ。しかし、顔にばかり注目していて気が付くのが遅れたが、今の彼女の服装は瑞穂とは全く違っている。瑞穂の服装は基本白と黒だが、彼女のはもはや真っ白だ。そして決定的に違う箇所が存在する。それが、服装の装飾。そう、瑞穂の服装の装飾は布などでされているものが多い。が、彼女の服装の装飾は布もあるが何より、宝石が多い。瑞穂の服装に、宝石はなかった。そしてもう一つ、大きな違いが一つだけ存在する。

彼女の髪の色が、茶色。

「んんー？ そうだ、今日は服装が違う……ってか、何か前より太った？」

「服装ですか？ えと、服装は何時もと変わらないって……ふ、太っ？ え、ええっと、十分ギリギリだと思っんですが……そ、そう、ギリギリ、ギリギリです！ こ、これくらい太っていた方が女性的に魅力があるんです……って、え？」

ティンは女性に言っちゃいけない言葉を吐き、水穂も顔を真っ赤にしながら答えるが、此処でやっと自分に対する認識を理解する。

それとティンよ、上の描写を全てひっくり返すと言うかそこに気付くか。

「……もしかして、貴方の言う瑞穂さんとは、凄く細くないですか？」

水穂は諭す様な声色でティンに問う。

「うん。もう少し太った方が良いかなんて思うくらいは」

「……服装は動き易そうで、大体黒と白と紺？」

「うん、そうそう。いつもそんな格好じゃん」

「……その方、氷結瑞穂と、言いません？」

「うん、そうだよ。と言うか、あんたじゃん」

水穂は大きな溜息をついてティンと向き合う。

「あの……それは漆黒の氷姫と呼ばれる方の瑞穂さんで、私は天束水穂と言います。髪形が似ているので、たまに間違えられるんですが……顔も違うし、声も髪も瞳も違うのでこんなに間違えられるのは初めてです……と言うか漆黒の氷姫の由来と文字を考えれば違うと気づくはずですが……」

「……へ？ 漆黒の氷姫？ 誰それ？」

ティンはのんきに返す。しかし、聞き覚えがあるらしく、頭を捻る。

「漆黒の氷姫ですよ？ 氷結瑞穂さんといえばそちらの方が通じると思います」

「漆黒？ 何でそんな呼び方なの？」

「漆黒と言うのは瑞穂さんの黒くて長い髪と黒い瞳、そして氷姫と言うのは氷魔導師を意味し、姫とは世間に認められるほどの行為をした若い女性魔導師の総称。故に、漆黒の氷姫です」

「ふーん……あ」

ティンは思い出した。氷結瑞穂の名に聞き覚えがあったことに。そして、それをどこで聞いたのかを。

「氷結瑞穂って、去年テレビに出てた人じゃん！ そうだ、何かこう、でっかい建物のテレビとかに出てた人だ！ 映像見てないから、どんな人か見てなかったけど、何かテレビで色々言われてた！」

「ああ、当時の瑞穂さんは色々と言われていましたから……何せ、姫の称号を手に入れたのが撃破数百万ですから……しかも百万突破ですし、マスコミもあれやこれや色々あること無いこと言っていましたし、友人として教会の権力を使ってマスコミを押さえ込んだりと色々大変で」

「それってしよっけんらんよーってやつ？」

「あ、いえ。あの話題は姫連合としても見過ごせない状態になっていましたし、教会が動かずとも姫連合が動いたと思いますよ」

ティンは適当な相槌を打つ。正直本人にはちんぷんかんぷんである。

「姫連合って、何？」

「姫連合を知らないんですか？ 氷姫は知っているのに……えっと、姫連合と言うのは若く、優秀な女性魔導師に送られる称号である姫が集う連合です。彼女達は事実上かつての貴族に近い階級が与えられていて、社会的地位も高い方々です」

「……つまり、偉い人々？」

「……ええ、はい」

水穂は分っているようで分っていないようなティンの対応に険しい表情となっていく。

「……この教養の無さ……まさか、彼女の孤児院ではろくな教育をしていないのかしら……。えっと、ティンさん」

「ん、何？」

「失礼ですが、今お年はいくつで？」

「十九だけど？」

「これで、十九……」

水穂の表情はより真剣みが増していく。

「ティンさん。貴方は新聞などは読みますか？」

「ん？ 読まないよ。前に師範代に読ませてって頼んだら『お前に読ませても無駄だ』と返されたし」

「な……貴方の孤児院は一体どう言う教育をしているんですか!？」

「え、え？ 行き成り何を怒ってるの？」

と水穂は憤り、ティンが驚いていると何かを思い出したように踵を返す。

「そ、そうでした、巡回の後にも用事があるんです。ではティンさん、またいつか」

「ほーい。水穂か……瑞穂、今何をしてるんだろっな……」

ティンは置いてきた友人を思い出しながら歩き出す。そんな時だ。ティンの横から誰かが突っ込んできた。水穂に似た白い法衣に似たローブに、茶髪の長い髪を結い上げ、ポニーテールにした少女だ。ティンの横を抜けようとして——ティンの足に引っ掛かって転ぶ。

「ちょ、あんた何処に目え付けてんのよ!？」

「え、え、その、ごめ」

「待てえい!」

そんなやり取りをしている間に金属音が響く足音が近付き、見てみれば全身甲冑の者達が一気に此方へと向かって来る。少女が来た方向からやって来たその者達はティン達を囲んでいく。

「大人しく我らと来て貰おう」

「やだもんね!　っべー!」

甲冑の問いかけに対して少女は砂埃を払いながら立ち上がり、舌をべーっと出す。ティンは凄く微妙な表情で彼女に顔を向ける。

「……ねえ、ちょっと」

「ほら、行きなさい我が従僕よ!　何時ものように蹴散らしなさい!」

「なっ、星姫の騎士だと!?　そんな情報、聞いては」

「待て、一体何なの?」

甲冑の連中が戸惑っている中、ティンはだんだん何かに巻き込まれている様な嫌な予感がしながら剣に手をかける。

「何でもいい。その娘もついでにやってしまえ!」

「巻き込まれた!?　ちょっと、あたしは無関係だよ!」

「ちょっと、あんた騎士服を着ているくせにフェミニスト精神は無いの!？」

「フェミ……って、何?」

言っている間に甲冑の集団は一気にティンに襲い掛かり——素早く踏み込み、三人連続で切り捨て、身を返すと同時に一番遠い相手目掛けてもう一本の剣を抜き。

「掛かったわねえッ！」

居合いの要領で甲冑の連中に剣を投げようとした瞬間、少女の顔、口元がにやける様につり上がり、足元から光り輝く魔法陣が展開される。

「輝け星陣、スターダストレイン！」

甲冑の連中諸共光の魔法陣で包み込み、光の屑が降り注ぐ。甲冑たちは舞い落ちる光の屑――星屑によって舞い踊り、そしてより奇烈に舞う光が甲冑達を一気に薙ぎ払っていく。最後に立っていたのは、茶髪ポニーテールの少女だけだった。

「ふん、この光輝の星姫に喧嘩を売ってただで済むと思ってんだから相当に頭イカれてるわね。ほらあんた、行くわよ」

「え、ちょ」

茶髪の少女はそう言ってティンの腕を引く。

「ま、待つてよ！ あんた誰！？」

「この私を知らないの！？　しゃーない、よく聞きなさい。この私は光輝の星姫、リフィナ・オーラストラよ！」

少女はそう言って困惑するティンを引いて何処かへと行く。

姫と騎士（後書き）

今回はちょっと短めです。では神剣の舞手『姫と騎士編』始まり始まり！。

んじゃ、次回。

姫と騎士―輝光の聖騎士―

ティンはリフィナの手にかくれて町外れの古びた教会の中に入り、リフィナは手馴れた雰囲気で教会の奥に入り床を探り、取っ手のようなものを取り出してそれを引っ張り、床が開く。そしてティンの方に振り向き。

「ほら、先入って」

「え、うん」

ティンは催促され、その中に入る。中は暗く、石造りの階段が続いている。ティンはとりあえず奥まで階段を下りていく。正直暗くて仕方ないが、明りが無いなら仕方ないとティンは降りて。

「おい、その馬鹿」

とそこで後ろから声が来る。発言者はリフィナだ。

「光の魔法が使えるなら明かりくらい自分で灯しなさいよ」

「へ？」

後ろから言いながらリフィナはティンよりも前に行く。その指先には光が集まって輝いている。ティンは取りあえず黙ってついて行くことにした。

「どこに向かっているの？」

「教会地下の奥。そこなら一先ず安全だから」

言いながらどんどん階段を降り、次に広い空洞に出た。真っ暗で周囲の様子が確認出来ず、ティンはぐるりと周囲を見渡す。

「フラッシュ」

リフィナは手を前に開いて差し出し、魔法の名を告げる。すると空いた掌の中で光が弾け、暗い部屋を明るく満たす。

そこにあつたもの、それは。

「よ、鎧？」

「そ、この辺りが戦争してた頃、教会は此处を即席の病院にしたって訳。此处にあるのは一種の倉庫、死んだ兵士達の鎧やらが無造作

に置かれているから、怨霊とかいるかもよ」

「へえ、そうなんだ」

言いながらティンはさきゆくリフィナの後について行く。

「ちよつとあんた、女なんだから少しは怖いとか思わないの？」

「いや、普通幽霊くらいで怖がる？ 怨霊とか言われてもあ、そつて感じだし」

「かつわいくねえ……」

「その台詞、そのまま返して良い？」

二人はそんな事を言い合いながら歩き、暫く歩いていると急にリフィナは振り返ってポシエットから何かを取り出し、それをきた道に放り込む。

「今なにしたの？」

「ちよつとトラップ。あたしらの真後ろを一種の神殿に作り変え、異界化させて後を追いつらくさせる。ま、時間くらいは稼げるですよ」

そう言つて踵を返して行く。教会地下は地上より地下の方が充実しており、さびれた上と比べてこっちの方が広くて大きい。

「ここは一体」

「地下の礼拝堂。大昔、異端者たちの根城だったのが始まり。それが見つかり、あらゆる時代の流れで時に倉庫となり、時に秘密通路になり、マニアな冒険者には結構知られている話よ」

リフィナは言いながら歩き進み、やがて適当に置いてある木箱に座り込む。

「ま、その辺にでも適当に座りなよ。そんな演劇みたいな服、いつまで着込んでるのよ」

「え、この服？ そう言えば、ずっとこの服だなあ……」

ティンは思い出した様に言うつと携帯型お着替え君を取り出し、スITCHを押す。そしてティンはかなり久しぶりにオーラウェアに着替える。リフィナはその様子を見て。

「あんた、それ……」

「何、ほしいの？」

「いやそんなの欲しくないけど……でも、あんたそんな使い方じゃ駄目だよ」

「……へ？」

ティンはず素っ頓狂な声を出す。そんなティンの反応をスルーしてリフィナは携帯型お着替え君を手に取り、ひっくり返して真ん中の小さなスイッチを押す。すると注に画面が浮かび『お着替え設定』という表示が出ている。

「うえ、うえええ！？　こんなのあつたの！？」

「何言ってるのあんた？　ケーお君って言ったらこれを使った変身でしょうが！　そんなのも知らずに使ってたの！？」

「ケ、ケーおくん？」

「ケータイお着替え君って言ったらケーお君でしょうよ。全く、上着も下着も同時の上に換装時間もデフォなんて、あんたなんでこれ買ったの？　使いこなせて無いじゃん！」

リフィナは言いながら設定画面をいじる。時には何らかの項目を操作し、ケーお君の設定を無断で変更する。

「ちよ、ちよつとなにやってんだよ！？」

「なあに、ちよつと設定を弄って機能を変えてるだけ。大丈夫、ちゃんとセットしてる所は手付かずだから。ようし、いいこと思いついた、あんたただけあたしの騎士になれ」

ティンは驚いた表情でリフィナを見る。いきなりのことなのだから当然でもあるが。

「き、騎士って、どういうこと？」

「んーつまりはさ、あたしを守るガードマンになってってこと。今だけで良いから」

リフィナは無邪気な笑顔でいい放つ。対してティンは。

「……そう言えば、さっきの奴ら騎士がどーのつていつてたっけ」

「そそ、そゆこと。つまり騎士って言うのは“姫”の相方で姫を護る人のこと」

「……姫？ あんたどっかの偉い人？」

「……もしかしてあんた、私のことを知らないの？」

リフィナは怪訝な表情を見せ、ティンは何んのこっちゃと言うような顔をしている。

「……え、本当にどっかの国のお姫様とか？」

「あ、の、ねえ。あんた、新聞は？」

「読んだこと無い。前に読んだことあるけど、あんなちっさい文字全然読めないよ」

ティンはないないと手を振って返す。

「……雑誌は読んだことある？」

「雑誌？ ああ、漫画雑誌ならたまーに。買っても妹達が回し読むんだよねー」

「じゃ、じゃあニュースは？ 流石にそれくらい見てるよね？」

「ああ、テレビはいつつもアニメとかしか見ないし」

「は、何？ 私知らない？ 光輝の星姫、リフィナ・オーラステラを？」

リフィナは自分の胸に手を当て、ティンに語りかける。

「うん。あんただれ？ どこの国のお姫様？」

「あ、の、ねえ！ 私は、星空の術式を学会で発表した、姫！ 若き天才女性魔導師の誉れ高き称号！ 分かる！？ 魔導師の未来を背負って立つ、才能ある魔導師！」

「……あ、なんかさっき聞いたな、そんなの。瑞穂もだっけ」

「瑞穂？ ああ、あんなの詐欺師も良い所！ 姫の面汚しも良い所よ！」

ティンは少し驚いた。瑞穂がこんな評価が下されているとは露も知らなかったからだ。

「……詐欺師ってどういうこと？」

「撃墜数百万突破で姫の称号獲得なんて絶対嘘っぱちに決まってるじゃん！ 何かやったに違いないね。この前どうやって撃墜数百万を超えたのか聞いてみたら、苦い顔して目線逸らしたし、きつと何

「かやつたに違いない！」

「……そんなに凄い数字なの？」

「あつたり前じゃん！ 百万人をあの年で、たった二年で出来る訳が無いでしょうが！」

「へ、へえ……でも瑞穂つて、そんな嘘つくかなあ？」

リフィナは胸を張って自信満々に語るが、ティンは未だに頭をひねり続ける。彼女が流石に姫になる為にそんな事をするとは思えないからだ。

「ふん、ああ見えて機械になんか細工したに違いないじゃん！ 全く、あんな奴が何で姫になったの！？」

リフィナはそこまで捲し立て、落ち着く様に足を組み直す。

「ま、あんな嘘つきのことばどーでもいいや。それよりも何だけど、あんた私に耳かして」

「ん、んー、良いけど」

ティンは言われるがままにリフィナに耳を差し出し、ごにごにょとティンに語りかける。それを聞いたティンは。

「え、ええ！？ ホント！？」

「ホントよホント。んでね……」

更にリフィナはティンの耳へとごにごにょと何かを吹き込んで行く。やがてティンは目を輝かせて。

「いい！ それすつごく良いよ！ いつやるの！？」

「まあ待ちなさい。奴さんももうすぐ来るだろうし、もう遅いから寝ましょう。昼前から逃げっぱなしで疲れたー」

リフィナは言うところりと寝っころがる。ティンも欠伸をして。

「寝よ」

とだけ言ってポシエットから寝袋を取り出してその中に入って目を閉じる。

「利用するだけは利用してやるよ、馬鹿な剣士」

リフィナは無造作に置かれた箱の上で気持ち良さそうに熟睡している。そこに喧しい金属音が彼女の元へ近づいて行く。

「ほう、一人か。騎士を逃がし、貴様一人となったか」

リフィナは一切起きる様子を見せない。だが。

「あの神殿、よく抜けられたね」

「なるほど。教会地下に突如出現した別ダンジョンへと通ずる転移術式を置いたのはやはり貴様か」

甲冑達は疲れを見せることなく立ち塞がるが、多くの仲間が少し震えているところを見ると相当に疲れているようだ。対して振り向くことさえせずにリフィナ。

「しかし突破に一日半もかかるなんて、待ちくたびれて二度も寝ちゃったじゃん、どうしてくれるの」

「ほう、あのような罫を仕組んでおいてその台詞とは頭が下がる。どのような神経が聞きたくなる思いだ」

甲冑達のリーダー格が一步前に出て語る。リフィナは背伸びをして甲冑どもの方へと振り向く。

「にしてもがっちゃがっちゃ全くうるさいったらありやしない。あんた達ねえ、レディに気を使おうって無い訳？」

「すまんが、人間兵器と呼ぶべき貴公をレディと呼ぶには些か抵抗が」

「ふん、挑発だけなら一丁前？姫を人間兵器呼ばわりなんていい根性してるじゃない。ぶちのめしてやるつか？」

リフィナは身体を起こして木箱から降り、箒を手取る。同時、

甲冑達は武器を手に取り戦闘隊形に移る。

「一人でこの数をどうする？」

「魔導師が一人で相手するのに、無策だとも？」

「小細工なぞ通用せぬ。こちらには対魔法装備も持っている」

「で、しょうねー。んじゃこつちもやるとするか」

リフィナは左足を後ろに送り、カンツと高い音を鳴らす。魔法陣が展開され、甲冑達が一斉に動き出す。

「リンク、セツト！」

リフィナは魔法陣を目の前に展開し、更に魔法陣は輝きを増していく。

「無駄だ！ クリスタルの前に、例え姫だろうと意味は無い！」

「ハートコネクト！」

リフィナは指を払い、魔法陣に書き加えていく。

「ブースト！ イグニッション！」

そして輝く魔法陣が碎ける様に弾け。

「でえええええええええつやあああッッ！」

中から白い服の剣士——ティンが現れる。その手に持つのは、ケ
ーお君。

「な、貴様は！？」

「燦然登場！」

装置を起動させ、ティンは光を纏い、オーラウェアのシルエット
が消え、ティンの腰から光が弾け、スカートが現れ。

「輝光の！」

続いて上着が装着され。

「聖騎士！」

腕を大きく振るって翻り、首元から続いてマントも展開され、腰
に光の剣も追加され、指を立てて顔の前へと置き。

「ティーンッ！」

決めポーズと共にティンの纏う光が弾けて散る。

「ふん、特撮ヒーロー物気取りか！？ 舐めるな！」

「打ち合わせ通りやるよ！ ティン、あんたの体内魔力を出来るだ
け放出させながらこっちに来て！」

ティンは何も言わずに抜剣してリフィナの元へと駆け出すが、甲
冑連、中が立ちはだかる。ティンは甲冑の一人に銀の騎士剣で切り
裂き、続いて襲ってくる甲冑を踊るように飛び越え。

「騎士なぞ放って置け！ 狙うは姫一人だ！」

「ふん！ 姫を舐めんじやないわよ！ クリスタルが相手だって」

リフィナは箒を構え、魔法陣の術式を構築し、甲冑のリーダー格がクリスタルの装飾が施された槍を構えて突進し——二人の間に、ティンが読んで字の如く踊り出る。

「な、にい！？」

「リフィナ！」

「あ……い、行くよティン！ 魔力支配！」

リフィナは一瞬硬直しながらもティンの背中へと手を突っ込み、光が溢れ出す。そして、ティンの体中が光り始め。

「え、何、何なの、これ……？」

「今此処に、代理となりてかの神剣を召喚す！ 代理召喚ッ！」

ティンの体中から発せられる光が線となり、ティンの体中を駆け巡り、その手に光が集う。そして——その手に神々の黄昏、黄金の十字架、最終戦争の名を冠する剣が光臨する。

「来い、ラグナロクウウウウッ！」

ラグナロクが、ティンの右腕に呼び寄せられる。そして。

「な、何、何なんだよ、これ……」

ティンの体中に、身に覚えのない傷が無数に走っていた。顔から足の先まで、びっしりと。それは正しく、狂気の現場だ。

姫と騎士―輝光の聖騎士―（後書き）

ん、三話で終わらせる予定が長くなりそうな予感。んじゃ、次回にまたー。

クリスタルⅡ魔力砕きの宝石と呼ばれるもの。魔力に当てると魔力が乖離して魔法が掻き消される。

姫と騎士―神剣を得た代償―

数時間前。

「ねえ、リフィナ」

ティンは暇そうに近くの置物に背中を預けていた。そのだるそうな目線の先にいるのは茶髪の髪をポニーテールにした少女、リフィナだ。彼女もだるそうに箱の上で寝っ転がっている。

「ねえ。いくらなんでもさ、遅いにも程つてのが無い？」

「ああ、気にしなくても良いよ。別に問題ないから」

そう言ってリフィナは欠伸をする。そしてぐるり寝返りをうち。

「そついやさ、あんたって何か身体に色々細工してない？ 色々感じるんだけど。やめた方が良くないよーそれ、ほぼ禁忌と言っても良いもんだよ。一体何があつたのか知らないけどさ、身分相応って言葉が世の中にはあるわけだね」

リフィナは暇そうに言った。対するティンはと言うと。

「え、えつと……何だろ、これはあたしがやったんじゃないって、親がやったんじゃないけど」

「え……じゃ、じゃああんた、本当に障害者？ ちょ、つーことはなに、その身体はそういうこと？ わ、何その親、本当に正気なの！？ よくまあ実の娘にそんな鬼畜な事を……」

リフィナはブツブツと呟きながらティンを見る。その目は何処か同情と、空虚なものが宿っている。

「ねえ、今なんか言った？」

「いんや別に。で、人体媒体なんて狂気の沙汰までやってあんたは何を手にしたの？」

「人体媒体……？」

「人体媒体って言うのは人の身体使って魔法を使うこと。で、何が出来るの？」

「えつと、神剣が呼べる」

その言葉に、リフィナはやりと口の両端を釣り上げる。

「へえ……んじゃ、ちよつとあれだ。変身ポーズでも練習するよ」

そして現在。

「な……何、これ。何なのこれ。一体、何がどうなってるの!？」

「それが人体媒体つてもん。あんたさ、もしかして人を使った魔法がなんなのか、知らない？」

ティンは震えながら振り返る。

「人体媒体って言うのはね、昔の地方で言うところの生贄。人の身体そのものを魔法を使う道具にする狂気の術式。人間の身体を術式の媒体とし魔法を使用する禁忌の術式。それが、人体媒体。その身体中の傷は魔力の管、魔力を通し、術式を動かすためのもの。まさか、術式書くのにマジックで書くとも思ってた？」

「な……え……?」

「後、前」

言われてティン前を向くと同時に剣を振る。振られた剣は直ぐさま直前まで迫った甲冑の持つ槍にぶつかり、火花が舞う。

「落ち込んでる暇なんてないよー?」

「う、うる、さい!」

ティンは槍を蹴り付けて弾き、身を返しつつ甲冑の身にその黄昏の十字剣を叩き込む。ティンの手によって振るわれたその一撃は易安と甲冑の鎧に食い込み、それどころかバターでも切り裂いているかのように刀身が甲冑の身体を文字通り滑る様に通り抜けて行く。

「え」

ティンは予想外の結果に思わず手を止める。その瞬間。

「呆けるな! 次来てる!」

言われてティンは前を見れば、次々に甲冑連中がティンに殺到している。ティンは咄嗟に甲冑連中を飛び越えて。

「馬鹿め、大事なお姫様が剥き出しだぞ!？」

瞬間、甲冑集団が一気に薙ぎ払われて行く。甲冑達が剥き出しにした油断が原因となつて。

ティンはその手に握られた神剣へと目を落とす。黄昏の如き黄金の輝きを放つ十字架へと。何時もこの剣を握る時は正気を失つていた。いや、正気を失つた時しかこの剣を呼べなかった。だからこそ、この剣の異常性が分かる。理解出来る。なるほど、これこそ神の剣、正しく神剣の名を冠するに値する代物。鋼鉄さえバターの様に切り裂く切れ味、触れてるのに握っている感覚が全く無い重さ、そして何よりも。

「――何て、暖かい」

思わず、呟いた。剣が放つ光が、凄く暖かい。まるで母親に抱かれてるかのような暖かさと安心感。体中から溢れ出して来る光。そして、ティンは呟いた。

「誰にも、負けるが気がしない……！」

「潰せえ！ その騎士を叩き潰せえッ！」

リーダー格の男の呼び掛けに応じ、甲冑連中が各々武器を持ってティンへと殺到する。ある者は大剣を、ある者は槍を、ある者は斧を、ある者は――ライフルを。

鋼鉄の鎧姿に似合わぬ鉄砲を持った集団が囲み、その中へ武器を持った連中が寄って集って襲い掛かってくる。

「掃射！」

掛声に合わせ、ライフルが火を噴き、弾丸が甲冑達の間を潜り抜けてティンの元へと突き刺さり――。

「――奴は、何処だ？」

瞬間、ティンは消えていた。何処かへともなく。影も無く。直後、ライフルを構えていた甲冑が光に包まれて弾かれる。

「そこかあッ！」

火を噴く機関銃。ティンは銃口向けられた時点ですばやく駆け出し、擦違い際に次々と銃を構えた甲冑達が薙ぎ払われて行く。そして、ティンが剣を振るえばその軌跡が黄金の輝きとなって斬線に現

れる。それを見た者達は次々に震えた。

「な、んだ、あれは。化物、か？」

「う、美しい……何と、美しい剣閃だ……」

踊る様な、嵐の様な、荒れ狂う暴風の様で丁寧に編まれた裁縫の様に繊細な剣戟が次から次へと甲冑を飲み込んでいく。

ある者は剣を構えて切りかかり、ある者は槍を構えて突撃し、またある者は斧を手に振り回し、ティンへと襲いかかった。だがその結末は全て同じ。

剣で襲えば剣の一撃を払って黄金の輝きが飲み込み。

槍で襲えば槍を切り払って間合いを詰め、黄金の輝きが飲み込み。斧で襲えば斧が振るわれる前に黄金の輝きが飲み込んで行く。

そんな風にティンは次々と甲冑達を切り捨てて行く。いや、これ
はもはや剣戟と言うより猛獣の狩だ。黄金の輝きが甲冑を飲み込み、
そして吐き出して行く。その単純作業だが、荒れ狂う剣閃と混ざり、
酷く美しかった。やがて、気が付くとそこには誰にもいなかった。
そう、誰一人として、ティンを除いて立っている人間は誰もいなかった。誰も。

「あれ、リフィナ……？ 何処……？」

ティンは呆けて周りを見渡すと足音が響いて来る。その方向へティンは振り返って。

「敵、か……！？」

ティンはラグナロックを構え直し、音の先へと視線を集中させる。そして――。

「でえあああッ！」

「全員、即刻戦闘行動を中止して武器を捨てなさい！ これよりこの場は我等神聖教会団が預かります！」

思わず剣を止めてこの場に入ってきた女性を見つめる。その女性
は。

「水、穂……？」

「ティン、さん？ な、なぜ、此処に……？」

天束水穂。先日会ったばかりの女性。彼女はさつきまでなぎ払って居た甲冑連中によく似た連中を連れ、この場に割り込んで来る。「ど、どうということ！？ 何で水穂が此处にいるの！？」

「わ、私はこの付近に潜伏中と言う凶悪犯の捕獲の為、こうして神聖教会団戦闘部隊である神聖騎士団を率いてやって来ました。ティンさん、まさかとは思いますが……あなたもその一味ですか？ 或いは賞金首を狙ってやって来た冒険者？」

言われたティンは跳び上がりそうな程に驚く。何せいきなり犯罪者扱いが賞金稼ぎ、その上自分が今しがた切払ったのは例の凶悪犯で、リフィナを狙っていると言うのである。てんこ盛りの情報にティンはただただ驚くのみである。しかし、これでティンは己が何をすべきかを知った。ならば。

「……どちらにせよ、あなたを重要参考人として我々のご同行願います」

「水穂様！ こちらの犯罪集団と思わしき者達が気絶して居ます！」
水穂の下に十字が刻まれたローブを纏った男が報告し、水穂はそちらに視線を向ける。

「分かりました。一部は気絶している犯罪者達を拘束し、この場で待機！ 残る方々でこのまま追跡を続けます！ 罪深きものと言えど彼らは同じ人間、手荒な真似は一切許しません！ これは、神聖教会団副神官長である天束水穂が厳しく命じます！ 後重要参考人から話を伺いたいのでそちらの準備もお願いします」

「ハッ！ ……水穂様、少し宜しいでしょうか？」

「はい、何でしょうか？」

「その重要参考人は……どちらでしょうか？」

「え？ 彼女なら此处に……って、え？」

水穂が見渡せば、先程まで目の前に居た筈の少女が何処にもいなかった。

ティンは踊る様な足取りで教会地下を駆け抜けていく。やがて、見覚えのある後姿が目に入ってくる。白い服に、結い上げられた茶髪。間違いない、彼女は。

「リフィナ！」

「……星光よ、我が敵を打ち砕け」

呼ばれた彼女は、空虚な目でティンに向けて躊躇もすることなく、光る箒を構える。

「——へ？」

「シャインバスター！」

瞬間、ティン目掛けて光線が走る。ティンはソレを素早く方向転換を行い、リフィナの下へと跳び降りる。

「な、なにすんだよいきなり!？」

「——あ、ああ、ティン？ ご、ごめん、敵と見間違えたよ。此処暗いからさあ」

（く、暗い？ 確かに暗いけど、あんた灯りをつける魔法使えたんじゃ……）

ティンは凄く白々しいリフィナの言い訳に凄く苛立ちを覚える。だが、昨日の事を振り返る。変身ポーズや、好きな漫画とかを語り合った昨晚。だから、どうしても彼女を嫌な奴とは思えなかった。思いたくない。昨日まで見せたあの笑顔に嘘は無いと思っているから。だから、何となく。

「……そっか、それじゃ仕方ないね」

——ティンは、その言葉を信じた。飲み込んだ。

思えば、これが彼女にとって、騎士としての試練だったのかも知れない。後に彼女はこの選択を後悔する。あの時に——。

「水穂様、各部隊の編成が終わりました。これより犯罪者集団を追います！」

「ああ、そうですね。ところで思ったのですが、私一人で重要参考人の捜索を行うので、私抜きでいつて来て下さい。彼女は私一人で捜索しますから」

「し、しかし、それでは水穂様——」

「それと貴方達に一つ言っておきます」

水穂はちらりと背後を見る。

「教会の幹部を両親に持ち、教会の学校で学び育った私にとって神聖騎士団は一種の昔馴染みなんですよ。幼馴染と言ってもいいんですよ？ そんな私からすれば、貴方達の甲冑を見れば、全くの別物です。一目見ただけで十は違う所が見つかりますよ？ その本心は分かりませんが、その行いを悔い、私に懺悔すると言っのなら今はちよつと説教するだけで許してあげます。が」

水穂は柔らかい笑顔のまま後ろに振り返る。だが。

「相手は丸腰の女一人、バレたならやつちまえ！」

「その気は……皆無のようですね」

甲冑達は武器を握り締めて水穂に襲い掛かる。その武器の刀身、そこが水晶となっている——つまり、魔力碎きの宝石、クリスタルだ。これは魔力の結合部分を分解する性質を持っている。これを前に、魔導師は全く意味を成さない。水穂は神官で、魔導師。ただこの武器に蹂躪されるだけなのだ。

対する水穂は足元を蹴る。同時に起こる光の爆発。宙を舞う破片、それらが甲冑達を一瞬で薙ぎ払って行く。彼らの持つてる武器が魔力碎きの武器。確かにこれは魔法を打ち消す。しかし、魔法によって吹き飛ばされた瓦礫は、どうしようもない。打ち消しようが無い。ただ、吹き飛ばされるだけだ。瓦礫に巻き込まれて。

一瞬にして半数以上を吹き飛ばされる甲冑達。水穂は再び柔らかい、聖母の様な笑顔を浮かべていった。

「まだ間に合います。さあ、懺悔なさい」

言ったはいいが、甲冑達は既に逃走の直後であった。水穂はただ悲しそうな表情で魔法陣を懐から取り出す。

「御免なさい、犯罪者集団の一味と思われる人達を取り逃してしまいました」

『ええ、先ほど報告を頂きましたし、水穂様が通信魔法を起動していたのでそちらの情報は全て把握済みです。しかし、ご無事で何よりです』

「それにしても本当に御免なさい。貴方達も肝を冷やしたでしょう？」

『本当です。貴方のことは幼少期より見ていましたが、人生で最高の無茶ですよ。少しは自重をお願いしたところです』

水穂は思わず苦笑する。確かに彼女は昔から彼ら騎士団に迷惑をかけっぱなしであったと思い返す。そうしていると見覚えのある、ちゃんとした神聖騎士団の面子が到着する。

『ですが、まさか連中が此方の鎧を模倣するとは盲点でした。貴方がいれば大丈夫と思い、新米ばかりで編成したのが裏目に出るとは……』

「いえ、それを進言したのは私です。この失態は私に責任があります」

『いえ、それを受け入れたのは私で……この話は止めましょう。お互いに責任があります。責任の転嫁をしても仕方ありません』

「そうですね」

水穂は一息はいて考え直す。一先ずこれからの事を考え直す。

「取り合えず、貴方達は上で待機している部隊と連携し、この地下教会の出入り口を封鎖して下さい。犯人集団を見つけ次第に逮捕して下さい。」

神の名の下に」

「神の名の下に！」

偽善者達

地下礼拝堂に聖職者達の声が響き渡る。

姫と騎士―神剣を得た代償―（後書き）

あけおめ！。と言ってもこれしか書き留められなかったぜよ。
じゃ、また。

姫と騎士―あなたを守らせて―

「おい、どうということだよ」

ガチャガチャと音を立て甲冑達が歩く中、一人が洩らす。

「何が姫一人攫うだけの簡単な仕事だよ、騎士はいる、教会の連中が出張って来る、かんたんじゃねーじゃねーか!? 話が違っぞ、どうということだよ!？」

「うるせえ」

先頭に立つ甲冑が静かに返す。

「騎士つってもただのがきじゃねーか。始末すりゃ良い」

「教会の連中はどうすんだよ。あいつら、俺らを本気で捕まえる気だぞ、もう出口は塞がっている、もう逃げ場はねえ!」

甲冑の声が地下教会に響き渡る。

「くそつ、もう俺は降りる! リーダーの狂言に付き合ってられるか!」

甲冑達が一気に最後尾にいた一人に注目する。やがてリーダー格の甲冑がソイツに向け。

「降りる、だあ……? 逃げ場はねえぞ?」

「うるせえ! 一人ならどうにでもならあ! もうあんたの無茶な作戦に付き合ってられるかよ!」

甲冑の叫びを誰が止めない。いや、誰もが口に出さないだけで意見は皆同じなのだ。だが、誰も彼の様に口を挟める気にはなれなかった。

「降りると……もう無理だと? こっちには最終兵器だってあるんだぜ?」

「はあ? もうあんたの寝言は沢山だよ!」

そう言って甲冑の一人は背を向けてきた道を返す。

「おい、待てよ」

「待てるかよ。どうせその最終兵器とやらもくっだらねえ小細工だ

る？　そういうのいいから、後はあんただけでやってくれ」

「……リーダー」

「おい、なあこりゃあ立派な裏切りだよなあ？」

リーダー格の甲冑は芝居のかかった口調で周囲に煽る。急な事に甲冑達に動揺が走る。

「ああ、そうだ。裏切りだあ！　裏切り者は……罰を与えなきゃなあッ！」

リーダー格の甲冑は懐からあるものを取り出す。黒光りする鉄塊。それは正しく――拳銃だ。それかなり大きな。もはやそれはハンドカノンと呼んだ方が早いというくらいに。背を向けた甲冑はめんどくさそうに振り向き。

空気を振動させ、爆発音に近いものが響いた直後、鉄を叩く音が響く。

頭部に直撃。結果だけ書けばこんなかんじだろう。甲冑は思いつきり頭を仰け反らせ、力を抜いて膝から落ち、うつ伏せに倒れる。誰もが初めは“頭部にでっかい玉が当たって気絶した”とか“裏切り者を置いて行くんだろう”と思っていた。しかし、直ぐに何かが違う事に気が付く。こう、倒れ方が変、とか。何だか、死んだみたい、とか。

疑問を持った。ならば答えを得ようと動くのが普通であろう。しかし、回答は向こうから来た。倒れた甲冑の頭部から赤い水溜りが広がって行く。赤い赤い、真っ赤な水溜り。そう――血だ。つまりだ、頭を撃ち抜かれた甲冑が頭から血を流して倒れている……と言うことは？

「死ん、でる？」

瞬間、誰もがぞつとして動きを止める。今リーダー格の甲冑は躊躇も無く、罰と称して仲間を射殺した。このものはみな二桁に及ぶ程同種族を殺して来た凶悪犯だ。このくらいで恐怖に縛られて騒いだりはしない。だが、誰も彼もがいきなりの状況に戸惑っている。更にこの状況でリーダーは真上に向けて発砲する。

「おい、何だんまりしてんだあ？　まさかてめえ等……俺を裏切るうって言うんじゃないやねえよなあ？」

空気が一変する。この状況は激しくまずいと誰もが認識する。今誰が死んでもおかしくない。リーダーが誰を射殺するか、もう予測が付かなくなってきた。

「なあ、おい」

リーダーは静かに呟き、仲間の一人の頭に銃口を突き付ける。

「ふひ、ひいッ」

「もう一人死ななきゃ、駄目か？」

「い、いやッ！　裏切らねえッ！　裏切らねえよッ！　地獄の底までだつてあんたについていくッ！」

甲冑はそう言つて最後の言葉を飲み込んだ。だから、殺さないでくれ、と。リーダーは周囲を見渡し。

「で、おめえ等は？」

ついていく、と言う台詞が乱舞する。誰も彼もがそう言つて命乞いをした。

実に滑稽である。彼等はこの人生、何人も殺してきたと言つのに、いざ自分の番になるとこれだ。

リーダーは満足げに頷きながら銃をしまい。

「ようしよし、それで良い。俺に従えば身代金を山分けだ。てめえら、絶対に裏切るんじゃない、ねえぞ？」

彼等の頭からはもう儲け話何てなかった。ただこのまま撃ち殺されたくない、意地汚い生への渴望だけ。

ティンは水穂から聞いた事すべてをリフィナへと伝える。凶悪犯のことや教会のことなど。するとリフィナは鼻で笑い。

「んなのどーでもいい」

と切り捨てる。

「え、なんで？」

「どうせあれでしょ？ 姫を人質にでも取れば色んな所から金を搾り取れるとも思ってたんでしょう？ 甘いつての。私に所属して欲しい会社はオークションの様に身代金を用意しようとするけど、姫連合は鏢一文も払うもんか。寧ろ自力で脱出しろとか言ってくるよ、人を戦略兵器か何かと勘違いしてる様だし」

リフィナは言うだけ言うと言の腰のポシェットからペットボトルを取り出し、キャップを外して口に突っ込む。

「……ねえ、何で一人で行ったの？」

「そりゃ、あんたの邪魔になんない様に退いてあげてたのよ」

そう言ってリフィナはさり気なく視線を遠くに置く。ティンはそんなリフィナに気付かずに納得する。

「……でもさ、やっぱり傍に居てくれた方が都合が良いからさ、なるべく、一緒に居てくれない？ あたしが……あんたのこと、絶対守るから。信じて、ね。約束、するから」

ティンはリフィナの前に跪き、懇願する様に、願う様に言った。ただ、守りたいと願い続けるのみだ。騎士でありたいと。

リフィナはそんなティンに戸惑いながらも。

「わ、分かった。分かったよ、これからはあんたの側に居るようにするから、だから頭上げて、ね？」

そう言ってリフィナはティンの顔を上げる。リフィナにつられてティンも顔を上げる。

「……あたし、さ」

「何？」

ティンの呟きにリフィナは返す。

「あんたの、こと……さ」

ティンはリフィナの手を掴み、立ち上がるとリフィナの顔をじっと見て、追い縋る様な眼差しで。

「守らせて、くれる？」

「——うん、いいよ。じゃあ、私のこと、確り宜しくね」

そう、リフィナは笑顔で返す。ティンはそっとリフィナの手から

力を抜いて放す。

ティンは心の中で新たに、強く誓う。もう二度と友達を、自分が大事だと思う人を、この手で守り通したい。かつて聖都で誓った、神聖なる騎士の誓い。ただその信念にのみ己の剣を捧げると誓った思い。浅美のときは守れなかった誓いだけど、今度こそ守りぬくと、ティンは新たに誓い、思いを強くする。

「兎に角、ここからですよ。ここに居るよりはマシだと思うから」「そうだね、外にさえ出れば後はあの偽善者どもがどうにかしてくれるでしょう」

リフィナが言っているとティンは彼女の手を引いて歩き出す。今度こそ守り抜くんだと強く思っ

「誰が信用するか、お前なんか」

水穂は結局一人でティン達を探すことにした。連れて来た騎士達の中にも偽者が混じっている可能性も高い。故に彼女は単身で探索を行っている。のだが。

「ですから、皆さん心配し過ぎです」

『ですが水穂様、幾ら貴方の実力が高くても譲る訳には参りません。誰も連れて行かぬなら、我々の監視の目くらいは許して欲しい』

浮かぶ魔法陣の中に映る、兜を付けた青年が溜息混じりに洩らす。それを見て思わず水穂は苦笑する。彼等とは幼い頃から知り合いとは言え、ここまで来ると耳にタコが出来る。

と、そんな会話をしていると水穂の前方から甲冑を来た集団がやって来る。

「これはこれは水穂様ではありませんか。何故此所に？」

『——貴様、先ほどの命令が届いていないのか？』

別に表示された魔法陣の中から別の男性が映し出される。容姿は

まず銀髪的美丈夫と言う所だ。貫く様な冷たい目で現れた甲冑集団を見る。

「先程の命令、と言いますと？」

「一から指示し直さねばならないとはな。貴様、もしや私の顔を忘れたか？」

「ぶ」

思わず水穂は吹き出し、よそを向いて肩を震わせる。

「……水穂様、今重要な話の最中でして」

「い、いえ、だって、あのアルバートが小粋なジョークが出来る様になってるなんておかしくて……私も結婚しちゃう訳ね」

「ああ、あれ冗談か、アルバート。本気で言ってるそばかり」

水穂はとうとう背を向けてうずくまり、兜男は対応に困った様に頭を掻く。

「……私とて冗談くらい言いますし、そもそもこれは冗談では無く単にカマを……解説してて阿呆らしい」

「と言うわけだ。貴様らの正体は掴んでいる。もう逃げ場は無い、観念して大人しくしろ」

呆れ果てたアルバートに対して、兜男は甲冑集団に向けて降伏を促す。

「——チツ、知られてんならやつちまえ！ 相手は女一人だッ！」

瞬間、魔法陣の向こう側で空気が一変する。言われた本人は少し困った顔をしている。そんな所で甲冑のうち一人が彼女に斧を叩き込んで来る。水穂は慌てず騒がず相手の足を引っ掛けながら優雅な動きで横にずれる。すると男はあっさりとバランスを崩して地面に突っ伏す。

「クソッ、やはり物怖じさえしないか！」

「くっ、おいッ！ 魔導師部隊と突入班の編成はまだかッ！？」

「は、はいッ！ 現在大急ぎで本部の方に転移魔導師の舞台を編成していますが、なにぶん急なことで対応が悪く」

「この様な非常事態に何を悠長なことを言っている！ 水穂様に何

かあつてからでは遅いのだぞ！？」

アルバートの必死な声が響いて来る。水穂はその声にやはりと溜息を吐いた。ちよつと考えれば当然だろう、何せ連れて来た騎士に偽者がいるなら地上部隊にも混じっていると考えるのが普通だ。水穂は一応上にはベテランを、実際の現場には新人を連れて来たのが流石に動揺が広がっているらしい。

『こ、こちらは何度も急ぐ様伝えているのですが、向こうも相当に混乱しているらしく……』

『何をバカなことを……！ 水穂様に何かあつてからでは遅いと、何故分らない……！』

『こうなればやむを得ん、私が直に向かう！』

今度は別の魔法陣に映る兜男が叫んだ。

『ヨハン、バカな事をいうな！ 現場責任を請け負う貴様が容易く動くな！ 此所は俺がいくッ！』

『馬鹿者ッ！ 指揮官である貴様が動いてはただでさえ動揺している部下に歯止めが聞かなくなるんだぞ！？ 彼らが混乱に陥った時、どうする気だ！？』

『それこそ貴様がまとめ上げる！ 今は水穂様の』

『あーもー良いです！ 私一人で十分ですのでお二人は混乱中の地上部隊の収集と偽者探しに勤しんで下さい！』

水穂は動作中も喧しい二人をそう言つて片付けると水穂は錫杖を手に取り、甲冑集団と向き合う。

『女一人で俺達をやれると思つてんのかよ！？』

『ええ。神に代わり、私が貴方達に罰を下しましょう。人が人の罪を裁く罪を背負いましょう。さあ、懺悔なさい』

水穂の言葉が引き金となつて甲冑達が一斉に襲い掛かる。水穂はそれに対して思いつき錫杖をぶん回した。甲冑達もそれを甘んじてそれを受け入れる。所詮は女の腕力、大したことなどないと思つていた。振るわれた杖だつて素人の動き、単調でただの力任せ。故にだ。

だから、直後の衝撃を理解出来なかった。

瞬間、水穂に一番近くにいた列を組んでいた三人が、爆音に近い音を撒き散らして一斉の吹っ飛び、粉塵巻き起こし轟音響かせて壁に叩き付けられる。それだけで甲冑集団は足を止めた。全く状況が理解できぬ、と。

「……何、何だ、これは」

「何か？」

甲冑達は吹き飛ばされた仲間達を見やった。直撃を食らった相手は凄いいことになっているのが目に飛び込んでくる。魔力の保護によって死んではないが兜は吹っ飛び、拉げた顔面を見せ、ぴくぴくと気絶。これだけでこの司祭がどれ程の腕力を兼ね備えているかがよく分かるというものだ。

「ば、馬鹿力だけで俺達を倒そうつてのか！？ な、舐めるんじゃない！」

「淑女に向けて」

水穂は再び思いつきり杖を振るう。

「何て酷いことを」

縦に振り下ろされた杖の一撃は甲冑一人の兜を易々と打ち砕く。本来彼らが身に付けているのは魔力を練りこんだ防具の筈。魔力を練りこんだ防具は基本、精神の強さに通じる。強く、硬く思っている防具に魔力を注げばその分防具は強固な物となり、弱く魔力を注げばその分防具は本来の防御力のみが残る。武器も同じだ。強く武器に魔力を注げば、その分武器が強固になる。場合によっては木の棒でさえ、鉄を砕ける様になる。

ならば、この状況では彼女の注ぐ魔力が、その思いが、兜の防御を超えた、と言うことだ。いや、さっきの光景を見ると全然そう思えないのは蹴っ飛ばしておくとして。

水穂は振り下ろした杖を構えなおすと次に四人が武器——槍を突き出して一気に水穂に飛び掛って来る。水穂は直ぐに握った杖を殴打からただ握るだけに変える。ただそれだけ動作だ、直ぐに済むし、

止められない。

そして四人の突き出した槍が水穂の体に触れようとした瞬間、槍も甲冑達も全てを輝く鎖が縛り上げる。

「ぐあッ!？」

「輝きし聖なる縛鎖よ、罪深き者たちに苦痛の裁きを与えたまえ」

鎖の出先は水穂の足元より広がる光輝く魔法陣、そこからだ。未だ生まれ出でる数多の鎖は甲冑達の体を貫き、その体を縛り上げてより強く拘束する。

「——ディバイン・バインド!」

水穂の宣言に連動して鎖は甲冑達を宙に縛り上げる。この間にも甲冑連中は水穂に群がっていく。同時に水穂は杖を構え直して一歩踏み出し、錫杖を振るって近付いた甲冑に叩き込む。甲冑は逆にそれを取ろうとしたのか、水穂の一撃に突っ込んでいくが見事に直撃を受けて甲冑集団の中へと打ち込まれる。

「ど、どんな馬鹿力して……」

「もう、レディに対するものいいじゃないやありませんよ?」

レディならもつと非力でいろよ、と甲冑達は思うが、同時に後ろから回り込んだ数人の甲冑が水穂に襲い掛かる、が水穂は慌てず騒がず、くると回って更にその勢いに任せて思いつき蹴りつける。やはりと言うか、その瞬間に凄まじい轟音が響き、甲冑がボールの様にすつとんでいき、甲冑連中に飛び込んでいき、続いて水穂の後ろに回った連中が襲い掛かるが、水穂は振向く必要も無く光の爆発を後ろに発生させ、一気に吹き飛ばす。

「ひ、怯むなあ! 相手は一人、押さえ込めば」

甲冑の一人が自棄に叫んだ言葉は続く光の爆発で潰される。気が付くと、立っている甲冑はもう彼一人だけであった。

「……さて、ではどうしますか?」

「……ま、参った。別に俺らは奴らにそこまでする義理は無え」

「分かりました。では」

水穂は背を見せ、魔法陣を動かす。

「油断」

「してませんが、何か」

錫杖で地を叩き、動き出した鎖が甲冑を縛り上げる。

「では近くに散分している各部隊へ通達。私の現在居る座標を送ります」

水穂は展開した魔法陣にそう伝えると了解と言っ言葉が何度も出て来る。続いて外の様子が映されている魔法陣へと目を移す。

「水穂様あああああああ今参りますうううううううううううううう！」

「お、落ち着いて下さいヨハン隊長！ 隊長が動かれては皆が動揺します！」

「ああ……水穂様、一人で戦うの宜しいのですがせめて淑女らしく勝って頂きたい。貴方ももう人妻、派手に開脚して蹴り飛ばすなどの様な真似などとしては居ないであろうか。大体貴方は昔からレディとしての心構えと言うものが……」

「アルバート様も苦勞なされて……」

水穂は猛烈に頭痛を覚えた。彼女の的には出来るだけまともなベテランを連れて来たつもりだが、流石に目も当てられない状況であった。

「あ、水穂様、一つ宜しいでしょうか」

「あ、はい」

と頭を抱えていると魔法陣の中から一人の兵士が彼女に語りかけて来る。

「先程から“漆黒の氷姫を出せ”と言っ要請が出ていますので」

「私は天束水穂です、氷結瑞穂じゃありません」

「いえ、でも“みずほが居るなら出せ”と言っ感じの要請なら多数のものが存在し、一部は姫連合から来てますし」

水穂はこめかみを押さえながら悩む。いや、名前の読みも同じだし髪型も似てるからたまに間違えられるが、こんな間違えられ方されるとは思っても無かった。しかし、何故。

「一体どうして」

『ああ、ヨハン隊長が』

『水穂様ああああああ！　今お傍に！　水穂様あああああ
あ！　貴方に何かあれば社長に顔向けがあああああ！　水穂様あ
あああああああ！』

『と言う感じで』

「今直ぐ教会本部に送り返しなさい。もう少しマシな人を寄越すよ
うに言っておいて」

水穂は言ってから泣きたいと思った。流石にこれはもう酷いと言
うしかなかった。

『あ、氷姫様と是非とも話したいと言う企業の方が此方に尋ねてい
るのですが、どうすれば』

『こちらにも同様のものが来ているのですが』

「全員人違いだと言って置きなさい、と言つか無視しなさい。私は
天東です、氷結じゃありません！」

『あー誰か精神安定剤を持って来い。水穂様が御乱神だー』

そんなやり取りの間に突入部隊がやって来て水穂が蹴散らした甲
冑を逮捕して行きましたとさ。

姫と騎士―あなたを守らせて―（後書き）

おはようっす。

今度から土曜日の定期更新となります。としたいです。
では、また土曜日に。さーいならー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5277s/>

神剣の舞手

2012年1月7日07時46分発行